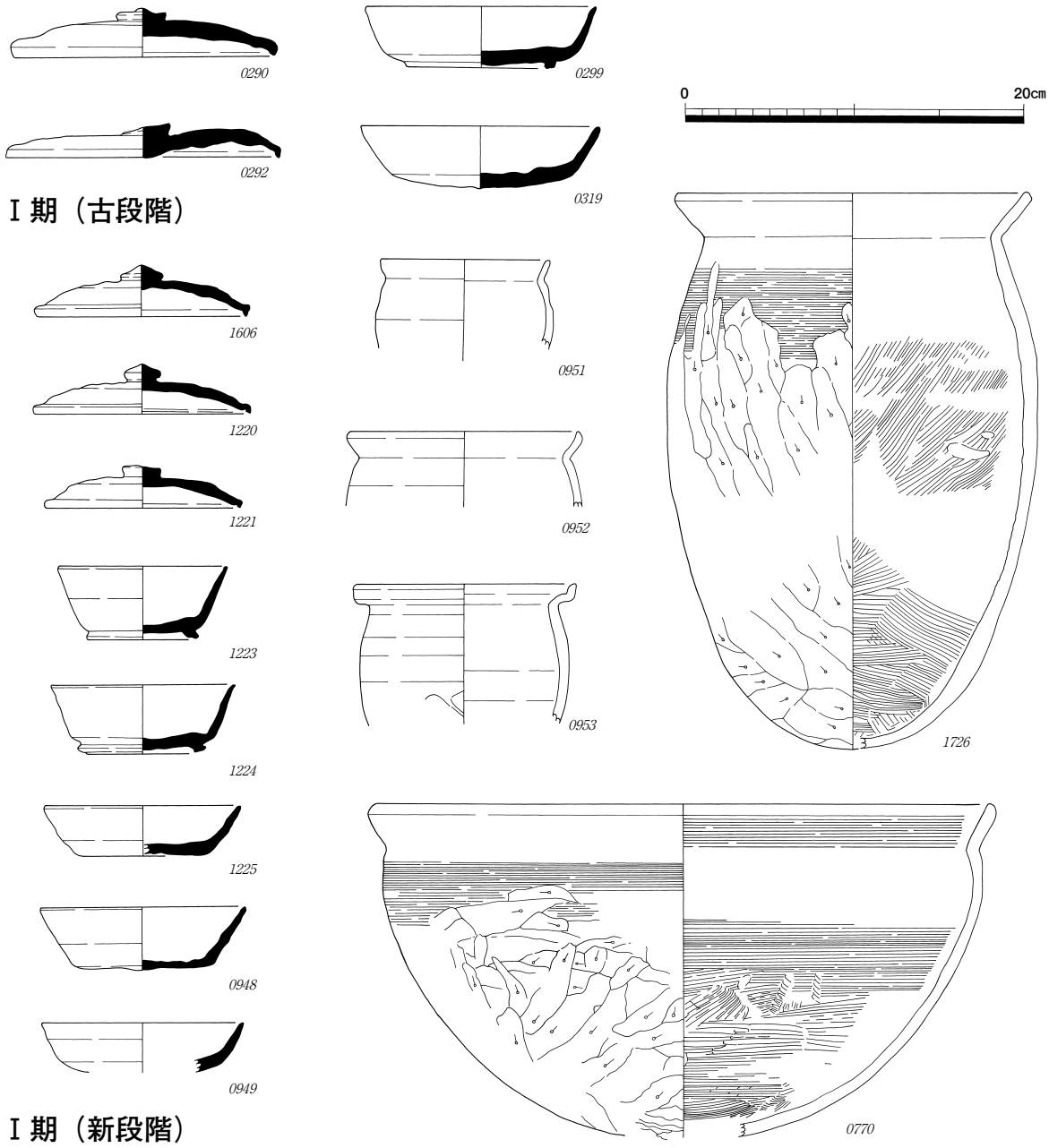
3）任海宮田遺跡Ⅲ期：9世紀後半（第4図）

C14地区 SI04・05・06、C20地区 SI07・08、C22地区 SI01・02・07の出土土器群である。

須恵器は杯蓋 a・b、杯 Aa、皿 Ab がある。杯蓋 a・b は技法2により、口縁部は形態 i ～ iii がある。杯蓋 a の扁平となる。杯 Aa は小径の底部から、直線的な口縁部が浅く開く、技法2となる。皿 Ab の底部は技法3による。

土師器は椀 Aa・Ab・B、皿 A・B、鉢 B、小型甕、長胴甕、堝がある。椀 Aa・Ab は器高が高く、底径は小さい。底部は技法5・6による。椀 B は口縁端部が外反する器形を呈する。皿 A・B の底部は技法6による。小型甕は主に技法10で、技法12も認められる。長胴甕は技法8・9による。堝は胴部に張りが無い。甕類の口縁部は形態 b1・2・4、d、e1、f1があり、形態 f1は小型甕のみに認められる。



第2図　任海宮田遺跡Ⅰ期の土器

4）任海宮田遺跡Ⅳ期：9世紀末～10世紀初（第4図）

C14地区 SI03、C20地区 SI04、C22地区 SI03の出土土器群が相当する。

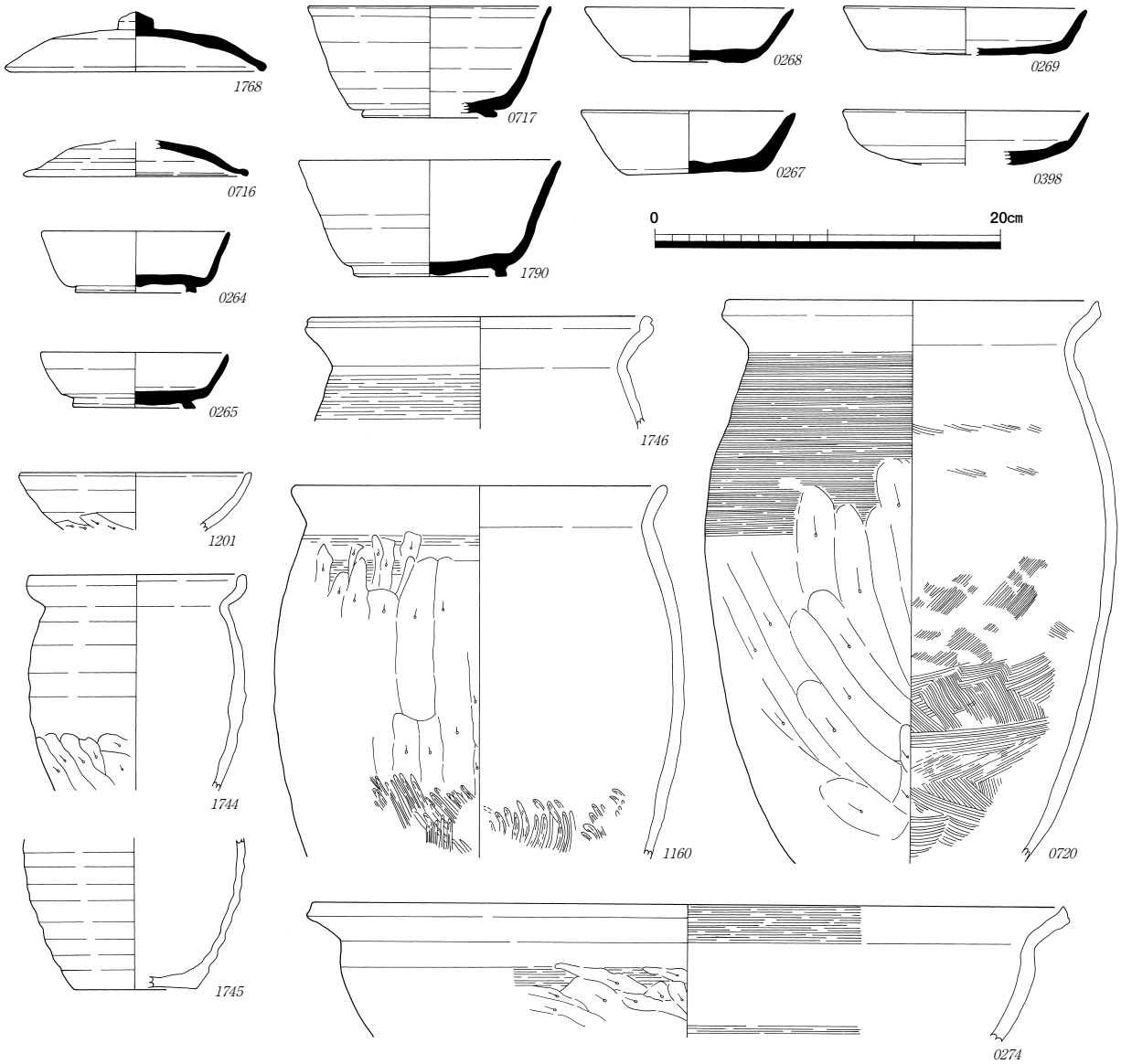
須恵器は杯蓋b、杯Aaがある。杯蓋bは技法2・3があり、口縁部は形態iiとなる。杯Aaは底径が小さく、直線的な口縁部が浅く開いて立ち上がる。

土師器は椀Aa、皿B、小型甕、長胴甕がある。椀Aaは器高が低くなり、底径はやや大きくなる。法量の大きいものには高さのある器形も存在する。皿Bは前期よりも器壁が厚めで、底径も大きめとなる。小型甕は技法10・11があり、長胴甕は技法9となる。口縁形態は形態c、d、e1・2、f2がある。形態c、f2は小型甕のみにある。

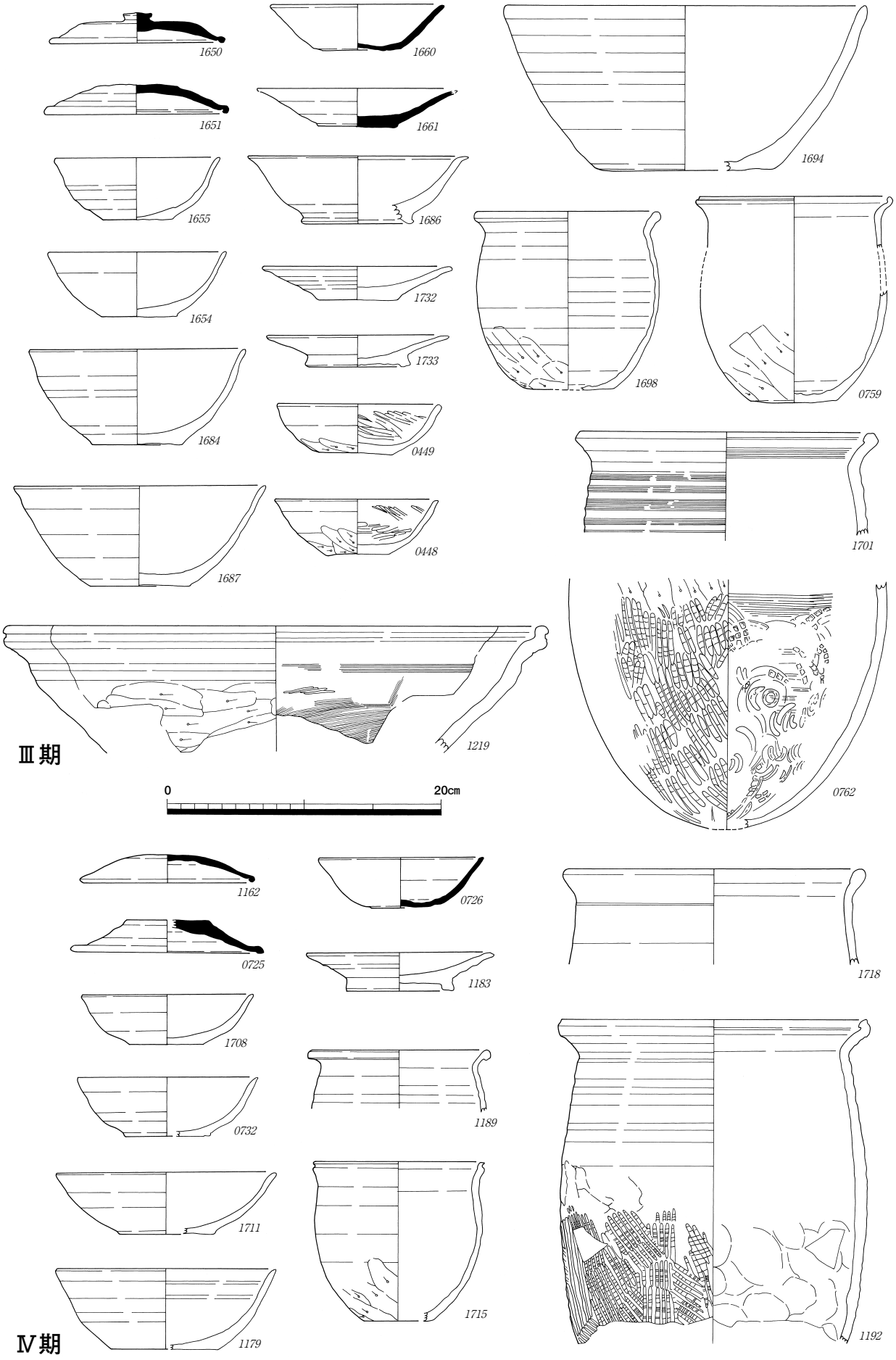
5）任海宮田遺跡Ⅴ期：10世紀前半～中頃

C地区では竪穴住居などの遺構から、まとまって当該期の遺物は出土しなかった。

B地区出土の土器群では、当期の須恵器は杯Aa、杯Ba等があり、杯Aaは口縁部が浅く開く形態となり、杯Baは椀形態に近くなる。土師器は椀Aa、皿A、小型甕、長胴甕などがある。椀AaはⅣ期より器高が低くなり、甕類の口縁部は外側に肥厚する形態となる。こうした椀形態となる杯Baや



第3図　任海宮田遺跡Ⅱ期の土器



第４図　任海宮田遺跡Ⅲ・Ⅳ期の土器

口縁部外側が肥厚する長胴甕は、C 地区出土の土器では確認されない。このことから、C 地区では任海宮田遺跡Ⅰ～Ⅳ期において、主要な遺構は変遷するものと考えられる。

B 遺構変遷

古代の遺構としては、竪穴住居51棟、掘立柱建物 1 棟の他、土坑や溝などが検出された。ここでは主に建物について、時期区分により設定した土器群の出土や、遺構の重複関係などから遺構変遷を想定した。C 地区において古代の遺構を検出した調査区は、東西で大きく二つのまとまりで捉えられる。C 6 ～11、13・15、14・23地区の西側調査区と、C18～22地区で構成される東側調査区である。遺構変遷は、この二者に分けて示していく。

（ｉ）**西側調査区**（第 5 図）

Ⅰ期

〈古段階〉

古段階の遺物がまとまって出土した竪穴住居はなく、C 9 地区 SD001西側のテラス状部分から出土した土器群がⅠ期古段階に相当する。その出土位置から、当段階で SD001はかなり埋没していたことが分かる。また、C 8 地区 SD001でも覆土上層から当段階の遺物が出土するが、特定位置に集中する傾向はない。両溝とも、Ⅱ期以降の遺物も出土することから、浅い溝として存続していたと考えられる。調査区外に当段階の建物群が存在する可能性もある。

〈新段階〉

竪穴住居には C11地区 SI01・02、C13・15地区 SI01、C14・23地区 SI02・07・08がある。また、C 6 地区 SD001・002、C13・15地区 SD001、SK002も新段階に該当する。

C 6 地区 SD001・002は当期の遺物も出土するが少ない。Ⅳ期までの遺物の出土があり、主体はそちらに近いと考えられる。

C13・15地区には SI01があり、隣接する SD001、SK002からも当期の遺物が出土する。SK002の付近には、ウマ上下顎臼歯が出土した SX01が確認される。SX01の時期は判然としないが、周囲の遺構は SK002のみであり、同様な時期を想定する。

C14・23地区には SI07・08がある。重複関係から SI07が新しいが、いずれも当期におさまる。

Ⅱ期

竪穴住居には C 9 地区 SI01・02、C10地区 SI01・02・03、C14地区 SI01がある。C 8 地区 SD001、C 9 地区 SD001も存続する。

C 8 地区 SD001北岸の東側では、当期の須恵器杯類の他、Ⅰ・Ⅲ期の遺物が混在して出土する。

C 9 地区には SI01・02がある。重複していないが、近接しており併存しないと思われる。SI01・02に近い SD001南岸の東側ではⅠ～Ⅱ期の遺物がまとまって出土している。Ⅱ期の所産である須恵器杯類には、「家成」・「斐家成」・「庄」などの墨書土器がある。

C10地区 SI01～03は、重複関係から SI01が SI02より新しい。SI02・03は出土遺物が少なく、時期が不明確で、Ⅰ期新段階も含めて考えられる。

C10地区では包含層中から奈良三彩火舎や鉄鉢形の土師器鉢 A、有高台で深身となる深椀の出土があり、他の地区にはない特徴となる。それらの時期は、竪穴住居がⅠ期新段階～Ⅱ期となることから、同様の時期が想定される。ただし、奈良三彩は平安時代には生産が衰退する（井上1998）ことから、8 世紀後半～末頃の所産と思われる。今回のⅠ期古段階に相当し、C10地区の建物群よりもやや古いこととなる。最終的な廃棄の下限がⅡ期であったと考えておきたい。また、土師器鉢 A 類の出土は

C10地区を中心に、C８地区SD001にも認められ、両者の関連が強いことを示す。しかし、C８地区SD001は後述するようにⅢ期まで存続する可能性が高く、C10地区に建物群が無くなった後も、何らかの活動が行なわれていた場所であったと考えられる。

C10地区包含層出土で、当期の須恵器杯Ａに「斐」の墨書が認められる。

C13・15地区SD001は当期の遺物も含むことから、存続していたものと考えられる。出土遺物には「斐」と墨書された須恵器杯Aaが含まれる。

Ⅲ期

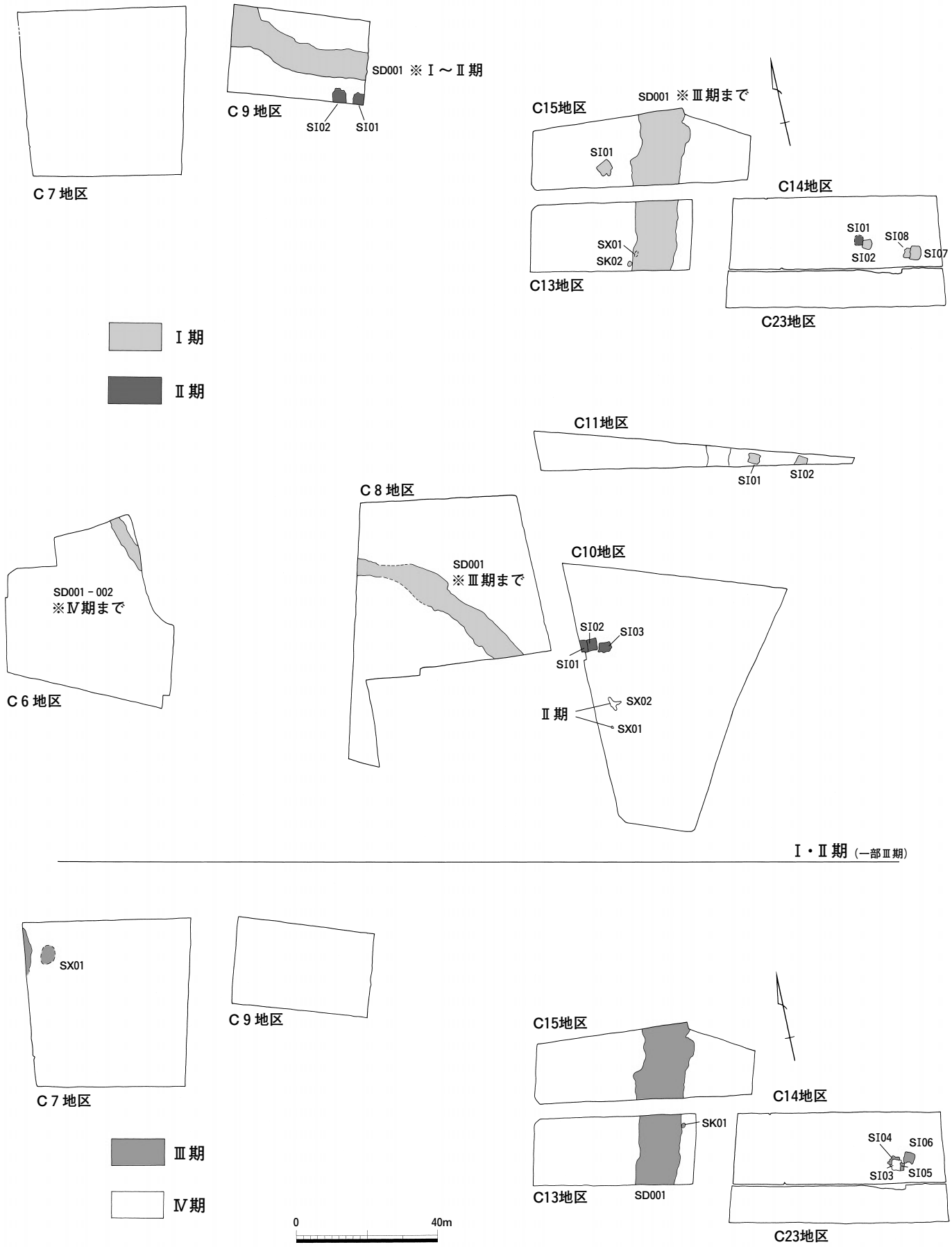
竪穴住居にはC14地区SI04・05・06がある。他にC８地区SD001、C13・15地区SK001、C７地区SX01、C10地区SX01も当期となる。

C７地区SX01は須恵器甕Ａと土師器椀Ｂの廃棄が行なわれた。隣接する溝SD001も同様の時期と考えるが、調査区内には他の遺構はほとんど検出されず、集落の縁辺であったと考えられる。

C８地区SD001は当期まで存続し、出土した当期の土器に「成」・「西家」の墨書が確認される。特にSD001北岸の東寄りでは、当期の土器群が多く出土する。その中には、糸切り未調整である土師器椀や須恵器杯Ａがあり、それらと共に小型堝Ａが含まれる。小型堝Ａの形態は、堝を小型化したものだが、底面は小さな平底にしており、普遍的に確認される器種ではない。県内に類例を求めると、南太閤山Ⅰ遺跡出土の８世紀第２～４四半期の土器群に存在する（富山県教育委員会1985）。平底であるが、今回出土した小型堝Ａに比べて底部は丸みを帯びている。報文中では甕に分類され、都城における人面墨書用土器の模倣形態との指摘がある。また、SD001では鉄鉢形態の土師器鉢Ａも共伴している。仏器模倣である鉄鉢形土器の生産は、須恵器であるが上末釜谷４号窯第２次操業でも確認されている（富山大学人文学部考古学研究室1989）。比定される９世紀第３四半期においても、そうした器種が存続していたことを示す。加えて、上末釜谷４号窯第２次操業の須恵器鉄鉢には、小型堝Ａに器形が類似したものがある。ただし、体部や口縁部の立ち上がりが強い点や、底径がやや大きくて糸切り痕を残す点が異なる。この様に、小型堝Ａは器形的には８世紀後半代である南太閤山Ⅰ遺跡の類例に近いものの、共伴する遺物からは９世紀後半頃とする方が妥当であると思われる。その機能については、通例出土しない器種であることや、特異な出土状況から日常的に用いられる煮炊具では無い可能性が高い。また、隣接するC10地区ではⅠ～Ⅱ期を中心に、奈良三彩火舎や土師器鉢Ａの出土があり、仏教的な活動が推測される。その一連の行為の中で、C８地区SD001での遺物の廃棄も行なわれたと考えるならば、小型堝Ａもそうした役割を担っていた可能性があろう。そして、それはⅢ期まで存続していたことを示している。

C10地区SX01は「成」の墨書土器が集中出土した地点で、周囲には焼土が集中するSX02がある。SX02の時期は、出土遺物にはⅡ期以前の須恵器があるものの、破片資料であり判然としない。SX01・02の周辺には他の遺構は分布しておらず、関連が強いと考えられ、同様な時期と考えた方が良いと思われる。なお、C10地区では人面墨書の可能性がある土師器小型甕が１点出土している。小破片であるため時期は不明であるが、調査区の土器様相からⅢ期が下限と考える。県内における人面墨書土器は、「すべて溝跡からの出土で木製祭祀具が伴う」（堀沢2003）とされ、官衙遺跡との関連が強いと指摘されている。任海宮田遺跡自体や周辺遺跡において、官衙など公的な施設が存在していたかは明かでない。また、小破片１点のみで、人面墨書であるかどうかも明瞭でない資料であるため、律令的な祭祀が行なわれたと確定するのは、現時点では躊躇われる。

C13・15地区SK001には当期の土師器長胴甕が埋設される。その位置から、SD001が当期まで存続



第５図　Ｃ地区西側調査区遺構変遷

し、それを意識したものと考えられる。

C14・23地区 SI04・05はⅣ期の SI03に切られるため、重複関係は明らかではない。その配置から同時併存しなかったと考えられ、少なくとも２時期に細分される。

Ⅳ期

C14・23地区 SI03のみが単独で存在する。

C６地区 SD001・002は当期までの遺物を含み、最終的な埋没をむかえる。Ⅲ期のC７地区 SX01の様に、古代における遺構の広がりの西端に位置する。C６・７地区に近接した調査区外に建物群を想定することもできるが、集落の縁辺部で意図的に遺物の廃棄を行なっていた可能性もある。

（ⅱ）**東側調査区**（第６図）

Ⅰ期

〈新段階〉

C19地区 SI01～04、C20地区 SI01・09、C21地区 SI01、C22地区 SI04～06・16・17が相当する。東側調査区では、Ⅰ期古段階の遺物がまとまって出土した遺構はなかった。

C19地区では３棟が重複する。SI01が SI02・03より新しく、少なくとも２時期に細分される。SI04は出土遺物では時期は不明であるが、Ⅳ期の SB01により切られており、SB01構築時にはすでに埋没していたと思われる。SI01～03と同様の時期と考えておきたい。

C20地区には SI01・09がある。他に SD001からも当段階の遺物が出土するが、後述するようにⅡ期以降の遺物が多く出土している。

C21地区では SI01のみがある。SI01の埋没後にさく状遺構が形成されることから、それらはⅡ期以降に相当すると考えられる。

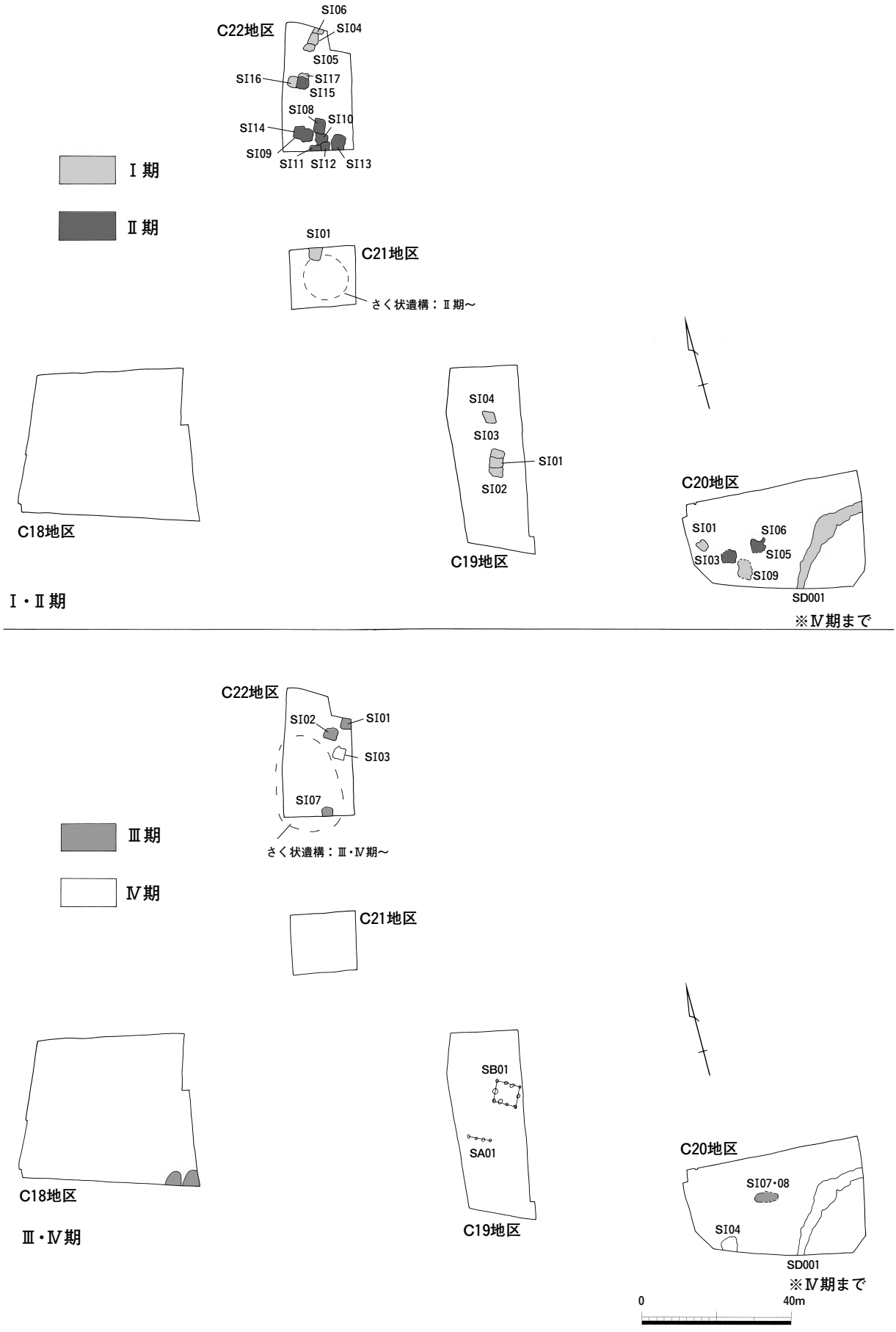
C22地区では調査区の北西側に竪穴住居が分布する。SI04～06は近接して位置しており、少なくとも２時期に細分されるが、前後関係は不明である。SI16・17も同様である。

Ⅱ期

C20地区 SI03・05・06、C22地区 SI08・09・10・11・12・13・14・15が相当する。

C20地区では竪穴住居３棟の他に、SD001からも当期の遺物が出土する。SD001から出土した須恵器杯類を見ると、口縁部は直線的に外傾するものの、底径はやや大きい。また、糸切り痕を残すものは少ない傾向があり、当期に相当するものが主体となる。その中には「縄足」と墨書されたものが多く含まれる。さらに、土師器椀で「縄足」の墨書があるものは、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリで調整が加わるものが多く、やはり当期の特徴を示している。このように、Ⅱ期では須恵器を中心とした遺物の廃棄行為が行なわれ、特に「縄足」の墨書が含まれていることが特徴となる。ここで、SD001出土の供膳具を破片数で見ると、須恵器が1126点、土師器（赤彩・黒色含む）が2367点と、およそ１：２の比率で土師器が多い。また、土師器椀にはⅣ期の特徴を持つものも含まれる。このことから、土師器の椀類が主要な供膳具となるⅢ～Ⅳ期まで SD001への遺物の廃棄が続いたと考えられる。

C22地区では調査区南側に建物群が集中する。重複関係から SI14＞SI09、SI11＞SI12＞SI10の順があり、少なくとも３時期に細分が可能である。また、調査区中央の SI15はⅠ期の SI16・17と重複し、それらを切る。SI08からは「縄足」の墨書が出土し、包含層で出土した「墾田」の墨書土器も当期に相当する。



第６図　Ｃ地区東側調査区遺構変遷

Ⅲ期

C18地区 SI01・02、C20地区 SI07・08、C22地区 SI01・02・07がある。

C18地区 SI01・02は出土遺物が少なく、時期が判然としない。土師器長胴甕の特徴から SI02は当期であると推定した。SI01については、当期としておくが、SI02と近接することから併存しないものと思われる。包含層出土の遺物がⅡ～Ⅲ期を主体とすることから、Ⅱ期も含めた変遷が可能かもしれない。

C20地区では SI07と SI08が重複する。SI07が新しく、少なくとも２時期に細分される。いずれも遺構の遺存状況が悪く、建物の詳細は明らかでない。SD001では、先述のようにⅢ期以降は土師器椀類を主体とした遺物の廃棄が行なわれる。また、当期の須恵器杯類には「縄足」とともに「貳」の墨書が認められる。土師器椀類には墨書はほとんど認められない。

C22地区では、SI02からは多くの土師器椀類が出土する。出土状況からは２回ほどに分けた廃棄があるようだが、土器の形態に明瞭な違いはなく、短期的な差であったと考えられ、一括して当期の土器群の指標となる。SI07はⅡ期の SI11・12と重複し、それらを切る。また、C22地区の西側ではさく状遺構が検出されており、それらはⅠ～Ⅱ期の竪穴住居群が埋没した後に形成されている。Ⅲ・Ⅳ期との竪穴住居とは重ならないことから、併存する可能性がある。

Ⅳ期

C19地区 SB01、SA01、C20地区 SI04、C22地区 SI03がある。

C19地区では掘立柱建物 SB01とそれに付随する柵列 SA01がある。SB01柱穴出土の遺物にはⅠ～Ⅱ期の遺物が混入し、SA01柱穴からは当期に相当する土師器椀 Aa の出土がある。後者の時期を採用し、当期に該当させた。また、包含層から出土した土師器椀 Aa に「城長」の墨書がある。器高が低く、底径が大きいという特徴から、当期に比定される。

C20地区では SI04から出土した土師器椀 A の底部破片に「□長」の墨書があり、「城長」である可能性がある。また、包含層出土の土師器椀 Aa（1561）にも「城長」があり、器形の特徴から当期に比定される。SD001は当期までの出土遺物があり、最終的な埋没をむかえる。

C22地区では SI03が単独であり、Ⅲ期からさく状遺構が存続していた可能性がある。

（２）古代の建物について

A 建物棟数の分布・密度

任海宮田遺跡 C 地区で検出された建物は竪穴住居51棟、掘立柱建物１棟であった。時期別の棟数を見ていく（表１）。竪穴住居はⅠ期：18棟、Ⅱ期：17棟、Ⅲ期：10棟、Ⅳ期：３棟、不明：３棟であった。掘立柱建物はⅣ期に１棟のみが確認される。

竪穴住居の棟数を東・西の調査区で示す（表２）。西側調査区でⅠ期：６棟、Ⅱ期：６棟、Ⅲ期：３棟、Ⅳ期：１棟となる。東側調査区ではⅠ期：12棟、Ⅱ期：11棟、Ⅲ期：７棟、Ⅳ期：２棟となる。棟数は各時期ともに東側調査区が、西側調査区の約２倍を示す。

竪穴住居の分布密度を、東・西に調査区で示す（表２）。密度は竪穴住居を検出した調査区の面積に基づき、1,000㎡毎の棟数を算出した。西側調査区では、Ⅰ期：0.6、Ⅱ期：0.6、Ⅲ期：0.3、Ⅳ期：0.2棟／1,000㎡となった。東側調査区では、Ⅰ期：2.6、Ⅱ期：2.4、Ⅲ期：1.5、Ⅳ期：0.4棟/1,000㎡となった。東側調査区がⅠ～Ⅱ期では約4倍、Ⅲ期では5倍、Ⅳ期では2倍の密度を示す。

以上のように、Ⅰ期から形成された集落が、Ⅱ期にかけて同様な規模で推移する。Ⅲ期から減少傾

向にあり、Ⅳ期は単独の竪穴住居が散在し、掘立柱建物が伴う景観となるが、その後は存続しない。特に東側調査区に棟数が多く、密度も高い傾向にある。これは、東側調査区ではC19・22地区などでⅠ～Ⅱ期での竪穴住居の重複が多いことから、同時期内での建て替えが頻繁にあった結果であると考えられる。

B 竪穴住居の面積・構造

（ｉ）面積

最大面積の竪穴住居は、Ⅱ期のC20地区SI03で13.72㎡を測る。最小面積についてはⅢ期のC20地区SI07が5.3㎡となるが、遺存状態が悪く本来の規模を示していないと思われる。他に７㎡以下の竪穴住居が数棟あるが、遺存状況を加味すれば、Ⅰ期のC14・23地区SI02の7.1㎡を最小面積とした方がよいと思われる。最大面積の竪穴住居も一辺４ｍに満たない規模で、一般に小型の竪穴住居とされるが、その中でも最大面積は最小面積に対して約1.9倍の値を示し、規模の違いがあったことが分かる。なお、掘立柱建物C19地区SB01は35.28㎡の面積で、竪穴住居の最大面積の約2.5倍となる。

ここで、各期における最大・最小面積を比較してみる。先述したように、７㎡以下を除いて考えてみると、Ⅲ期以外で最大・最小面積の対比率を求めることができる。最小を１とすると、Ⅰ期では最大：最小＝1.91：１、Ⅱ期は1.74：１、Ⅳ期は1.32：１となる。時期が下るにつれ、規模の差が縮まっていく傾向が分かる。

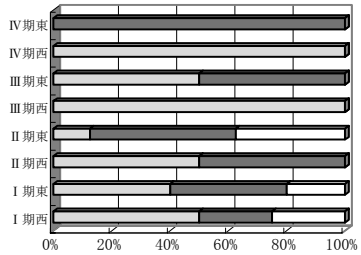
この様に、一般に見て規模の小さな部類に入る竪穴住居で集落が形成されているが、その中にも、ある程度の規模の違いがある。東西の調査区毎に規模を、小型（９㎡未満）・中型（９㎡以上12㎡未満）・大型（12㎡以上15㎡未満）の３つに区分して構成比を見ておきたい（グラフ１）。Ⅰ期では東・西の調査区に大・中・小型の構成があり、比率も類似する。Ⅱ期では東側調査区に大型が残り、西側調査区は中・小型で構成される。Ⅲ期には大型は無くなり、東は中・小型、西は小型のみとなる。Ⅳ期には東は中型のみとなる。すなわち、わずかな面積の違いではあるが、Ⅰ期からⅣ期にかけて建物群構成が単純化し、Ⅱ～Ⅲ期では東側調査区に規模の大きな竪穴住居が残る様相が窺える。

	西側調査区						東側調査区						
時期区分	C８	C９	C10	C11	C13・15	C14・23	C18	C19	C20	C21	C22		
Ⅰ期				SI01 SI02	SI01	SI02 SI07 SI08		SI01 SI02 SI03 SI04	SI01 SI09	SI01	SI04 SI05 SI06 SI16 SI17		
Ⅱ期		SI01 SI02	SI01 SI02 SI03			SI01			SI03 SI05 SI06		SI08 SI09 SI10 SI11 SI12 SI13 SI14 SI15		
Ⅲ期						SI04 SI05 SI06	SI01 SI02		SI07 SI08		SI01 SI02 SI07		
Ⅳ期						SI03		SB01 SA01	SI04		SI03		
不明	SI01					SI09			SI02				

表１　任海宮田遺跡Ｃ地区古代建物変遷表

棟数	西側	東側	合計	
Ⅰ期	6	12	18	棟数
	0.6	2.6	1.2	棟/1,000㎡
Ⅱ期	6	11	17	棟数
	0.6	2.4	1.1	棟/1,000㎡
Ⅲ期	3	7	10	棟数
	0.3	1.5	0.7	棟/1,000㎡
Ⅳ期	1	2	3	棟数
	0.1	0.4	0.2	棟/1,000㎡
不明	2	1	3	棟数
	0.2	0.2	0.2	棟/1,000㎡
合計	18	33	51	棟数
	1.7	7.3	3.4	棟/1,000㎡

表２　竪穴住居棟数・密度一覧表



	Ⅰ期西	Ⅰ期東	Ⅱ期西	Ⅱ期東	Ⅲ期西	Ⅲ期東	Ⅳ期西	Ⅳ期東
大型	1	1	0	3	0	0	0	0
中型	1	2	1	4	0	1	0	1
小型	2	2	1	1	1	1	1	0

グラフ１　竪穴住居の時期・規模別構成比

（ⅱ）平面形

長軸・短軸の値を基に散布図を示す（グラフ２）。長軸：短軸が１：１に近い方形基調の竪穴住居と、１：1.3に近い長方形気味となる竪穴住居があり、後者がやや多い傾向にある。ただし、時期毎や東西の調査区によって特徴となる傾向は無いようである。

（ⅲ）貼り床

51棟の竪穴住居の内、15棟に貼り床が確認された（グラフ３）。各時期で貼り床のある棟数はⅠ期：22％、Ⅱ期：41％、Ⅲ期：10％、Ⅳ期：67％を占める。Ⅱ期とⅣ期にやや高い傾向がある。

貼り床の有無を規模別に示す（グラフ４・５）。Ⅰ～Ⅱ期にかけては、規模の大小に応じて貼り床の有無があったとは言えない。Ⅲ～Ⅳ期では、小型よりも中型に貼り床が設けられる傾向がある。

（ⅳ）柱穴・屋内土坑・その他

柱穴はC13・15地区SI01で確認されたのみである。また、竪穴内で確認されたカマドや柱穴以外の遺構は、C９地区SI02、C19地区SI02、C20地区SI01、C22地区SI02・03で大小の土坑が確認されたに過ぎない。いずれも柱穴あるいは貯蔵穴などの性格をもつか判然としない。また、今回確認された竪穴住居には、いわゆる壁周溝とされる竪穴壁面に沿った溝も皆無であった。壁周溝は壁面への板材設置に関わると考えられるが、任海宮田遺跡C地区の竪穴住居では、壁材を備えていなかったのか、あるいは別の方法を用いたのかもしれない。いずれにしても、壁周溝を掘削しないという簡易な手法が取られていたことになる。

Ｃカマド

（ⅰ）構築位置

カマドが構築される壁面の方位を示す（グラフ６）。Ⅰ期からⅡ期へ東壁が減少し、西壁が増加する。Ⅲ期は南壁が半数を占め、東壁がなくなり、北壁での構築が認められる。Ⅳ期では北・東壁が半数ずつとなり、Ⅰ～Ⅲ期まであった南・西壁への構築が無くなる。

壁面に対するカマドの構築位置（グラフ７）は、左寄りが10棟、中央が５棟、右寄りが11棟となる。左・右寄りがそれぞれ約４割と拮抗し、中央は約２割に止まる。壁面の方位毎では、北壁は右・左寄り、東・南・西壁は各位置で構成される。中央は東壁でやや多い。左寄りは、東・南・西・北壁の順で比率を高める。右寄りは、東・南壁でおよそ半数を占める。

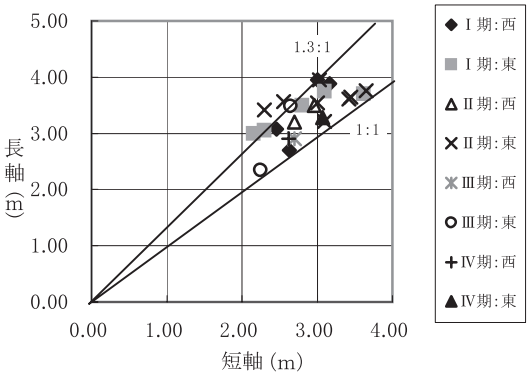
時期別に見ると（グラフ８）、Ⅰ～Ⅱ期は右・中央・左の各位置があり、構成比率もほぼ等しい。Ⅲ期には右寄りが約７割に増加し、残りが左寄りとなる。Ⅳ期では中央と左寄りが半数ずつとなる。

竪穴住居の規模毎に見ると（グラフ９）、中型で中央に構築される事例が無く、右・左寄りが半数ずつを占める。小・大型では各位置に構築され、その比率も同様の傾向となる。

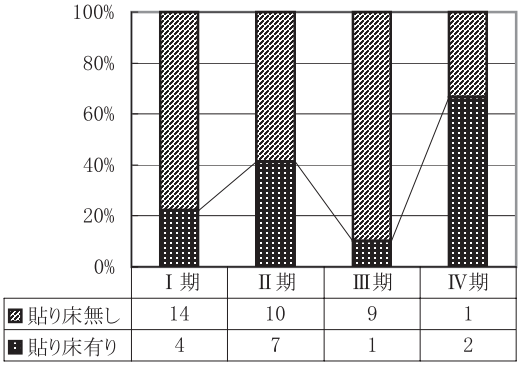
以上から、右寄りはⅢ期を中心に各壁方位にあるが、東・南壁にやや多い。中央はⅣ期を中心に、東壁にやや多くある。左寄りは北壁に多く、各時期に分散する。また、カマドの構築位置は竪穴規模に影響されていない。こうした傾向はあるが、各時期におけるカマド構築壁や位置の組み合わせは複雑で、明瞭な変化の様相は把握しにくい。おそらく、カマドの位置は、分散した各竪穴住居群内での建物配置や構築順などに応じて決められていたと思われる。各竪穴住居群での検討が必要であろうが、遺存状況によりカマドの有無自体が分からない場合も多く、いくつかの事例を示すに止めたい。

C９地区SI01・02はⅡ期で西壁にカマドがあり、SI01は中央、SI02は右寄りに位置する。同時併存しないと思われ、前後関係は不明だが構築壁面は共通する。

C14・23地区ではSI01～07があり、Ⅰ～Ⅳ期まで変遷する。Ⅰ期ではSI08からSI07への建替えが

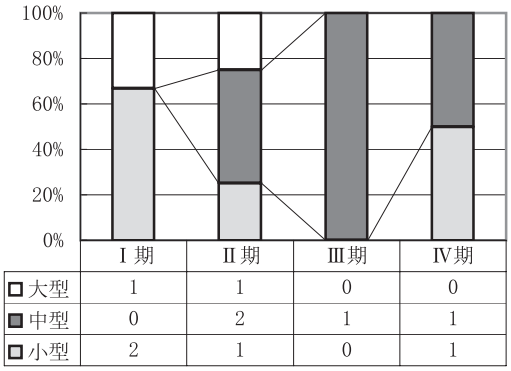


グラフ 2　竪穴住居の時期別平面形

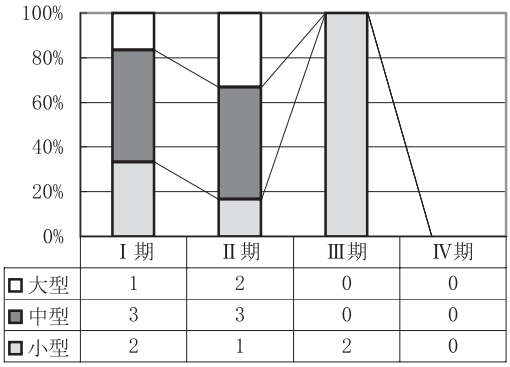


グラフ 3　竪穴住居の時期別貼り床有無

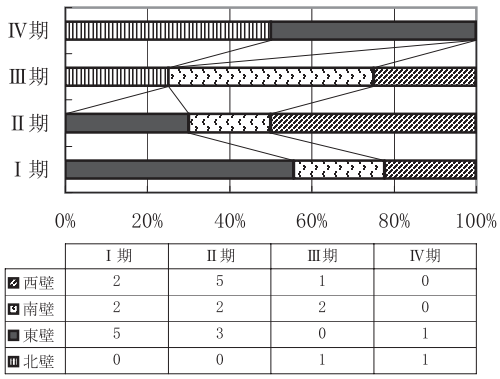
※時期不明3棟を除く



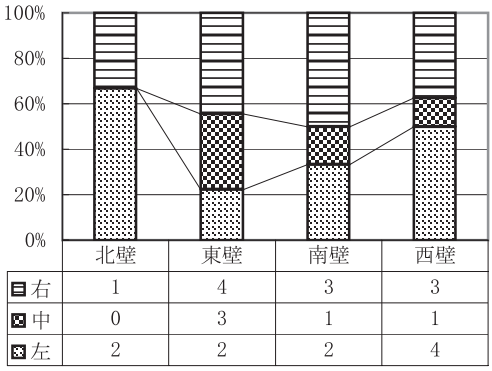
グラフ 4　貼り床有り竪穴住居の時期・規模別構成比



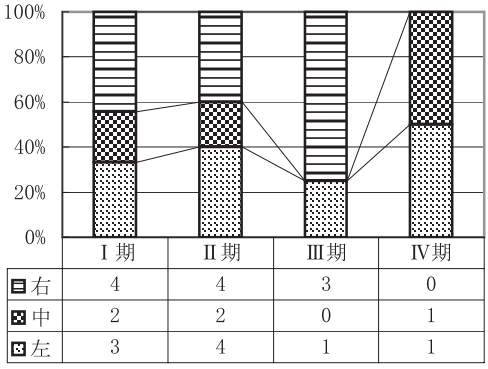
グラフ 5　貼り床無し竪穴住居の時期・規模別構成比



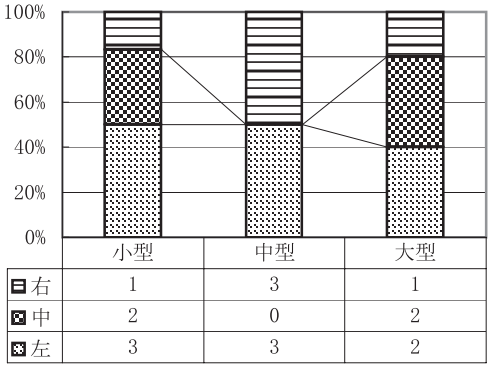
グラフ 6　カマド構築壁方位（時期別）



グラフ 7　カマド位置（壁方位別）



グラフ 8　カマド位置（時期別）



グラフ 9　カマド位置（竪穴住居規模別）

あり、西壁右寄りが継続する。しかし、同時期のSI02は東壁左寄りとなる。SI02と重複するⅡ期のSI01は東壁右寄りとなり、壁面を維持しつつ、配置を変える。Ⅲ期ではSI04～06の３棟があるが、SI04で西壁左寄り、SI06で南壁右寄りとなり、壁面の統一性は崩れる。Ⅳ期ではSI04のみで、東壁中央となる。いずれにしても、時期の移行段階で、壁面が替わる傾向があると言えよう。それを踏まえればⅢ期内における状況も、さらに小期が分れる可能性を示唆している。

C20地区ではⅡ期にSI03・05で、ともに東壁にあるが、SI03は右寄り、SI05は中央となる。

C22地区はⅠ～Ⅳ期まで変遷する。Ⅰ期ではSI04で東壁右寄りに位置している。Ⅱ期は調査区南側に７棟が集中し、その内、SI08・09は南壁で、SI08は左寄り、SI09は右寄りに位置する。SI10・13は西壁左寄りと共通する。これら南側の竪穴住居群はいくつかの小期に分れると考えられ、そうした変遷毎にカマドの位置も変化したと考えられる。Ⅲ期ではSI01が南壁右寄り、SI02が北壁右寄りで共通しない。Ⅳ期にはSI03が北壁左寄りに位置する。

以上の様に、時期が推移する際にカマドの構築される壁面や位置は、新たに竪穴住居が構築される際には、前段階とは違った配置を選択される傾向がある。また、Ⅰ・Ⅱ期は各期の建物群内で壁面を共通させる傾向が把握された。こうしたあり方は、周辺遺跡での検討の中で９世紀代の様相として捉えられる（青山2001）。今回の竪穴住居も９世紀代に変遷するもので、特にⅢ期以降の９世紀後半代では、建物群のなかでもカマド位置の共通性が崩れていくことが窺えた。

（ⅱ）構造

１）補強材

検出された51棟の竪穴住居の内、カマドは26棟で確認され、残る25棟での有無は不明であった。26基のカマドの内、礫による袖部の補強が12基、礫の抜き取り穴が１基に検出された。13基では遺存状況が悪く、構築時に補強材が用いられたかは判然としない。礫による補強がなされたカマドには、時期や地区などで特に集中する傾向は認められない。しかし、竪穴規模では中・大型に確認される。小型ではカマドが確認されても、補強材の有無は全て不明である。中・大型の竪穴住居に比べて、より簡易な構造で、補強材も使用していなかった可能性も考えられる。

また、C９地区SI02のように削平により竪穴自体の遺存状況が悪く、カマドの遺存状況も不良となり、構造が明らかにならない場合と、C10地区SI03のように竪穴の深さもある程度残り、全体的な遺存状況はさほど悪くなくとも、カマドの遺存状況は不良となる場合がある。後者のようなカマドについては、意図的な解体などの要因を考える必要もあろう。

２）支脚位置

カマドに設置する煮炊具の底面を支えるための支脚は、C13・15地区SI01のみで確認された。その位置は、カマドが設置された壁面のライン上にある。煮炊具を据える位置が、竪穴壁面と同一線上であったことを示す。竪穴外も屋内空間として、ある程度確保される必要があったと考えられる。また、支脚は確認されなかったが、袖部の補強材となる礫の位置や、燃焼部に形成された焼土の範囲から、C14・23地区SI01・04でも竪穴外の空間が必要であった可能性がある。この様に、一部の竪穴住居には、竪穴外も屋内空間として利用するための上屋構造があったものと思われる。

（３）須恵器・土師器の胎土分類について

報告書に収録した須恵器・土師器については、胎土の分類を行なった。須恵器はⅠ～Ⅵ群、土師器はⅠ～Ⅴ群に分類される。分類の基準は、任海宮田遺跡B地区の報告時と同様である。ここでは、

それらの構成比率や、自然科学的な胎土分析との比較を行なっていく。

まず、須恵器・土師器の胎土分類について示す。任海宮田遺跡B地区の報告ではカラー図版を用いて器面や断面を示しているので、視覚的な凡例としてはそちらを参照されたい。

〈須恵器〉

Ⅰ群：胎土はやや粗く、砂気が強い。断面は薄い灰色を呈する。

Ⅱ群：胎土はきめ細かく、断面は青灰色を呈し、白色細粒が混じる。

Ⅲ群：胎土は非常にきめ細かい。断面は赤みを帯びた褐色、器面は黒褐色を呈する。大粒の白色粒が混じる場合がある。

Ⅳ群：器面・断面は白みがかった明灰色を呈する。還元不十分な、生焼けの製品である可能性もあるが、一定量出土する。

Ⅴ群：胎土が練り込んだような層をなす。断面は灰色もしくは赤みを帯びる。やや大きめの白色粒と黒色粒が混じる。

Ⅵ群：胎土はやや砂っぽい。断面は薄い灰色を呈する。黒色粒の混入が多く、焼成時に黒色粒が発泡し、穴が開いている場合がある。

Ⅶ群：胎土は非常に粗い。大粒の砂粒が混入する。C地区では該当する個体は確認されなかった。

〈土師器〉

Ⅰ群：胎土は粗く、軟質。断面は灰黄色を呈する。赤彩土師器・黒色土器にも多く認められる。

Ⅱ群：胎土は細かく、断面は黄白色を呈する。赤彩土師器・黒色土器にも多く認められる。

Ⅲ群：胎土の特徴はⅡ群に類似するが、黒色粒が多く含まれる。

Ⅳ群：胎土はきめ細かく、硬質。断面は橙色を呈する。

Ⅴ群：胎土は粗く、断面は肌色を呈する。赤色粒を多く含む。

A 胎土群の傾向

（ⅰ）**須恵器**（第７図）

全体では多い順にⅠ群：65.4％、Ⅵ群：17.6％、Ⅲ群：8.4％、Ⅳ群：5.1％、Ⅱ群：2.8％、Ⅴ群：0.7％となる。

供膳具でも、同様の順となる。比率もⅠ群：66.9％、Ⅵ群：15.2％、Ⅲ群：8.4％、Ⅳ群：6.0％、Ⅱ群：2.5％、Ⅴ群：0.9％となり、大きな変化はない。供膳具内を器種毎に見ると、Ⅰ群が主体となる傾向はかわらないが、Ⅲではⅲ群の比率がやや高い特徴がある。

貯蔵具では、Ⅰ群：59.0％、Ⅵ群：27.8％、Ⅲ群：7.8％、Ⅱ群：3.9％、Ⅳ群1.5％となる。Ⅵ群の比率が多くなり、Ⅱ群もやや多くなる。Ⅳ群の比率が低くなり、Ⅴ群は認められない。貯蔵具を器種毎に見ると、鉢はⅠ群のみで構成され、甕ではⅠ群の比率が高いという特徴がある。

地区毎に胎土群の構成比を見ると、Ⅰ群の比率はC10・11地区とC21地区で高めとなる。これらの地区の建物はⅡ期までで途絶する。逆にⅢ・Ⅳ期まで建物や溝が確認される地区ではⅠ群は比較的少なく、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ群が比率を高める傾向があり、特にC６・22地区で顕著である。このことは、Ⅱ・Ⅲ群が、時期区分のⅢ・Ⅳ期と関連が強いことに起因すると考えられる。つまり、Ⅱ・Ⅲ群の製品については、杯蓋の形態からは８世紀前半頃の時期が想定されるが、その他の器種や技法からは９世紀後半以降の所産であるものが多く、Ⅲ・Ⅳ期に相当するためである。

（ⅱ）土師器（第８図）

全体では多い順にⅡ群：73.6％、Ⅴ群：10.3％、Ⅰ群：8.4％、Ⅲ群：6.5％、Ⅳ群：1.2％となる。

Ⅱ群が卓越し、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ群の比率は大きな差はなく、Ⅳ群はごくわずかである。

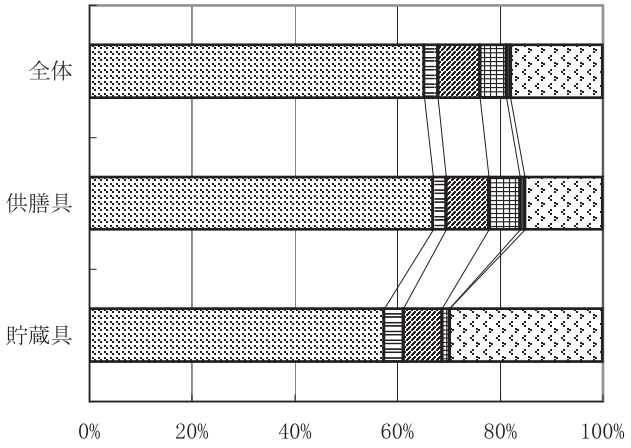
供膳具ではⅡ群：63.6%、Ⅴ群15.5%、Ⅰ群：11.9%、Ⅲ群：7.1%、Ⅳ群：1.9%となる。Ⅱ群の比率がやや低下し、他の各群がそれぞれ比率を高める。供膳具内で、土師器・赤彩土師器・黒色土器での胎土群の比率を見てみると、土師器ではⅠ・Ⅱ群の割合が低くなり、他の群がそれぞれ比率を高める。逆に赤彩土師器ではⅠ群の比率が高くなり、Ⅰ・Ⅱ群でほぼ半数ずつを占める。また、黒色土器はⅡ群が88.0%と高い比率を示す。赤彩土師器ではⅠ・Ⅱ群、黒色土器ではⅡ群の胎土となる傾向が強い。

煮炊具ではⅡ群：89.8%、Ⅲ群：5.6%、Ⅰ群：2.8%、Ⅴ群：1.8%となり、Ⅳ群は認められなかった。Ⅱ群の比率が極めて高く、煮炊具の主体となっていたことが分かる。

地区毎に胎土群の構成比を見ると、いずれの地区もⅡ群が多くを占める。また、Ⅳ群はC6・7・10・20地区で確認され、東側調査区にやや多い傾向がある。

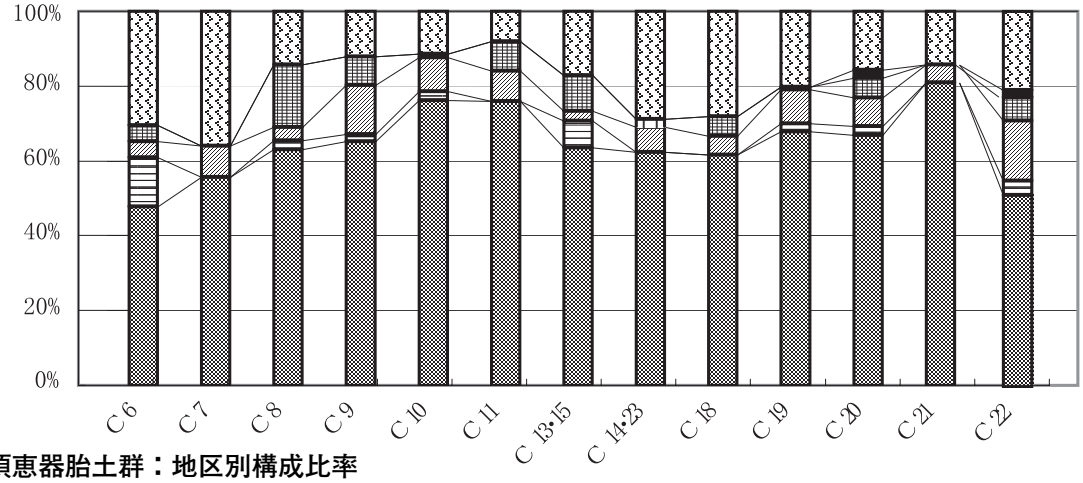
Ⅲ・Ⅴ群については、任海宮田遺跡B地区の報告時に行なった胎土分析と出土のあり方から、B6

	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	計	
須恵器	704	30	90	55	8	195	1082	点数
合計	65.1	2.8	8.3	5.1	0.7	18.0	100.0	%
供膳具	580	22	73	52	8	132	867	点数
合計	66.9	2.5	8.4	6.0	0.9	15.2	100.0	%
杯蓋	135	6	11	6	1	48	207	点数
	65.2	2.9	5.3	2.9	0.5	23.2	100.0	%
杯	28	3	5	0	0	2	38	点数
	73.7	7.9	13.2	0.0	0.0	5.3	100.0	%
杯B	109	5	20	9	0	41	184	点数
	59.2	2.7	10.9	4.9	0.0	22.3	100.0	%
杯A	291	7	32	35	7	38	410	点数
	71.0	1.7	7.8	8.5	1.7	9.3	100.0	%
Ⅲ	16	1	5	2	0	3	27	点数
	59.3	3.7	18.5	7.4	0.0	11.1	100.0	%
その他	1	0	0	0	0	0	1	点数
	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	%
貯蔵具	121	8	16	3	0	63	211	点数
合計	57.3	3.8	7.6	1.4	0.0	29.9	100.0	%
壺	82	7	12	1	0	55	157	点数
	52.2	4.5	7.6	0.7	0.0	35.0	100.0	%
鉢	4	0	0	0	0	0	4	点数
	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	%
甕	35	1	4	2	0	8	50	点数
	70.0	2.0	8.0	4.0	0.0	16.0	100.0	%



須恵器胎土群：構成比率

	地区	C6	C7	C8	C9	C10	C11	C13·15	C14·23	C18	C19	C20	C21	C22	群合計
胎土群	Ⅰ群	11	20	53	69	92	19	26	28	24	90	187	17	51	687
	Ⅱ群	3	0	2	2	3	0	3	0	0	3	7	0	4	27
	Ⅲ群	1	3	3	14	11	2	1	3	2	12	21	1	16	90
	Ⅳ群	1	0	14	8	1	2	4	1	2	1	15	0	6	55
	Ⅴ群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	2	8
	Ⅵ群	7	13	12	13	14	2	7	13	11	27	44	3	21	187



須恵器胎土群：地区別構成比率

第7図　須恵器胎土群の構成比率

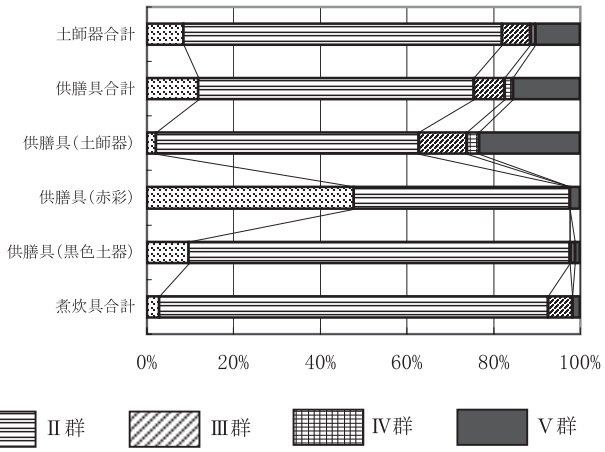
地区の土師器焼成遺構との関連が強いことが示唆された。その出土率はB地区全体で、おおよそ1/3とされている。C地区ではⅢ・Ⅴ群は合わせて16.8%と、1/5に満たない。焼成遺構の稼働時期は9世紀後半から10世紀初頭と考えられ、時期区分ではⅢ・Ⅳ期に相当する。この時期の主な遺構は、B地区では掘立柱建物8棟、竪穴住居14棟があり、C地区では掘立柱建物1棟、竪穴住居13棟がある。竪穴住居の棟数には大差なく、掘立柱建物の棟数の差が、Ⅲ・Ⅴ群の出土量に関連するようである。また、Ⅲ・Ⅴ群の分布を見ると、B地区ではB1・2・6地区の調査区域西側にほとんどが集中し、C地区では各地区にⅢ・Ⅴ群のどちらかが確認される。B地区では西側に多く、C地区では全体に一定量が供給されていたこととなろう。

B胎土分析結果との比較

須恵器、土師器の分類した胎土について、化学的な分析による産地推定を行なった。分析資料となる須恵器は、胎土分類群毎にB・C地区から供膳具6点、貯蔵具4点の計10点を基本に選び出した。ただし、Ⅴ・Ⅶ群の須恵器は試料採取に適した資料が少なかったため、それぞれ7点、5点となった。

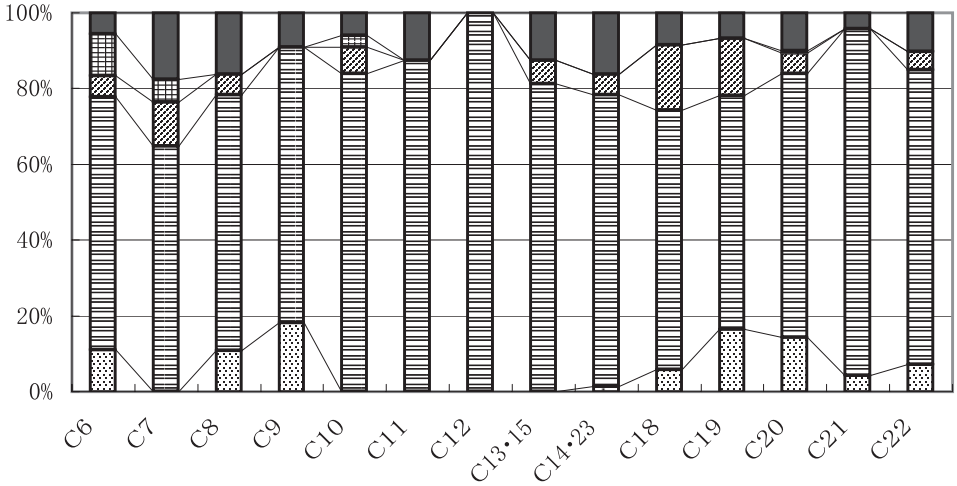
また、B地区出土の鳥形須恵器3点と焼台1点を加え、総計66点を対象とした。さらに、C地区出土の墨書土器39点についても、文字群と胎土との関連を確認するため対象とした。

	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	計	
土師器合計	63	551	49	9	77	749	点数
	8.4	73.6	6.5	1.2	10.3	100.0	%
供膳具合計	55	295	33	9	72	464	点数
	11.9	63.6	7.1	1.9	15.5	100.0	%
土師器	6	179	33	8	69	295	点数
	2.0	60.7	11.2	2.7	23.4	100.0	%
赤彩土師器	41	43	0	0	2	86	点数
	47.7	50.0	0.0	0.0	2.3	100.0	%
黒色土器	8	73	0	1	1	83	点数
	9.6	88.0	0.0	1.2	1.2	100.0	%
煮炊具合計	8	256	16	0	5	285	点数
	2.8	89.8	5.6	0.0	1.8	100.0	%



土師器胎土群構成比率

	地区	C6	C7	C8	C9	C10	C11	C12	C13·15	C14·23	C18	C19	C20	C21	C22	群合計
胎土群	Ⅰ群	2	0	4	6	0	0	0	0	1	2	12	24	1	9	61
	Ⅱ群	12	11	25	24	84	7	1	13	57	24	45	117	21	98	539
	Ⅲ群	1	2	2	0	7	0	0	1	4	6	11	9	0	6	49
	Ⅳ群	2	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7
	Ⅴ群	1	3	6	3	6	1	0	2	12	3	5	17	1	13	73



土師器胎土群：地区別構成比率

第8図　土師器胎土群の構成比率

ここでは、墨書土器を除いた資料について胎土分類と分析結果との比較を行い、墨書文字については後述する。分析結果は胎土分析研究会の三辻利一氏による報告を第二分冊２～９頁に収録しているので、参照されたい。

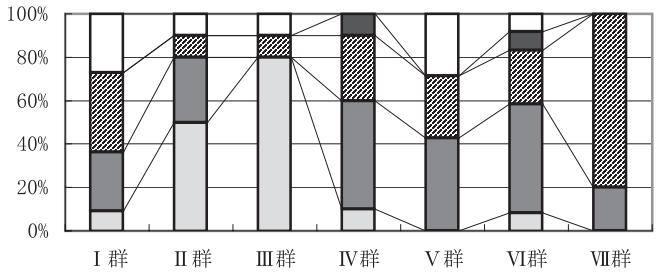
分析結果では、化学的特性から須恵器・土師器ともにA～D群の４つの群（以下、分析A～D群と表記）に分けられた。県内の須恵器窯跡との対応は、分析A群は該当が無く、県外産と推定されている。分析B群は県西部の窯跡、分析C群は下条川右岸・左岸や栴檀野窯跡群などの県中央部の窯跡群が、分析D群は上末窯跡群などの県東部が産地として推定されている。土師器に関しても、それらの須恵器窯跡群付近で粘土を採取し、製作したものと想定される。ただし、分析B群では射水丘陵東端に位置する向野池遺跡も含まれる。

この分析A～D群の比率や、肉眼観察による胎土群との対応関係を示しておく（第９図）。

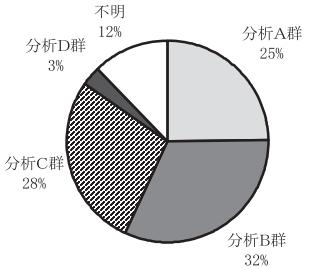
（ｉ）須恵器

分析結果による各分析群の比率は、分析A群：25%、分析B群：32%、分析C群：28%、分析D群：３%、不明：12%であった。分析A・B・C群がそれぞれ３割前後を占めている。

		胎土群（肉眼観察）								
	須恵器	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	Ⅶ群	各分析群合計	分析による推定産地
胎土分析	分析A群	1	5	8	1	0	1	0	16	不明
	分析B群	3	3	0	5	3	6	1	21	県西部
	分析C群	4	1	1	3	2	3	4	18	県中央部
	分析D群	0	0	0	1	0	1	0	2	県東部
	不明	3	1	1	0	2	1	0	8	
	各群合計	11	10	10	10	7	12	5	65	備考：焼台を除く



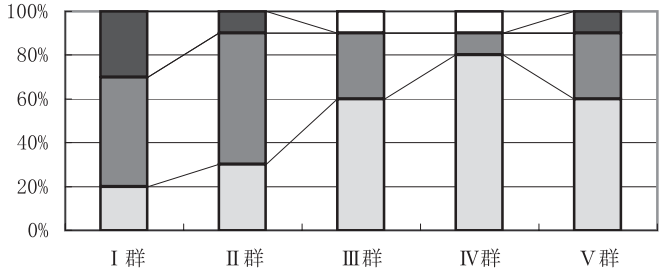
須恵器：胎土群における分析群比率



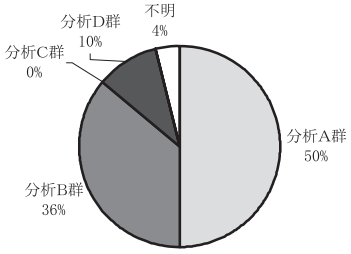
須恵器：分析群比率

分析A群　分析B群　分析C群　分析D群　不明

		胎土群（肉眼観察）						
	土師器	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	各分析群合計	分析による推定産地
胎土分析	分析A群	2	3	6	8	6	25	不明
	分析B群	5	6	3	1	3	18	県西部・向野池遺跡
	分析C群	0	0	0	0	0	0	県中央部
	分析D群	3	1	0	0	1	5	県東部
	不明	0	0	1	1	0	2	
	各群合計	10	10	10	10	10	50	



土師器：胎土群における分析群比率



土師器：分析群比率

分析A群　分析B群　分析C群　分析D群　不明

第９図　分折胎土群との対比

肉眼観察による分類と分析結果との対応を示しておく。分析A群はⅢ群で80％と高い割合で一致し、Ⅱ群も50％を占める。分析B群はⅢ群以外の各群に２～４割程度存在し、特に一致する傾向はない。分析C群はⅦ群で80％と高い割合で一致する。分析D群は全体に少なく、Ⅳ群で16.6％、Ⅵ群で5.5％が認められる程度である。

胎土分析の結果では県西部の分析B群、県中央部と推定される分析C群、不明産地のA群が拮抗し、県東部の分析D群はごく僅かとなった。

（ⅱ）土師器

分析結果による各分析群の比率は、分析A群：50％、分析B群：36％、分析D群：10％、不明：４％で、分析C群は存在しない。

肉眼観察の分類群と分析結果の対応を示す。分析A群はⅣ群で80％、Ⅲ・Ⅴ群で60％と比較的高い割合で一致する。分析B群はⅡ群で60％、Ⅰ群で50％の割合となる。分析D群はⅠ・Ⅱ・Ⅴ群に存在するが、10～30％と低い割合である。

以上のことから、Ⅲ～Ⅴ群は分析A群に、Ⅰ・Ⅱ群は分析B群に対応する可能性が高い。

結果としては、産地不明のA群が半数を占めることとなった。県西部の分析B群、県東部の分析D群と続く。須恵器で約半分を占めていた県中央部の分析C群は皆無であった。

C 胎土分類と分析結果との整合性

須恵器については、Ⅲ群は分析A群、Ⅶ群は分析C群と対応する可能性が高い。また、Ⅰ・Ⅳ～Ⅵ群は分析B群とC群がそれぞれ３～４割を占める傾向が類似する。Ⅰ群は顕著な特徴はなく、また、Ⅳ群は酸化炎焼成、Ⅴ群は生地粘土の混練不足、Ⅵ群は混合材添加の多寡などの制作工程上に生じた結果を分類の観点としたため、特定の分析胎土群に対応しなかったと思われる。Ⅰ・Ⅳ～Ⅵ群に一定量存在する分析B・C群は、分類の視点を変えれば、それぞれ別の胎土分類群をなす可能性もあろう。

土師器では、Ⅰ・Ⅱ群で主体となる分析B群は県西部に対応するが、向野池遺跡の土師器と化学的特性が類似することも指摘されており、射水丘陵東端付近も想定される。また、Ⅲ・Ⅴ群はB６地区の土師器焼成遺構と関連が強いとされるが、Ⅳ群も同様の粘土を用いて製作した可能性が示された。その粘土素地は分析A群が主となるが、現段階では県内の須恵器窯で使用された類例は無い。また、土師器焼成遺構に関わりがある工人の出自を推測する手掛かりとして、鳥形須恵器と焼台についても分析を行なった。両者とも分析B群となり、土師器焼成遺構で製作された土師器とは異なる結果となった。それらと土師器製作工人の関連が強いとすれば、粘土素地は工人とともに将来されたものでなく、いずれかの地で採取されたものが搬入されたこととなる。化学的特性では県内に該当する場所は現段階ではないが、未だ確認されていない県内の窯跡も視野に入れつつ、今後の検討される課題となろう。

（４）墨書土器について

C地区において、墨書土器は合計288点出土した。任海宮田遺跡ではB地区の調査を始め、過去の調査においても墨書土器が多数出土しており、同一文字の墨書土器を有する集団の存在が指摘されている（中野2001）。ここでは、今回の調査で出土した墨書土器について、その文字構成や分布などについて示す。なお、墨書土器の点数については、後述する土器組成の項では破片数を示しているため、数値が異なってくるので留意されたい。

A 組成と分布

墨書土器の種類毎での内訳は須恵器229点（79.5%）、土師器43点（14.9%）、黒色土器７点（2.4%）、赤彩土師器９点（3.2%）となる。これらは、土師器甕類３点を除き、須恵器杯蓋・杯や土師器椀・皿の供膳具で占められている。その中でも須恵器杯類が202点と多く、土師器椀類37点、須恵器杯蓋27点と続く。なお、B 地区での種類別の比率は須恵器38%、土師器72%であり、ほぼ逆転している。B 地区では、B１・６地区で土師器椀類に「成」・「平」の墨書が多いことによると考えられる。

文字別では、１個体に複数箇所の墨書があるものを別々に数えると、292点の文字・記号が確認された（表３）。その中で、「縄足」あるいはその可能性があるものが95点（32.5%）と最も多い。次いで「成」が24点（8.2%）ある。また、「家成」は９点だが、「斐」を併記した「斐家成」を合わせると12点（4.1%）となる。その他、同一文字で３点以上確認されたのは、「貳」・「斐」・「城長」･「庄」がある。

墨書部位は（表４）、全体で見ると底部外面が231点（79.9%）と多くを占める。残りは体部外面31点（10.7%）、頂部外面17点（5.9%）、頂部内面10点（3.5%）となる。概ね、杯・椀類は底部外面、杯蓋は頂部外面に墨書する傾向がある。ただし、「城長」は体部外面が多く､右側を頭とする横位での墨書が主となる。他に体部外面への墨書は｢縄足｣があるが､こちらは左頭の横位が主となる。

これら主な文字群の分布について、時期を踏まえてまとめてみる。「家成」・「斐家成」・「庄」はC９地区を中心とした西側調査区でⅡ期が中心となる。「成」はC10地区に多い他、B６地区で多量に確認された文字であり、Ⅲ期を主体とする。「縄足」はC20地区を中心に東側調査区に多く、Ⅱ～Ⅲ期に確認される。また、東側調査区では「貳」がⅢ期以降、「城長」がⅣ期に認められる。

B 文字の分類

一定量出土する文字群のうち、書き方に違いが認められるものについて分類した。「成」・「平」・「貳」はB 地区の報告時の分類を用いる。C 地区では「縄足」について分類が可能であった（表３）。

「成」は合計24点あるが、成分類３が20点（83.3%）を占める。B 地区では成分類２の方がやや多くあった点とは異なる。「平」は合計２点のみで、１点が平分類２と判断された。「貳」は合計８点のうち、貳分類１が６点（75%）となる。B 地区では貳分類１・２が同数であったことに比べ、貳分類１が集中する傾向がある。

「縄足」は合計で95点がある。「縄」を縄分類A・B、「足」を足分類a・bと分け（第10図）、両者が分類可能な場合はその組み合わせで表記した。縄分類A は糸偏を崩しているが、その形状を止める。縄分類B は形状が崩れ、立心偏状になる。「足」は最終画の払い方で、足分類a・b に分けた。「縄」のみ分類できたのは20点で、縄分類A が15点、縄分類B が６点となる。「足」のみは17点あり、足分類a が15点、足分類b が２点となる。「縄足」の２文字揃って確認できたのは11点あり、縄足Aa が４点、縄足Ab が２点、縄足Ba が５点、縄足Bb は０点であった。「縄」では縄分類A、「足」では足分類a が多いものの、両者の分かる個体では縄足Ba が多い結果となった。さらに細分して分類できる可能性があり、複数の書き手が想定される。

C 墨書土器の胎土分類

墨書土器の胎土群は須恵器ではⅠ群、土師器ではⅡ群を主体とする（表５）。これは須恵器・土師器供膳具での胎土群の構成とほぼ同様である。須恵器・土師器の主な文字群毎に胎土群を示す。

須恵器は「成」・「家成」・「斐家成」・「斐」・「貳」・「縄足」である（グラフ10）。「斐家成」・「斐」はⅠ群のみ、「成」・「家成」はⅠ群を中心にⅥ群をわずかに含む。「貳」はⅠ群が半数を占めるが、

文字		各文字小計		須恵器 杯蓋	須恵器 杯	須恵器 Ⅲ	土師器 椀	土師器 Ⅲ	土師器 甕類	黒色土器 椀	赤彩土師器 椀	赤彩土師器 Ⅲ
縄足	縄分類 A	15	95	2	12	0	1	0	0	0	0	0
	縄分類 B	6		0	6	0	0	0	0	0	0	0
	足分類 a	15		3	8	0	3	0	0	0	0	1
	足分類 b	2		0	2	0	0	0	0	0	0	0
	縄足 Aa	4		0	3	0	1	0	0	0	0	0
	縄足 Ab	2		0	2	0	0	0	0	0	0	0
	縄足 Ba	5		0	5	0	0	0	0	0	0	0
	縄足 Bb	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0
	分類不可	46		7	24	0	12	0	0	0	3	0
成	成分類 1	0	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	成分類 2	1		0	0	0	1	0	0	0	0	0
	成分類 3	20		0	18	0	0	0	0	2	0	0
	分類不可	3		0	3	0	0	0	0	0	0	0
貳	貳分類 1	7	9	0	7	0	0	0	0	0	0	0
	貳分類 2	1		0	1	0	0	0	0	0	0	0
	分類不可	1		0	1	0	0	0	0	0	0	0
平	平分類 2	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	分類不可	1		0	1	0	0	0	0	0	0	0
家成			9	1	8	0	0	0	0	0	0	0
家成＋斐			3	1	2	0	0	0	0	0	0	0
城長			6	0	2	0	4	0	0	0	0	0
斐			6	0	6	0	0	0	0	0	0	0
庄			3	0	3	0	0	0	0	0	0	0
人面？			1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
少数文字又は記号			38	4	23	0	7	2	0	1	2	0
不明			90	9	67	0	7	1	2	4	4	1
合計		292		27	204	0	37	3	3	7	9	2

表 3　文字別一覧表

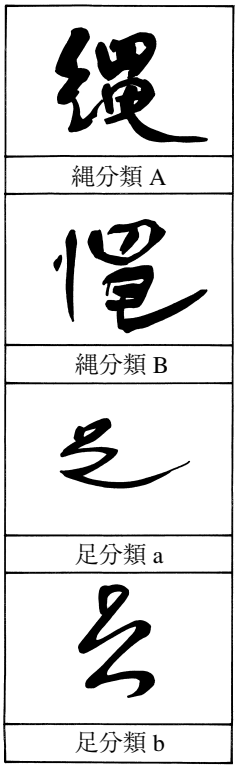
		杯蓋 頂部 外面	杯蓋 頂部 内面	杯・椀・Ⅲ 底部 外面	体部外面（天地別） 左頭	倒立	右頭	不明	合計
須恵器	成	0	0	20	0	0	0	0	20
	家成	0	1	8	0	0	0	0	9
	斐家成	0	1	2	0	0	0	0	3
	斐	0	0	5	0	0	0	0	5
	貳	0	0	9	0	0	0	0	9
	縄足	10	2	60	2	0	0	0	74
土師器	縄足	0	0	19	2	0	1	0	22
	城長	0	0	1	0	0	3	0	4
須恵器・土師器　その他		7	6	107	1	2	2	18	143
		17	10	231	31				289

表 4　墨書部位

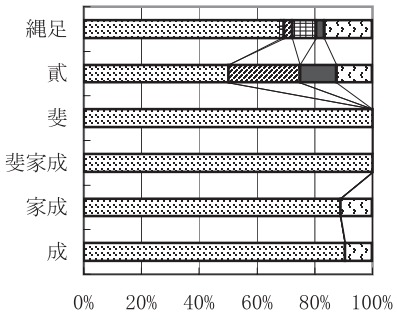
※甕体部外面 3 点を除く

胎土群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	計
墨書須恵器	173	2	7	15	6	26	229
墨書土師器	4	34	11	0	10		59

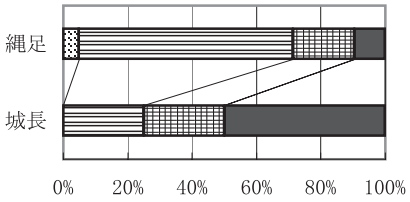
表 5　墨書土器胎土群構成比



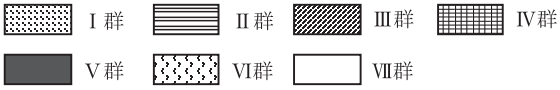
第10図　「縄足」文字分類



グラフ10　須恵器：文字別胎土群比率



グラフ11　土師器：文字別胎土群比率



Ⅲ・Ⅴ群の比率が高い。「縄足」はⅠ～Ⅵ群の全てが認められるが、Ⅰ群が主体となる傾向は変わらない。「縄足」・「貳」の東側調査区に分布する墨書土器が、複数の胎土群で構成されている。

土師器は「縄足」・「城長」である（グラフ11）。「縄足」はⅡ群、「城長」はⅤ群が多い。また、「城長」ではⅢ・Ⅴ群を合わせて８割近くを占める。土師器のⅢ・Ⅴ群は、B６地区土師器焼成遺構と関連が強いとされ、「城長」にその胎土群が多い点が注目される。おそらく、「縄足」がⅡ～Ⅲ期、「城長」はⅣ期が主体であり、後者の方が土師器焼成遺構の稼働時期により近いためと思われる。

D 墨書土器の胎土分析

須恵器の墨書土器では、「縄足」・「成」・「家成」・「斐家成」・「貳」など一定量確認されるものと、「墾田」「観音寺」など少数確認される特徴的な文字について、合計39点の胎土分析を行なった。

分析資料での胎土分類はⅠ群が26点と多く、「家成」・「斐家成」・「成」・「縄足」が概ね該当した。Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ群では、いずれにも「縄足」が存在し、Ⅳ群には「笠丸」、Ⅵ群には「墾田」・「観音寺」が含まれる。また、Ⅲ群は「貳」のみであった。

分析結果では、産地不明の分析A群では「貳」・「観音寺」、県西部と推定される分析B群では「家成」・「斐家成」・「斐」が主体となる。県中央部の分析C群では「縄足」・「成」を中心に、「斐」・「貳」・「墾田」・「家成」・「庄」がわずかに含まれた。県東部の分析D群では「笠丸」のみであった。

以上のように、「家成」・「斐家成」・「成」・「縄足」の一定量出土する文字群は、胎土分類では概ねⅠ群であったが、分析胎土群により分析B群は「家成」・「斐家成」、分析C群は「成」・「縄足」に対応する傾向が読みとれた。分析A群は「貳」に対応する。

また、B地区出土の「成」は報告時に行なった須恵器墨書土器の胎土分析では、「平」とともにほとんどが釜谷窯跡群と推定された（三辻2007）。さらにA１地区出土の線刻で「成」と記された須恵器の胎土分析結果は、今回の分析A群に対応している。これらのことから、特に「成」は複数の産地により構成されていることが分かる。

E まとめ

さて、C地区とB地区を合わせた文字の分布では、西側に「成」・「平」・「家成」・「斐家成」・「斐」があり、東側に「縄足」・「貳」・「城長」が多く分布する様相が窺える。これらの文字群ごとに、時期や胎土分析の結果などをまとめると以下のようになる。

「家成」・「斐家成」・「斐」はⅡ期にあり、県西部の製品と推定される須恵器である。

「縄足」はⅡ～Ⅲ期にあり、須恵器は県中央部、土師器は県西部に産地推定される。複数の書き手によるものであるが、C20地区のSD001を中心にまとまって出土し、分布にあまり広がりはない。

「平」はⅢ期以降で、須恵器は釜谷窯跡群となるが、土師器は遺跡内で生産されたと推定される。

「成」はⅢ期以降で、須恵器は県中央部・釜谷窯跡群・不明産地と推定される。不明産地の胎土となる土師器は、「成」集団に関わりの深い土師器焼成遺構の製品と考えられる。この粘土素地を持ち込んで遺跡内で生産された製品は、任海宮田遺跡全体に供給され、その製品の墨書には「平」・「城長」も認められる。ただし、土師器焼成遺構のあるB６地区や、大型掘立柱建物のあるB１地区では、この胎土と対応するⅡ・Ⅲ群の須恵器が多く出土することが指摘される（武田2006）が、これらの須恵器への墨書は少ない。

逆に、Ⅱ・Ⅲ群の須恵器に墨書されるのは「貳」である。C地区では全て須恵器に墨書され、B地区でも須恵器がほとんどを占める。こうした傾向は周辺の調査地においても指摘され（堀沢2000）、

同時期に土師器供膳具があるにも関わらず、須恵器を選んで墨書されていた可能性がある。

このように、各時期とも複数産地の製品が搬入されていたと考えられ、多くの場合、同一文字群であってもそうした傾向にあり、特に「成」において顕著であった。ここで注目されるのは、不明産地の分析A群となった胎土である。土師器ではB6地区の土師器焼成遺構での製作と考えられるこの製品には「成」・「平」・「城長」の墨書があり、任海宮田遺跡全体に分布する。また、焼成前に「成」と線刻された須恵器も同様の胎土であることから、この分析A群なる須恵器や粘土素地の搬入に「成」集団が強く関連していた可能性が高い。また、「成」・「平」の分布域では、この胎土となる須恵器は墨書の対象外で、「貳」では墨書の対象と成り得た。そこにどの様な意図があるのか判然としないが、何らかの意識的な差が認められることは、そこに異なる集団が存在していたことを窺わせる。しかし、先述したように「成」集団製作の土師器には「平」や「城長」の墨書もあることから、集団間で製品の流通を含めた交流があったと考えられよう。

（5）古代土器組成と出土分布

任海宮田遺跡C地区では、竪穴住居はC8～11、13・15、14・23、18～22地区で検出され、掘立柱建物はC19地区のみで認められる。これらの地区について土器の組成と分布を提示していく。他にC6・7地区では建物はないが、居住域以外での土地利用の広がりが窺え、組成についてのみ提示しておく。また、一部の竪穴住居出土土器の組成を示す。なお、任海宮田遺跡では、A・B地区の報告でも同様に土器組成と分布を示してきた。それらとC地区での結果を比較しておきたい。

A 集計と分布図作成の方法

集計については、土器を各種類別に分類し、計数は接合前に破片数で行なった。

地区毎の破片数は遺構・包含層出土の破片数に分け、それらを器種毎の小計と、杯類や壺類などの中分類毎の小計を示し、種類毎の合計を示している（表6）。

種類別では、須恵器・土師器・黒色土器・赤彩土師器・施釉陶器・製塩土器毎に集計した（表7、グラフ12）。なお、C地区では古代の遺構・包含層から土錘・羽口などの土製品は出土していない。

用途別の集計結果は、供膳具・貯蔵具・煮炊具・硯（文房具）・製塩土器・その他（形状判別不可能）に分けて示した（表8、グラフ13）。また、供膳具は須恵器・土師器・黒色土器・赤彩土師器に分けて示しておく。

分布図は2×2mのグリッド毎に、種類毎に●△などのシンボルを用い、数量によりその大きさを変えて地区毎に示した（第10～27図）。また、シンボルはグリッド内を4分割し、それぞれの器種毎に位置を決めて配した。そのため、見かけ上は調査区外にシンボルが位置することがあるが、全て調査区内からの出土である。

B 土器組成と分布

以下、C地区における土器の組成について示しておきたい。まず、C地区全体の概観を示し、その後に各地区の様相を見ていく。

〈C地区全体〉

遺構変遷の際に示したように、古代の遺物には時期幅があるが、全体での傾向を大まかに把握することはできよう。

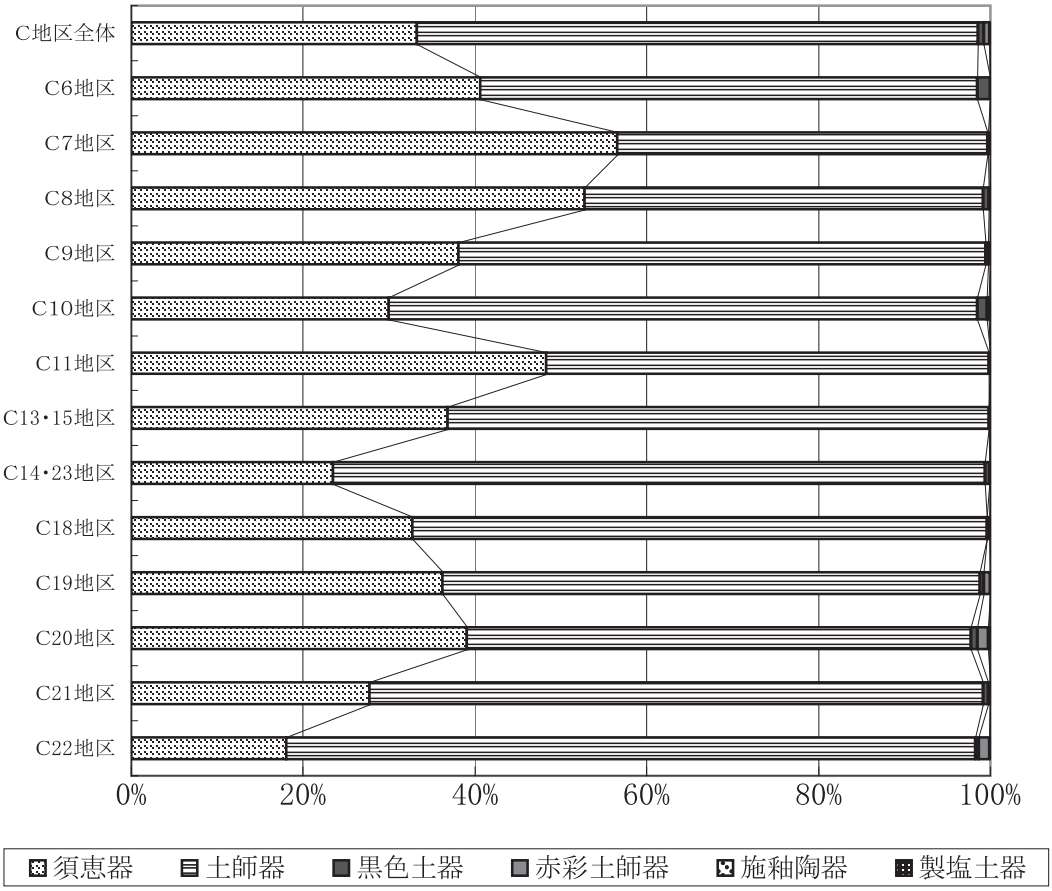
種類毎：土師器31,165点（65.35%）、須恵器15,849点（33.24%）、赤彩土師器322点（0.68%）、黒色土器300点（0.63%）、製塩土器24点（0.05%）、施釉陶器23点（0.05%）となる。

表６　任海宮田遺跡Ｃ地区　古代出土遺物　破片数集計表（１）

種類	器種	Ｃ６地区					Ｃ７地区					Ｃ８地区					Ｃ９地区					Ｃ１０地区					Ｃ11地区					Ｃ13・15地区				
		遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計
須恵器	杯蓋	47	18	65	65	384	17	79	96	96	518	99	66	165	165	1008	39	98	137	137	813	27	416	443	443	2011	5	38	43	43	318	21	66	87	87	537
	杯	159	46	205	239		57	102	159	242		204	94	298	570		82	158	240	467		59	119	178	1032		30	64	94	172		37	103	140	277	
	杯Ａ	9	6	15			9	38	47			101	55	156			70	78	148			42	696	738			6	52	58			29	55	84		
	杯Ｂ	10	9	19			12	24	36			82	34	116			29	50	79			9	107	116			1	19	20			9	44	53		
	皿	1	0	1	1		1	0	1	1		1	1	2	3		0	0	0	0		0	0	0	3		0	0	0	0		0	0	0	3	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			2	0	2		
	皿Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	1	1			0	0	0			0	3	3			0	0	0			0	1	1		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	鉢	0	0	0	0		0	0	0	0		3	1	4	4		0	0	0	0		0	1	1	1		0	0	0	0		0	1	1	1	
	壺類	12	6	18	18		18	40	58	58		28	19	47	47		14	19	33	33		10	122	132	132		1	17	18	18		11	34	45	45	
	壺蓋	0	0	0	0		0	0	0	0		1	1	2	4		5	2	7	7		0	0	0	4		0	0	0	0		0	1	1	1	
	短頸壺	0	0	0			0	0	0			0	2	2			0	0	0			0	4	4			0	0	0			0	0	0		
	直口壺	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	広口壺	0	0	0			0	0	0			1	1	2			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	2	2		
	長頸壺	0	0	0	1		0	0	0	1		1	0	1	5		1	0	1	21		0	1	1	7		0	0	0	0		0	1	1	5	
	双耳壺	0	1	1			0	1	1			1	1	2			9	11	20			0	6	6			0	0	0			0	2	2		
	細頸壺	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	横瓶	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		7	5	12	12	
	甕	26	27	53	53		52	68	120	120		108	96	204	204		93	54	147	147		13	374	387	387		1	83	84	84		16	89	105	105	
	硯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	2	2	2		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	4	3	7	7		0	0	0	0		4	2	6	6		1	0	1	1		0	0	0	0		0	1	1	1		0	1	1	1	
土師器	椀	269	130	399	414	547	73	133	206	237	395	328	122	450	617	886	33	72	105	122	1313	44	486	530	1141	4606	3	35	38	85	340	18	69	87	164	921
	椀Ａ	9	0	9			0	27	27			92	62	154			10	6	16			13	553	566			4	41	45			1	65	66		
	椀Ｂ	4	2	6			0	4	4			6	7	13			1	0	1			0	45	45			0	2	2			0	11	11		
	皿	3	0	3	4		0	2	2	2		2	0	2	5		0	0	0	0		2	14	16	20		0	0	0	0		0	0	0	0	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	1	1			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿Ｂ	1	0	1			0	0	0			2	0	2			0	0	0			0	4	4			0	0	0			0	0	0		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	鉢	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	13	13	13		0	0	0	0		0	0	0	0	
	甕	42	34	76	85		24	92	116	140		113	78	191	246		373	667	1040	1187		231	3160	3391	3427		113	134	247	254		175	536	711	755	
	小型甕	1	3	4			18	3	21			36	8	44			41	101	142			14	9	23			1	5	6			22	20	42		
	堝	4	1	5			1	2	3			8	3	11			5	0	5			1	12	13			0	1	1			0	2	2		
	その他	38	6	44	44		15	1	16	16		14	4	18	18		0	4	4	4		2	3	5	5		0	1	1	1		0	2	2	2	
黒色土器	椀	13	0	13	13	14	0	1	1	1	1	4	6	10	13	13	0	7	7	7	7	1	70	71	78	79	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	椀Ａ	0	0	0			0	0	0			2	1	3			0	0	0			2	3	5			0	0	0			0	0	0		
	椀Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	2	2			0	0	0			0	0	0		
	皿	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	1	0	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0	
赤彩土師器	椀	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	0	0	0	2	3	0	2	2	2	4	12	0	12	12	13	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	椀Ａ	0	0	0			0	0	0			2	0	2			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	椀Ｂ	0	0	0			0	1	1			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿	0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	1	1		1	0	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		1	0	1	1		0	1	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0	
灰釉陶器	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
緑釉陶器	椀	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0	0		0	0	0	1	
	坏	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	1	1		
	不明	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
奈良三彩	火舎	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	10	10	10		0	0	0	0		0	0	0	0	
製塩土器	製塩土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		653	292	945	945	945	297	619	916	916	916	1243	667	1910	1910	1910	808	1329	2137	2137	2137	482	6237	6719	6719	6719	165	494	659	659	659	348	1112	1460	1460	1460

表６　任海宮田遺跡Ｃ地区　古代出土遺物　破片数集計表（２）

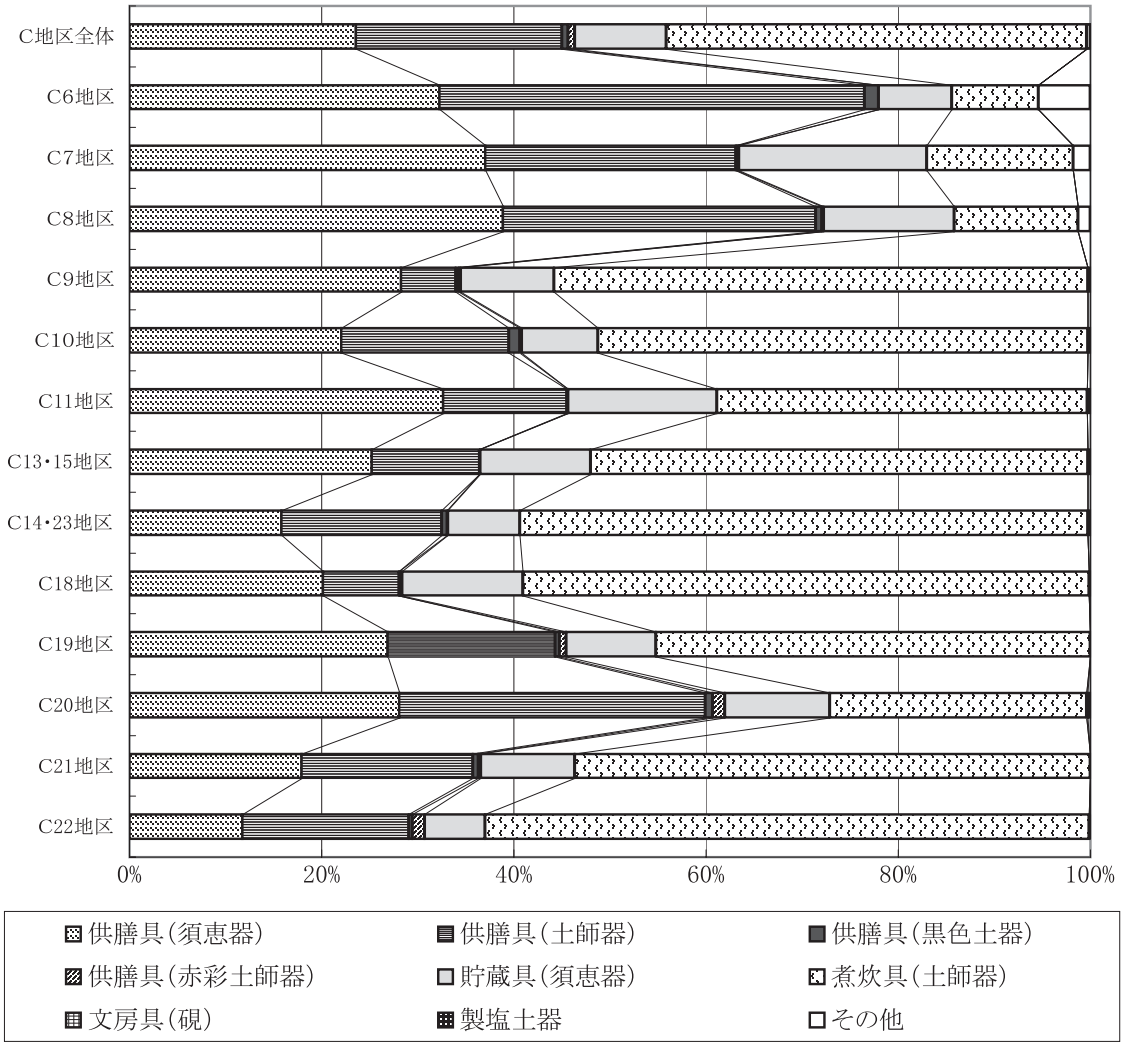
		Ｃ14・23地区					Ｃ18地区					Ｃ19地区					Ｃ20地区					Ｃ21地区					Ｃ22地区				
種類	器種	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計	遺構	包含層	器種小計		種類別合計
須恵器	杯蓋	75	117	192	192	1071	4	87	91	91	571	59	335	394	394	1941	270	302	572	572	5008	22	42	64	64	417	66	109	175	175	1252
	杯	108	185	293	518		10	130	140	247		154	460	614	1021		857	683	1540	3018		32	79	111	204		111	282	393	638	
	杯Ａ	49	84	133			4	64	68			40	222	262			560	416	976			10	48	58			39	119	158		
	杯Ｂ	24	68	92			3	36	39			18	127	145			246	256	502			10	25	35			17	70	87		
	皿	0	3	3	5		0	1	1	4		0	2	2	11		0	4	4	6		0	0	0	1		0	0	0	2	
	皿Ａ	1	1	2			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	1	1			0	0	0		
	皿Ｂ	0	0	0			0	3	3			2	7	9			2	0	2			0	0	0			1	1	2		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	鉢	0	6	6	6		0	9	9	9		0	14	14	14		2	0	2	2		0	0	0	0		0	0	0	0	
	壺類	27	51	78	78		0	26	26	26		9	78	87	87		183	246	429	429		5	35	40	40		11	67	78	78	
	壺蓋	0	1	1	2		0	0	0	0		0	11	11	12		6	0	6	22		0	0	0	1		0	2	2	7	
	短頸壺	0	1	1			0	0	0			0	1	1			9	7	16			0	1	1			0	5	5		
	直口壺	0	0	0	23		0	1	1	11		0	0	0	27		0	0	0	72		2	0	2	7		0	0	0	12	
	広口壺	2	13	15			0	1	1			1	15	16			11	10	21			2	0	2			0	6	6		
	長頸壺	2	5	7			3	0	3			0	2	2			14	0	14			2	0	2			0	0	0		
	双耳壺	1	0	1			0	6	6			0	8	8			23	14	37			0	1	1			6	0	6		
	細頸壺	0	0	0			0	0	0			0	1	1			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	横瓶	0	2	2	2		0	1	1	1		0	6	6	6		0	5	5	5		0	0	0	0		0	0	0	0	
	甕	70	166	236	236		3	178	181	181		40	329	369	369		403	468	871	871		26	74	100	100		113	226	339	339	
	硯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	5	4	9	9		0	1	1	1		0	0	0	0		10	1	11	11		0	0	0	0		1	0	1	1	
土師器	椀	161	432	593	750	3457	13	80	93	133	1168	129	605	734	921	3359	1824	1572	3396	4077	7534	42	162	204	269	1076	324	569	893	1185	5566
	椀Ａ	42	111	153			0	39	39			34	147	181			631	14	645			19	41	60			72	205	277		
	椀Ｂ	1	3	4			0	1	1			1	5	6			26	10	36			3	2	5			4	11	15		
	皿	3	3	6	11		0	5	5	6		3	5	8	15		8	1	9	14		0	0	0	0		4	0	4	10	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	2	2			0	0	0			4	0	4		
	皿Ｂ	3	2	5			0	1	1			0	6	7			2	1	3			0	0	0			2	0	2		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0	
	鉢	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		5	1	6	6	
	甕	980	1612	2592	2693		47	934	981	1029		587	1623	2210	2422		1642	1354	2996	3429		191	526	717	807		1276	2516	3792	4362	
	小型甕	28	63	91			3	40	43			36	132	168			244	154	398			34	52	86			258	305	563		
	壷	2	8	10			0	5	5			13	31	44			11	24	35			3	1	4			5	2	7		
	その他	2	1	3	3		0	0	0	0		1	0	1	1		8	2	10	10		0	0	0	0		0	2	2	2	
黒色土器	椀	19	3	22	24	24	0	0	0	0	0	6	12	18	23	23	70	4	74	100	100	3	4	7	9	9	18	9	27	29	29
	椀Ａ	2	0	2			0	0	0			1	4	5			13	13	26			2	0	2			1	0	1		
	椀Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	1	1		
	皿	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
赤彩土師器	椀	0	1	1	3	3	0	3	3	4	6	0	15	15	22	40	67	34	101	142	159	0	0	0	1	3	28	35	63	83	85
	椀Ａ	2	0	2			0	1	1			0	7	7			12	24	36			1	0	1			10	9	19		
	椀Ｂ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			1	4	5			0	0	0			0	1	1		
	皿	0	0	0	0		0	0	0	2		5	5	10	16		0	1	1	2		0	0	0	1		0	1	1	3	
	皿Ａ	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	皿Ｂ	0	0	0			0	2	2			2	5	6			0	1	1			0	1	1			0	2	2		
	高杯	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
	その他	0	0	0	0		0	0	0	0		1	1	2	2		2	16	18	18		0	1	1	1		0	0	0	0	
灰釉陶器	瓶	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
緑釉陶器	椀	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0			0	6	6	9		0	0	0	0		1	0	1	1	
	坏	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0		
	不明	0	0	0			0	0	0			0	0	0			1	2	3			0	0	0			0	0	0		
奈良三彩	火舎	0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
製塩土器	製塩土器	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	5	18	18	18	0	0	0	0	0	3	2	5	5	5
合計		1610	2946	4556	4556	4556	90	1656	1746	1746	1746	1142	4221	5363	5363	5363	7171	5658	12829	12829	12829	409	1096	1505	1505	1505	2380	4558	6938	6938	6938



グラフ12　土器種類別組成

種類	須恵器	土師器	黒色土器	赤彩土師器	施釉陶器	製塩土器		
C 地区全体	15849	31165	300	322	23	24	47683	点数
	33.24	65.35	0.63	0.68	0.05	0.05	100	%
C 6 地区	384	547	14	0	0	0	945	点数
	40.63	57.89	1.48	0.00	0.00	0.00	100	%
C 7 地区	518	395	1	2	0	0	916	点数
	56.55	43.12	0.11	0.22	0.00	0.00	100	%
C 8 地区	1008	886	13	3	0	0	1910	点数
	52.77	46.39	0.68	0.16	0.00	0.00	100	%
C 9 地区	813	1313	7	4	0	0	2137	点数
	38.04	61.44	0.33	0.19	0.00	0.00	100	%
C10地区	2011	4606	79	13	10	0	6719	点数
	29.93	68.55	1.18	0.19	0.15	0.00	100	%
C11地区	318	340	1	0	0	0	659	点数
	48.25	51.60	0.15	0.00	0.00	0.00	100	%
C13・15地区	537	921	0	1	1	0	1460	点数
	36.78	63.08	0.00	0.07	0.07	0.00	100	%
C14・23地区	1071	3457	24	3	0	1	4556	点数
	23.51	75.87	0.53	0.07	0.00	0.02	100	%
C18地区	571	1168	0	6	1	0	1746	点数
	32.70	66.90	0.00	0.34	0.06	0.00	100	%
C19地区	1941	3359	23	40	0	0	5363	点数
	36.19	62.63	0.43	0.75	0.00	0.00	100	%
C20地区	5008	7531	100	162	10	18	12829	点数
	39.04	58.70	0.78	1.26	0.08	0.14	100	%
C21地区	417	1076	9	3	0	0	1505	点数
	27.71	71.49	0.60	0.20	0.00	0.00	100	%
C22地区	1252	5565	29	86	1	5	6938	点数
	18.05	80.21	0.42	1.24	0.01	0.07	100	%

表 7　土器種類別組成



グラフ13　土器用途別組成

器種	全体	C 6	C 7	C 8	C 9	C10	C11	C13・15	C14・23	C18	C19	C20	C21	C22	
供膳具(須恵器)	11246	305	339	742	604	1479	215	368	721	351	1440	3598	269	815	点数
	23.58	32.28	37.01	38.84	28.26	22.01	32.63	25.21	15.83	20.11	26.85	28.05	17.87	11.75	%
供膳具(土師器)	10222	418	239	622	122	1174	85	164	761	139	936	4092	269	1201	点数
	21.44	44.23	26.09	32.57	5.71	17.47	12.90	11.23	16.70	7.96	17.45	31.90	17.87	17.31	%
供膳具(黒色土器)	300	14	1	13	7	79	1	0	24	0	23	100	9	29	点数
	0.63	1.48	0.11	0.68	0.33	1.18	0.15	0.00	0.53	0.00	0.43	0.78	0.60	0.42	%
供膳具(赤彩土師器)	323	0	2	3	4	13	0	1	3	6	40	162	3	86	点数
	0.68	0.00	0.22	0.16	0.19	0.19	0.00	0.07	0.07	0.34	0.75	1.26	0.20	1.24	%
貯蔵具(須恵器)	4563	72	179	260	208	530	102	168	341	219	501	1399	148	436	点数
	9.57	7.62	19.54	13.61	9.73	7.89	15.48	11.51	7.48	12.54	9.34	10.90	9.83	6.28	%
煮炊具(土師器)	20836	85	140	246	1187	3427	254	755	2693	1029	2422	3429	807	4362	点数
	43.70	8.99	15.28	12.88	55.55	51.01	38.54	51.71	59.11	58.94	45.16	26.73	53.62	62.87	%
文房具(硯)	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	点数
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	%
製塩土器	24	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	18	0	5	点数
	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.14	0.00	0.07	%
その他	167	51	16	24	5	15	2	4	12	2	1	31	0	4	点数
	0.35	5.40	1.75	1.26	0.23	0.22	0.30	0.27	0.26	0.11	0.02	0.24	0.00	0.06	%
破片数計	47683	945	916	1910	2137	6719	659	1460	4556	1746	5363	12829	1505	6938	点数
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	%

表 8　土器用途別組成

用途別：供膳具22,091点（46.33%）、煮炊具20,836点（43.70%）、貯蔵具4,563点（9.57%）、その他167点（0.35%）、製塩土器24点（0.05%）、硯２点（0.01%未満）となる。また、供膳具は須恵器50.9%、土師器46.3%、赤彩土師器1.5%、黒色土器1.4%の割合で構成される。なお、墨書土器は291点出土し、全破片数の内0.6%となる。この内、２点が小型甕に墨書され、他は須恵器・土師器の供膳具に墨書が認められた。供膳具に限ってみれば、墨書土器は1.31%の割合となる。

分布：各地区内の分布は後述することにし、ここでは、地区毎の出土点数と面積単位での出土率を比較しておきたい。両者については表９、グラフ14で示した。

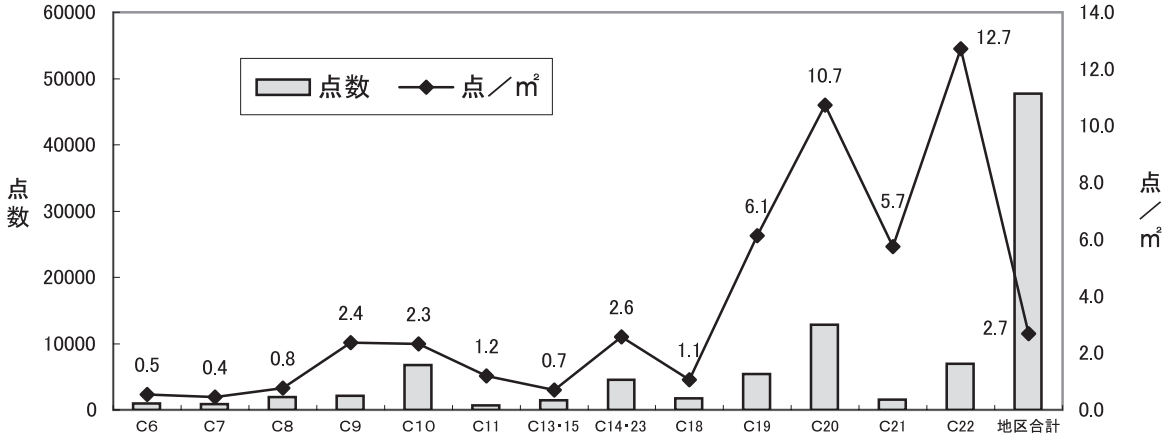
土器の総点数は47,683点を数える。地区毎では、C20地区が12,829点で最も多く、それに次ぐC22地区の6,938点に対し、２倍近い出土量がある。さらにC10地区の6,719点と続き、最も少ないのはC11地区の659点となる。この様に、点数で比較すれば、C地区の東側に多い傾向があるものの、C10地区やC14・23地区の中央部付近にも低いピークがあるように見られる。

ここで、見方を変えて、調査面積あたりの出土量として比較してみたい。古代面の調査対象面積は、調査区全体よりも小さくなる場合があるが、遺物の出土自体は調査区全域に広がるため古代面の面積のみの出土点数を把握することは難しい。そのため、調査区全体の面積で、出土点数を割った値を、点／面積（㎡）として提示することとする。

C22地区が12.7点/㎡で密度が最も高い、次いでC20、C19、C21地区と続く。他の地区では、2.6点/㎡以下の値を示し、最も密度が低いのはC７地区の0.4点/㎡となる。この様に、点数のみの比較ではややばらつきのあった傾向が、密度で比べるとC地区でも東側の地区で遺物が多く出土する傾向が明瞭になる。

以上のように、出土点数・出土率からはC地区の東側、熊野川左岸に隣接する範囲に中心があったことが分かる。このことは、検出された建物群の分布や密度の状況とも一致する。

特徴：C地区全体の様相をまとめると、以下のようになる。①供膳具における須恵器と土師器の比率はほぼ同等である。②遠隔地から搬入された施釉陶器はごく僅かに存在する。③土師器の煮炊具が高



グラフ14　地区別出土点数・出土率

地区	C６	C７	C８	C９	C10	C11	C13・15	C14・23	C18	C19	C20	C21	C22	地区合計
点数	945	916	1910	2137	6719	659	1460	4556	1746	5363	12829	1505	6938	47683
面積	1757	2064	2471	900	2907	552	859	1775	1659	876	1195	262	546	17823
点/㎡	0.5	0.4	0.8	2.4	2.3	1.2	0.7	2.6	1.1	6.1	10.7	5.7	12.7	2.7

表９　地区別出土点数・面積・出土率

い割合で存在する。④C地区の東側は遺構・遺物ともに濃密な分布を示す。

〈C6地区〉

種類毎：土師器547点（57.89%）、須恵器384点（40.63%）、黒色土器14点（1.48%）となる。

用途別：供膳具737点（77.99%）、煮炊具85点（8.99%）、貯蔵具72点（7.62%）、その他51点（5.40%）となる。また、供膳具は須恵器41.4%、土師器56.7%、黒色土器1.9%の割合で構成される。墨書土器は須恵器1点、土師器1点があり、供膳具の内の0.27%のみとなる。

特徴：①供膳具の比率が高く、煮炊具は少ない。供膳具では土師器の比率がやや高い。②溝における土師器供膳具を中心とした遺物の廃棄行為が行なわれたことが、①の要因と見られる。

〈C7地区〉

種類毎：須恵器518点（56.55%）、土師器395点（43.12%）、赤彩土師器2点（0.22%）、黒色土器1点（0.11%）となる。

用途別：供膳具581点（63.43%）、煮炊具140点（15.28%）、貯蔵具179点（19.54%）、その他16点（1.75%）となる。また、供膳具は須恵器58.3%、土師器41.1%、赤彩土師器0.3%、黒色土器0.2%の割合で構成される。墨書土器は須恵器に2点あり、供膳具の内の0.34%のみである。

特徴：①C6地区と同様に、供膳具の比率が高い。②供膳具では須恵器の比率がやや高い。③貯蔵具の比率が高めで、SX01での須恵器甕の廃棄行為が反映していると思われる。

〈C8地区〉

種類毎：須恵器1008点（52.77%）、土師器886点（46.39%）、赤彩土師器3点（0.16%）、黒色土器13点（0.68%）となる。

用途別：供膳具1380点（72.26%）、煮炊具246点（12.88%）、貯蔵具260点（13.61%）、その他24点（1.26%）となる。また、供膳具は須恵器53.8%、土師器45.1%、赤彩土師器0.2%、黒色土器0.9%の割合で構成される。墨書土器は須恵器7点、土師器8点、黒色土器2点、赤彩土師器2点があり、供膳具の内の1.38%となる。

分布：ほとんどの遺物が、調査区を貫く自然流路とその北東側に分布する。特に自然流路内の南東側に多くが集中し、出土状況からもⅡ～Ⅲ期に遺物の廃棄行為がされたことが分かる。また、墨書土器は流路部分にのみ出土が認められ、廃棄行為に伴ったものと思われる。

特徴：①供膳具の占める割合が高く、その内訳では須恵器の比率がやや高い。②竪穴住居1棟が確認されるが、その周辺に煮炊具の分布は少ない。短期的な利用であった可能性がある。③流路への廃棄行為には土師器・須恵器の供膳具の他、須恵器貯蔵具や土師器煮炊具も伴う。先述した小型埴Aも含まれ、器種構成の豊富な内容であり、Ⅱ～Ⅲ期になされた。

〈C9地区〉

種類毎：土師器1313点（61.44%）、須恵器813点（38.04%）、赤彩土師器4点（0.19%）、黒色土器7点（0.33%）となる。

用途別：供膳具737点（34.49%）、煮炊具1187点（55.55%）、貯蔵具208点（9.73%）、その他5点（0.23%）となる。また、供膳具は須恵器82.0%、土師器16.6%、赤彩土師器0.5%、黒色土器0.9%の割合で構成される。墨書土器は須恵器21点があり、供膳具の内2.85%となる。

分布：調査区を東西に貫く自然流路と、調査区南東に位置する竪穴住居2棟の周辺に遺物の分布が多い。流路内には西側と東側に遺物の分布が多い。後者の方が全体量も多く、特に須恵器貯蔵具の出土が顕著な特徴となる。竪穴住居付近には墨書土器を含む須恵器食膳具、土師器煮炊具の分布が多い。

接合関係を見ると流路西側、流路東側と竪穴住居周辺の二つにまとまりがある。後者は同時期の竪穴住居との関連が強いとみられるが、接合線は竪穴住居を避けて調査区南側中央も含めて広がり、遺構の希薄な範囲にも何らかの活動が及んでいたことを示す。

特徴：①煮炊具の占める割合が高く、それらは竪穴住居周辺に廃棄された。②供膳具では須恵器が多くを占め、それらは流路内への廃棄行為に伴うものが多い。③流路内の廃棄行為は東・西側に分けられる。西側はⅠ期古段階の土器群で、竪穴住居より先行する。東側はⅡ期に相当し、墨書土器と須恵器貯蔵具が含まれる。④供膳具における墨書の割合が、C 地区内で最も高い。

〈C10地区〉

種類毎：土師器4606点（68.55％）、須恵器2011点（29.93％）、赤彩土師器13点（0.19％）、黒色土器79点（1.18％）、施釉陶器10点（0.15％）となる。施釉陶器はC 地区内で最も高い比率を示すが、全て同一個体となる奈良三彩の破片である。

用途別：供膳具2745点（40.85％）、煮炊具3427点（51.01％）、貯蔵具530点（7.89％）、その他15点（0.22％）、硯２点（0.03％）となる。また、供膳具は須恵器53.9％、土師器42.8％、赤彩土師器0.5％、黒色土器2.9％の割合で構成される。墨書土器は須恵器27点、土師器２点、黒色土器２点、赤彩土師器１点があり、供膳具の内1.17％となる。

分布：竪穴住居３棟が位置する調査区北西側を中心に分布する傾向がある。接合関係もその周辺で完結するものが多いが、須恵器食膳具は南側、須恵器貯蔵具は東側へも広がりを持つ。墨書土器「成」の集中出土地点であるSX01付近を中心とした調査区西側の中央付近に、須恵器・土師器の食膳具がやや多い傾向があり、同時に土師器煮炊具の分布も一定量がある。墨書した食膳具の集中廃棄のみでなく、土師器煮炊具を伴った一連の行為が想定される。奈良三彩と鉄鉢形の土師器鉢は竪穴住居群周辺に分布する。後者はさらに南側に広がり、焼土集中遺構のSX02周辺に至る。

特徴：①煮炊具の占める割合が高く、それらは竪穴住居周辺に分布する。しかし、それよりやや距離を置き、墨書土器を含めた一連の廃棄行為に関連するものも存在する。②供膳具では黒色土器がC 地区内で最も高い比率として存在する。③奈良三彩・土師器鉢の存在から、仏教的な活動が推定される。主に建物周辺に分布するが、後者は焼土集中遺構との関連も想定される。④奈良三彩はⅡ期まで、鉄鉢形土師器鉢はⅡ～Ⅲ期、「成」墨書須恵器の集中廃棄はⅢ期となる。同様の内容であったかは不明であるが、それぞれ時期が多少ずれているものの、祭祀的な活動の場所であったと考えられる。⑤破片数で具体的な比率を示すことはできないが、須恵器供膳具に煤の付着が多く認められ、④に関連すると思われる。⑥C 地区で唯一、硯の出土が確認された。

〈C11地区〉

種類毎：土師器340点（51.60％）、須恵器318点（48.25％）、黒色土器１点（0.15％）となる。

用途別：供膳具301点（45.68％）、煮炊具254点（38.54％）、貯蔵具102点（15.48％）、その他２点（0.30％）となる。また、供膳具は須恵器71.4％、土師器28.2％、黒色土器0.3％の割合で構成される。墨書土器は須恵器４点があり、供膳具の内1.33％となる。

分布：竪穴住居周辺の調査区東側に土師器煮炊具が多く出土する他は、明瞭な分布傾向は捉え難い。しかし、調査区中央の溝から西側は遺構が皆無であるものの、遺物が散在する。

特徴：①貯蔵具の割合が比較的高いが集中的には分布せず、遺構の検出されない範囲を含めて散在する傾向がある。②供膳具における須恵器の比率が高い。

〈C13・15地区〉

種類毎：土師器921点（63.08％）、須恵器537点（36.78％）、赤彩土師器１点（0.07％）、施釉陶器１点（0.07％）となる。施釉陶器は緑釉陶器である。

用途別：供膳具533点（36.51％）、煮炊具755点（51.71％）、貯蔵具168点（11.51％）、その他４点（0.27％）となる。また、供膳具は須恵器69.0％、土師器30.8％、赤彩土師器0.2％の割合で構成される。墨書土器は須恵器７点、土師器１点、赤彩土師器１点があり、供膳具の内1.69％となる。

分布：調査区中央を南北に貫く自然流路以東と、その西岸に隣接する竪穴住居周辺を中心に遺物が分布し、接合関係もその周囲に広がる。その傾向は須恵器供膳具と土師器煮炊具によく現われている。しかし、須恵器貯蔵具は自然流路より東側との接合関係もあり、竪穴住居とは別の遺物の動きがあったとみられる。墨書土器の出土はわずかであるが、自然流路に伴うものが多い。

特徴：①煮炊具の比率が高く、そのことが土師器の比率が高い要因となっている。②供膳具では須恵器が主体的である。③自然流路より東側には遺構がほとんど無いが、一定量の遺物が散布し、接合関係の広がりも窺える。隣接するC14・23地区と関連する可能性もある。

〈C14・23地区〉

種類毎：土師器3457点（75.87％）、須恵器1071点（23.51％）、赤彩土師器３点（0.07％）、黒色土器24点（0.53％）、製塩土器１点（0.02％）となる。

用途別：供膳具1509点（33.13％）、煮炊具2693点（59.11％）、貯蔵具341点（7.48％）、その他12点（0.26％）、製塩土器１点（0.02％）となる。また、供膳具は須恵器47.8％、土師器50.4％、赤彩土師器0.2％、黒色土器1.6％の割合で構成される。墨書土器は須恵器７点があり、供膳具の内0.46％のみとなる。

分布：調査区中央から西側の大部分を近世以降の整地層に攪乱されているため、その部分では遺物の分布は少なく、出土していても原位置を保っていないと思われる。古代の遺構検出面が残っていた調査区東側では、竪穴住居群付近に多くの遺物が分布する。しかし、竪穴住居からやや距離を空けた調査区北東部に須恵器食膳具・貯蔵具、土師器煮炊具がある程度まとまって分布することも確認できる。調査区外に建物を含めた遺構の広がりが想定される。接合関係は竪穴住居周辺で多くが完結するが、須恵器貯蔵具はそこを中心としつつ、さらに広がりをもつ。

特徴：①煮炊具の比率が高く、供膳具における土師器の比率も高い。それにより全体の土師器の比率が高くなり、C地区で最も高い値を示す。②製塩土器がわずかに出土する。③出土分布から、さらに北側への遺構の広がりが予想される。

〈C18地区〉

種類毎：土師器1168点（66.90％）、須恵器571点（32.70％）、赤彩土師器６点（0.34％）、施釉陶器１点（0.06％）となる。施釉陶器は灰釉陶器である。

用途別：供膳具496点（28.41％）、煮炊具1029点（58.94％）、貯蔵具219点（12.54％）、その他２点（0.11％）となる。また、供膳具は須恵器70.8％、土師器28.0％、赤彩土師器1.2％の割合で構成されている。墨書土器は須恵器１点、土師器４点があり、供膳具の内1.01％となる。

分布：竪穴住居が調査区南東に２棟あり、その周辺に須恵器供膳具、土師器煮炊具のまとまった分布がある。けれども、遺構が皆無であるその他の範囲にも遺物が散在する。特に調査区中央部から北東部に土師器煮炊具の分布が目立つ。また、須恵器供膳具・貯蔵具は調査区中央部での接合関係が目立つ。接合線は東西方向に長くなる傾向がある。

特徴：①煮炊具の比率が高く、それにより土師器の比率も高くなる。②供膳具では須恵器が高い比率を占める。③竪穴住居からやや距離を空けた範囲に土師器煮炊具の分布が多くある。竪穴住居の存在とは別の要因を考える必要があるが、判断材料が乏しく判然としない。

〈C19地区〉

種類毎：土師器3359点（62.63％）、須恵器1941点（36.19％）、赤彩土師器40点（0.75％）、黒色土器23点（0.43％）となる。

用途別：供膳具2439点（45.48％）、煮炊具2422点（45.16％）、貯蔵具501点（9.34％）、その他１点（0.02％）となる。また、供膳具は須恵器59.0％、土師器38.4％、赤彩土師器1.6％、黒色土器0.9％の割合で構成される。墨書土器は須恵器20点、土師器６点、黒色土器１点、赤彩土師器２点があり、供膳具の内1.19％となる。

分布：竪穴住居４棟、掘立柱建物１棟、柵列１条が調査区中央にある。その付近と、それよりやや北～西側にかけて遺物の分布が広がっている。柵列から南側では遺物の分布が少ないものの、一定量あり、特に須恵器貯蔵具の分布は調査区内でも比較的多くある。須恵器貯蔵具は建物の西側で接合関係が完結する傾向が強く､他と異なった廃棄のあり方をしていた可能性がある｡黒色土器・赤彩土師器・墨書土器の分布は建物群を避けるような分布を呈している。

特徴：①土師器の比率はやや低い。供膳具が高めの比率で存在することと、供膳具でも須恵器が主体となっているためと考えられる。②黒色土器・赤彩土師器・墨書土器は建物群の範囲外での出土が多い。おそらく掘立柱建物が機能していた段階で、その外側への廃棄がなされたものと推測される。

〈C20地区〉

種類毎：土師器7531点（58.70％）、須恵器5008点（39.04％）、赤彩土師器162点（1.26％）、黒色土器100点（0.78％）、製塩土器18点（0.14％）、施釉陶器10点（0.08％）となる。施釉陶器は灰釉陶器１点、緑釉陶器９点である。

用途別：供膳具7952点（60.73％）、煮炊具3429点（26.73％）、貯蔵具1399点（10.90％）、その他31点（0.24％）、製塩土器18点（0.14％）となる。また、供膳具は須恵器45.2％、土師器51.5％、赤彩土師器2.0％、黒色土器1.3％の割合で構成されている。墨書土器は須恵器125点、土師器16点、黒色土器２点、赤彩土師器３点があり、供膳具の内1.84％となる。

分布：調査区南西側に竪穴住居９棟、西側に調査区を南から西に貫く溝SD001がある。これらの付近を中心に遺物の分布が多い。竪穴住居周辺は土師器煮炊具の分布が多い。竪穴住居はⅠ～Ⅳ期まであり、Ⅰ・Ⅱ期の建物周辺には須恵器供膳具、Ⅲ・Ⅳ期では土師器供膳具が分布する。SD001からは各種の遺物が多量に出土している。須恵器・土師器・黒色土器・赤彩土師器の供膳具、須恵器貯蔵具、墨書土器、製塩土器の分布が顕著である。特に溝内でも中央付近に分布する傾向が強く、墨書土器もそこに集中する。SD001出土遺物の接合関係は、溝内で完結する場合が多いが、須恵器貯蔵具は調査区西側との接合関係が一定量ある。施釉陶器は溝の南端と、竪穴住居群の北側に散在する。遺構分布の希薄な調査区北西には、須恵器供膳具や土師器煮炊具が一定量あり、建物を含めて遺構が広がる可能性がある。

特徴：①供膳具の割合が高く、その中でも土師器が須恵器をやや上回る。Ⅱ期では須恵器供膳具、Ⅲ～Ⅳ期以降は土師器供膳具を中心に溝へ多量に廃棄され、これにより供膳具の比率が高くなっている。②溝への廃棄遺物には須恵器貯蔵具も一定量含まれていた。③製塩土器の出土は、C地区内で最も多いが、組成に占める比率はごくわずかである。④墨書土器の出土点数は多いが、供膳具に占める割合

は1.84％に止まる。

〈C21地区〉

種類毎：土師器1076点（71.49％）、須恵器417点（27.71％）、赤彩土師器３点（0.2％）、黒色土器９点（0.6％）となる。

用途別：供膳具550点（36.54％）、煮炊具807点（53.63％）、貯蔵具148点（9.83％）となる。また、供膳具は須恵器48.9％、土師器48.9％、赤彩土師器0.5％、黒色土器1.6％の割合で構成されている。墨書土器は出土していない。

分布：調査区北端に竪穴住居１棟があり、その南側に畠のさく状遺構が広がる。調査区西側は近世以降の流路で攪乱されており、出土遺物は二次的に混入したものだろう。竪穴住居付近に土師器の供膳具・煮炊具が比較的集中する。それらと須恵器供膳具については、さく状遺構が広がる範囲でも濃淡を持ちながらであるが分布している。その他はあまり顕著な傾向はない。

特徴：①土師器の比率が高い。煮炊具の出土量が多いためと考えられる。②調査面積の割に、遺物の出土量が多い。遺物の出土分布や、北側に近接するC22地区のあり方から、C21地区とC22地区の間の未調査部分にも建物群が広がり、それらがC21地区の出土量に影響を与えたものと思われる。

〈C22地区〉

種類毎：土師器5565点（80.21％）、須恵器1252点（18.05％）、赤彩土師器86点（1.24％）、黒色土器29点（0.42％）、製塩土器５点（0.07％）、施釉陶器１点（0.01％）となる。施釉陶器は緑釉陶器のみである。

用途別：供膳具2131点（30.72％）、煮炊具4362点（62.87％）、貯蔵具436点（6.28％）、その他４点（0.06％）、製塩土器５点（0.07％）となる。また、供膳具は須恵器38.2％、土師器56.4％、赤彩土師器4.0％、黒色土器1.4％の割合で構成されている。墨書土器は須恵器12点、土師器１点があり、供膳具の内0.61％のみである。

分布：調査区内には竪穴住居17棟が確認された。遺物も竪穴住居付近を中心に概ね分布している。ただし、土師器煮炊具は全体に濃密な出土分布を示す。また、土師器供膳具はⅢ・Ⅳ期の竪穴住居とその周辺での出土が目立つ。黒色土器・赤彩土師器については調査区北東と南側に集中する傾向があり、他の種類に比べて竪穴住居の配置とより密接な関係を示している。墨書土器や製塩土器は調査区南側にやや多いものの、出土量も少なく、明確な傾向は捉え難い。接合関係では須恵器供膳具・貯蔵具が調査区全体に分散しているが、土師器煮炊具では竪穴住居周辺で完結する傾向が強い。

特徴：①土師器の比率がC地区内で最も高い。竪穴住居数が多いため煮炊具の出土も多く、供膳具での土師器の割合も多い結果であると思われる。②供膳具における赤彩土師器の比率が高い。③土師器煮炊具は概ね竪穴住居と分布を同じくするのに対し、同じ日常雑器である須恵器供膳具・貯蔵具は必ずしも同じ分布や接合関係の傾向を示す訳でない。最終的な廃棄のあり方に違いがあったと考えられる。

C竪穴住居の土器組成

地区での土器組成は時期幅を有するため、ここでは竪穴住居の出土土器を用いて、区分した時期毎の土器組成を示しておく（第28図）。竪穴住居出土の遺物も、その時期の遺物が全て一括廃棄されたとは限らず、前後の時期を含む可能性もあるが、地区全体よりも特定時期に近い傾向が捉えられよう。また、出土量が少ない場合、特定の種類や用途に片寄る可能性があるので、出土点数が100点以上の竪穴住居を対象とした。

Ⅰ期はC14・23地区SI07がある。土師器煮炊具が84.4％と多く、供膳具は須恵器が中心である。

Ⅱ期ではC20地区SI03、C22地区SI08・09・13・15がある。土師器煮炊具は約８割で、供膳具は須恵器が主体となり、Ⅰ期とほぼ同様な傾向を示す。C22地区SI08のみ土師器煮炊具が67.6％と低い比率となり、須恵器貯蔵具が17.1％と多い特徴がある。

Ⅲ期にはC14・23地区SI06、C22地区SI01・02・07がある。土師器煮炊具が５～６割前後と比率を下げる。供膳具は土師器が主体となる傾向がある。その比率は、C22地区SI02で42.4％と高いが、この竪穴住居では住居廃絶後に土師器供膳具が廃棄されたことにより高率となった。そのため、他の竪穴住居が示すように２割前後が土師器供膳具の占める比率と考えることができよう。また、土器組成に黒色土器や赤彩土師器が含まれるようになる。

Ⅳ期ではC14・23地区SI03、C20地区SI04、C22地区SI03がある。土師器煮炊具はⅢ期と同様の比率を示す。土師器供膳具は約３割を占め、供膳具の主体となる。黒色土器や赤彩土師器はⅢ期に引き続き土器組成に含まれるが比率に大差はない。

このように、Ⅱ期とⅢ期の間で土器組成の変化が明瞭に現われた。つまり、９世紀中頃を境に土師器供膳具が比率を高め、土師器煮炊具は低くなることが認められた。

D 任海宮田遺跡における各地区の様相

（ⅰ）C地区での様相

以下、C地区における古代の土器組成について簡単にまとめる。

①C地区では竪穴住居などの主要遺構は概ね９世紀代に相当し、土器組成もこうした時期幅を持つと言える。また、地区毎の土器組成は主要遺構により主体となる時期を想定することは可能であるが、竪穴住居での土器組成に比べると、前後する時期も含めた傾向が現われる点は否めない。そのため、ある地区を特定の時期の土器組成として考えることは難しい。

②竪穴住居出土遺物の土器組成では、Ⅱ期とⅢ期の間で土器組成の変化が明瞭に現われた。９世紀中頃を境に、それ以降では土師器供膳具が比率を高め、土師器煮炊具は低くなる。竪穴住居出土遺物には施釉陶器が含まれない等、その時期の土器組成を全て反映していない点もあるが、地区全体の土器組成よりは時期的な特徴を端的に捉えやすい。

③先に示した①・②から、竪穴住居出土の土器組成については、Ⅰ・Ⅱ期の平均が９世紀前半、Ⅲ・Ⅳ期の平均が９世紀後半を主体とする時期の傾向とすることができよう。９世紀前半では土師器煮炊具が81.1％と多くを占める。供膳具の合計は12.8％となり、その内の約８割は須恵器で構成される。９世紀後半では土師器煮炊具は53.8％まで比率を下げ、供膳具の合計は40.7％と増える。供膳具の約７割は土師器となる。また、供膳具の中では黒色土器や赤彩土師器も比率をやや高める。須恵器貯蔵具、製塩土器は９世紀代を通じて同様な比率で存在する。施釉陶器は竪穴住居出土遺物には含まれないが、他の遺構や包含層出土の点数を参考にしても、極めて少ない。

④C６～８地区では須恵器・土師器供膳具が多くを占める。出土状況や分布から、それらが溝などへの廃棄された結果が反映されたと考えられる。一部には須恵器貯蔵具が加わるあり方も窺えた。

⑤施釉陶器はわずかであり、建物との関連が窺えるものは少ない。C10地区の奈良三彩は建物群周辺に分布するが、その関係は判然としない。奈良三彩以外に、鉄鉢形土師器鉢・土師器深椀・「成」墨書土器の集中地点がC10地区には散在し、鉄鉢形土師器鉢などは隣接するC８地区にまで及ぶ。また、遺構変遷の際に述べた小型堝も同様な分布域を呈している。このC８・10地区付近は仏教的な活動を中心とした、祭祀的行為が行なわれた場所であった可能性がある。

（ⅱ）A・B 地区との比較

任海宮田遺跡ではA・B 地区の報告時にも土器組成を示しており（中村2006、2007）、それらを元に比較しておきたい。

各地区全体での土器組成（第29図）からは、次の点が指摘できる。A 地区では土師器煮炊具の比率が高いことが特徴となる。B 地区では土師器供膳具の比率が高く、黒色土器・赤彩土師器・施釉陶器や須恵器貯蔵具の出土もA・C 地区に比べて多い。こうした傾向は大型掘立柱建物や土師器焼成遺構が確認されたB１・６地区の様相が反映されており、竪穴住居のみが検出されたB13地区の用途別組成ではC 地区の様相と類似する。C 地区では供膳具と煮炊具の比率が近く、供膳具での須恵器・土師器の比率が拮抗する。

A・B・C 地区の竪穴住居出土遺物については、竪穴住居の時期区分により８世紀後半、９世紀前・後半、10世紀前半の平均的な比率による組成を示す（第30図）。

種類別では土師器が各地区・各時期ともに７～８割を示すが、B 地区の９世紀後半では約６割まで比率を下げる。須恵器は２割前後で推移するが、時期が下るに従い減少する傾向がある。製塩土器はC 地区で少なく、A 地区では９世紀前半、B 地区では９世紀後半に出土量が増える。A 地区では建物群に掘立柱建物が加わる段階、B 地区では大型掘立柱建物や土師器焼成遺構が現われる段階に相当する。B 地区の製塩土器については分布の点からも開発拠点との関連が指摘され（武田2007b）、黒色土器・赤彩土師器・施釉陶器の増加もそれに呼応する。

用途別ではA 地区で各時期を通じて土師器煮炊具が８割前後を占める。B・C 地区では９世紀後半以降に煮炊具が減少し、供膳具が増える。この傾向はB 地区で特に顕著で、９世紀前半にもその兆しを窺うことができる。９世紀後半以降に比率を高める供膳具は、C 地区での検討からは土師器を主体とすることが分かり、B 地区では黒色土器や赤彩土師器も一定量が存在する。また、貯蔵具の比率は全体の傾向からはB 地区が多かったが、竪穴住居での比率はB 地区とA・C 地区で大差なく、逆に低い場合もある。

Ｅまとめ

以上の様に、A・B・C 地区の土器組成は地区全体でも、竪穴住居出土遺物による時期毎の組成においても異なった特徴を有すると言えよう。

A 地区は一貫して土師器煮炊具の比率が高い。提示した結果が、竪穴住居出土の土器組成のみであったためでもあるが、各地区の竪穴住居での土器組成を比較しても同様の特徴が際だっている。

B 地区は９世紀後半以降に大型掘立柱建物や土師器焼成遺構が存在する。こうした開発の拠点的な役割を担った地区で土師器供膳具・施釉陶器・製塩土器や土錘を主とした土製品などが多く出土したため、それらの比率が高くなった。竪穴住居にもそうした傾向が反映され、特に土師器煮炊具が少ないことが指摘できる。また、その比率は同時期のA・C 地区よりも低く、さらに何らかの要因があったと思われる。一つには竪穴住居が短期的な使用であったため、土師器煮炊具の利用自体も少なかったことが推測される。もう一つの考えとして、竪穴住居以外での炊さんも視野に入れる必要があろう。B 地区で９世紀後半以降の竪穴住居は主にB１・６地区にあり、開発拠点となる建物に付属していた可能性が高い。特にB１地区は地区全体で土師器煮炊具の出土は4.1％と低く、単に竪穴住居での土師器煮炊具が少ない訳ではない。そのことを加味すれば、経営主体による鉄製煮炊具を用いた集中的な炊さん形態も想定されよう。また、B 地区では竪穴住居での貯蔵具の比率も低い。A・C 地区の竪穴住居が一定量の貯蔵具と煮炊具を保有し、竪穴独自の炊さんと貯蔵をなし得たとすれば、B 地区の

竪穴住居は貯蔵という行為も竪穴外へ依存した傾向が指摘できよう。B 地区全体では貯蔵具の比率は高く、開発拠点での貯蔵物の管理が推測され、これは集中的な炊さんと関連する事項であると考えられる。このように、B 地区西側の建物群は土器組成を始め、その使用や保有形態も他の調査地とは異なると見られる。

C 地区は A・B 地区の中間的な様相を示す。また、竪穴住居での土器組成からは 9 世紀後半以降に供膳具の比率が高まり、特に土師器供膳具が主体となることが明瞭に確認された。さらに、C 8 ・10 地区では 9 世紀前半代を中心に仏教的な活動を主とした祭祀的行為が窺われる。

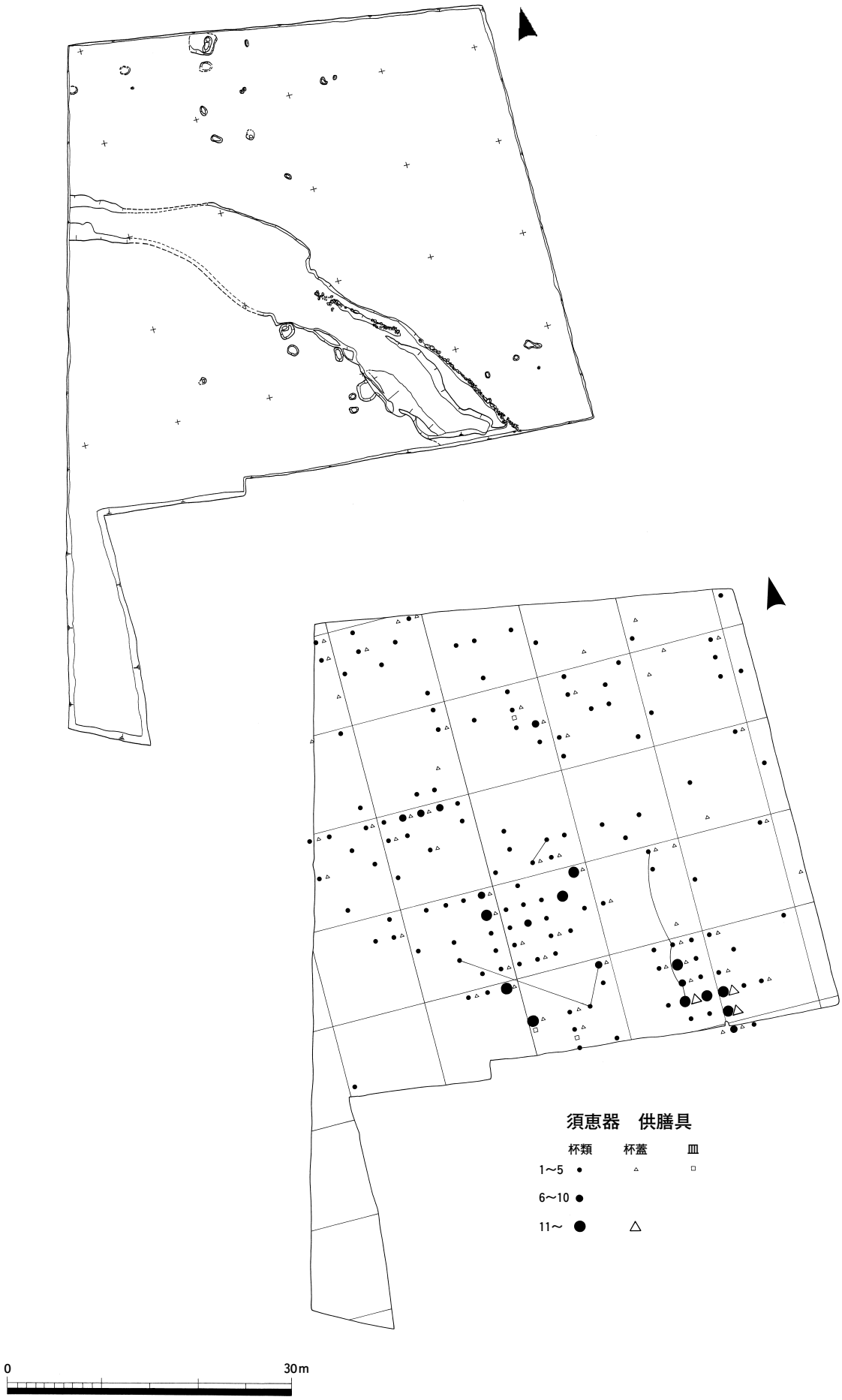
この様に A・B・C 地区と一様な様相ではないが、概観すると二つの土器組成に分けられよう。

一つは B 1 地区の大型掘立柱建物や B 6 地区の土師器焼成遺構に代表されるような、開発拠点でのあり方である。B 1 地区で多量に出土する灰釉陶器は私的で日常的な使用が推測され（内田2001）、大型掘立柱建物は在地有力主導型の経営拠点としての性格が指摘される（武田2007c）。こうした経営主体では供膳具の比率が高く、煮炊具が少ない。また、黒色土器・赤彩土師器・施釉陶器・製塩土器・硯・土製品の比率が一定量存在する。9 世紀後半以降に主体を持つことも合わせ、供膳具では土師器が多くなる。

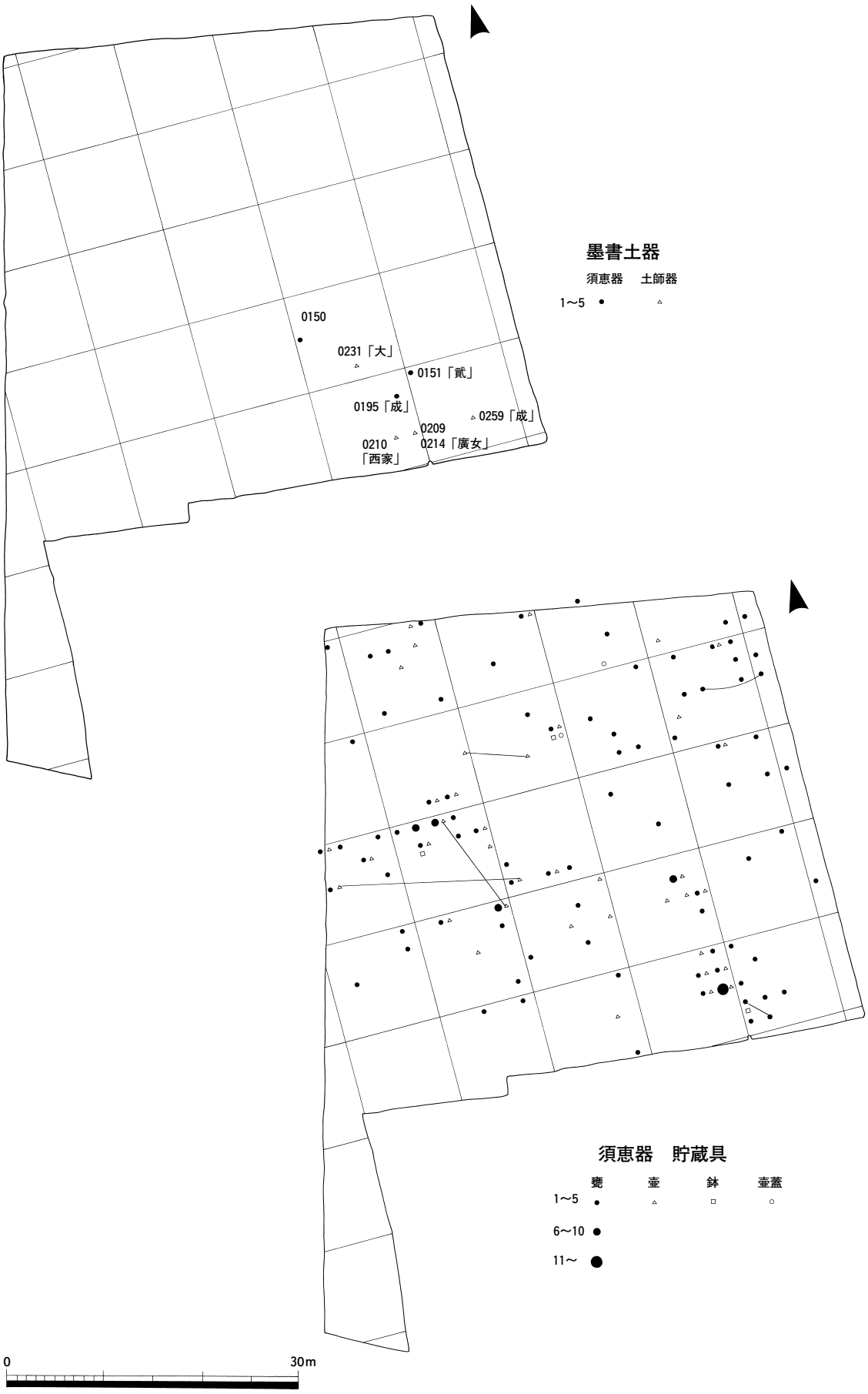
もう一つは、経営主体を中心とした開発行為の具体的作業に従事した竪穴住居の居住者層である。これはさらに細分される。経営主体に近接する竪穴住居では、先述したように炊さんや貯蔵が在地有力層の集中的な管理の下にあった可能性があり、いわゆる徴発労働者（森2000）の性格が色濃く反映されていると思われる。他の竪穴住居も規模は概して小さく、長期的な居住に不向きである点などから同様の性格が想定されるが、煮炊具や貯蔵具の比率では一定の炊さんと貯蔵を竪穴住居において行なっていた可能性があり、開発行為に動員された労働者でも、そのあり方はやや異なっていたとすることができよう。

こうした傾向があるが、地区によっては供膳具の集中廃棄や仏教的祭祀行為も窺われ、単純に二分化することはできないであろう。しかしながら、様々な要素を内包している点が、任海宮田遺跡における組成の特徴とも言えよう。それは、8 世紀後半から10世紀代に至る長期間にわたって集落が営まれ、墨書土器に見るように複数の勢力が混在していたことにも起因するであろう。

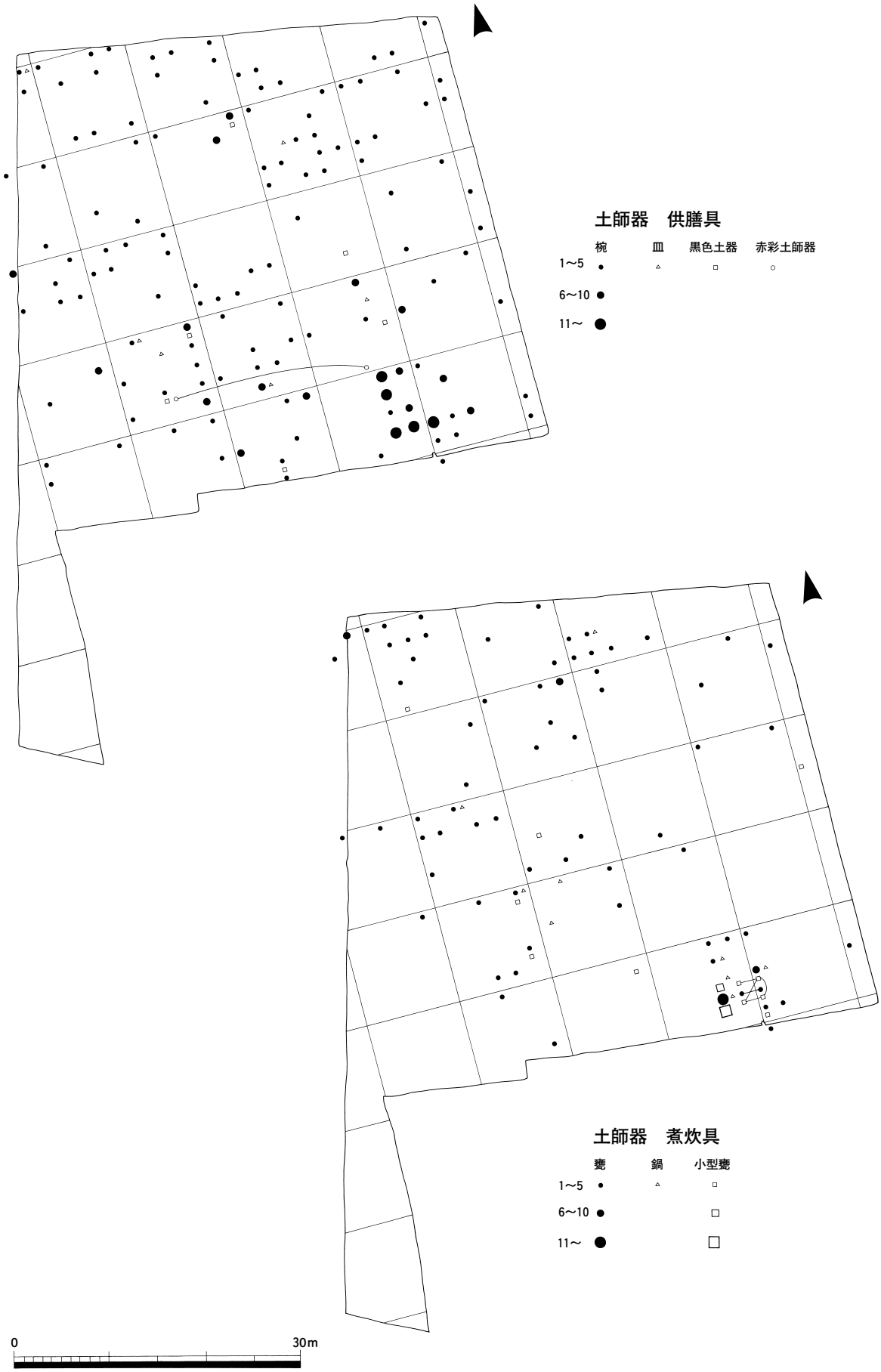
今回は任海宮田遺跡 C 地区の基礎的な資料を中心に、A・B 地区との対比を主に行なった。その内容は、扇状地における開発を目的とした集落の一つのケースとして扱うことができるだろう。しかし、任海宮田遺跡の性格や特徴を明らかにしていくには、他の遺跡や地域での成果と比較検討を重ねていくことが今後も必要となろう。



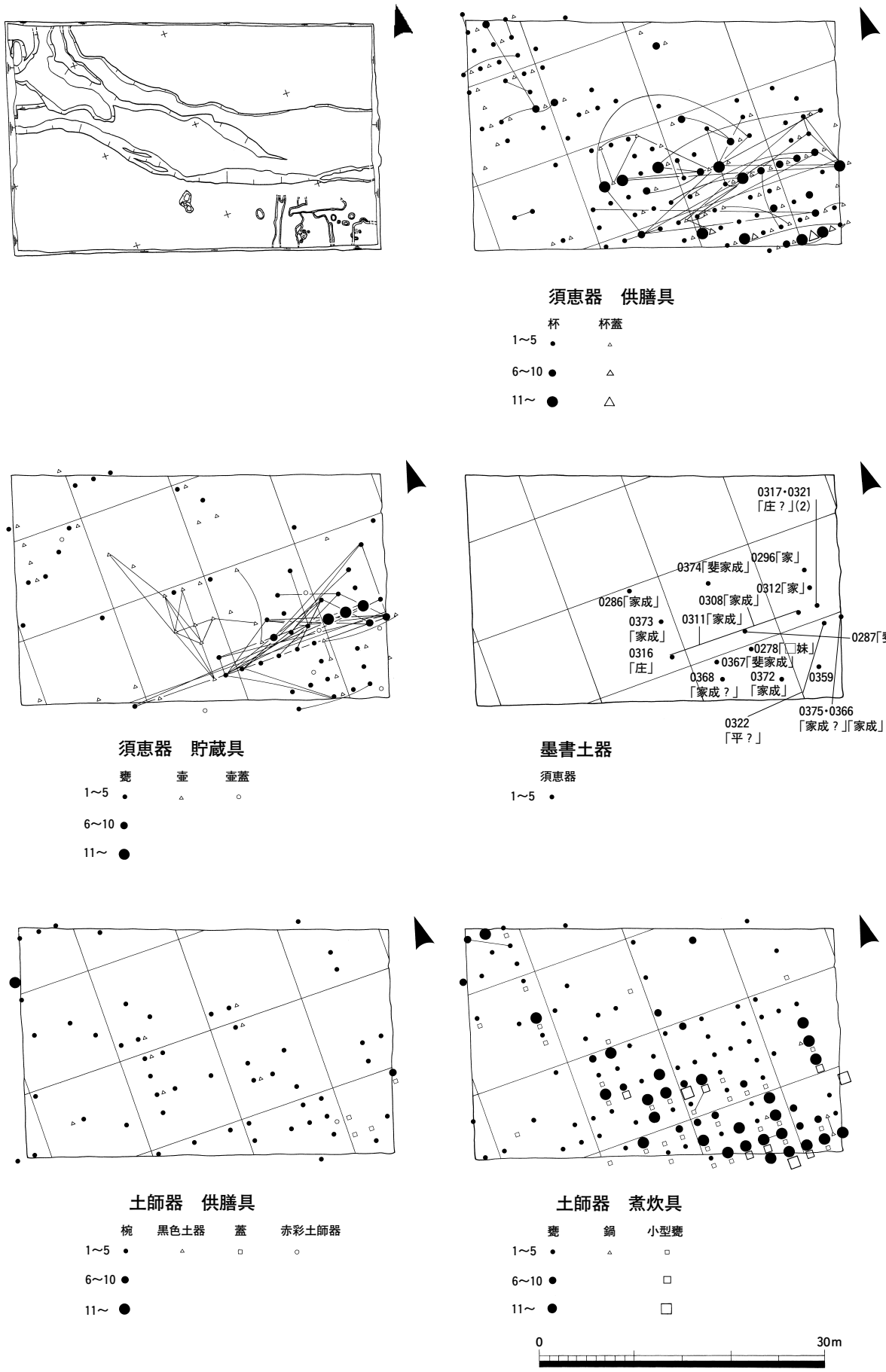
第10図　C８地区　古代出土分布図（１）



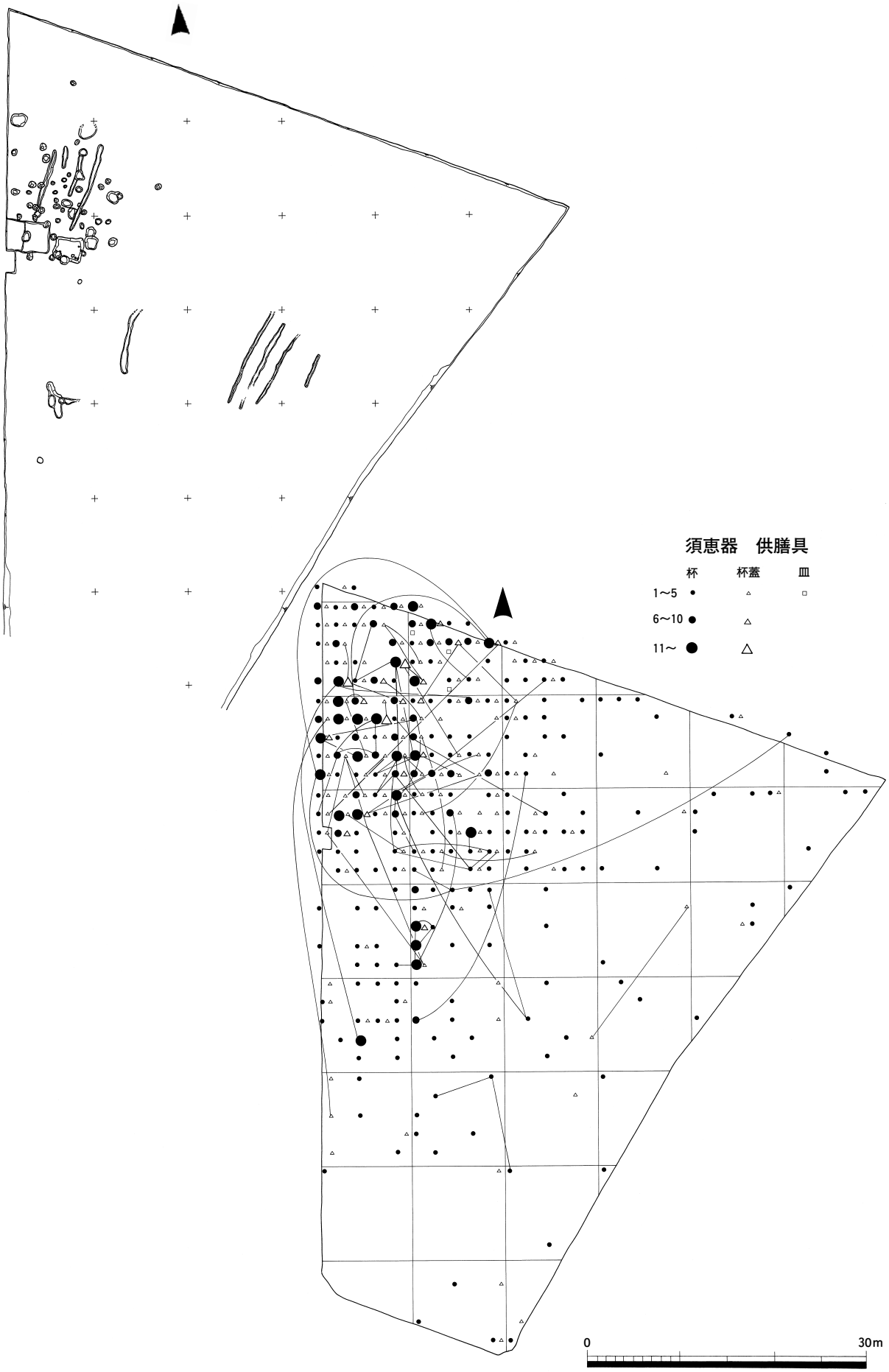
第11図　C８地区　古代出土分布図（２）



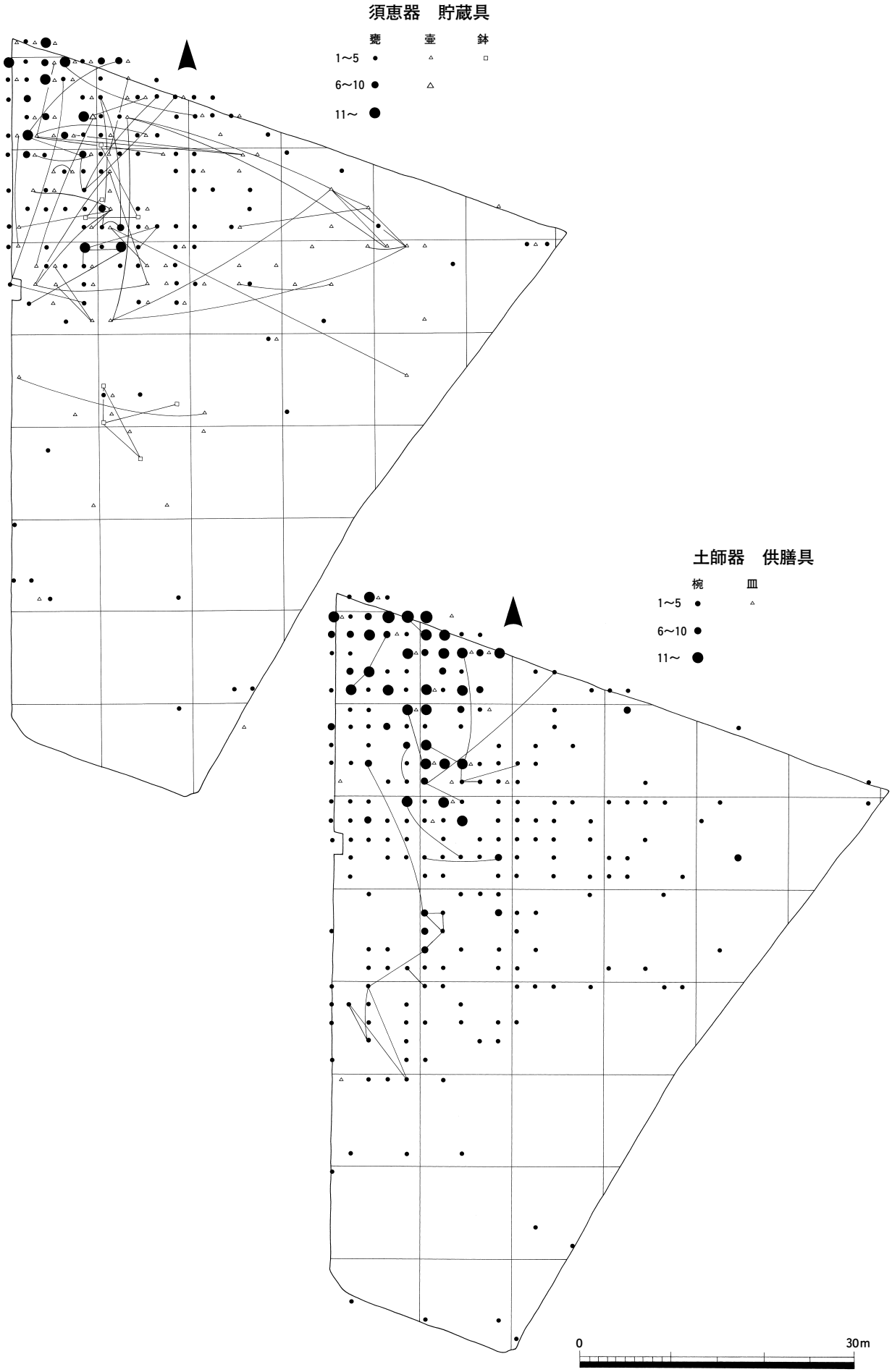
第12図　Ｃ８地区　古代出土分布図（３）



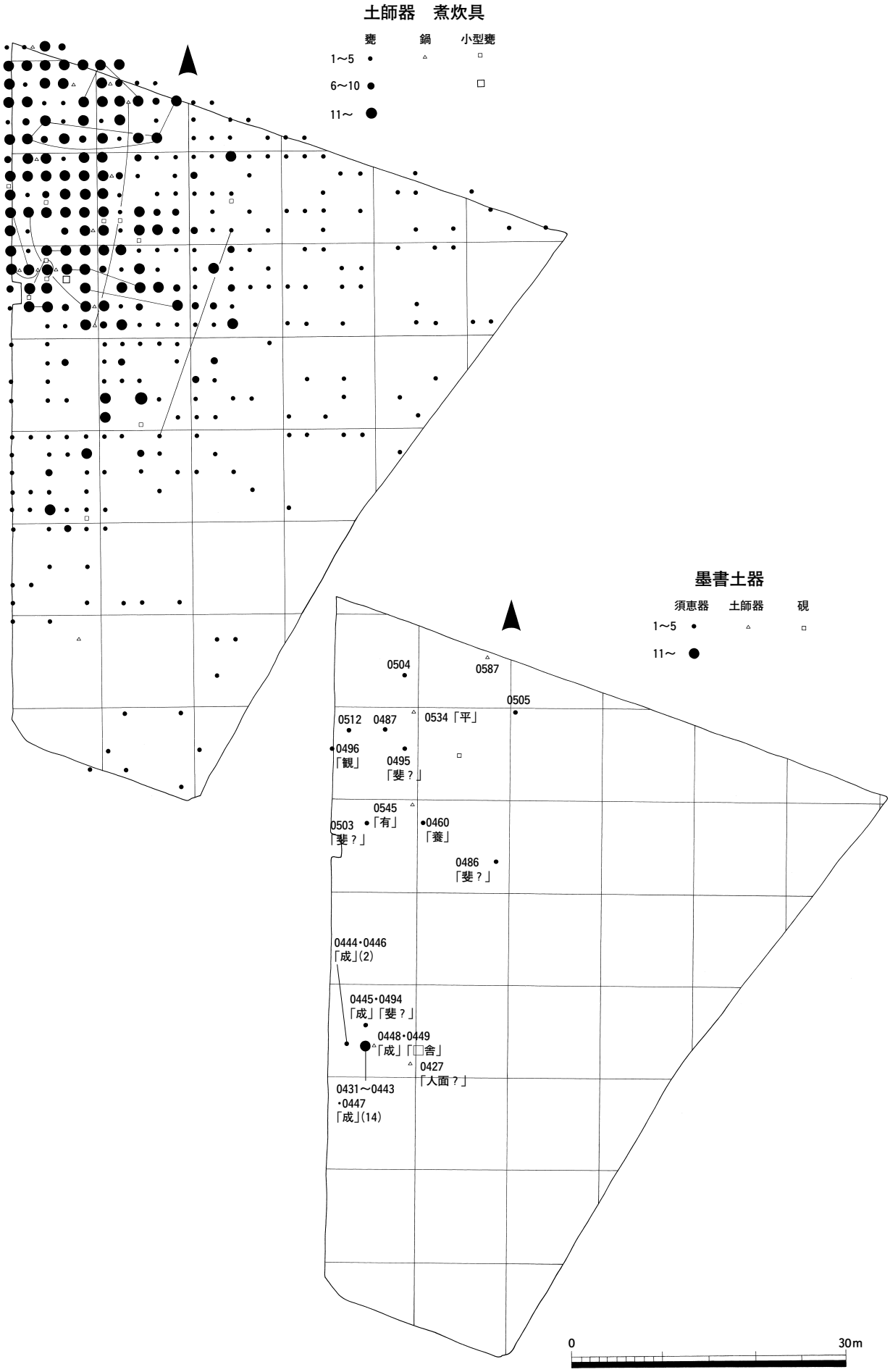
第13図　C９地区　古代出土分布図



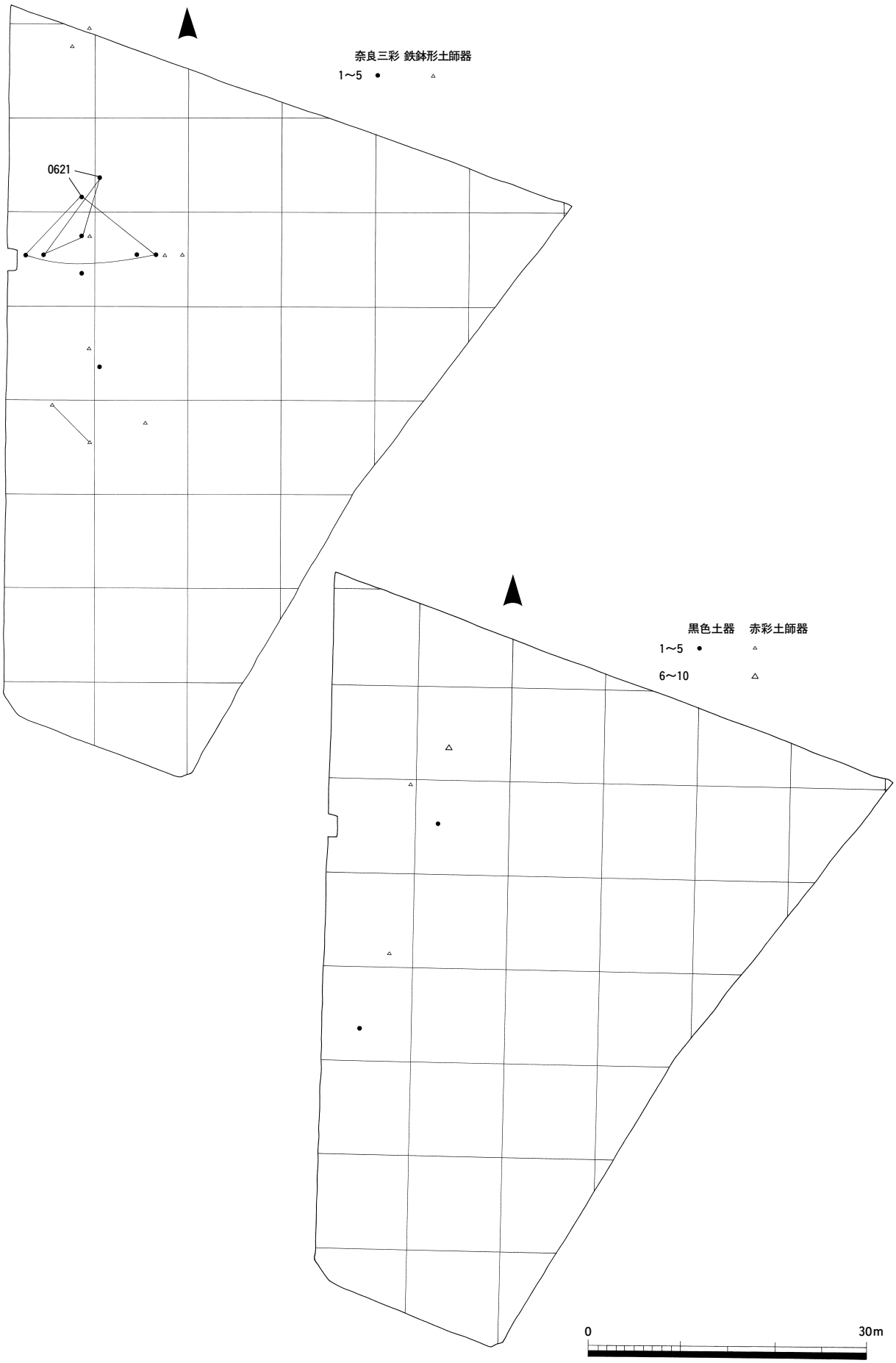
第14図　C10地区　古代出土分布図（１）



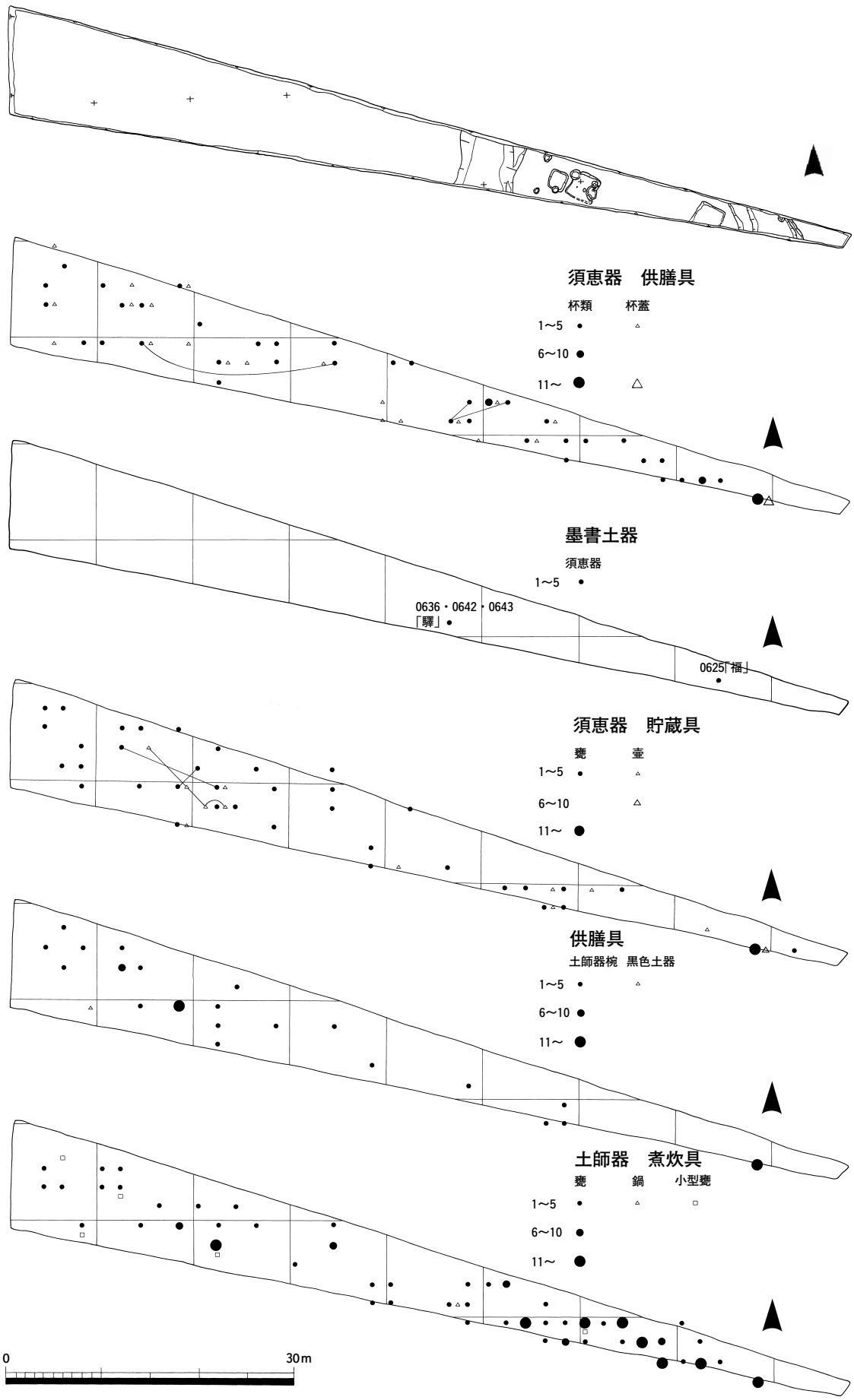
第15図　C10地区　古代出土分布図（２）



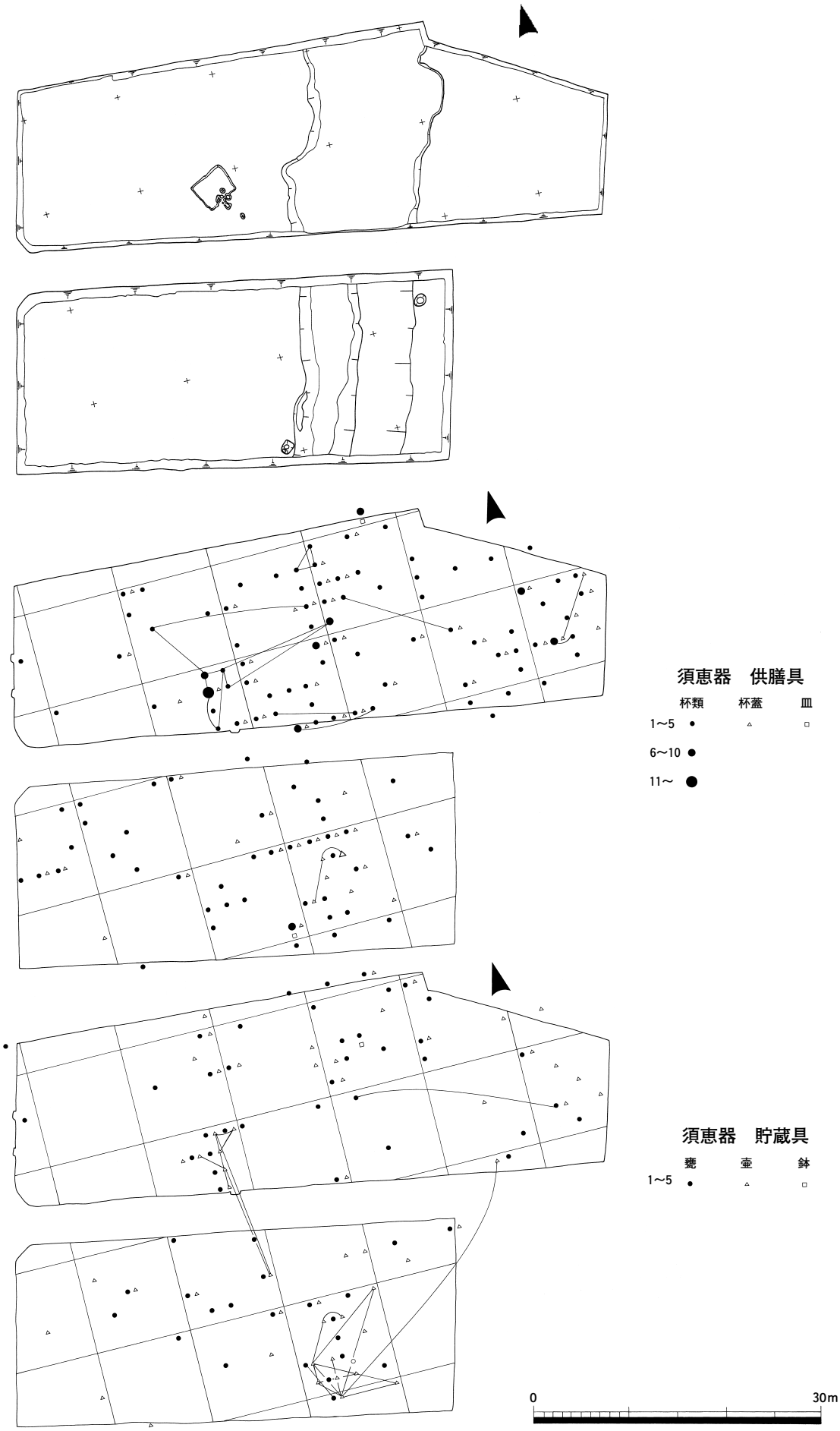
第16図　C10地区　古代出土分布図（３）



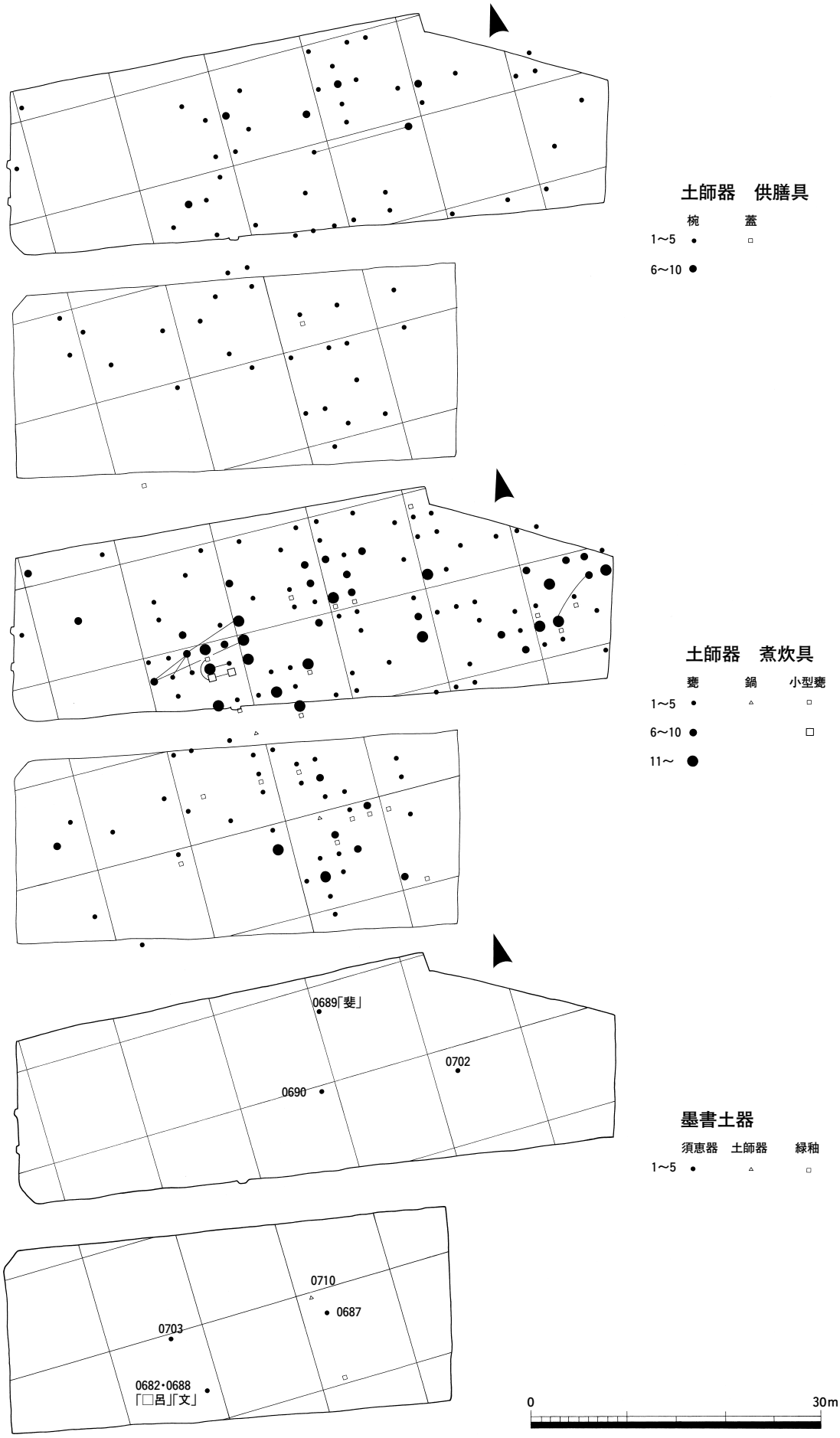
第17図　C10地区　古代出土分布図（４）



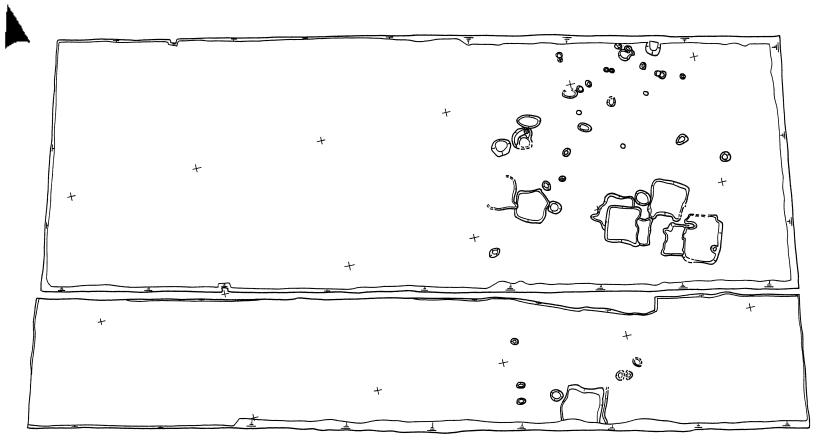
第18図　C11地区　古代出土分布図（５）

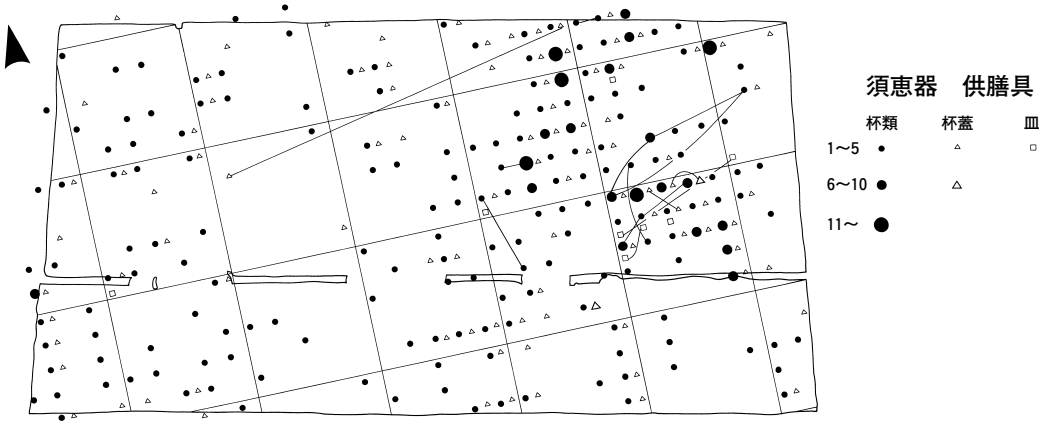


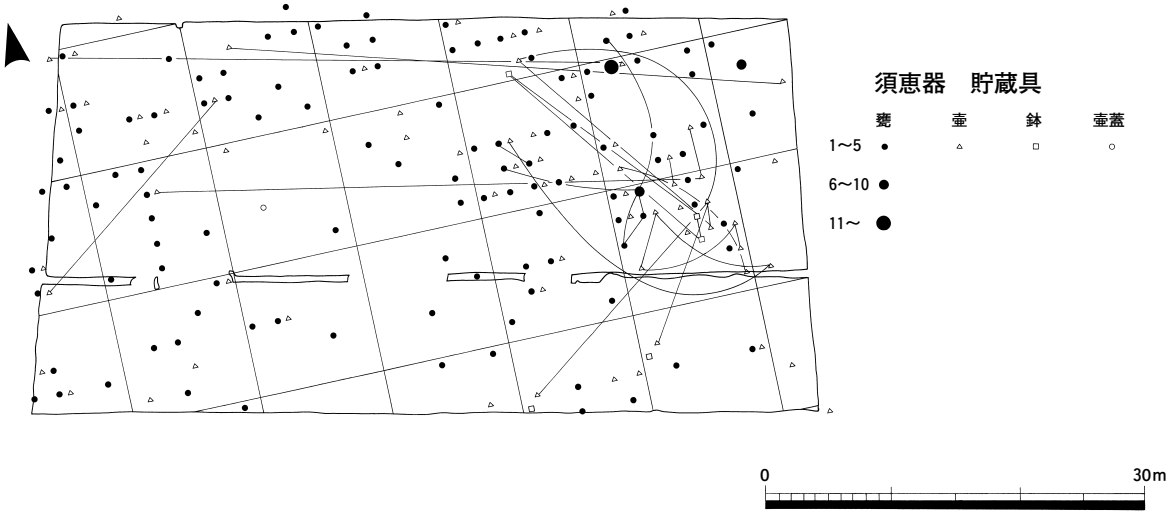
第19図　C13・15地区　古代出土分布図（1）



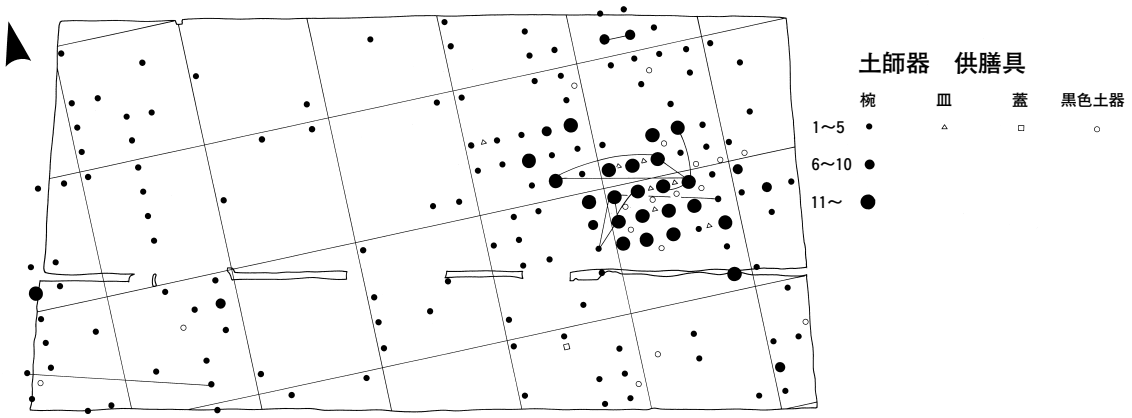
第20図　C13・15地区　古代出土分布図（２）

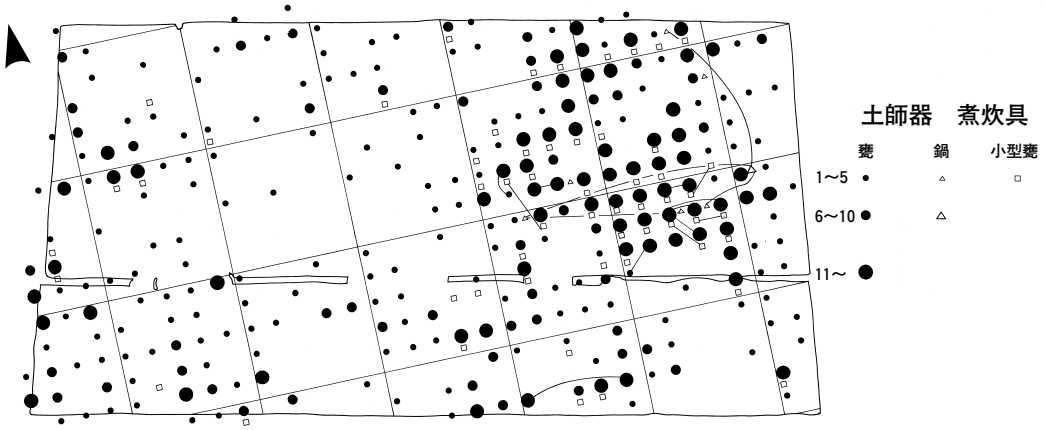


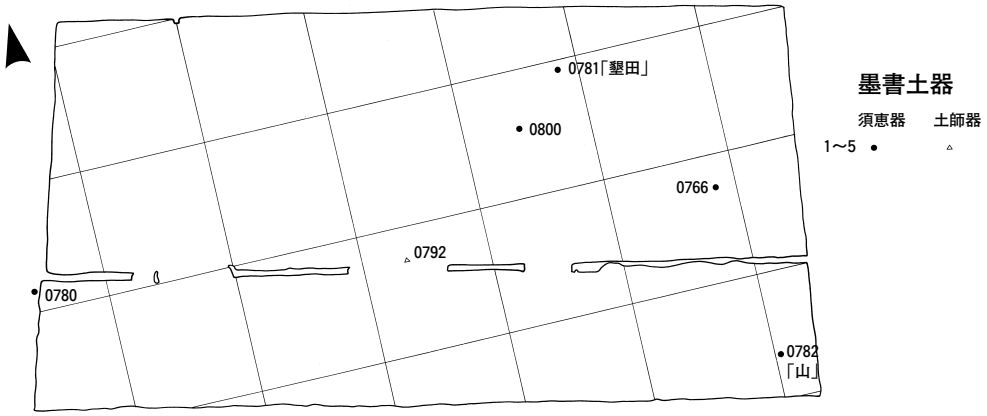




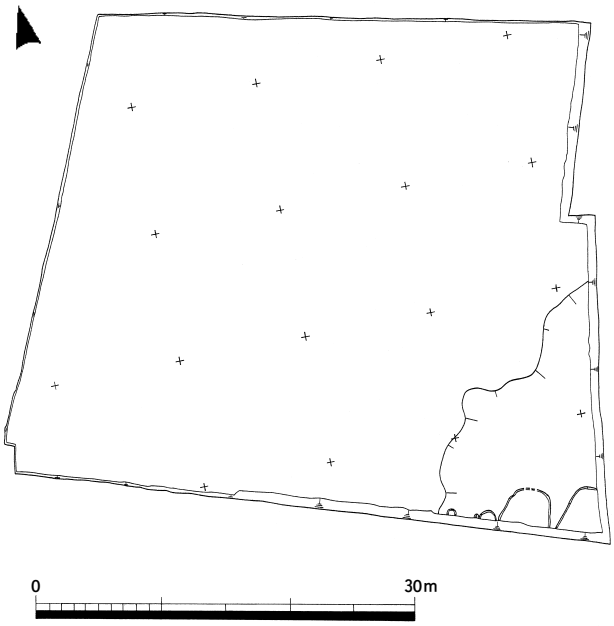
第21図　C14・23地区　古代出土分布図（１）

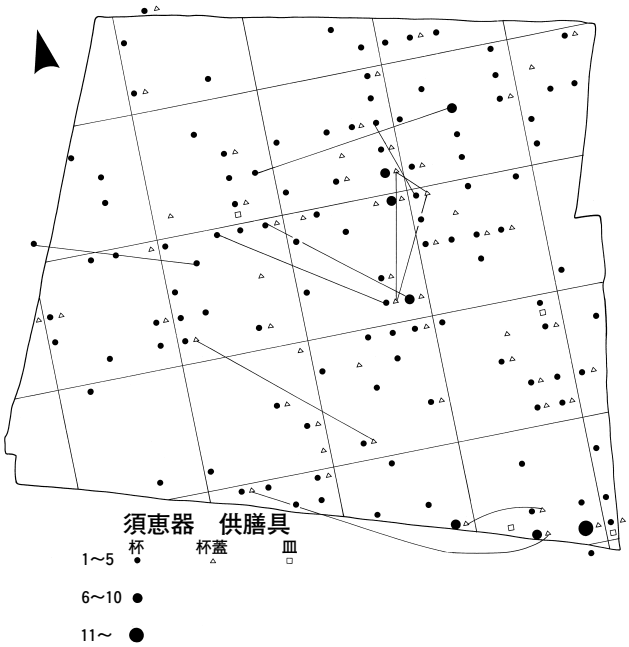


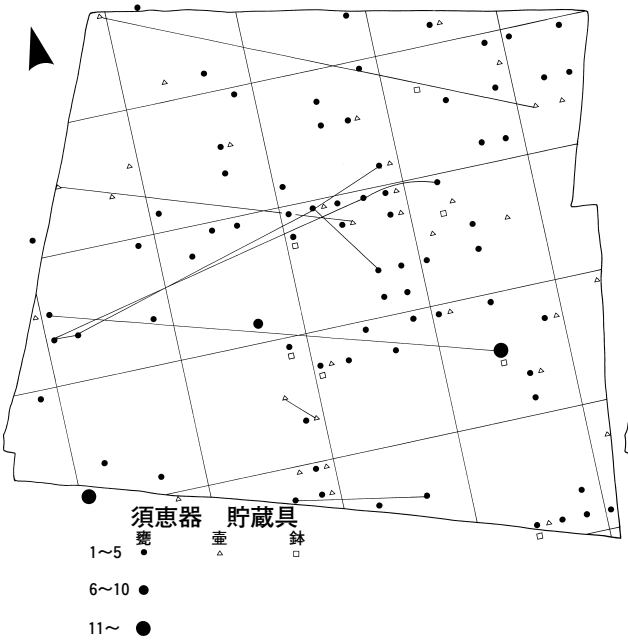


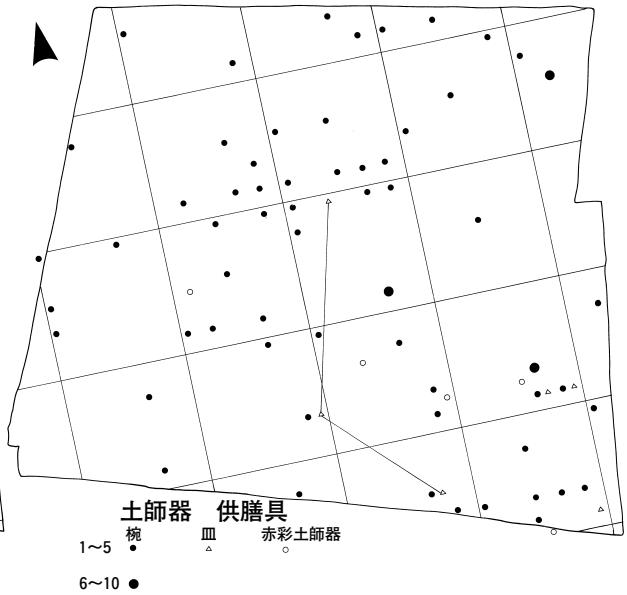


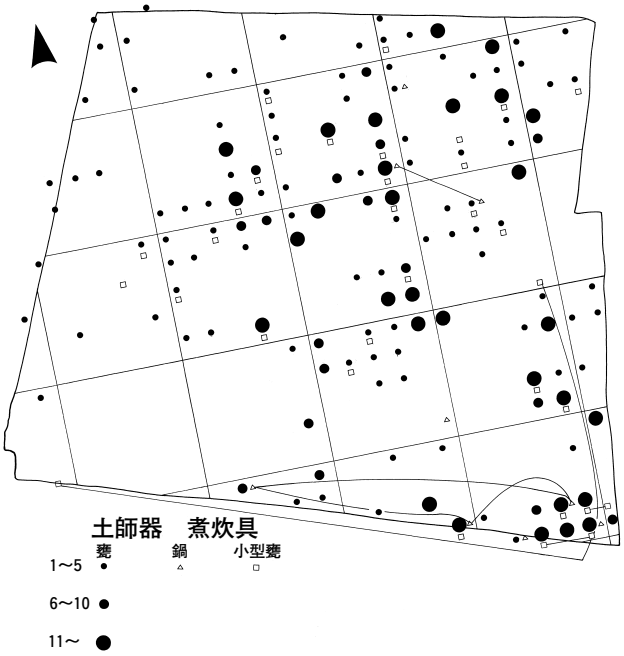
第22図　C14･23地区　古代出土分布図（２）

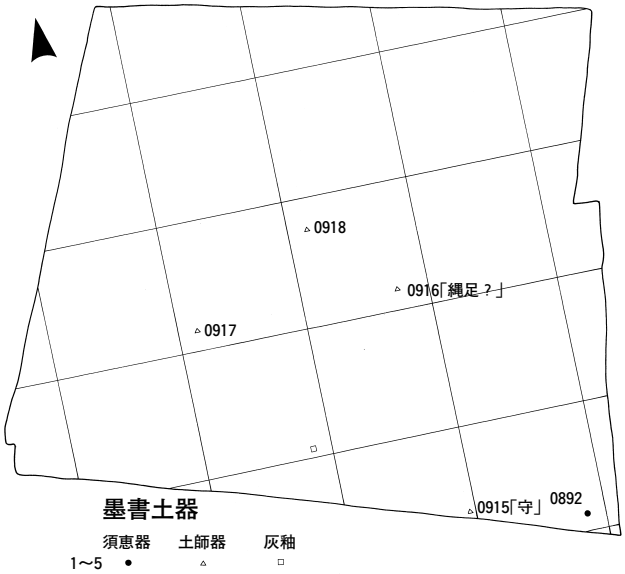




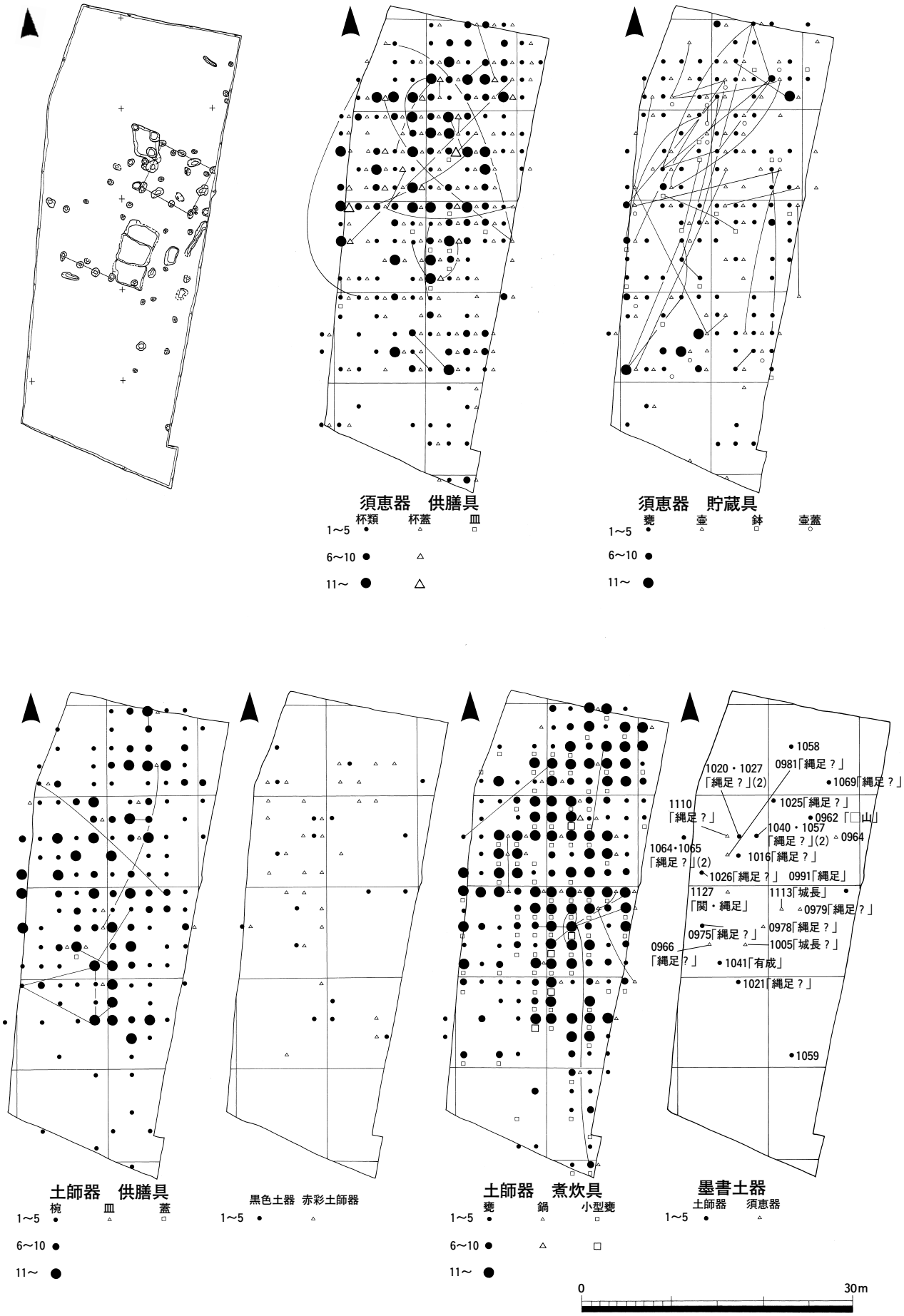




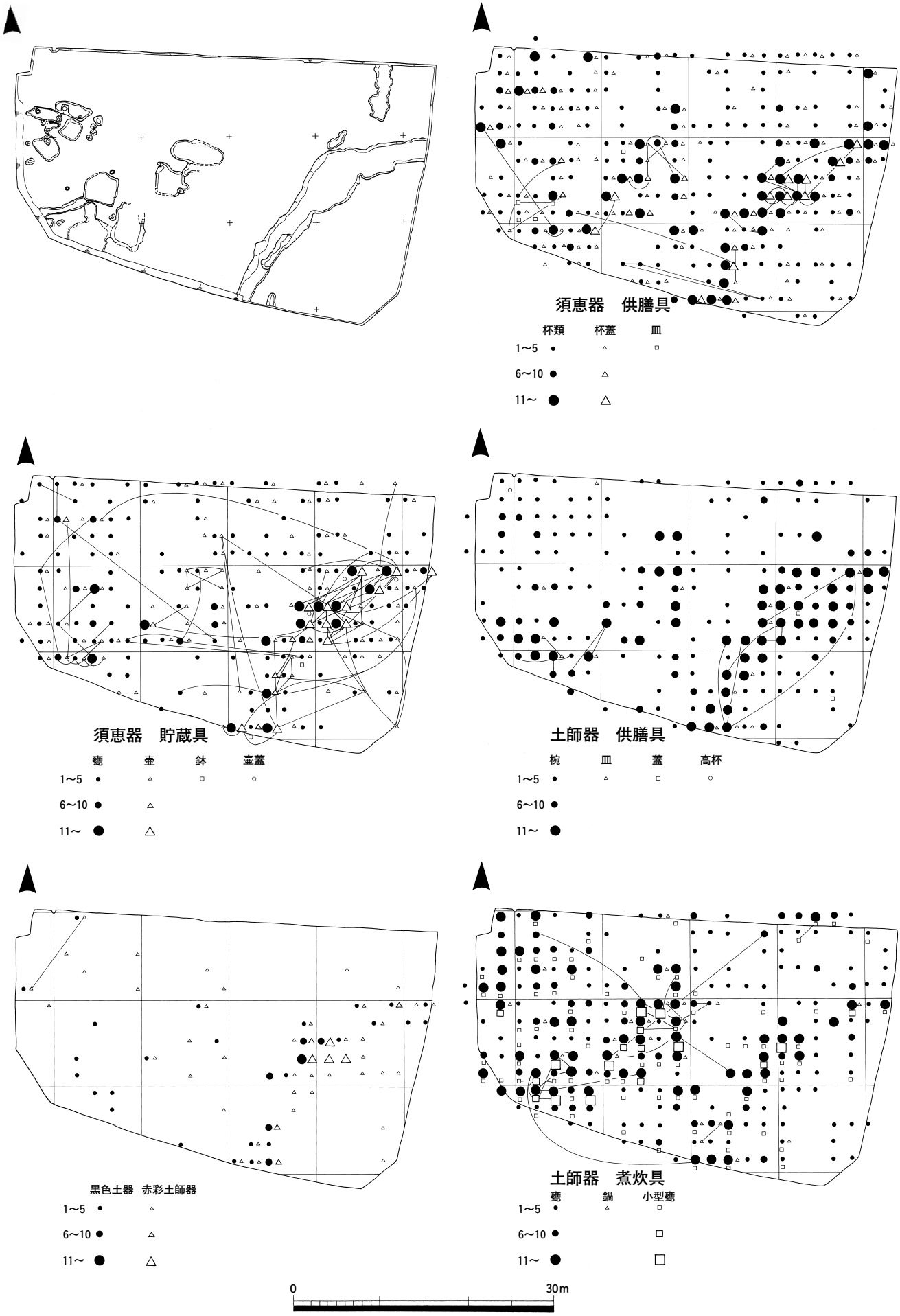




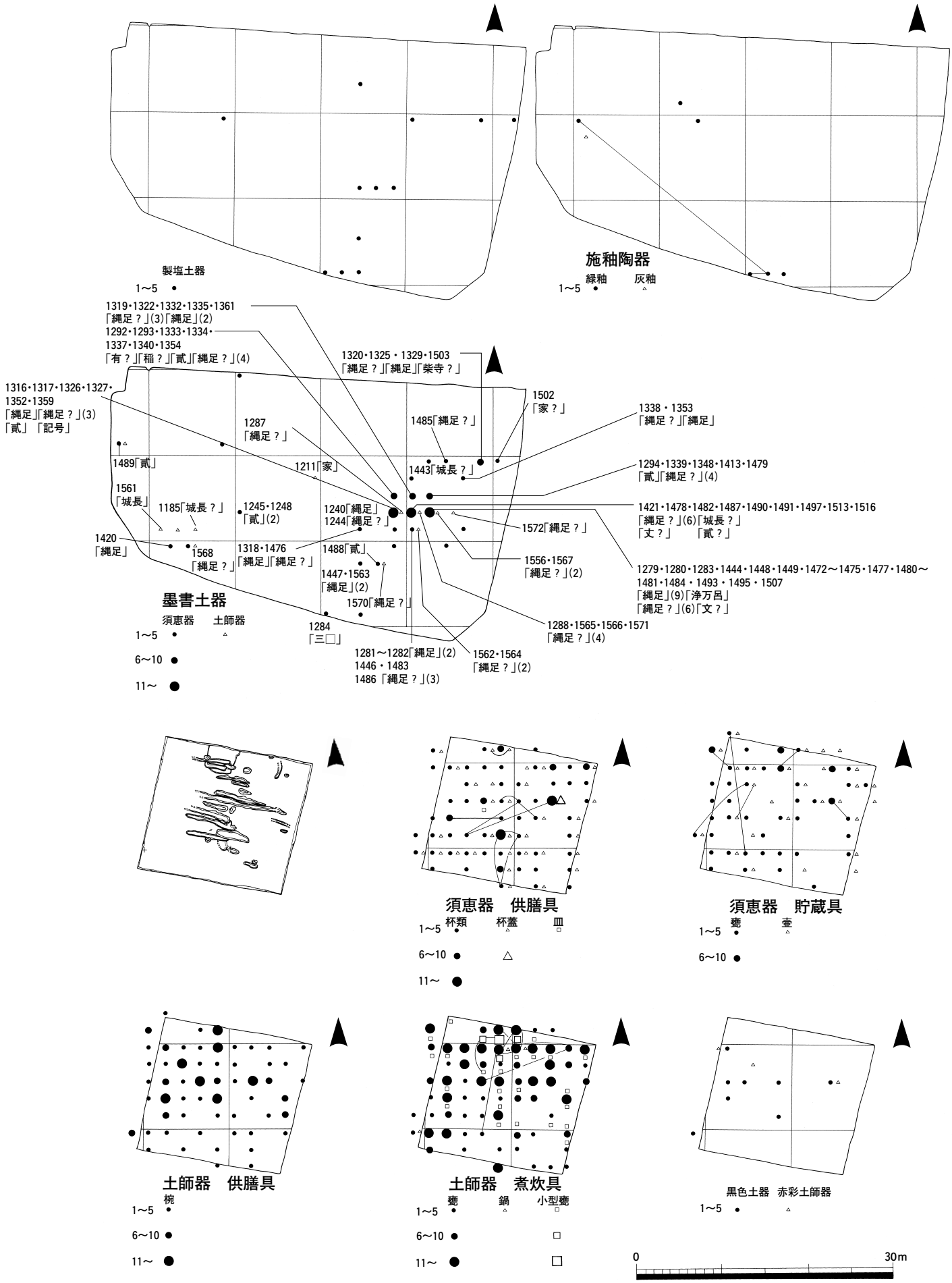
第23図　C18地区　古代出土分布図



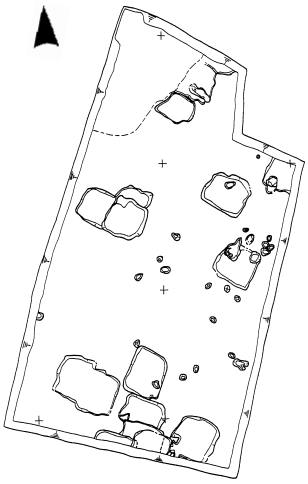
第24図　C19地区　古代出土分布図

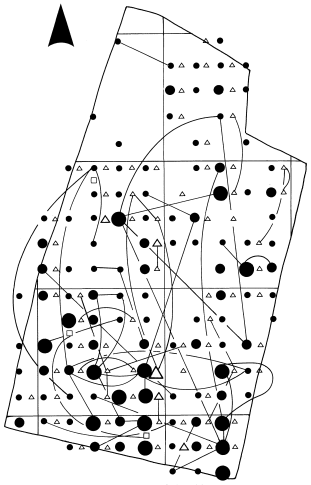


第25図　C20地区　古代出土分布図



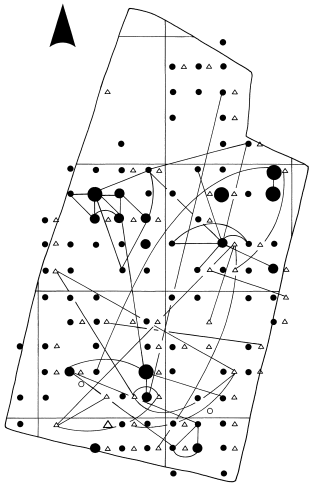
第26図　C20地区　古代出土分布図（２）　C21地区　古代出土分布図





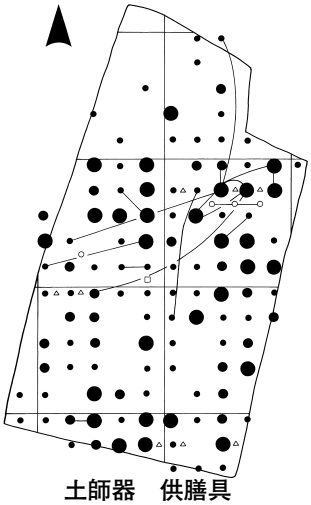
須恵器　供膳具

	杯類	杯蓋	皿
1～5	●	△	□
6～10	●	△	
11～	●	△	



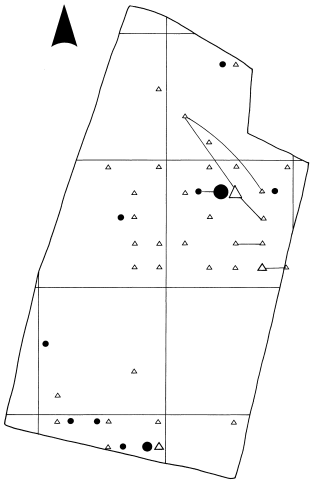
須恵器　貯蔵具

	甕	壺	壺蓋
1～5	●	△	○
6～10	●	△	
11～	●		

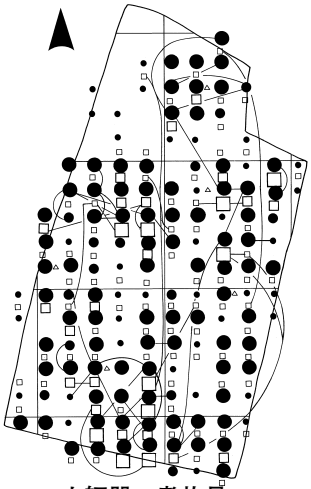


土師器　供膳具

	椀	皿	蓋	鉢
1～5	●	△	□	○
6～10	●			
11～	●			

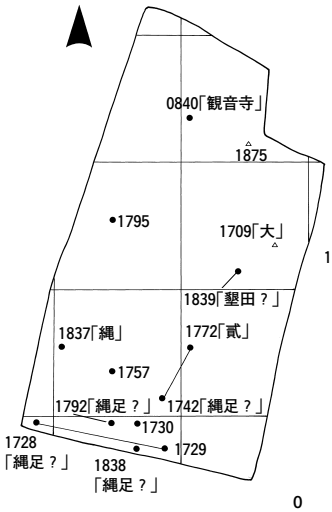


	黒色土器	赤彩土師器
1～5	●	△
6～10	●	△
11～	●	△



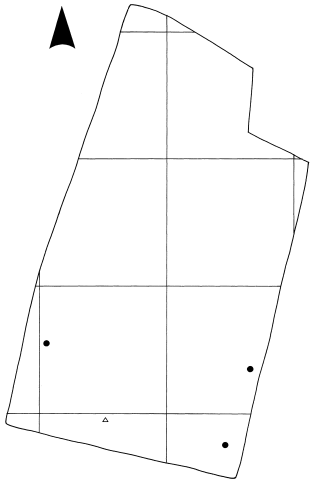
土師器　煮炊具

	甕	鍋	小型甕
1～5	●	△	□
6～10	●		□
11～	●		□



墨書土器

	須恵器	土師器
1～5	●	△

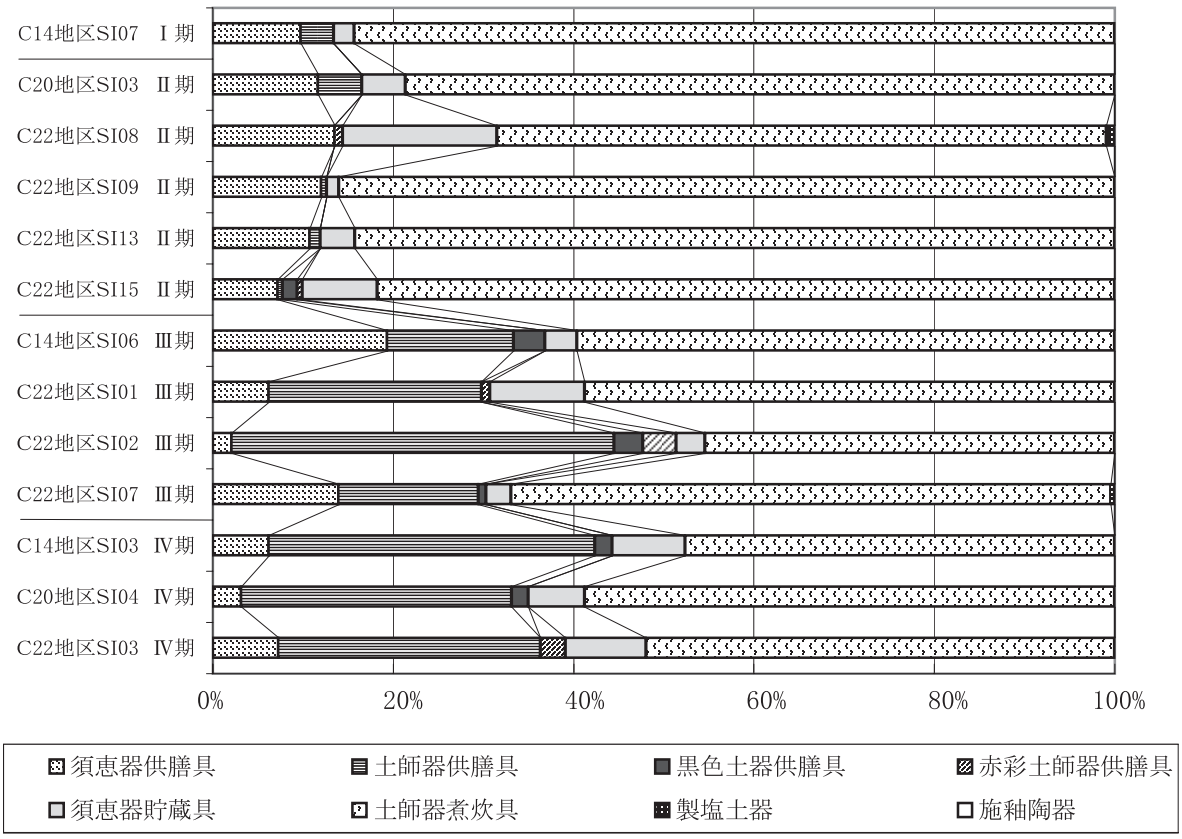


	製塩土器	緑釉
1～5	●	△

0　30m

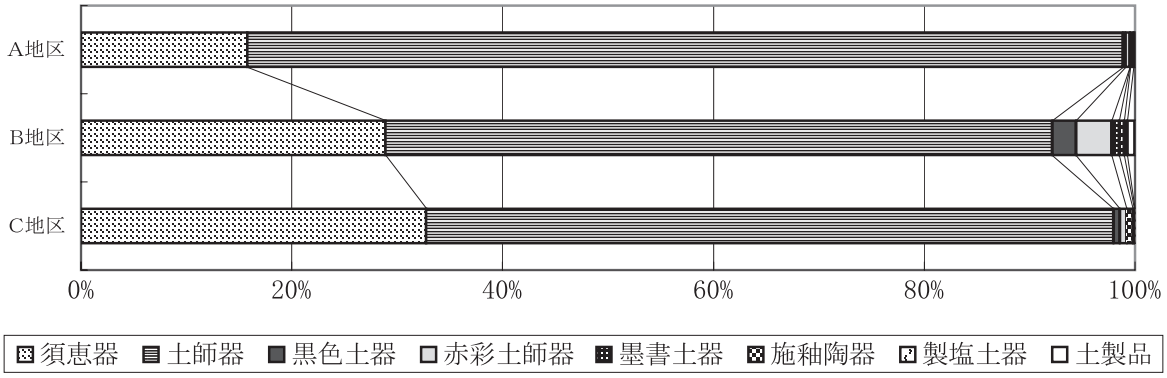
第27図　C22地区　古代出土分布図

時期	竪穴住居番号	須恵器供膳具	土師器供膳具	黒色土器供膳具	赤彩土師器供膳具	須恵器貯蔵具	土師器煮炊具	製塩土器	施釉陶器	合計	
Ⅰ期	C14地区 SI07	13	5	0	0	3	113	0	0	134	点数
		9.7	3.7	0.0	0.0	2.2	84.4	0.0	0.0	100	%
Ⅱ期	C20地区 SI03	12	5	0	0	5	81	0	0	103	点数
		11.7	4.9	0.0	0.0	4.9	78.5	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI08	15	0	0	1	19	75	1	0	111	点数
		13.5	0.0	0.0	0.9	17.1	67.6	0.9	0.0	100	%
	C22地区 SI09	18	1	0	0	2	129	0	0	150	点数
		12.0	0.7	0.0	0.0	1.3	86.0	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI13	17	2	0	0	6	134	0	0	159	点数
		10.7	1.3	0.0	0.0	3.8	84.2	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI15	13	1	3	1	15	148	0	0	181	点数
		7.2	0.6	1.7	0.6	8.3	81.6	0.0	0.0	100	%
Ⅲ期	C14地区 SI06	22	16	4	0	4	68	0	0	114	点数
		19.3	14.0	3.5	0.0	3.5	59.7	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI01	7	27	0	1	12	67	0	0	114	点数
		6.1	23.7	0.0	0.9	10.5	58.8	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI02	9	185	14	16	14	198	0	0	436	点数
		2.1	42.4	3.2	3.7	3.2	45.4	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI07	35	39	2	0	7	167	1	0	251	点数
		13.9	15.5	0.8	0.0	2.8	66.6	0.4	0.0	100	%
Ⅳ期	C14地区 SI03	13	76	4	0	17	100	0	0	210	点数
		6.2	36.2	1.9	0.0	8.1	47.6	0.0	0.0	100	%
	C20地区 SI04	5	48	3	0	10	94	0	0	160	点数
		3.1	30.0	1.9	0.0	6.3	58.7	0.0	0.0	100	%
	C22地区 SI03	13	52	0	5	16	93	0	0	179	点数
		7.3	29.0	0.0	2.8	8.9	52.0	0.0	0.0	100	%



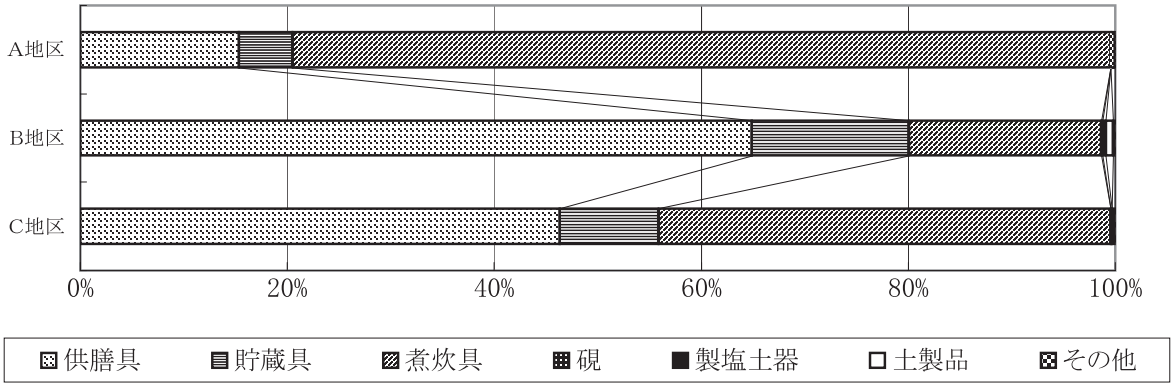
第28図　C 地区竪穴住居土器組成

地区	須恵器	土師器	黒色土器	赤彩土師器	墨書土器	施釉陶器	製塩土器	土製品	備考
A 地区	15.8	83.1	0.2	0.4	0.0	0.1	0.3	0.1	竪穴住居出土遺物による組成
B 地区	28.9	63.3	2.2	3.4	0.7	0.5	0.3	0.7	
C 地区	32.7	65.2	0.6	0.7	0.6	0.1	0.1	0.0	



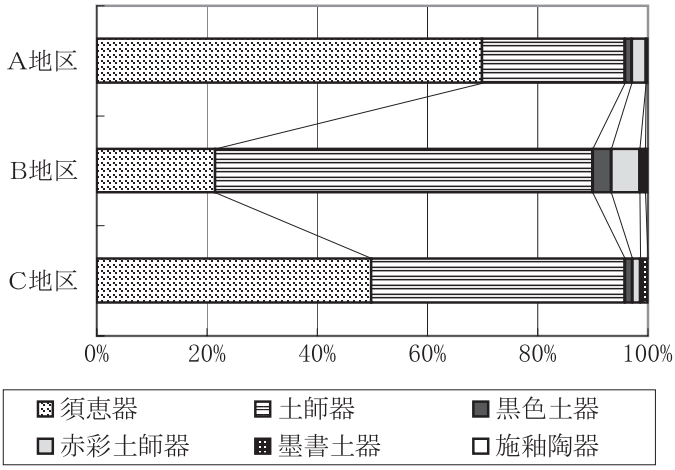
種類別：A・B・C 地区対比

地区	供膳具	貯蔵具	煮炊具	硯	製塩土器	土製品	その他	備考
A 地区	15.3	5.2	79.1	0.0	－	－	0.4	竪穴住居出土遺物による組成・その他に製塩土器、土製品を含む
B 地区	64.9	15.2	18.6	0.1	0.3	0.7	0.2	
C 地区	46.3	9.6	43.7	0.0	0.1	0.0	0.3	



用途別：A・B・C 地区対比

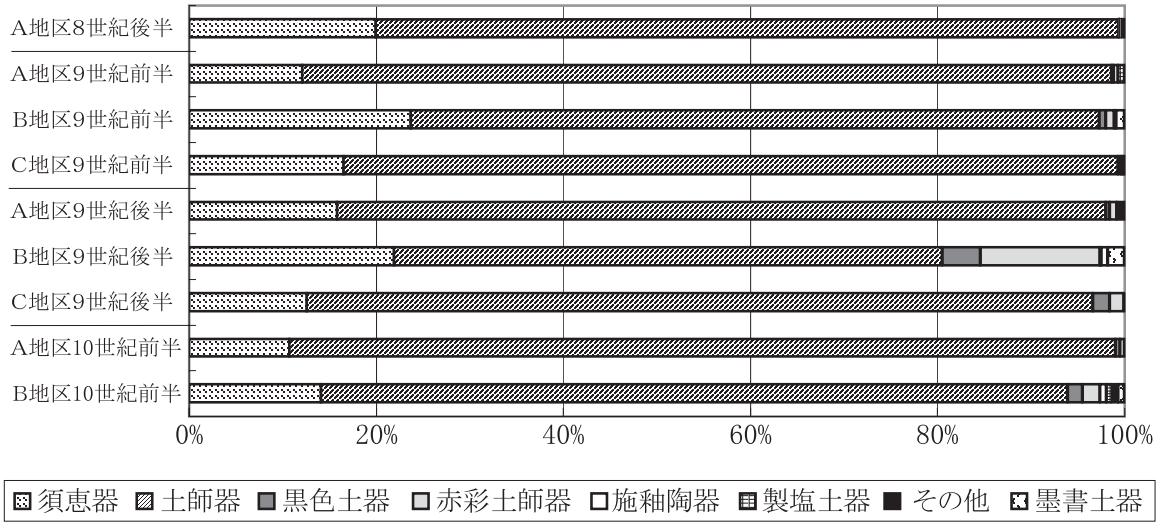
種類	C 地区	B 地区	A 地区	
須恵器	11012	9354	237	点数
	49.9	21.4	69.8	%
土師器	10179	29934	88	点数
	46.1	68.7	26.0	%
黒色土器	293	1457	4	点数
	1.3	3.3	1.2	%
赤彩土師器	316	2277	9	点数
	1.4	5.2	2.7	%
墨書土器	291	441	－	点数
	1.3	1.0	－	%
施釉陶器	8	194	1	点数
	0.0	0.4	0.3	%
合計	22099	43657	339	点数



A・B・C 地区供膳具：種類別対比

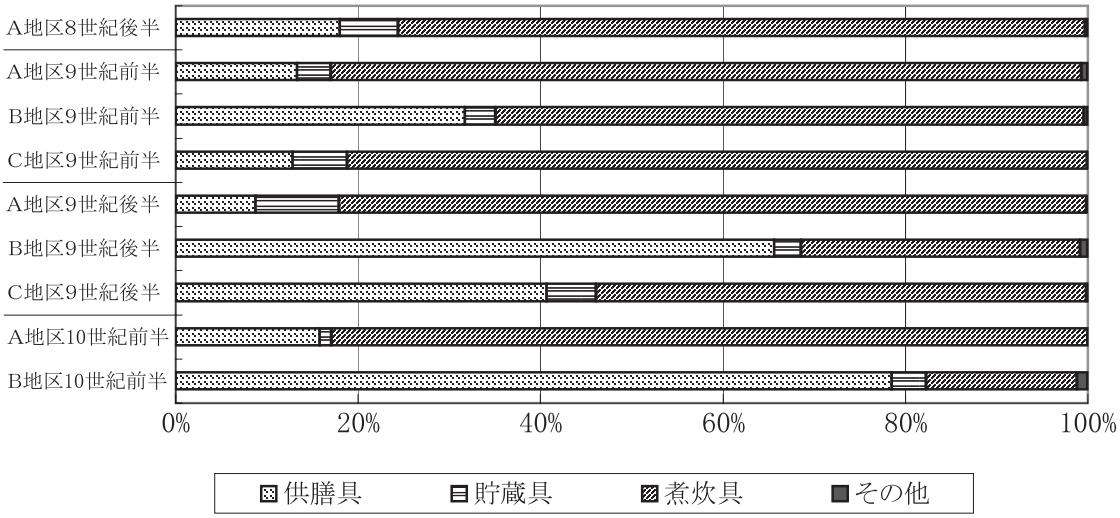
第29図　任海宮田遺跡 A・B・C 地区土器組成対比

時期	地区	須恵器	土師器	黒色土器	赤彩土師器	施釉陶器	製塩土器	その他	墨書土器	報告書時期区分
8 世紀後半	A 地区	20.0	79.4	0.0	0.2	0.1	0.3	0.0	－	前Ⅰ期
9 世紀前半	A 地区	12.1	86.5	0.2	0.5	0.0	0.7	0.0	－	前Ⅱ期
	B 地区	23.7	73.6	0.7	0.9	0.0	0.2	0.0	0.9	任海宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ期
	C 地区	16.5	82.8	0.4	0.2	0.0	0.1	0.0	－	任海宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ期
9 世紀後半	A 地区	15.8	82.2	0.4	0.8	0.0	0.0	0.8	－	後Ⅰ期
	B 地区	21.9	58.6	4.1	12.8	0.1	0.7	0.0	1.8	任海宮田遺跡Ⅲ・Ⅳ期
	C 地区	12.6	84.0	1.8	1.5	0.0	0.1	0.0	－	任海宮田遺跡Ⅲ・Ⅳ期
10世紀前半	A 地区	10.7	88.3	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	－	後Ⅱ期
	B 地区	14.1	79.8	1.6	1.9	0.7	0.5	0.7	0.7	任海宮田遺跡Ⅴ期



A・B・C 地区竪穴住居出土土器：種類別組成

時期	地区	供膳具	貯蔵具	煮炊具	その他	報告書時期区分
8 世紀後半	A 地区	18.0	6.4	75.3	0.3	前Ⅰ期
9 世紀前半	A 地区	13.3	3.7	82.3	0.7	前Ⅱ期
	B 地区	31.7	3.4	64.5	0.4	任海宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ期
	C 地区	12.8	6.0	81.1	0.1	任海宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ期
9 世紀後半	A 地区	8.8	9.2	81.2	0.8	後Ⅰ期
	B 地区	65.6	3.0	30.6	0.8	任海宮田遺跡Ⅲ・Ⅳ期
	C 地区	40.7	5.5	53.7	0.1	任海宮田遺跡Ⅲ・Ⅳ期
10世紀前半	A 地区	15.8	1.3	82.9	0.0	後Ⅱ期
	B 地区	78.5	3.8	16.5	1.2	任海宮田遺跡Ⅴ期



A・B・C 地区竪穴住居出土土器：用途別組成

第30図　任海宮田遺跡 A・B・C 地区竪穴住居土器組成対比

2　中世

（1）中世の遺構変遷

A 時期区分の設定

C 地区の調査では中近世の掘立柱建物59棟、礎石建物 1 棟、井戸21基が確認され、他に多くの土坑・溝などを検出した。ここでは、主要な建物を中心とした遺構の変遷を示していく。

建物の時期については、柱穴出土の遺物から判断できる場合は少ない。そのため、建物を含めた遺構の時期を比定する上では、地区の出土遺物から遺構変遷が想定される時期をある程度把握し、遺構の配置や重複関係等を基に変遷を考えた。その方法については、B 地区の報告時に示しており、今回もそれに準拠している。

まず、C 地区で中近世の遺構を検出した地区での、中世段階の遺物の消長を模式的に示す（表10）。概ね13～14世紀代もしくは、15世紀代の遺物が主体となって出土する地区にわかれる。また、16世紀代の遺物の出土は少ない。表には示されていないが、C８、C14・23、C17地区では近世段階の遺物が多くなる。これらのことから、C 地区では12世紀末ごろから集落の形成が始まり、16世紀代には縮小傾向にあり、一部は近世まで存続する様相が窺える。

時期区分については、B 地区の報告時にⅠ～Ⅶ期までを設定しており、今回も踏襲する。B 地区では建物数も多く、各世紀代を前・後半に分けた時期区分に分散させ、遺構の前後関係を想定することができた。しかし、C 地区では建物数や重複関係も少なく、詳細な時期区分に分け難い。そのため、Ⅰ・Ⅱ期：12世紀末～13世紀代、Ⅲ・Ⅳ期：14世紀代、Ⅴ・Ⅵ期：15世紀代、Ⅵ期：16世紀代以降として把握し直し、変遷を追っていく。ただし、遺物や重複関係などにより、判断できる場合は詳細時期として示しておきたい。

B 遺構変遷

（ⅰ）C２・３・４地区（第31・32図）

Ⅰ・Ⅱ期では SB01～08がある。SB01～03・06は SD001・003による区画内に位置する。SB04・05の位置は重複するが、前後関係は不明である。SB07は SD002による区画内にある。SD002は SD001と併存、あるいはやや後出すると考えられ、SB07も同様であろう。また、SB07は他の建物と方位を違えており、SD002の西辺を意識したものと思われる。SB08は SD002・005による区画内に位置する。SD040は自然流路でⅠ期以降存在し、最終的な埋没はⅦ期となる。

Ⅲ期には SB09～11がある。SB09の南には SD027による区画がある。SB10・11は重複するが、前後関係は不明である。また、SB10・11には石組井戸 SE02が隣接し伴う。

Ⅳ期には SD006による区画がある。区画内に建物は確認されないが、SK008や石組井戸 SE01等が存在する。また、SD006の南側の土坑群、南西側の溝群も認められる。

Ⅴ・Ⅵ期は SD040に遺物の出土がある他は、明確な遺構がない。後Ⅳ期新の瀬戸美濃四耳壺が SK082不整形

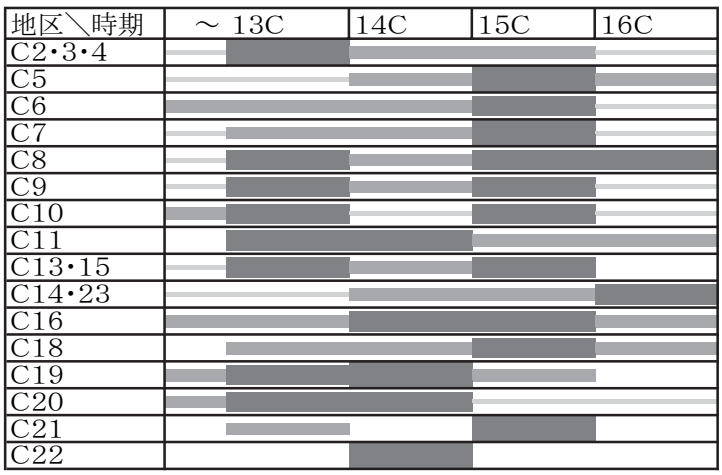
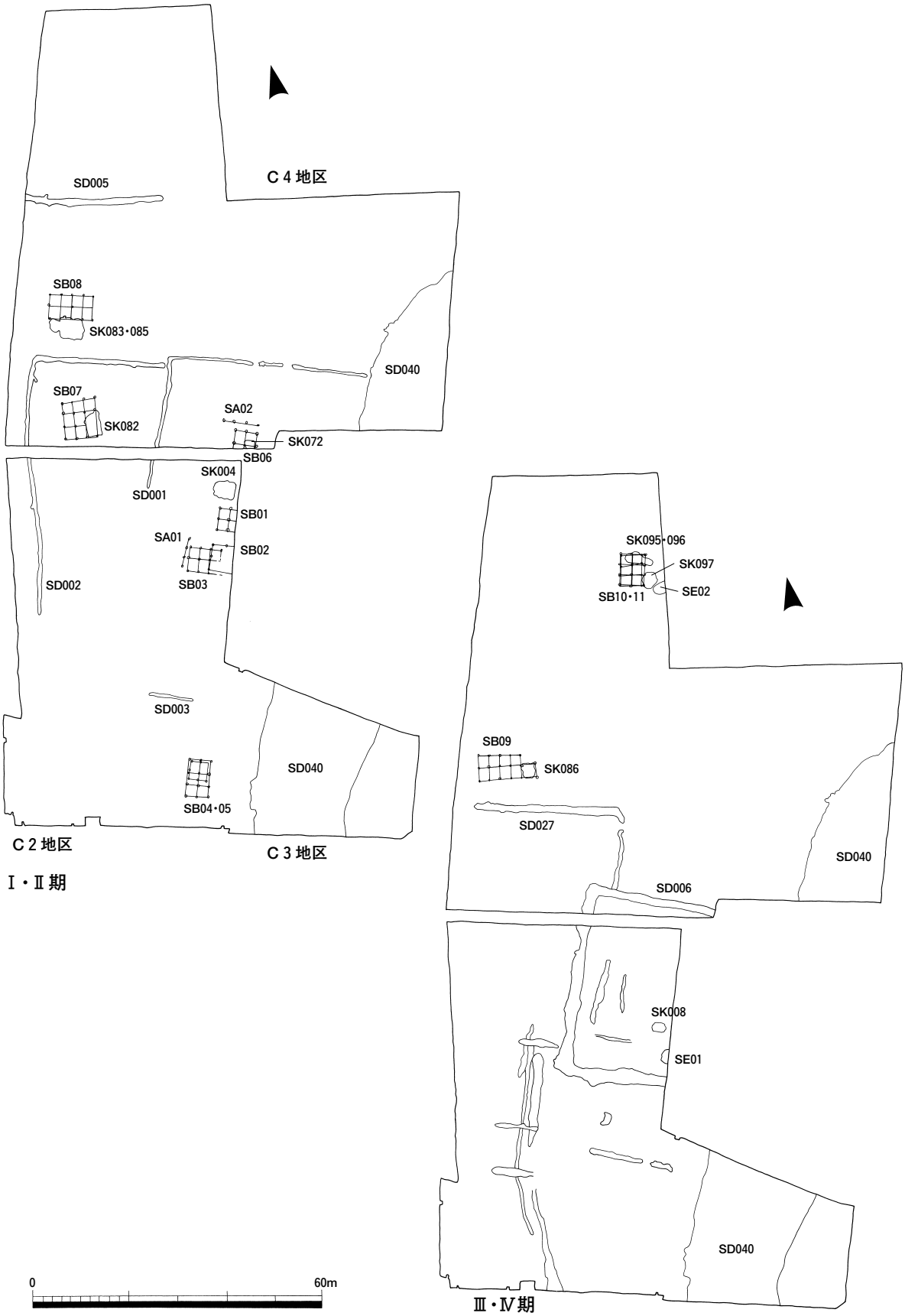
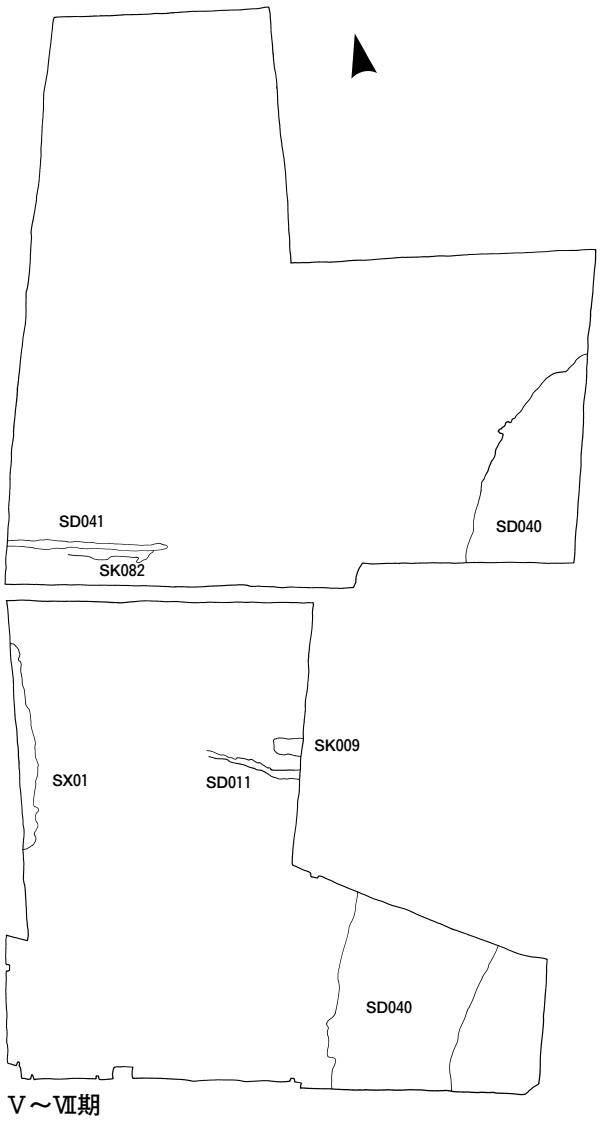


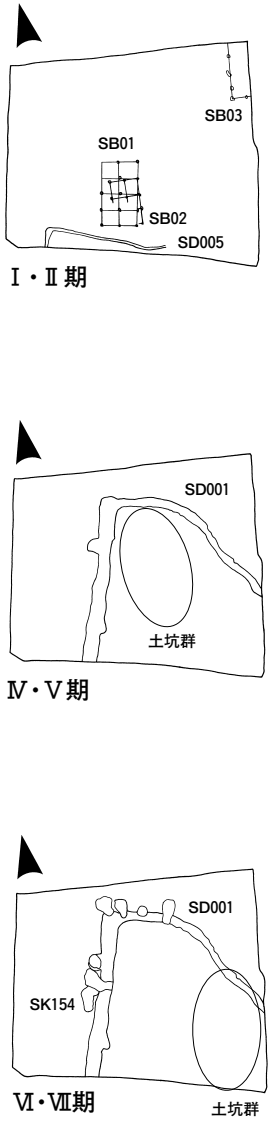
表10　地区別遺物消長表



第31図　C２・３・４地区　遺構変遷

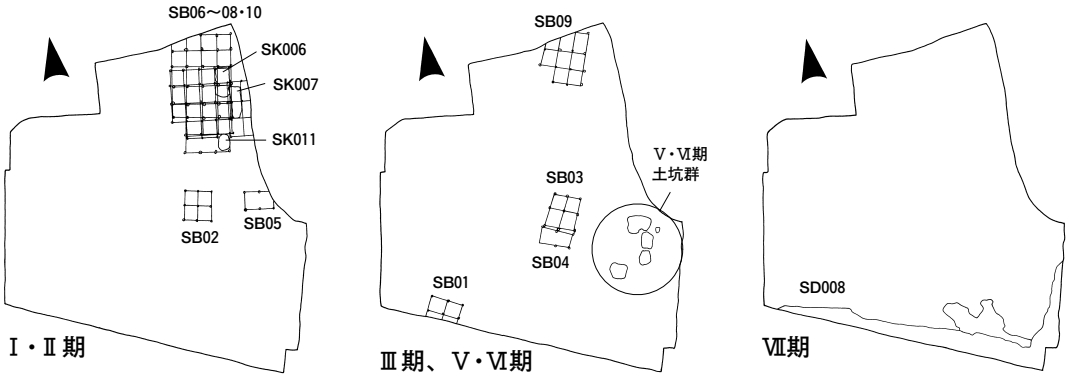


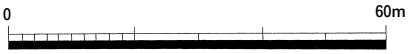
C２・３・４地区



C５地区

C６地区





第32図　C２・３・４、C５、C６遺構変遷

部分にて出土するが、性格は不明である。

Ⅶ期はSK009、SD011・041、SX01やSD040の最終段階が相当する。建物も確認されず、概して遺構は少ない。

（ⅱ）C５地区（第32図）

Ⅰ・Ⅱ期ではSB01～03がある。SB01・02は重複するが、前後関係は不明である。また、SB01・02の南側にSD005があるが、建物の区画溝であるかは判然としない。

Ⅲ期以降では建物は確認されない。SD001による区画と区画内の土坑群で構成される。遺物からはⅣ期以降が主体となる。SD001はⅣ～Ⅶ期まで存続するが、土坑群は出土遺物の様相から、Ⅳ・Ⅴ期とⅥ・Ⅶ期で分布域が異なる傾向がある。Ⅳ・Ⅴ期は概ねSD001区画内の北西から中央に土坑群が形成される。Ⅵ・Ⅶ期では区画内の東から南東に土坑群が形成される。東側ではⅣ・Ⅴ期に比べ、土坑の規模がやや大きく、形状が整わない。これらの土坑群のうち、SK065・075・127・135・148は銅銭あるいは完形の中世土師器皿が出土し、墓壙の可能性がある。いずれも一辺２m前後の方形を基調とするが、覆土への礫の混入に違いがある。これらを含め、区画内に密集する方形・長方形基調となる土坑や、方形基調の土坑が重複したと思われる区画内東側の不整形の土坑群も同様の性格が考えられる。しかし、骨片の出土は認められず、墓壙であるかは判然としない。

SD001の区画外には、SK001～005が北西側、SK153～155が西側に分布する。いずれもⅦ期で、SD001を切るものが多い。SK154の底面には焼土・炭化物層が形成され、羽口・鉄滓の出土が多い。分析結果では鍛錬鍛冶滓であったが、SK154自体が鍛冶関連の遺構とは考え難い。また、後述する出土分布で示すように、羽口・鉄滓の分布はSK154周辺以外に、調査区東側にも広がっている。鍛冶関連の作業が調査区内、あるいは隣接地で行なわれた可能性があるが、その内容は明らかでない。

（ⅲ）C６地区（第32図）

Ⅰ・Ⅱ期にはSB02・05～08・10がある。SB06～08・10は調査区北東に重複してあり、SB08→SB07→SB06→SB10の順となる。これらの南側にSB02・05があり、SB06・07・10のいずれかと併存すると思われる。このようにⅠ・Ⅱ期において、少なくとも４段階の建物変遷があったと考えられ、Ⅰ期にSB07・08、Ⅱ期にSB06・10とすることも可能であろう。

Ⅲ期では建物方位を変えて、SB01・03・04・09が存在する。SB03・04は併存しないと思われ、２段階の変遷が想定される。

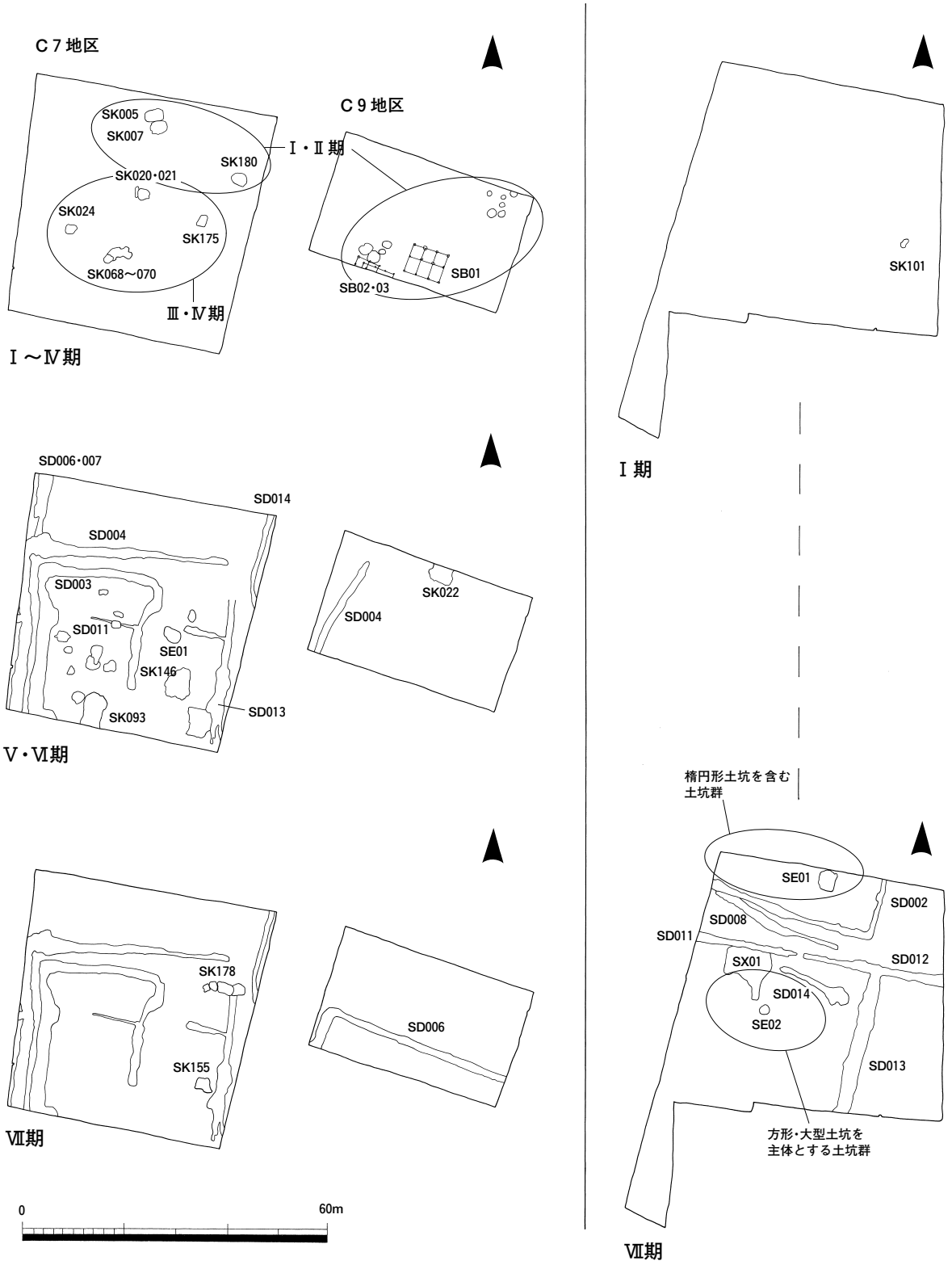
Ⅴ・Ⅵ期になると建物は確認されず、調査区東に方形状の土坑群が形成される。

Ⅶ期には調査区南にSD008があり、付近に土坑が散見される。近世までの遺物を含むが、その位置からC５地区SD001と一連の溝である可能性がある。

（ⅳ）C７地区（第33図）

Ⅰ～Ⅳ期には調査区北半に土坑が散在すると考えられる。Ⅰ・Ⅱ期ではSK005・007・180が調査区北寄りに、Ⅲ・Ⅳ期ではSK020・021・024・068～070・175が中央寄りに分布する。

Ⅴ・Ⅵ期からはSD003・004・006・007・013・014による区画が行なわれる。出土遺物の様相から、SD003の区画内をさらに区切るSD011より南側の土坑群が形成されたと考えられる。土坑群は方形基調の土坑が数多く重複し、完形の中世土師器皿が比較的多く出土する点などは、先に見たC５地区の土坑群のあり方と似ている。しかし、銅銭の出土はほとんど無く、SK093・146の様な一辺４mを越えるような土坑が認められることなど、異なる点もある。また、出土遺物に瀬戸美濃・瓦質土器の花瓶や香炉、青銅製の燭台が認められる点も特徴的である。これらのことから、墓壙あるいは、宗教的



第33図　C７、C８、C９地区　遺構変遷

な施設に関係して形成された遺構群の可能性がある。

Ⅶ期では引き続き溝による区画があるが、遺構の分布は調査区東側を中心とするSK155・178等がある。区画を形成していたSD003・004は覆土上層に多量の礫と共に、遺物に越中瀬戸や鉄砲玉と思われる鉛玉が含まれており、16世紀末頃から近世に最終的な埋没を向かえる。

（ｖ）C８地区（第33図）

Ⅰ期には調査区南東にSK101がある。SK101は回転台成形の中世土師器、青白磁皿、水晶数珠玉が出土する墓壙である。調査区内には同時期の建物等は確認されず、隣接するC10地区の建物群との関連が強いと考えられる。

Ⅶ期からは、SD002・011～013による区画が形成される。SD002の区画内にはSE01があり、柱穴の可能性がある楕円状の土坑が散見されるが、建物は復元できなかった。SD011～013によって形成される調査区南西の範囲では、土坑群が確認される。SD002区画内のような楕円形土坑は認められない。SX01は水溜としての機能が可能性としてあるが、他の遺構も含め全体的に性格は不明と言わざるを得ない。また、これらは出土遺物から近世以降の所産である遺構がほとんどである。

（vi）C９地区（第33図）

Ⅰ・Ⅱ期には調査区南西にSB01～03が認められる。SB02・03は重複し、２時期に細分可能だが、前後関係は不明である。他にSB02・03北側と調査区北東に土坑が分布する。

Ⅲ・Ⅳ期に属する遺構は明らかでないが、遺物は一定量出土する。

Ⅴ・Ⅵ期ではSK022、SD004がある。SD004は隣接するC７地区の区画溝と関連する可能性があるが、やや方向を違える。

Ⅶ期では近世以降にSD006が調査区南を区画するが、区画内に当該期の遺構は認められない。距離を置くが、時期と方位はC８地区SD002と同様で関連が窺えるものの、連続する溝であるかは判然としない。

（vii）C10・11・13～16・23地区（第34・35図）

Ⅰ・Ⅱ期ではC10地区SB01～04、C11地区SB01・02がある。いずれも建物方位が近似しており、一連の建物群であると考えられる。ただし、C10地区の建物周辺には幅の狭い溝が数条あり、SB03とSD008、SB04とSD012の対応を敢えて推測すれば、SB03とSB04は併存せず２時期に細分されよう。

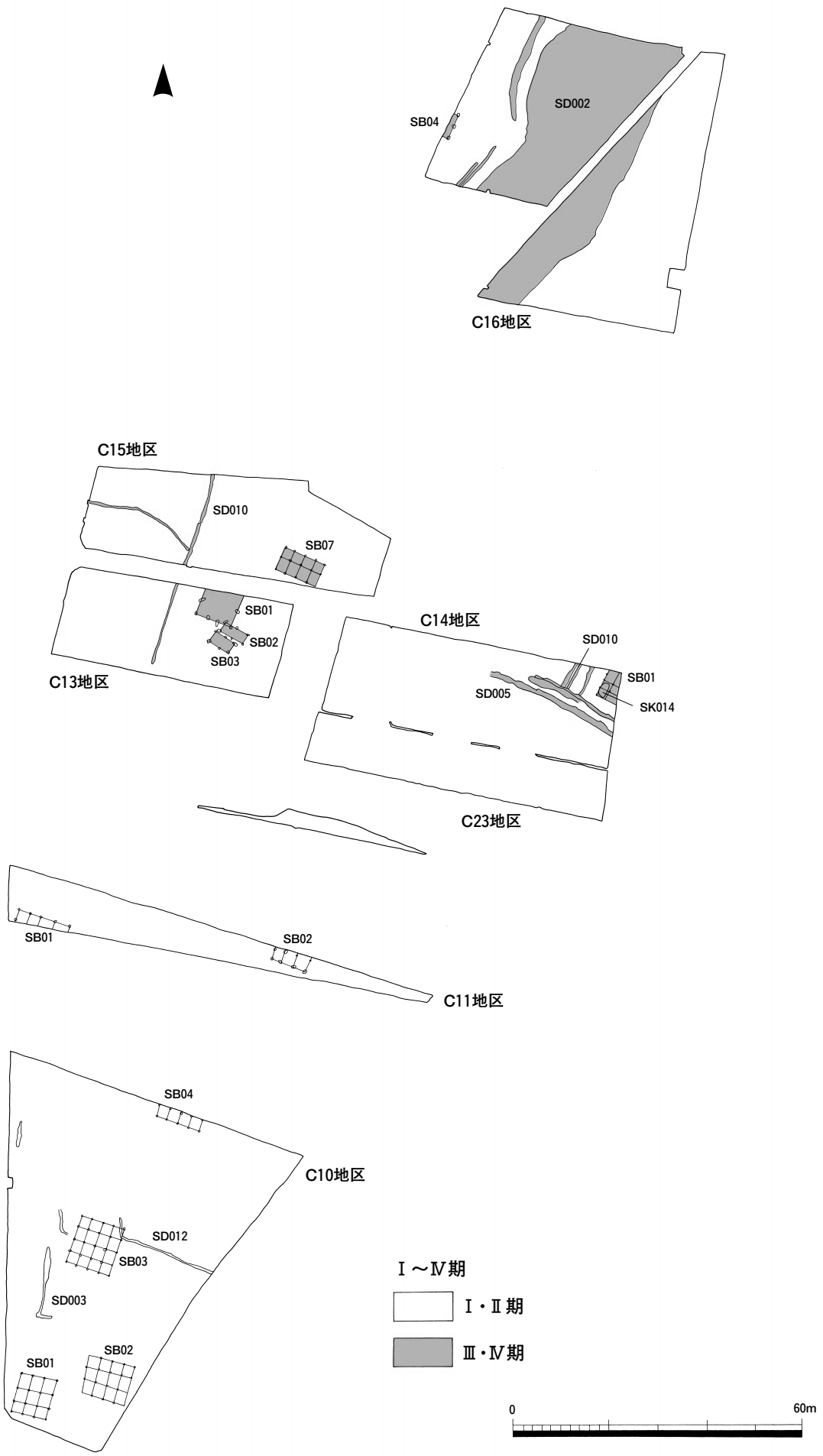
Ⅲ・Ⅳ期にはC13・15地区SB01～03・07、C14・23地区SB01、C16地区SB04が相当する。建物群周辺にはC13・15地区SD010、C14・23地区SD001・005・010等の溝があり、範囲は明らかでないが区画溝と考えられる。また、C16地区ではSD002が浅い谷状地形として存在する。Ⅰ・Ⅱ期よりも北側に建物群が移行しており、このあり方はⅤ期以降に続く。

Ⅴ・Ⅵ期になると、C13・15地区SB04～06、C14・23地区SB02、C16地区SB01～03が認められる。C10地区でも当期の遺物が一定量出土するが、遺構は特定し難い。

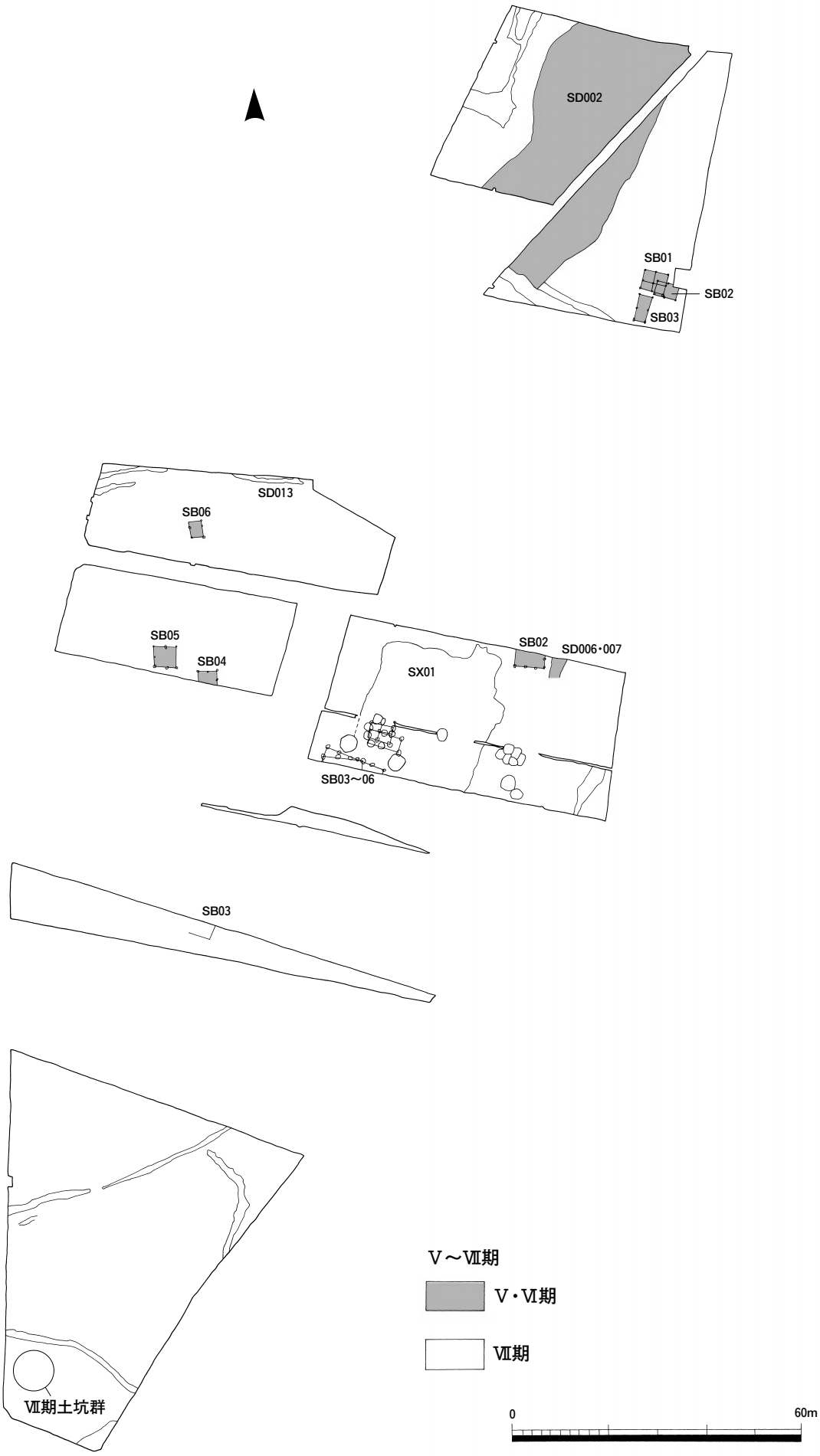
Ⅶ期は近世以降の段階に属する遺構が認められる。C11地区SB03、C14・23地区SB03～06、SE01～15があり、C10、13・15、16地区でも溝が検出される。また、C14・23地区では整地跡のSX01～05が最終的に形成される。

（viii）C18～22地区（第36図）

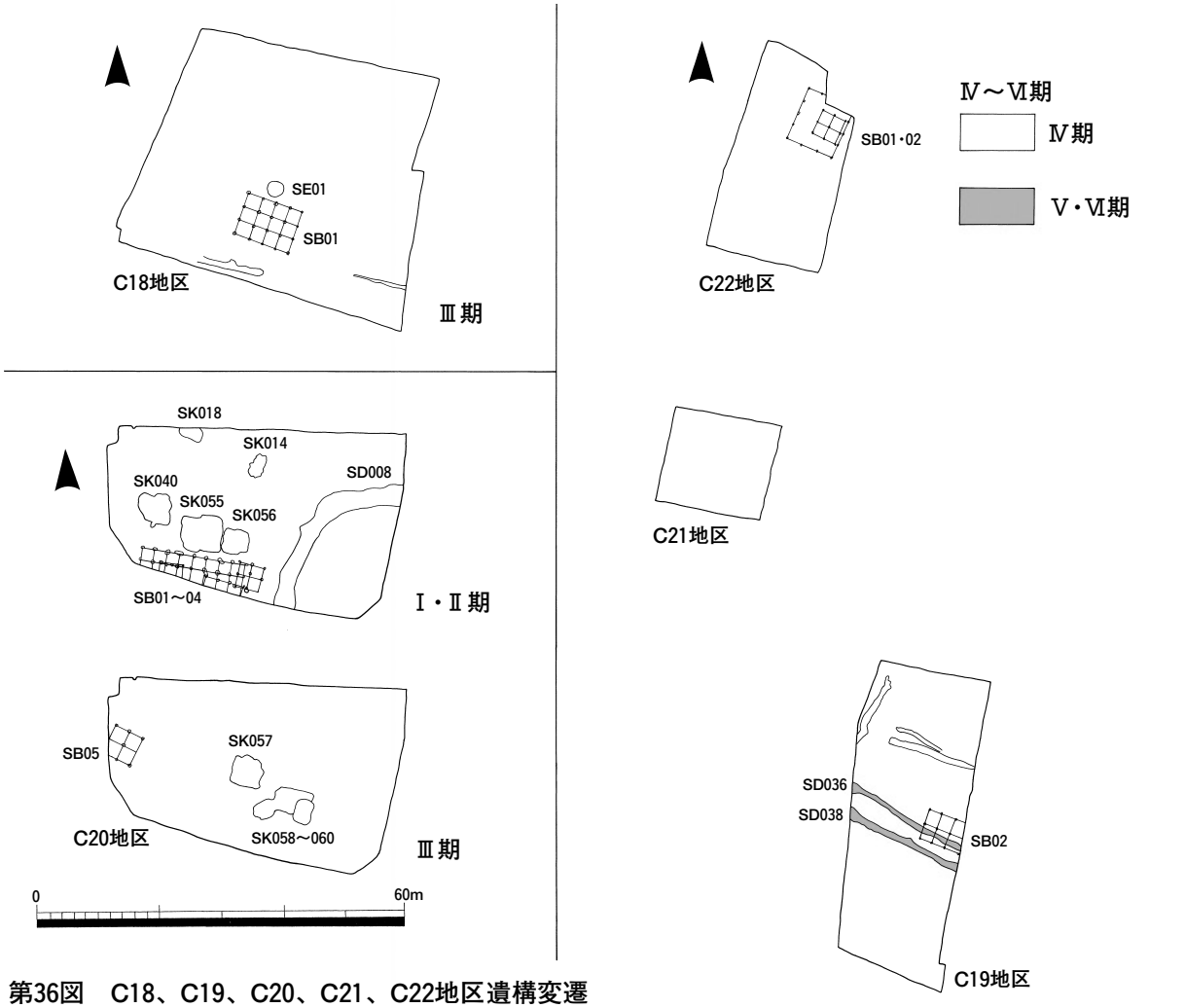
Ⅰ・Ⅱ期にはC20地区SB01～04がある。重複関係は不明であるが、少なくとも３段階に変遷する。建物群の北側にはSK014・018・040・055・056の土坑があり、この内SK055・056はSB01に関連する大型の土坑である。SK055は内部に石積みがあり、竪穴状に開口して上部構造を有していた可能性が



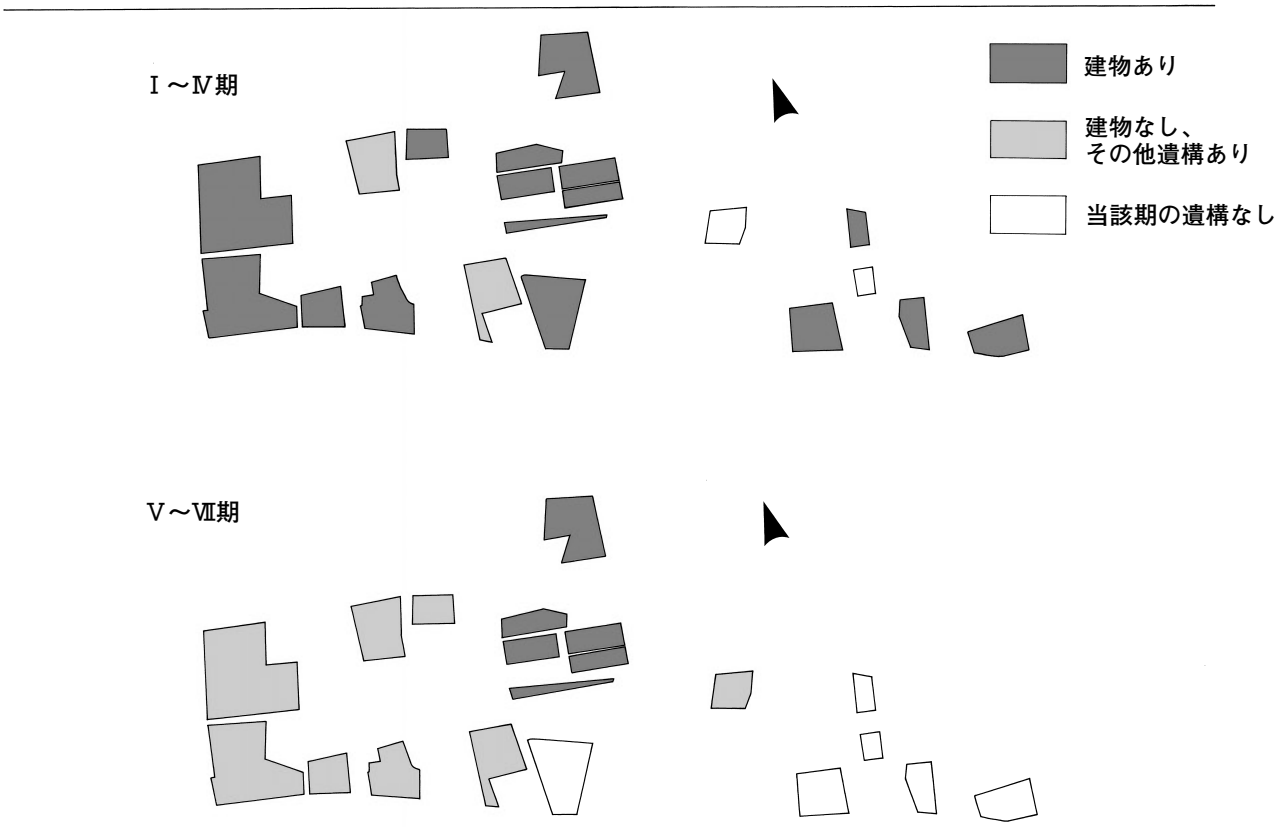
第34図　C10、11、13・15、14・23、16地区遺構変遷（1）



第35図　C10、11、13・15、14・23、16地区遺構変遷（２）



第36図　C18、C19、C20、C21、C22地区遺構変遷



第37図　任海宮田遺跡Ｃ地区建物分布模式図

あり、半地下状の倉庫的な機能が想定される。他にSD008がある。

Ⅲ期にはC18地区SB01、C20地区SB05が認められる。C18地区SB01には素掘井戸SE01が付属する。C20地区では他にSK057～060の方形状の土坑群があり、Ⅰ・Ⅱ期のSK055・056の役割を踏襲すると推測するが、上部構造の有無は不明で、掘り込みも浅くなり、簡素な造りになったと思われる。

Ⅳ期になるとC19地区SB02、C22地区SB01・02が相当する。C19地区SB02にはSD032・034・035が区画溝として関連する可能性がある。

Ⅴ・Ⅵ期ではC19地区SD036・038の平行する２条の溝がある。また、C21地区でも当該期の遺物が一定量出土するものの、遺構は特定できない。

（２）中世の建物について

遺構変遷によって想定される各建物の時期を一覧として示した（表11）。ここでは、検出された掘立柱建物の規模・構造についての様相をまとめておきたい。

A 建物密度・分布

1,000㎡あたりの建物棟数を示す（グラフ15）。Ⅰ・Ⅱ期は1.08棟、Ⅲ・Ⅳ期は0.65棟、Ⅴ・Ⅵ期には0.25棟、Ⅶ期以降は0.18棟となる。この様に、時期を追う毎に建物密度は低くなる。

また、C地区における建物および遺構の大まかな分布状況を、地区・時期毎に示す（第37図）。Ⅰ～Ⅳ期において建物が確認されるのは、西側のC２～６地区、中央のC９～11・13～16・23地区、東側のC18・19・20・22の３つの範囲に大きく分れる。Ⅴ～Ⅶ期では中央のC11・13～16・23地区の範囲で確認されるようになる。

以上のように、建物群の形成が複数の範囲であった段階から、特定の範囲と移行する様相が窺える。しかし、後者の段階にあっても建物は散在してあり、密度は低い。

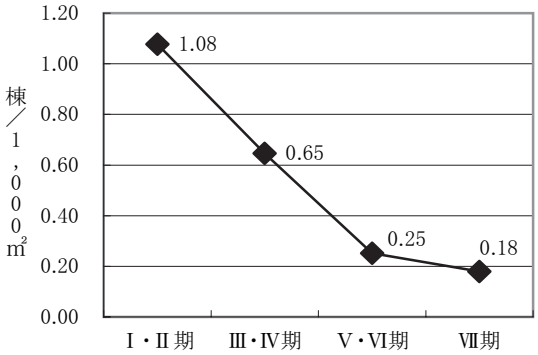
B 建物構造・面積

建物構造を総柱・側柱・礎石建物に分け、時期毎の変化を示す（グラフ16）。Ⅰ～Ⅳ期では総柱建物が主となりつつ、徐々に側柱建物が増える。Ⅴ・Ⅵ期では側柱建物が主体へと変換する。Ⅶ期には礎石建物が確認されるが、いずれも近世段階の建物で、その認定や構造には不明瞭な点があることも否めない。ここでは総柱建物から側柱建物への移行を、Ⅳ期からⅤ期に確認するに止めたい。

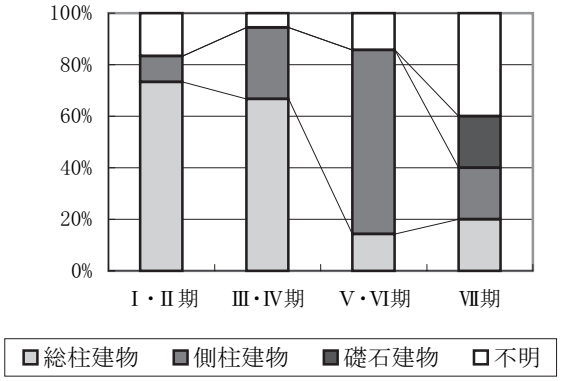
建物面積を25㎡未満、25㎡以上50㎡未満、50㎡以上100㎡未満、100㎡以上に分け、時期毎に示す（グラフ17）。Ⅰ～Ⅳ期にかけて50㎡未満の建物が増加しつつ、25㎡未満と25㎡以上50㎡未満の比率がほぼ等しい傾向が続く。Ⅴ期以降は25㎡未満のみで構成される。

	C2･3･4	C5	C6	C9	C10	C11	C13･15	C14･23	C16	C18	C19	C20	C22
Ⅰ・Ⅱ期	SB01～08	SB01～03	SB02･05～08･10	SB01～03	SB01～04	SB01･02						SB01～04	
Ⅲ・Ⅳ期	SB09～11		SB01･03･04･09				SB01～03･07	SB01	SB04	SB01	SB02	SB05	SB01･02
Ⅴ・Ⅵ期							SB04～06	SB02	SB01～03				
Ⅶ期～						SB03		SB03～06					

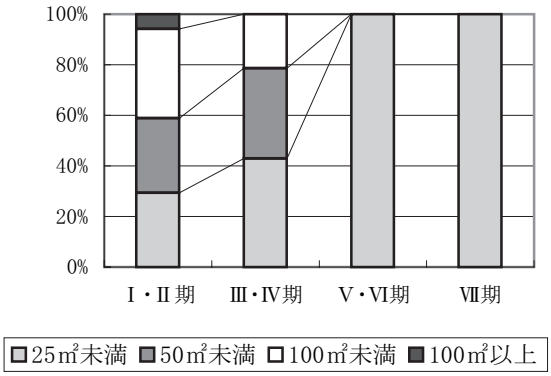
表11　C地区中世建物時期別一覧



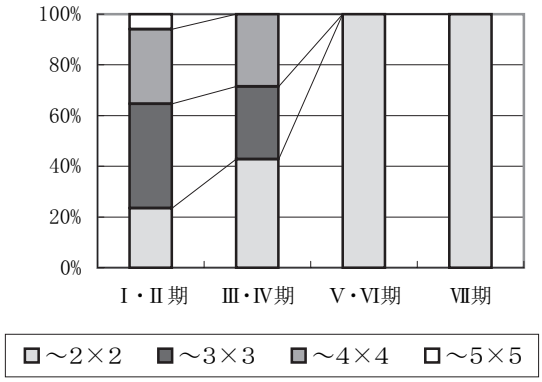
グラフ15　建物密度



グラフ16　建物構造

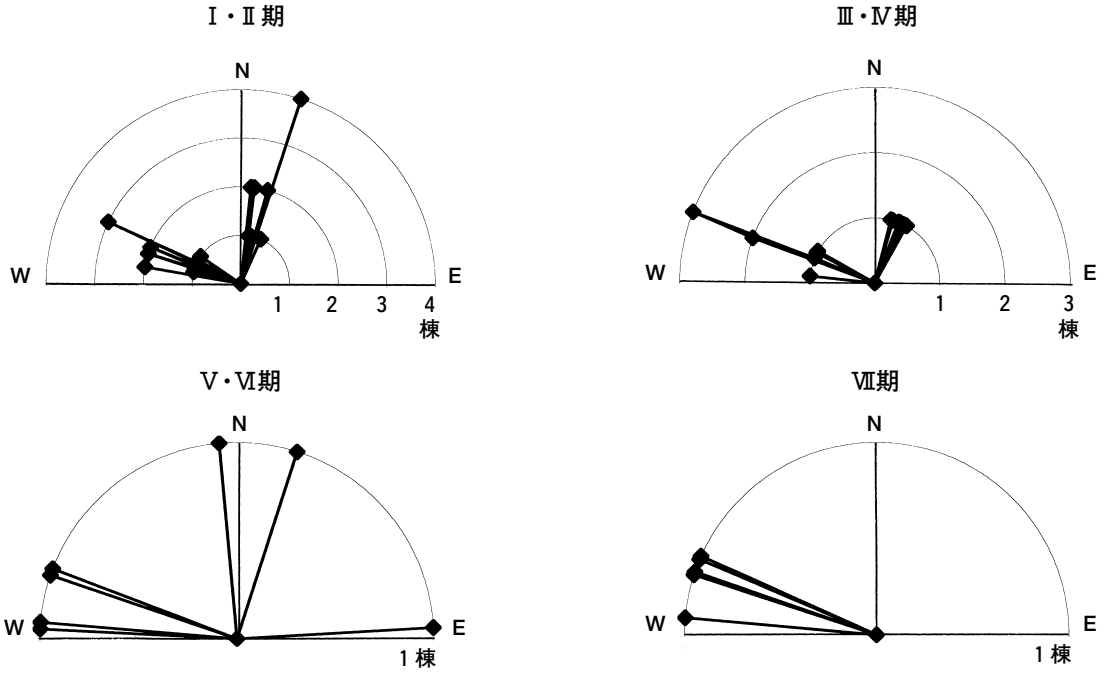


グラフ17　建物面積



グラフ18　建物間数

※桁行・梁行ともに確認できた建物を対象



第38図　建物方位

建物を桁行間数毎で見ると（グラフ18)、Ⅰ・Ⅱ期に桁行５間までが確認されるが、主に桁行４間までの建物で構成され、Ⅲ・Ⅳ期までその傾向が続く。Ⅴ期以降は桁行２間までの建物のみとなる。なお、C20地区 SB01では梁行が不明であるものの、桁行は８間が確認されており、本来はＣ地区での最大規模の建物であったと考えられる。

この様に、建物構造は総柱から側柱への変化、規模の縮小化が時間的な経過と共に進行する傾向が窺える。

Ｃ建物方位

建物方位を北からの東西方向への振幅として示した（第38図)。Ⅰ～Ⅳ期にかけては２方向へまとまる。一つはN－30°－E程度まで東へ傾く建物群で、Ⅰ・Ⅱ期ではN－19°－Eにやや集中し、Ⅲ・Ⅳ期ではN－15～30°－Eに分散する。もう一つはN－80°－W程度まで西に傾く。Ⅰ・Ⅱ期ではN－65°-W、Ⅲ・Ⅳ期ではN－69°－Wと近似し方位にまとまる傾向がある。Ⅴ・Ⅵ期ではⅠ～Ⅳ期の方位の他に、北あるいは東・西方位に近い建物も現われる。Ⅶ期は近世段階の建物となるが、Ⅵ期までに認められた方位の一部が存続していると言える。

以上のように、Ⅰ～Ⅳ期までは北北東・西北西の傾向があったものが、Ⅴ期から北・東・西の方位が加わるあり方が分かる。また、Ⅶ期には西北西・西方位の東西棟のみとなる。

Ｄ竪穴状土坑

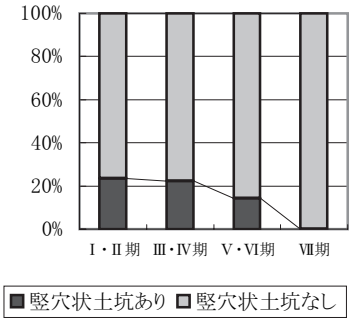
掘立柱建物の内外に、いわゆる竪穴状土坑が付随する建物は12棟に認められ、概ね１棟に１基の竪穴状土坑が付属する。複数確認できる場合もあり、竪穴状土坑は計15基を数える。また、建物は側柱建物１棟を除き、総柱建物である。

時期毎に竪穴状土坑の有無を棟数による比率で示した（グラフ19)。Ⅰ・Ⅱ期は23％、Ⅲ・Ⅳ期は22％の建物で確認される。Ⅴ・Ⅵ期には14％へ減じ、Ⅶ期には認められない。竪穴状土坑が確認された建物の規模を間数別に見る（グラフ20)。Ⅰ～Ⅳ期まで桁行３もしくは４間の建物で確認される場合がほとんどで、Ⅴ・Ⅵ期には桁行２間のみとなる。また、建物内外での配置（第39図）では、建物の南辺沿いと北東隅に構築される傾向が窺える。

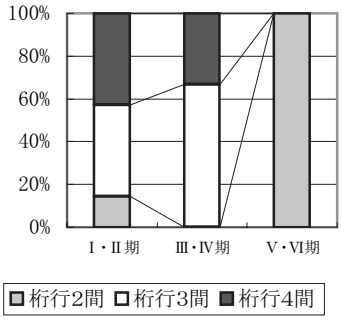
覆土などの特徴では、Ｃ２・３・４地区 SK072・086の底面に炭化物が層状に形成される。C14・23地区 SK014では小礫が多く混入する。これら以外の竪穴状土坑では、覆土の堆積や混入物に特色はなく、底面の硬化なども認められない。

竪穴状土坑自体の規模は、建物柱間距離の２×１間分に相当する事例が９基あり、次いで１×１間分が４基、２×２間分が１基、不明が１基となる。

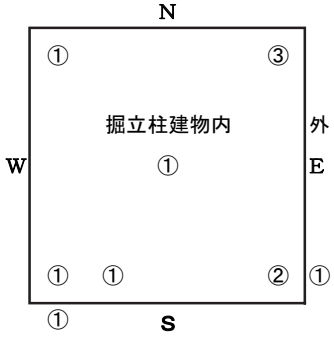
これらのことから、竪穴状土坑はⅠ～Ⅳ期に２割程度、Ⅴ・Ⅵ期には比率が下がるが一定量の建物



グラフ19　竪穴状土坑付属率



グラフ20　建物規模別竪穴状土坑確認数



第39図　竪穴状土坑構築位置

に設置されていると言えよう。また、建物は桁行３間あるいは４間で、土坑自体は建物の２×１間分を占める傾向がある。土坑の位置は、建物南辺や北東隅が意識されたようである。

（３）中世の土器・陶磁器組成と分布

任海宮田遺跡Ｃ地区では中世を通じてＣ地区全体の範囲が土地利用されていた。その結果、多くの遺物も残された。そのほとんどを占める土器・陶磁器の組成、およびその出土分布を示しておきたい。既に報告した任海宮田遺跡Ａ・Ｂ地区を含め、神通川を挟んで対岸に位置する中名Ⅴ・Ⅵ遺跡や道場Ⅰ遺跡においても、土器・陶磁器の組成・分布を提示してきている。それらの結果と比較検討を進める上での、基礎的な資料の拡充を図ることも目的の一つである。

Ａ集計と分布図作成の方法

対象としたのは、基本的には掘立柱建物が確認された地区である。しかし、建物は認められなかったものの、土坑など遺構が多く検出された地区や、組成などに特徴がある地区も扱った。そのため、23箇所ある地区の内、C12、C17地区を除く、ほとんどの地区について示していく。

土器・陶磁器は中世土師器、珠洲、八尾、越前、瀬戸美濃、中国製陶磁器、瓦質土器、土製品（羽口・土錘）を対象とし、破片数を集計して提示する（表12）。その結果を基に種類別の組成を示した（第40図）。また、供膳具と調理・貯蔵具における種類別の比率構成（表13・14）、食膳具：調理・貯蔵具、調理具：貯蔵具の対比率も表にまとめる（表15・16）。さらに、珠洲と八尾での器種別の組成（第41図）、中国製陶磁器と瀬戸美濃の一覧表（表17）についても作成した。

分布図は２×２ｍのグリッド毎に、各種類により●△などのシンボルを用い、数量に応じてシンボルの大きさを変えて示している（第43～65図）。

Ｂ土器組成と分布

Ｃ地区では遺構変遷の際に確認したように、中世全般の遺物が出土している。そのため、長期間・広範囲に渡る活動の累積であることは注意されるべきであろう。しかし、先に示した地区別の遺物消長表（表10）から、主体となる時期を推測できる地区もあり、そうした事例は該当する時期の土器組成を比較・検討していく上で扱えると考えられる。ここでは最初にＣ地区全体の様相を概観し、その後に各地区の様相を示していきたい。

〈Ｃ地区全体〉

種類別：全破片数は9006点を数える。種類別では多い順に、中世土師器6261点（69.6％）、珠洲1928点（21.4％）、八尾305点（3.4％）、中国製陶磁器196点（2.2％）、瀬戸美濃173点（1.9％）、土製品109点（1.2％）、瓦質土器30点（0.3％）、越前４点（0.1％未満）となる。

珠洲は1928点の内、甕が911点、擂鉢745点、壺260点、不明12点となる。八尾の305点は、甕279点、擂鉢18点、壺８点で構成される。

中国は196点の内、148点を龍泉窯系青磁が占めている。主体となる龍泉窯系青磁を分類別で示すと、大宰府Ⅰ類が18点、Ⅱ類が46点、Ⅲ類が18点、Ⅳ類およびⅣ類以降が36点となり、上田分類Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ－Ⅱ類以降が30点を数える。このことから大宰府Ⅱ類と、大宰府Ⅳ類以降あるいは上田分類に該当するものが多い。白磁は大宰府Ⅸ類と森田分類Ｅ群がやや多い傾向がある。

瀬戸美濃の173点を時期別に示すと、前期が３点、中期が35点、後期が100点、大窯段階が32点、登窯段階が２点、不明が１点となる。後期が主体となり、中期と大窯段階の所産が続く。

土製品は羽口が93点を占め、その内の73点がＣ５地区の出土である。

供膳具：種類別に見ると、中世土師器が95.5％、中国（椀・皿・杯類）が2.7％、瀬戸美濃（椀・皿・杯類）が1.8％で構成される。中世土師器がほとんどを占める。

調理・貯蔵具：86.3％が珠洲、13.7％が八尾で構成される。調理具：貯蔵具＝34：66の比率となる。

分布：ここでは地区毎の出土点数と出土率を比較しておく。出土点数では、C７地区が3930点と最も多く、C地区全体の約44％を占める。C５地区で1375点、C２・３・４地区で1275点と続き、最少はC22地区の19点である。全体的な傾向としてC地区西側のC２～５、７地区に多くある。

出土点数を調査区面積で割った出土率を示す（第42図）。C７地区が1.9点/㎡、C５地区が1.15点/㎡となり、他の地区が概ね0.4点/㎡以下となるのに比べて、高い値となる。また、C６、９、20地区は出土点数の割にはやや高い出土率を示し、逆にC２・３・４地区では出土点数の割に出土率は低い傾向が窺える。

出土率を加味すれば、C地区全体の西側に遺物の出土が多いものの、その中でもC５、７地区が極めて濃密な出土のあり方を示し、C２・３・４地区ではやや疎らな傾向が窺える。C５、７地区での特異なあり方は、検出された密集する土坑群とそれを区画する溝から遺物が多く出土することに起因する。このことは、後述する遺物分布で確認することが出来る。また、出土の少ない東側でも、C20地区ではやや集中した出土のあり方を呈することが分かる。

特徴：①土器・陶磁器の約７割が中世土師器で占められる。その内、およそ半数がC７地区に集中する。②組成に占める中国製陶磁器と瀬戸美濃の比率は、ほぼ等しい。③八尾に調理具（擂鉢）は少なく、ほぼ貯蔵具（甕・壺）で占められる。④供膳具と調理・貯蔵具の比率は、75：25となる。

〈C１地区〉

種類別：中世土師器91点（79.8％）、珠洲８点（7.0％）、八尾１点（0.9％）、瀬戸美濃２点（1.8％）、中国製陶磁器11点（9.6％）、土製品１点（0.9％）となる。

遺物は少なく、遺構も皆無に等しい。中国の比率が高い点が特徴的であるため、組成のみを記載した。その要因は判然としないが、隣接するC２・３・４地区から流入した可能性が考えられる。中国は龍泉窯系青磁が10点で、その内の４点を大宰府Ⅱ類が占める。供膳具：調理・貯蔵具＝93：７となり、供膳具の比率が高い。

〈C２・３・４地区〉

種類別：中世土師器925点（72.5％）、珠洲279点（21.9％）、八尾29点（2.3％）、瀬戸美濃９点（0.7％）、中国製陶磁器31点（2.4％）、土製品２点（0.2％）となる。

瀬戸美濃は後期が５点と多く、前期・中期が各２点ある。中国は龍泉窯系青磁が29点を占める。大宰府Ⅱ－b類が11点と多く、他にⅠ類が３点、Ⅱ－a類が２点、Ⅲ類が４点、Ⅳ類もしくはそれ以降が９点を数える。

供膳具：中世土師器96.3％、瀬戸美濃0.7％、中国3.0％で構成され、中世土師器が卓越する。

調理具・貯蔵具：90.4％が珠洲となる。調理具：貯蔵具＝45：55となり、貯蔵具が比較的多い。

分布：調査区の東側にある自然流路内で、中世土師器と珠洲の分布が多い。また、中世土師器はC２地区北側のⅢ・Ⅳ期における方形区画内に分布が目立つが、他の範囲や建物周辺には少ない。珠洲、八尾、中国製磁器は建物群の周辺それぞれに分布が認められ、中世土師器とはやや異なるあり方を呈する。珠洲、八尾の接合関係では建物群周辺で完結するものの他に、C２・３地区中央から西側への広がりが認められる。瀬戸美濃は遺構分布の少ないC４地区北西にやや多い。

特徴：①施釉陶磁器や珠洲からは、概ね13世紀代から14世紀前半頃を主体とするが、中世土師器など

には15世紀代に比定されるものも含まれ、やや時期幅を有する土器組成を示すと言えよう。②中世土師器の比率は高めであるが、方形区画と自然流路内に多い。③珠洲は建物群周辺に分布する傾向があるが、方形区画内での出土は少ない。④供膳具：調理・貯蔵具＝76：24となる。

〈C５地区〉

種類別：中世土師器1167点（81.6％）、珠洲133点（9.3％）、八尾２点（0.1％）、瀬戸美濃26点（1.8％）、中国製陶磁器21点（1.5％）、瓦質土器３点（0.2％）、土製品78点（5.5％）となる。

瀬戸美濃は後期の16点、大窯段階の８点で多くを占め、中期は２点に止まる。中国は龍泉窯系青磁が13点あり、その内10点が大宰府Ⅳ類あるいはそれ以降となる。Ⅱ類は確認されず、Ⅰ類が２点、Ⅲ類が１点ある。また、黒釉天目茶碗が５点で、C地区出土の過半を占める。土製品の内、77点は羽口で、この点数はC地区出土の羽口総点数では約８割を占める。

供膳具：中世土師器96.4％、瀬戸美濃1.9％、中国1.7％で構成され、中世土師器が卓越する。

調理具・貯蔵具：珠洲が98.5％を占める。八尾はごくわずかであるが、完形の甕が１点出土している。調理具：貯蔵具＝38：62となる。

分布：調査区南東に密集した土坑群があり、その周辺を溝が区画している。各遺物もこれらの範囲内に多く分布する傾向がある。特に中世土師器では顕著に現われている。八尾については出土量がわずかで、傾向は窺えない。羽口と鉄滓は調査区中央と調査区南東側にまとまりがあり、同様の分布傾向を示す。接合関係は遺物が多い範囲の中で完結し、あまり広がりを持たない傾向にある。

特徴：①中世土師器の出土多く、特に密集する土坑群周辺での出土が目立つ。②施釉陶磁器では15世紀代以降が多く、時期を比定しうる中世土師器でも同様の傾向がある。概して15～16世紀代の土器組成を示すものと考えられるが、当該期の建物は無く、集落でのそれを示すものではない。一部の遺構は墓壙である可能性があるが、鉄滓・羽口の出土など他の要素も含んでおり、性格は判然とし難い。③供膳具：調理・貯蔵具＝90：10の比率で、供膳具の比率が極めて高い。

〈C６地区〉

種類別：中世土師器131点（44.2％）、珠洲154点（51.9％）、八尾１点（0.3％）、瀬戸美濃１点（0.3％）、中国製陶磁器６点（2.0％）、土製品４点（1.3％）となる。

中世土師器の割合が、比較的少なく、珠洲の比率が高い。瀬戸美濃は後期が１点のみある。中国では龍泉窯系青磁が５点、白磁が１点あり、前者は大宰府Ⅳ類もしくはそれ以降が主体となる。また、龍泉窯系青磁に含まれる盤１点は、いわゆる太鼓胴状を呈する器形で、Ⅲ類もしくはそれ以降となる。

供膳具：中世土師器94.9％、瀬戸美濃0.7％、中国4.3％で構成され、中世土師器が卓越する。

調理具・貯蔵具：珠洲が99.4％とほとんどを占める。調理具：貯蔵具＝31：69となる。

分布：いずれの遺物も調査区北東の建物群と、南東の土坑群の周辺に分布する傾向がある。接合関係では建物周辺では狭い範囲で完結するが、土坑群では広範囲に接合線が延びる。

特徴：①珠洲の比率が高く、規模の大きい建物群周辺の分布が目立つ。②施釉陶磁器は14世紀以降が主体となるが、珠洲は$Ⅰ_2$期やⅡ期も確認され、全体としては13～14世紀代の組成を概ね示すと考えられる。③供膳具：調理・貯蔵具＝47：53で、ほぼ同数となる。

〈C７地区〉

種類別：中世土師器3164点（80.6％）、珠洲567点（14.4％）、八尾37点（0.9％）、越前４点（0.1％）、瀬戸美濃81点（2.1％）、中国製陶磁器45点（1.1％）、瓦質土器25点（0.6％）、土製品６点（0.2％）となる。

中世土師器の比率が高い。地区内での瀬戸美濃や中国の割合は少ない。しかし、C地区全体で出土した瀬戸美濃の約47%、中国の約23%がC7地区からの出土となる。また、越前として集計した点数は、越前の擂鉢を模倣した土師質の土器である。瀬戸美濃は前期が2点、中期が23点、後期が47点、大窯段階9点からなる。後期から大窯段階の碗類が25点と多い。しかし、皿類が20点、壺類が17点と一定量ある。また、壺類は中期のものがほとんどで、他の器種よりも時期が古い傾向にある。その他の器種には花瓶が10点、香炉5点、盤類2点、水注2点があり、水注が中期となる以外は後期に相当する。中国は龍泉窯系青磁が29点と多い。大宰府Ⅰ類は2点、Ⅱ類は9点、Ⅲ類は2点で、残る16点はⅣ類もしくはそれ以降となる。白磁では森田分類E群が3点とやや多い。また、黒釉天目茶碗も4点あり、先に見たC5地区と当地区のみで確認される。

供膳具：中世土師器97.3%、瀬戸美濃1.4%、中国1.3%で構成され、中世土師器が卓越する。この比率はC5地区とほぼ同様の値となる。

調理具・貯蔵具：99.4%を珠洲が占める。また、珠洲において壺が占める割合が約22%と高い。調理具：貯蔵具＝29：71となる。

分布：調査区内は溝で区画され、南東と南西の区画内に土坑群が形成されている。中世土師器は南西の土坑群と調査区西端の区画溝の範囲に多くが分布する。珠洲も中世土師器と同様な傾向を示すが、特に区画溝部分に多くが集まる。また、珠洲では壺の比率が高いことがC7地区の特徴でもあるが、分布では明瞭な集中は認められない。瓦質土器は調査区西側の区画溝付近の分布が目立ち、その他には広がらず限定的である。その他の八尾、瀬戸美濃、中国は調査区北側に分布が少ない傾向はあるものの、散在して分布する。接合関係は調査区西側の区画溝周辺で完結するものと、そこから土坑群にのびるものに分れる。後者においては、調査区南側の土坑群へと東西に延びる接合線が多い。

特徴：①施釉陶磁器では瀬戸美濃では後期が多いが、中期も一定量出土する。龍泉窯系青磁でも大宰府Ⅳ類もしくはそれ以降が主体となるが、Ⅱ－b類も少なからず出土している。ただし、中世土師器の様相は15世紀以降の傾向が強く、全体としては概ね15～16世紀代の組成を示すと考えられる。②瀬戸美濃・瓦質土器に花瓶・香炉が認められ、青銅製燭台の出土もある。また、土坑群には墓壙の可能性を含むものもあり、宗教的な施設に関連する可能性がある。珠洲では底部穿孔の壺R種があり、$Ⅳ_2$期の製品で蔵骨器の可能性もあるが、内部に骨片は認められなかった。仮に蔵骨器として容器類が利用されていたと考えると、C7地区において珠洲壺類の出土が多い点は注目される。③供膳具：調理・貯蔵具＝84：16で、供膳具の比率が高い。

〈C8地区〉

種類別：中世土師器72点（37.5%）、珠洲92点（47.9%）、八尾9点（4.7%）、瀬戸美濃8点（4.2%）、中国製陶磁器7点（3.6%）、瓦質土器1点（0.5%）、土製品3点（1.6%）となる。

中世土師器の割合が少ない。瀬戸美濃は後期2点に対し、大窯段階が6点と多い。中国では龍泉窯系青磁が5点と多く、その内4点は大宰府Ⅳ期もしくはそれ以降となる。また、青白磁の皿は墓壙に埋納されたもので、11世紀後半～12世紀代の所産と見られる。

供膳具：中世土師器84.7%、瀬戸美濃8.2%、中国7.1%で、瀬戸美濃・中国の割合が比較的高い。

調理具・貯蔵具：91%を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝36：64となる。

分布：溝による区画内に分布する傾向が窺える。また、珠洲は調査区西側の大型土坑内からの出土が多く、また調査区北東の遺構が少ない範囲での分布も目立つ。全体的に遺物の出土量は少なく、明瞭な分布傾向は捉えにくい。

特徴：①当地区では近世以降の遺構が主体であり、中世段階の遺構はほとんど確認し得ない。施釉陶磁器からも15～16世紀に主体があり、土器組成もそうした時期を示すと思われるが、遺構は明確でない。②供膳具：調理・貯蔵具＝46：54で、ほぼ同数となる。

〈C９地区〉

種類別：中世土師器73点（29.6％）、珠洲134点（54.3％）、八尾23点（9.3％）、瀬戸美濃９点（3.6％）、中国製陶磁器６点（2.4％）、土製品２点（0.8％）となる。

中世土師器の比率が低く、珠洲や八尾の比率が高めである。瀬戸美濃は中期４点、後期５点となる。中期には瓶子・水注・折縁深皿・天目茶碗、後期では卸目付大皿・水滴・花瓶・平椀・天目茶碗の器種からなり、特的器種には集中しない。中国は白磁が４点、龍泉窯系青磁が２点となり、他の地区に比べて白磁が多い傾向があるが、出土点数自体が少なく、明瞭な特徴とできるかは判然としない。白磁は大宰府Ⅲ－２類、Ⅳ類、Ⅸ類などがある。

供膳具：中世土師器86.9％、瀬戸美濃6.0％、中国7.1％となり、瀬戸美濃の比率が比較的高い。

調理具・貯蔵具：珠洲が85.4％、八尾は14.6％となり、八尾の比率がやや高い。調理具：貯蔵具＝29：71となる。

分布：調査区西端では珠洲を中心として、遺物の分布が多く、接合関係もその周辺で完結する。他は調査区南部の建物群周辺を中心に散在するが少ない。ただし、中世土師器は調査区北東部にも分布が広がり、やや径の大きい円形土坑の分布と重なる。

特徴：①施釉陶磁器では13～14世紀代が主体であり、時期の比定できる珠洲も同様の傾向があり、当該期の土器組成を示すと考えられる。②中世土師器の比率が低く、珠洲・八尾の出土が目立つが、その分布は建物群より後出する溝周辺に多い。隣接するＣ７地区からの影響と思われる。③供膳具：調理・貯蔵具＝35：65で、調理・貯蔵具が多くなり、その主体は貯蔵具である。

〈C10地区〉

種類別：中世土師器47点（41.6％）、珠洲48点（42.5％）、八尾５点（4.4％）、瀬戸美濃１点（0.9％）、中国製陶磁器10点（8.8％）、瓦質土器１点（0.9％）、土製品１点（0.9％）となる。

瀬戸美濃は後期の灰釉平椀が１点のみある。中国の比率は高めで、龍泉窯系青磁が８点、白磁２点で構成される。青磁では大宰府Ⅰ類が３点とやや多い。他はⅡ－b類２点、Ⅲ類１点、Ⅳ類もしくはそれ以降が２点となる。白磁は大宰府Ⅲ類、Ⅸ－１類が各１点認められる。

供膳具：中世土師器81.1％、瀬戸美濃1.7％、中国17.2％となる。中国の比率が高い。

調理具・貯蔵具：90.6％を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝28：72となる。

分布：調査区内では、北・中央・南に掘立柱建物が確認されている。南側の建物周辺は遺物分布が少ない。他の建物についても、建物の範囲外にややまとまりがあるものの、総じて遺物分布は少なく、顕著な傾向は見いだせない。

特徴：①施釉陶磁器では13世紀代が主体であり、時期の比定できる珠洲も踏まえ、土器組成もその時期の様相を示すと考えられる。②供膳具：調理・貯蔵具＝52：48で、ほぼ同数となる。

〈C11地区〉

種類別：中世土師器38点（67.8％）、珠洲14点（25.0％）、八尾１点（1.8％）、瀬戸美濃３点（5.4％）となる。瀬戸美濃はいずれも後期に相当し、卸皿・花瓶・瓶子が認められる。

供膳具：中世土師器97.4％、瀬戸美濃2.6％で構成される。

調理具・貯蔵具：92.9％を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝43：57となり、貯蔵具の割合が高い。

分布：掘立柱建物の無い、調査区中央付近に分布する傾向がある。しかし、調査区は狭小で、遺物の出土量も少なく、明瞭な分布傾向とは言い難い。

特徴：①施釉陶磁器や珠洲から13～15世紀代と、やや時期幅のある土器組成を示すと考えられる。また、出土量も少なく、組成比率や分布の傾向を示すのにはやや不適であろう。②供膳具：調理・貯蔵具＝74：26で、C 地区全体の平均に近い。

〈C13・15地区〉

種類別：中世土師器155点（69.6％）、珠洲48点（21.5％）、八尾３点（1.3％）、瀬戸美濃８点（3.6％）、中国製陶磁器８点（3.6％）、土製品１点（0.4％）となる。

瀬戸美濃は前期１点、中期１点、後期３点、大窯段階３点がある。器種に明瞭な片寄りは見受けられない。中国は龍泉窯系青磁が６点、白磁と青白磁が各１点ある。青磁は大宰府Ⅳ類もしくはそれ以降が３点、Ⅰ－２類とⅡ－b 類が各１点で構成される。

供膳具：中世土師器93.4％、瀬戸美濃3.0％、中国3.6％で構成される。

調理具・貯蔵具：94.0％を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝40：60となり、貯蔵具の比率が高い。

分布：調査区の東側に掘立柱建物が散在しており、遺物の分布も概ねその範囲にある。C15地区北東は遺構が少ない範囲だが、遺物が散在しつつも分布する。その中には、組成で比率がやや高くなった珠洲擂鉢も含まれる。

特徴：①施釉陶磁器では13～15世紀の時期幅があり、時期の比定できる珠洲ではⅤ期が多くある。そのため、時期幅を持ちつつ、14～15世紀代に主体を持つ土器組成と考えられる。②調理具の比率が高いが、分布に明瞭な特徴はない。③供膳具：調理・貯蔵具＝77：23で、全体の平均に近い。

〈C14・23地区〉

種類別：中世土師器119点（57.2％）、珠洲66点（31.7％）、八尾11点（5.3％）、瀬戸美濃６点（2.9％）、中国製陶磁器５点（2.4％）、土製品１点（0.5％）となる。

瀬戸美濃は後期３点、大窯段階１点の他、登窯期の所産が２点も含めている。後期には皿類の他、筒型容器も認められる。中国は龍泉窯系青磁３点、白磁２点からなる。青磁はいずれも大宰府Ⅳ類以降で、白磁で時期が明確なのは森田分類 D 群が１点ある。

供膳具：中世土師器91.6％、瀬戸美濃4.6％、中国3.8％で構成される。

調理具・貯蔵具：珠洲が85.7％、八尾が14.3％で構成され、八尾の比率が比較的高めである。調理具：貯蔵具＝33：67となる。

分布：調査区内では北東と南西に掘立柱建物が確認されている。遺物分布の全体的な傾向は調査区の東側で少ない。中世土師器は調査区南西に多くがある。その他は、調査区東側を除いた範囲に散在する。組成では八尾の比率がやや高いが、分布では明瞭な傾向は認められない。

特徴：①施釉陶磁器では15世紀代が主体となるが、時期の比定できる珠洲や中世土師器を含めると、14～16世紀代の時期幅を有する。当地区では近世以降の遺構・遺物が多く、中世段階の遺構や包含層も大きく攪乱されている部分もある。そのため、中世の遺構・遺物の様相は不明瞭な点も多い。②供膳具：調理・貯蔵具＝63：37で、平均より供膳具がやや少ない。

〈C16地区〉

種類別：中世土師器87点（42.4％）、珠洲85点（41.5％）、八尾13点（6.3％）、瀬戸美濃２点（1.0％）、中国製陶磁器17点（8.3％）、土製品１点（0.5％）となる。中国製陶磁器の比率が高い。

瀬戸美濃はいずれも後期のものである。中国は龍泉窯系青磁が14点とほとんどを占める。他に同安

窯系青磁、白磁、染付けが各１点ある。龍泉窯系青磁は大宰府Ⅳ類もしくはそれ以降が８点と主体となり、残りはⅠ類が２点、Ⅱ類が３点、Ⅲ類が１点となる。同安窯系青磁は皿でⅠ－２b類、白磁は碗でⅧ－１類であるが、染付けは小野分類B群と時期が下る。

供膳具：中世土師器82.8％、瀬戸美濃1.0％、中国16.2％で構成される。

調理具・貯蔵具：86.7％が珠洲、13.3％が八尾で構成され、八尾の比率が比較的高めである。調理具：貯蔵具＝30：70となる。

分布：調査区の南東端と西端に掘立柱建物が位置しているが、その周辺での遺物分布は少ない。遺物は全体的に散在する傾向があるが、調査区中央を南北に貫く浅い自然流路の範囲に比較的集まる。特に珠洲・八尾は流路内の北端にまとまりがある。

特徴：①施釉陶磁器では14～15世紀代が主体となり、時期の比定できる珠洲でも同様の傾向がある。しかし、それ以前の所産の遺物も一定量あり、組成にはやや時期幅があると言える。②供膳具：調理・貯蔵具＝52：48で、ほぼ同数となる。

〈C18地区〉

種類別：中世土師器46点（41.5％）、珠洲51点（45.9％）、八尾６点（5.4％）、瀬戸美濃６点（5.4％）、中国製陶磁器１点（0.9％）、土製品１点（0.9％）となる。

　瀬戸美濃の比率がやや高く、後期が４点、大窯段階と時期不明が各１点ある。後期では卸皿が３点とやや多い。中国は龍泉窯系青磁椀が１点あり、大宰府Ⅲ－２c類となる。

供膳具：中世土師器88.5％、瀬戸美濃9.6％、中国1.9％で構成される。

調理具・貯蔵具：89.5％が珠洲、10.5％が八尾で構成され、八尾の比率がやや高めとなる。調理具：貯蔵具＝42：58となり、貯蔵具の割合が高い。

分布：調査区南部中央に掘立柱建物が位置している。遺物の分布は建物範囲にはほとんど無く、その周囲に散在している。八尾・瀬戸美濃・中国は調査区の西半のみに分布する。

特徴：①施釉陶磁器などからは13～16世紀代の期間があり、かなり時期幅のある土器組成を示すと考えられる。②建物付近には遺物の分布が少なく、建物範囲を除く周辺での出土が多い。③供膳具：調理・貯蔵具＝48：52で、ほぼ同数となる。

〈C19地区〉

種類別：中世土師器33点（52.5％）、珠洲17点（27.0％）、八尾４点（6.3％）、瀬戸美濃４点（6.3％）、中国製陶磁器４点（6.3％）、土製品１点（1.6％）となる。

　瀬戸美濃の比率はやや高く、中期１点、後期３点からなるが、いずれも未実測の小破片である。中国は龍泉窯系青磁椀のみで、大宰府ⅠもしくはⅣ類以降が１点、Ⅱ－b類が２点、Ⅲ類が１点となる。

供膳具：中世土師器86.9％、瀬戸美濃2.6％、中国10.5％で構成される。

調理具・貯蔵具：これらは81％が珠洲、19％が八尾で構成され、八尾の比率が比較的高い。調理具：貯蔵具＝48：52となり、ほぼ同程度の割合を示す。

分布：調査区中央部の東側に掘立柱建物が位置している。遺物の分布は、建物範囲を避けつつ、調査区北側に広がる。但し、瀬戸美濃・中国では、他の遺物が少ない調査区南西側に散在する。

特徴：①施釉陶磁器と時期の比定できる珠洲からは、14～15世紀代に主体を持つ土器組成であると考えられる。②八尾の比率が高く、全体的に調理具の比率が高い。しかし、分布からは建物との関連などの特徴は看取できず、その成因は明らかでない。③供膳具：調理・貯蔵具＝64：36となる。

〈C20地区〉

種類別：中世土師器98点（20.0％）、珠洲199点（40.8％）、八尾156点（31.9％）、瀬戸美濃４点（0.8％）、中国製陶磁器25点（5.1％）、土製品７点（1.4％）となる。

中世土師器が少なく、八尾の比率がかなり高い。瀬戸美濃は中期１点、後期１点、大窯段階２点からなる。いずれもⅢ類となる。中国は龍泉窯系青磁20点、青白磁１点、白磁４点となる。青磁は19点が椀で、大宰府Ⅰ類あるいはその可能性があるものが３点、Ⅱ－b 類が９点、Ⅲ類もしくはその可能性があるものが６点、Ⅳ類以降が２点で構成される。Ⅰ類やⅢ類と見られるものが他の地区よりも目立つ。

供膳具：中世土師器77.8％、瀬戸美濃3.2％、中国19.0％で構成され、中国の比率が高い。

調理具・貯蔵具：56.1％が珠洲、43.9％が八尾となり、八尾の比率がＣ地区の中で最も高い。また、珠洲の61.8％は擂鉢、八尾の96.8％は甕が占める。甕・壺の破片数を珠洲と八尾で比較すると、珠洲：八尾＝１：２となる。調理具は珠洲、貯蔵具は八尾が主体となる。調理具：貯蔵具＝36：64となり、この比率はＣ地区の平均値に近い。

分布：調査区西端と南西側に掘立柱建物が位置し、それらの範囲を避けつつ遺物は分布する。珠洲と八尾の分布は概ね共通し、建物に隣接する大型土坑付近に集まる傾向がある。但し、珠洲には調査区南西の建物範囲内にまとまりがある。接合関係では珠洲が建物群北側の土坑群周辺で完結するものが多いのに対し、八尾ではその範囲より北側に接合で東西方向に延びる接合線が目立つ。中国は調査区の南側と北側に分れて分布する。瀬戸美濃の出土量は少ないが、中国と同様な分布傾向を示す。

特徴：①施釉陶磁器では13世紀代が主体となり、時期の比定できる珠洲も含めその時期を主体とする土器組成を示すものと考えられる。②供膳具：調理・貯蔵具＝26：74で、調理・貯蔵具が多い。③八尾は貯蔵具、珠洲は調理具で主体となり、種類により用途が分れる。

〈C21地区〉

種類別：中世土師器12点（34.3％）、珠洲20点（57.1％）、八尾３点（8.6％）となる。

供膳具：中世土師器100％で構成される。

調理具・貯蔵具：86.4％を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝32：68となる。

分布：組成では珠洲の比率が高いことが特徴となるが、分布では明確な傾向は認められない。

特徴：①珠洲や中世土師器から15世紀代を主体とする組成と考えられる。しかし、遺構・遺物ともに少なく、居住域外でのあり方を示すと思われる。②建物が無く、遺構も少ない状況で、貯蔵具を主体とする珠洲の出土が一定量ある。③供膳具：調理・貯蔵具＝35：65で、調理・貯蔵具が多い。

〈C22地区〉

種類別：中世土師器３点（15.8％）、珠洲13点（68.4％）、八尾１点（5.3％）、瀬戸美濃２点（10.5％）となる。瀬戸美濃は中期１点、後期１点からなる。

供膳具：中世土師器75.0％、瀬戸美濃25.0％で構成される。

調理具・貯蔵具：92.3％を珠洲が占める。調理具：貯蔵具＝30：70となる。

分布：調査区北東の建物周辺に遺物の分布はほとんど無く、調査区の南側に散在する。

特徴：①施釉陶磁器から14～15世紀代の組成を示すと考えられる。②供膳具：調理・貯蔵具＝24：76で、調理・貯蔵具が多い。

Ｃまとめ

以上の様に、Ｃ地区全体および各地区での土器組成・分布について見てきた。全体の様相は、施釉陶磁器や珠洲などから、かなり長期間の累積の結果であると考えられる。また、遺構変遷で示したよ

うに、地区や時期によって建物群の有無や地区の性格などに違いがある。こうした様々な要素が混在しているため、組成や分布などの傾向を端的に示すことは難しい。ここでは、施釉陶磁器などの土器様相や遺構変遷の結果も踏まえ、主体となる時期を区分して整理しておきたい。さらに、特徴的な種類・器種、分布・接合状況についても示し、まとめとしておきたい。

13～14世紀代ではＣ６、10、20地区が挙げられる。Ｃ２・３・４、９地区も当該期に主体を持つが、Ｃ２・３・４では15世紀代以降の要素が多く含まれ、Ｃ９地区では珠洲・八尾・施釉陶磁器にＣ７地区からの影響が窺える。このため、ここではＣ６、10、20地区の土器組成を当該期の事例として扱っておく。

種類別の構成からは大きく二つに大別される。一つはＣ６、10地区のように中世土師器と珠洲が約４～５割と拮抗しつつ構成の主体となる。これにより供膳具：調理・貯蔵具はおおむね50：50の比率を示す。しかし、C10地区では八尾や中国製陶磁器の比率がやや高く、相違点もある。もう一つは、C20地区のように中世土師器の比率が低く、珠洲と八尾が高くなる。その結果、供膳具：調理・貯蔵具＝26：74となり、調理・貯蔵具が高い割合と示す。また、中国を供膳具内での構成比で見ると、C10地区で17.2％、C20地区で19％と高い比率となり、Ｃ６地区では4.3％に止まる。逆に瀬戸美濃は種類別・供膳具内それぞれの構成比において低い。これは瀬戸美濃が後期以降に相当するものがほとんどで、各地区の主体の時期とずれるからであろう。

15～16世紀代が主体となるのはＣ５、７、８地区が挙げられるが、いずれも当該期の建物は確認されず、居住域外での様相を示している。この他に、C13・15、14・23、16地区も当該期が主体となり、少数ながら建物も確認される。ここでは、中世土師器の比率が高いＣ５、７と、それ以外の地区に大別してまとめておきたい。

Ｃ５、７地区では中世土師器が約８割と、極めて高い割合を占める。両地区出土の中世土師器を合わせると、Ｃ地区全体での出土点数の約７割を占めている。このため、供膳具と調理・貯蔵具では、両地区の平均で87：13と供膳具の比率が高くなる。ただし、Ｃ７地区では瀬戸美濃の器種構成が豊富で、珠洲壺の比率が高いなどの相違点もある。当該期のＣ５、７地区は密集する土坑群が形成される段階で、それらに墓壙が含まれる可能性があることは既に指摘した通りである。中世土師器の出土分布も土坑群に重なることから、それらの供献を伴う土坑が多数作られたことが出土点数や構成比率に反映したものと考えられる。しかし、Ｃ７地区では銅銭の埋納は無く、瀬戸美濃・瓦質土器の花瓶・香炉や珠洲壺類の出土が目立つ。Ｃ７地区出土の珠洲壺Ｒ種に蔵骨器の可能性がある個体が含まれることから、仮に蔵骨器として珠洲壺類が利用されていたとなると、両地区では葬送形態に相違点があったとすることもできよう。いずれにしても、Ｃ５、Ｃ７地区での土器組成は、日常的な生活空間でのそれを示すものではないであろう。

Ｃ８、13・15、14・23、16地区では中世土師器と珠洲が対比を変えつつ種別構成の主体となっている。そうした比率の変動する要因は明確でないが、Ｃ５、７地区との違いは歴然としている。各地区における当該期の建物数は少なく、建物群の範囲も限定的である。そのため、居住域外の要素も含まれていると考えられ、種別組成が変動する原因の一つかもしれない。供膳具と調理・貯蔵具の比率は、C13・15地区で77：23となり供膳具が多く、他の地区はおおむね50：50と同程度となる。また、Ｃ８、C13・15、C14・23では瀬戸美濃大窯段階の製品、C16地区では中国の大宰府Ⅳ類以降の製品を主として比率が高くなる。

種類別、分布状況、接合関係などで、いくつか気づいた点を示しておきたい。

龍泉窯系青磁では、大宰府Ⅱ－b類が主体となるが、Ⅳ類以降も一定量が認められた。また、C10地区ではⅠ類がⅡ－b類よりもわずかに多い。B地区報告時の土器組成からは、建物群によりⅠ類の保有状況に違いがあることが指摘されている（森2007）。C10地区は同時期の他の地区よりも中国製陶磁器の比率が高く、他の建物群との関係を考える上で注目される。

瀬戸美濃は後期に相当するものが多く、椀・皿類を主体となす。その多くはC５、C７地区に集中している。また、C７地区では瀬戸美濃に加え、瓦質土器でも花瓶・香炉等が出土しており、他の地区よりも器種構成が豊富である。

出土分布では建物群との関連で、建物群周辺に分布するC２・３・４、20地区と、建物周辺に遺物がほとんど出土しないC10地区南側やC18地区がある。これらの地区はほぼ同時期に建物が存在していたと考えられるが、分布傾向は違いが認められる。建物群以外では、C５、７地区で土坑群や区画溝などの遺構と遺物の分布が明瞭に重なることが指摘できる。逆にC18、19地区では遺構と遺物の分布はあまり相関が見いだせない。

接合関係は遺物が比較的濃密に分布する範囲内で完結することが多いものの、C２・３・４地区では100m離れたグリッド間での接合があるなど、遺物の動きが大きい場合もある。こうした距離をもった接合関係は、大小の土坑群や溝の範囲を経由する傾向が窺える。おそらく、土坑・溝の掘削や埋没に際して、土砂と共に遺物の移動も生じているためであろう。そうした場合、遺物の出土位置は二次的に移動した場合も多分に含まれており、出土遺物から遺構の時期を比定する難しさを現している。

C20地区では珠洲と八尾の接合線は別々の範囲に広がる。珠洲は調理具が主体で、建物群近辺に分布・接合が多い。日常的な道具であるため、建物群との関連が強いのであろう。八尾は貯蔵具がほとんどで、建物群周辺の珠洲よりもさらに外側での分布・接合が認められる。建物に隣接し、倉庫的な機能が想定される大型土坑群やその北側での出土・接合であり、倉庫と貯蔵具との関連が窺われる。

供膳具と調理・貯蔵具の比率は、いくつかの類型に分れる。C５、C７地区では、90：10と供膳具の比率が高い。C２・３・４、C13・15、C14・23地区などでは、75：25～60：40と供膳具が主体となり、全体の平均値に近い。C６、C８、C10、C16、C18地区では50：50になり、供膳具と調理・貯蔵具がほぼ同程度となる。C20、C21、C22地区では、25：75と調理・貯蔵具の比率が高く、調査区域の東側に集まる。

以上のように、C地区における土器組成や分布を見てきた。地区数も多く、時期幅のある資料であり、雑駁なまとめになった。しかし、一部の地区においてはある程度時期を押さえた組成として示すことができた。また、瀬戸美濃や中国製陶磁器は全体の中では少量であるが、小破片も含めてそれらの時期・器種をできる限り比定することにより、地区における相違点を知ることが出来た。ここでは、C地区での様相を示すに止め、A・B地区や他の遺跡との比較検討については、第Ⅵ章にて後述することとする。

（青山　晃）

参考文献（第Ⅴ章）

青山　晃　2001　「古代北陸におけるカマドについて－富山県の造り付けカマドを中心として－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団

池野正男　2003　「越中における古代前半代の土師器食器について」『北陸の古代と土器』北陸古代土器研究代10号　北陸古代土器研究会

井上喜久男　1998　「畿外遺跡にみる三彩・緑釉陶器」『日本の三彩と緑釉』五島美術館

内田亜紀子　1997　「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』富山県文化振興財団

内田亜紀子　2000　「越中婦負郡の古代土師器煮炊具－婦中町中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の竪穴住居出土資料を中心に－」『富山考古学研究第３号』富山県文化振興財団

宇野隆夫　1988　「越中の国府・荘家・村落」『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集

岡本淳一郎　1991　「Ⅴ遺物　A 古代土器」『富山県富山市南中田 D 遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター

武田健次郎　2006　「特殊な胎土を持つ須恵器について－任海宮田遺跡 B 地区の出土傾向から－」『富山考古学研究第９号』富山県文化振興財団

武田健次朗　2007a　「２　墨書土器について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

武田健次郎　2007b　「４　製塩土器について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

武田健次郎　2007c　「６　大型掘立柱建物について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

田中道子・宇野隆夫1989　「第５章考察１須恵器の編年と画期」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室

富山県教育委員会1985　『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（３）南太閤山Ⅰ遺跡』

富山大学人文学部考古学研究室　1989　『越中上末窯』

中野由紀子　2001　「任海宮田遺跡の墨書土器について－B１地区出土資料の紹介－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団

中村亮仁　2006　「2.任海宮田遺跡 A 地区における古代の竪穴住居出土の土器組成について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』富山県文化振興財団

中村亮仁　2007　「１　任海宮田遺跡 B 地区出土の古代土器組成」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

堀沢祐一　2000　「第６章まとめ」『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書－主要地方道富山外郭環状線歩道新設工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』富山市教育委員会

堀沢祐一　2003　「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

三辻利一　2007　「Ⅲ任海宮田遺跡における墨書須恵器の産地同定」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

森　隆　2000　「任海遺跡群の古代建物群構成（３）－個別事象の検討－」『富山考古学研究第３号』富山県文化振興財団

森　隆　2003　「古代北陸の河川漁業に関する若干の考察」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

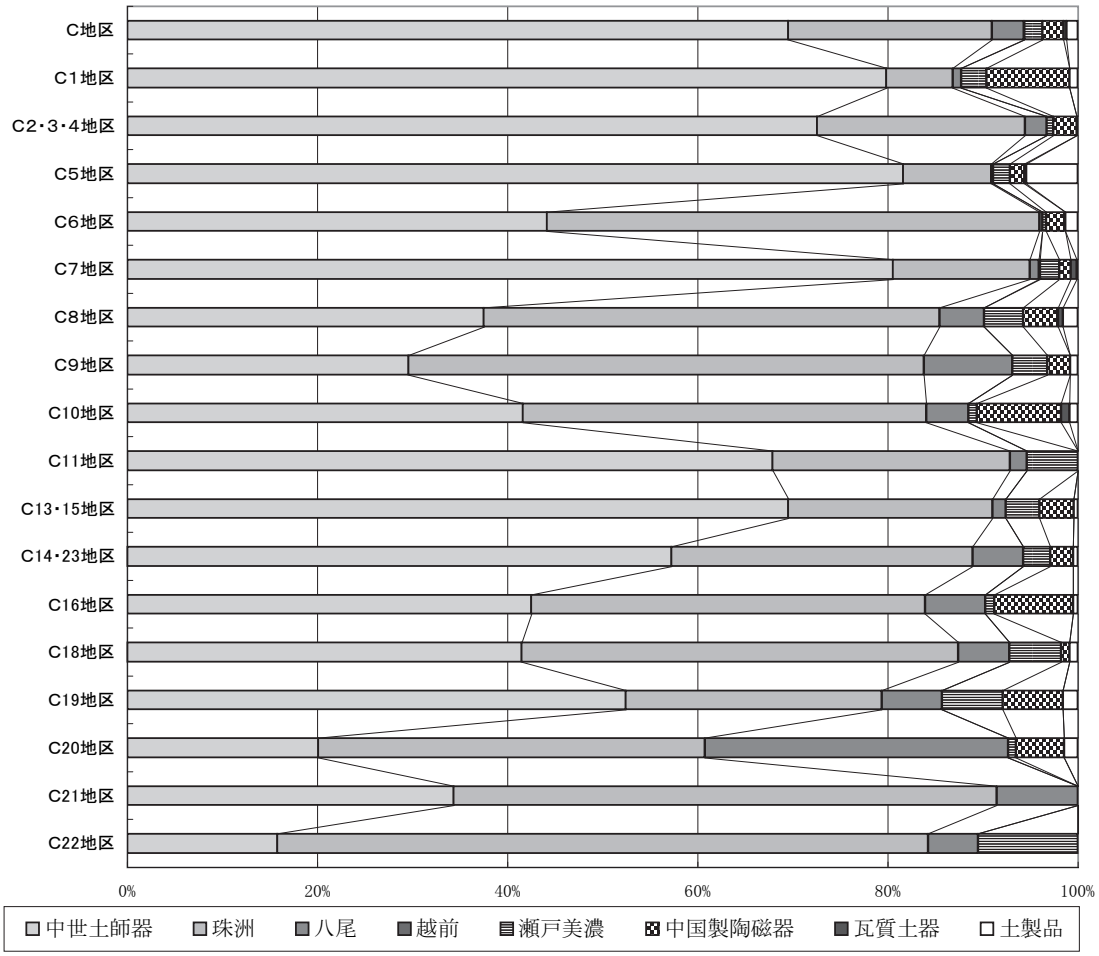
森　隆　2007　「８　中世の土器・陶磁器組成」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

表12　任海宮田遺跡Ｃ地区　中世出土遺物　破片数集計表（１）

	種類	中世土師器	珠洲				八尾				越前	瀬戸美濃				
地区	器種	皿	擂鉢	甕	壺	その他	擂鉢	甕	壺	その他		椀	皿	壺	杯	その他
C1	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	91	2	4	1	1	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0
	小計	91	2	4	1	1	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0
	合計	91	8				1				0	3				
C2･3･4	遺構	463	28	36	5	3	3	6	4	0	0	0	1	1	0	0
	包含層	462	104	73	27	3	2	14	0	0	0	2	4	0	0	1
	小計	925	132	109	32	6	5	20	4	0	0	2	5	1	0	1
	合計	925	279				29				0	9				
C5	遺構	674	18	23	3	0	0	1	0	0	0	12	3	0	0	2
	包含層	493	33	50	6	0	0	1	0	0	0	2	6	0	0	1
	小計	1167	51	73	9	0	0	2	0	0	0	14	9	0	0	3
	合計	1167	133				2				0	26				
C6	遺構	107	27	38	3	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
	包含層	24	21	49	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	131	48	87	19	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
	合計	131	154				1				0	1				
C7	遺構	1814	81	102	90	0	2	15	0	0	2	13	10	8	0	12
	包含層	1350	93	168	33	0	1	18	1	0	2	12	10	9	0	7
	小計	3164	174	270	123	0	3	33	1	0	4	25	20	17	0	19
	合計	3164	567				37				4	81				
C8	遺構	38	17	19	2	0	2	6	0	0	0	0	5	0	0	1
	包含層	34	17	36	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0
	小計	72	34	55	2	1	2	7	0	0	0	2	5	0	0	1
	合計	72	92				9				0	8				
C9	遺構	35	11	27	5	0	0	11	0	0	0	0	1	0	0	1
	包含層	38	33	53	5	0	1	11	0	0	0	3	1	1	0	2
	小計	73	44	80	10	0	1	22	0	0	0	3	2	1	0	3
	合計	73	134				23				0	9				
C10	遺構	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	包含層	47	15	22	8	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	47	15	25	8	0	0	5	0	0	0	1	0	0	0	0
	合計	47	48				5				0	1				
C11	遺構	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	36	6	5	2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2
	小計	38	6	5	2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2
	合計	38	14				1				0	3				
C13･15	遺構	8	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	147	19	18	7	1	0	3	0	0	0	1	4	1	0	2
	小計	155	20	20	7	1	0	3	0	0	0	1	4	1	0	2
	合計	155	48				3				0	8				
C14･23	遺構	38	10	9	1	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0
	包含層	81	15	30	1	0	0	9	0	0	0	2	2	0	1	0
	小計	119	25	39	2	0	0	11	0	0	0	2	3	0	1	0
	合計	119	66				11				0	6				
C16	遺構	13	6	18	4	0	0	5	0	0	0	0	0	0	1	1
	包含層	74	20	29	8	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	87	26	47	12	0	3	10	0	0	0	0	0	0	1	1
	合計	87	85				13				0	2				
C18	遺構	4	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	42	21	19	7	0	0	5	1	0	0	2	3	0	0	1
	小計	46	24	19	8	0	0	5	1	0	0	2	3	0	0	1
	合計	46	51				6				0	6				
C19	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	33	10	7	0	0	0	4	0	0	0	1	0	1	0	2
	小計	33	10	7	0	0	0	4	0	0	0	1	0	1	0	2
	合計	33	17				4				0	4				
C20	遺構	24	28	9	8	0	1	37	1	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	74	95	49	10	0	3	114	0	0	0	0	4	0	0	0
	小計	98	123	58	18	0	4	151	1	0	0	0	4	0	0	0
	合計	98	199				156				0	4				
C21	遺構	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	12	6	8	3	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	小計	12	7	9	3	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0
	合計	12	20				3				0	0				
C22	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	3	4	4	4	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0
	小計	3	4	4	4	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0
	合計	3	13				1				0	2				
合計		6261	745	911	260	12	18	279	8	0	4	56	58	22	2	35
		6261	1928				305				4	173				

表12　任海宮田遺跡Ｃ地区　中世出土遺物　破片数集計表（２）

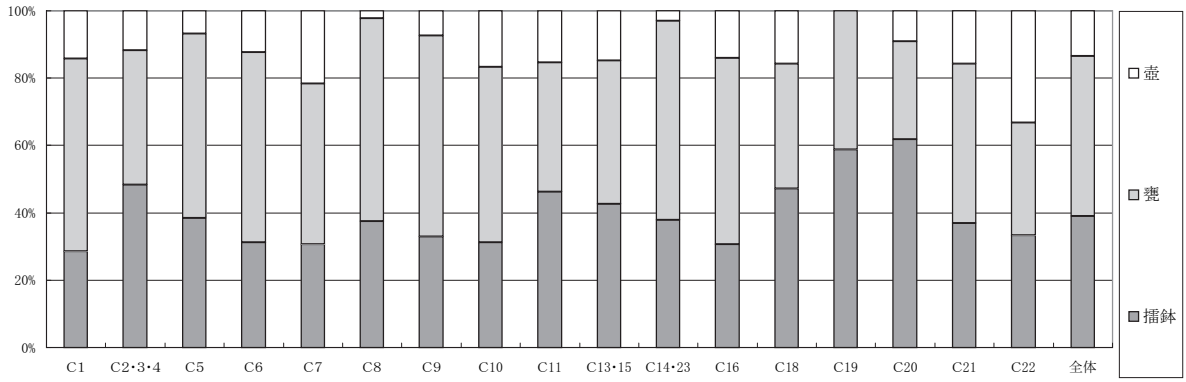
	種類	中国製陶磁器												瓦質土器		土製品		
		同安窯系青磁	龍泉窯系青磁				白磁				青白磁	染付	黒釉					
地区	器種	皿	椀	皿	杯	その他	椀	皿	壺	その他				火鉢	その他	土錘	羽口	その他
C1	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	7	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	小計	0	7	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	合計	9					1				0	0	0	0		1		
C2･3･4	遺構	0	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	包含層	0	17	2	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
	小計	0	24	2	2	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0
	合計	29					1				1	0	0	0		2		
C5	遺構	0	4	1	0	1	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	57	0
	包含層	0	4	2	0	1	0	0	0	0	0	1	3	0	1	0	20	1
	小計	0	8	3	0	2	1	1	0	0	0	1	5	1	2	0	77	1
	合計	13					2				0	1	5	3		78		
C6	遺構	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
	包含層	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	小計	0	4	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0
	合計	5					1				0	0	0	0		4		
C7	遺構	0	9	0	1	2	0	6	0	0	2	1	3	8	3	2	1	0
	包含層	0	15	0	0	2	0	1	1	0	0	1	1	8	6	1	2	0
	小計	0	24	0	1	4	0	7	1	0	2	2	4	16	9	3	3	0
	合計	29					8				2	2	4	25		6		
C8	遺構	0	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0
	包含層	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	小計	0	4	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0
	合計	5					1				1	0	0	1		3		
C9	遺構	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	小計	0	1	0	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	合計	2					4				0	0	0	0		2		
C10	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	包含層	0	7	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	小計	0	7	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0
	合計	8					2				0	0	0	1		1		
C11	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0					0				0	0	0	0		0		
C13･15	遺構	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	5	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	小計	0	5	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	合計	6					1				1	0	0	0		1		
C14･23	遺構	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	小計	0	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	合計	3					2				0	0	0	0		1		
C16	遺構	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	包含層	0	10	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	小計	1	12	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
	合計	15					1				0	1	0	0		1		
C18	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	小計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	合計	1					0				0	0	0	0		1		
C19	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	小計	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	合計	4					0				0	0	0	0		1		
C20	遺構	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0
	包含層	0	14	0	0	1	2	2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	小計	0	19	0	0	1	2	2	0	0	1	0	0	0	0	6	1	0
	合計	20					4				1	0	0	0		7		
C21	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0					0				0	0	0	0		0		
C22	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0					0				0	0	0	0		0		
合計		1	122	8	5	13	9	17	2	0	6	4	9	19	11	15	93	1
		149					28				6	4	9	30		109		



地区	中世土師器	珠洲	八尾	越前	瀬戸美濃	中国製陶磁器	瓦質土器	土製品	合計	
C 地区	6261	1928	305	4	173	196	30	109	9006	破片数
	69.6	21.4	3.4	0.0	1.9	2.2	0.3	1.2	100.0	%
C 1 地区	91	8	1	0	3	10	0	1	114	破片数
	79.8	7.0	0.9	0.0	2.6	8.8	0.0	0.9	100.0	%
C 2・3・4 地区	925	279	29	0	9	31	0	2	1275	破片数
	72.5	21.9	2.3	0.0	0.7	2.4	0.0	0.2	100.0	%
C 5 地区	1167	133	2	0	26	21	3	78	1430	破片数
	81.6	9.3	0.1	0.0	1.8	1.5	0.2	5.5	100.0	%
C 6 地区	131	154	1	0	1	6	0	4	297	破片数
	44.2	51.9	0.3	0.0	0.3	2.0	0.0	1.3	100.0	%
C 7 地区	3164	567	37	4	81	45	25	6	3929	破片数
	80.6	14.4	0.9	0.1	2.1	1.1	0.6	0.2	100.0	%
C 8 地区	72	92	9	0	8	7	1	3	192	破片数
	37.5	47.9	4.7	0.0	4.2	3.6	0.5	1.6	100.0	%
C 9 地区	73	134	23	0	9	6	0	2	247	破片数
	29.6	54.3	9.3	0.0	3.6	2.4	0.0	0.8	100.0	%
C10地区	47	48	5	0	1	10	1	1	113	破片数
	41.6	42.5	4.4	0.0	0.9	8.8	0.9	0.9	100.0	%
C11地区	38	14	1	0	3	0	0	0	56	破片数
	67.8	25.0	1.8	0.0	5.4	0.0	0.0	0.0	100.0	%
C13・15地区	155	48	3	0	8	8	0	1	223	破片数
	69.6	21.5	1.3	0.0	3.6	3.6	0.0	0.4	100.0	%
C14・23地区	119	66	11	0	6	5	0	1	208	破片数
	57.2	31.7	5.3	0.0	2.9	2.4	0.0	0.5	100.0	%
C16地区	87	85	13	0	2	17	0	1	205	破片数
	42.4	41.5	6.3	0.0	1.0	8.3	0.0	0.5	100.0	%
C18地区	46	51	6	0	6	1	0	1	111	破片数
	41.5	45.9	5.4	0.0	5.4	0.9	0.0	0.9	100.0	%
C19地区	33	17	4	0	4	4	0	1	63	破片数
	52.5	27.0	6.3	0.0	6.3	6.3	0.0	1.6	100.0	%
C20地区	98	199	156	0	4	25	0	7	489	破片数
	20.0	40.8	31.9	0.0	0.8	5.1	0.0	1.4	100.0	%
C21地区	12	20	3	0	0	0	0	0	35	破片数
	34.3	57.1	8.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	%
C22地区	3	13	1	0	2	0	0	0	19	破片数
	15.8	68.4	5.3	0.0	10.5	0.0	0.0	0.0	100.0	%

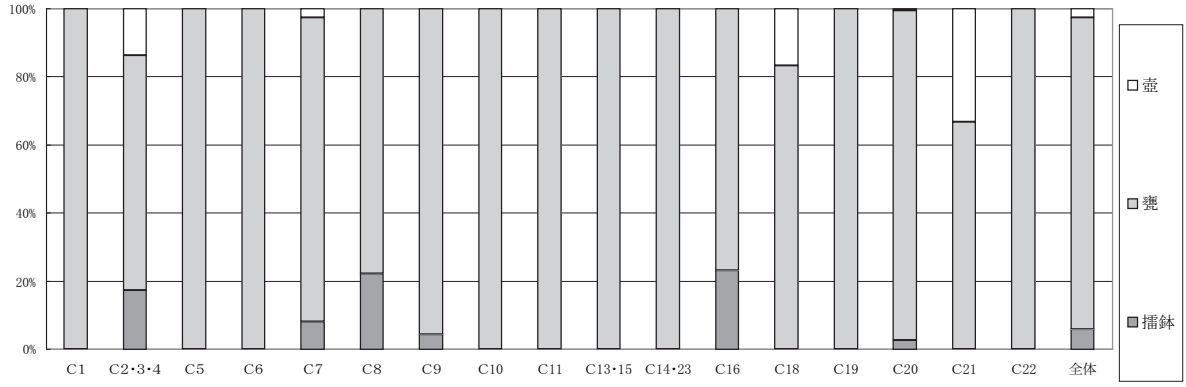
第40図　任海宮田遺跡 C 地区中世土器・陶磁器組成

珠洲器種別組成



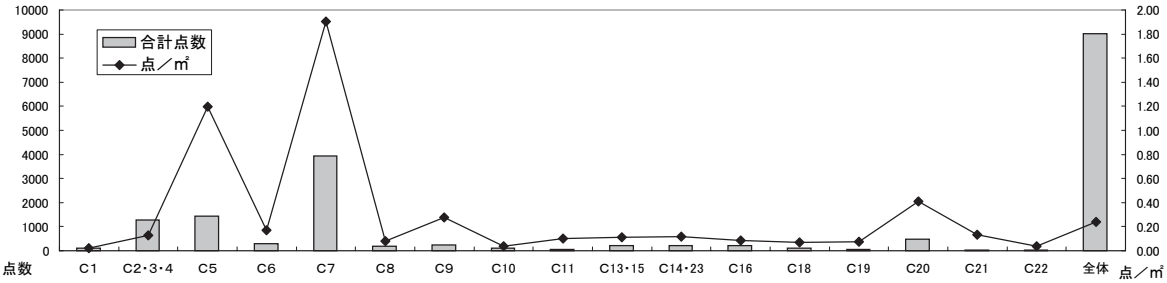
地区	C 1	C2･3･4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 9	C10	C11	C13･15	C14･23	C16	C18	C19	C20	C21	C22	C 地区全体	
擂鉢	2	132	51	48	174	34	44	15	6	20	25	26	24	10	123	7	4	745	破片数
	28.6	48.4	38.3	31.2	30.7	37.4	32.8	31.3	46.1	42.5	37.9	30.6	47.0	58.8	61.9	36.8	33.3	38.9	%
甕	4	109	73	87	270	55	80	25	5	20	39	47	19	7	58	9	4	911	破片数
	57.1	39.9	54.9	56.5	47.6	60.4	59.7	52.0	38.5	42.6	59.1	55.3	37.3	41.2	29.1	47.4	33.3	47.5	%
壺	1	32	9	19	123	2	10	8	2	7	2	12	8	0	18	3	4	260	破片数
	14.3	11.7	6.8	12.3	21.7	2.2	7.5	16.7	15.4	14.9	3.0	14.1	15.7	0.0	9.0	15.8	33.3	13.6	%
合計	7	273	133	154	567	91	134	48	13	47	66	85	51	17	199	19	12	1916	破片数

八尾器種別組成



地区	C 1	C2･3･4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 9	C10	C11	C13･15	C14･23	C16	C18	C19	C20	C21	C22	C 地区全体	
擂鉢	0	5	0	0	3	2	1	0	0	0	0	3	0	0	4	0	0	18	破片数
	0.0	17.2	0.0	0.0	8.1	22.2	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	5.9	%
甕	1	20	2	1	33	7	22	5	1	3	11	10	5	4	151	2	1	279	破片数
	100.0	69.0	100.0	100.0	89.2	77.8	95.7	100.0	100.0	100.0	100.0	76.9	83.3	100.0	96.8	66.7	100.0	91.5	%
壺	0	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	8	破片数
	0.0	13.8	0.0	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	0.0	0.6	33.3	0.0	2.6	%
合計	1	29	2	1	37	9	23	5	1	3	11	13	6	4	156	3	1	305	破片数

第41図　珠洲・八尾器種別組成



地区	C 1	C2･3･4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 9	C10	C11	C13･15	C14･23	C16	C18	C19	C20	C21	C22	C 地区全体
合計点数	114	1275	1430	297	3929	192	247	113	56	223	208	205	111	63	489	35	19	9006
点／㎡	0.02	0.13	1.20	0.17	1.90	0.08	0.27	0.04	0.10	0.11	0.12	0.08	0.07	0.07	0.41	0.13	0.03	0.24

第42図　地区別中世土器・陶磁器出土率

地区	中世土師器	瀬戸美濃	中国製陶磁器	合計	
C 1	91	3	10	104	破片数
	87.5	2.9	9.6	100.0	%
C 2・3・4	925	7	29	961	破片数
	96.3	0.7	3.0	100.0	%
C 5	1167	23	21	1211	破片数
	96.4	1.9	1.7	100.0	%
C 6	131	1	6	138	破片数
	94.9	0.7	4.3	100.0	%
C 7	3164	45	43	3252	破片数
	97.3	1.4	1.3	100.0	%
C 8	72	7	6	85	破片数
	84.7	8.2	7.1	100.0	%
C 9	73	5	6	84	破片数
	86.9	6.0	7.1	100.0	%
C10	47	1	10	58	破片数
	81.1	1.7	17.2	100.0	%
C11	38	1	0	39	破片数
	97.4	2.6	0.0	100.0	%
C13・15	155	5	6	166	破片数
	93.4	3.0	3.6	100.0	%
C14・23	119	6	5	130	破片数
	91.6	4.6	3.8	100.0	%
C16	87	1	17	105	破片数
	82.8	1.0	16.2	100.0	%
C18	46	5	1	52	破片数
	88.5	9.6	1.9	100.0	%
C19	33	1	4	38	破片数
	86.9	2.6	10.5	100.0	%
C20	98	4	24	126	破片数
	77.8	3.2	19.0	100.0	%
C21	12	0	0	12	破片数
	100.0	0.0	0.0	100.0	%
C22	3	1	0	4	破片数
	75.0	25.0	0.0	100.0	%
全体	6261	116	177	6554	破片数
	95.5	1.8	2.7	100.0	%

表13　供膳具の種類別比率

地区	珠洲	八尾	合計	
C 1	7	1	8	破片数
	87.5	12.5	100.0	%
C 2・3・4	273	29	302	破片数
	90.4	9.6	100.0	%
C 5	133	2	135	破片数
	98.5	1.5	100.0	%
C 6	154	1	155	破片数
	99.4	0.6	100.0	%
C 7	567	37	604	破片数
	93.9	6.1	100.0	%
C 8	91	9	100	破片数
	91.0	9.0	100.0	%
C 9	134	23	157	破片数
	85.4	14.6	100.0	%
C10	48	5	53	破片数
	90.6	9.4	100.0	%
C11	13	1	14	破片数
	92.9	7.1	100.0	%
C13・15	47	3	50	破片数
	94.0	6.0	100.0	%
C14・23	66	11	77	破片数
	85.7	14.3	100.0	%
C16	85	13	98	破片数
	86.7	13.3	100.0	%
C18	51	6	57	破片数
	89.5	10.5	100.0	%
C19	17	4	21	破片数
	81.0	19.0	100.0	%
C20	199	156	355	破片数
	56.1	43.9	100.0	%
C21	19	3	22	破片数
	86.4	13.6	100.0	%
C22	12	1	13	破片数
	92.3	7.7	100.0	%
全体	1916	305	2221	破片数
	86.3	13.7	100.0	%

表14　調理具・貯蔵具の種類別比率

地区	供膳具	調理･貯蔵具	合計	
C 1	104	8	112	破片数
	93	7	100	%
C 2・3・4	961	302	1263	破片数
	76	24	100	%
C 5	1211	135	1346	破片数
	90	10	100	%
C 6	138	155	293	破片数
	47	53	100	%
C 7	3252	604	3856	破片数
	84	16	100	%
C 8	85	100	185	破片数
	46	54	100	%
C 9	84	157	241	破片数
	35	65	100	%
C10	58	53	111	破片数
	52	48	100	%
C11	39	14	53	破片数
	74	26	100	%
C13・15	166	50	216	破片数
	77	23	100	%
C14・23	130	77	207	破片数
	63	37	100	%
C16	105	98	203	破片数
	52	48	100	%
C18	52	57	109	破片数
	48	52	100	%
C19	38	21	59	破片数
	64	36	100	%
C20	126	355	481	破片数
	26	74	100	%
C21	12	22	34	破片数
	35	65	100	%
C22	4	13	17	破片数
	24	76	100	%
全体	6554	2221	8775	破片数
	75	25	100	%

表15　食膳具と調理・貯蔵具の対比率

地区	調理	貯蔵	合計	
C 1	2	6	8	破片数
	25	75	100	%
C 2・3・4	137	165	302	破片数
	45	55	100	%
C 5	51	84	135	破片数
	38	62	100	%
C 6	48	107	155	破片数
	31	69	100	%
C 7	177	427	604	破片数
	29	71	100	%
C 8	36	64	100	破片数
	36	64	100	%
C 9	45	112	157	破片数
	29	71	100	%
C10	15	38	53	破片数
	28	72	100	%
C11	6	8	14	破片数
	43	57	100	%
C13・15	20	30	50	破片数
	40	60	100	%
C14・23	25	52	77	破片数
	32	68	100	%
C16	29	69	98	破片数
	30	70	100	%
C18	24	33	57	破片数
	42	58	100	%
C19	10	11	21	破片数
	48	52	100	%
C20	127	228	355	破片数
	36	64	100	%
C21	7	15	22	破片数
	32	68	100	%
C22	4	9	13	破片数
	31	69	100	%
全体	763	1458	2221	破片数
	34	66	100	%

表16　調理具と貯蔵具の比率

中国製陶磁器一覧

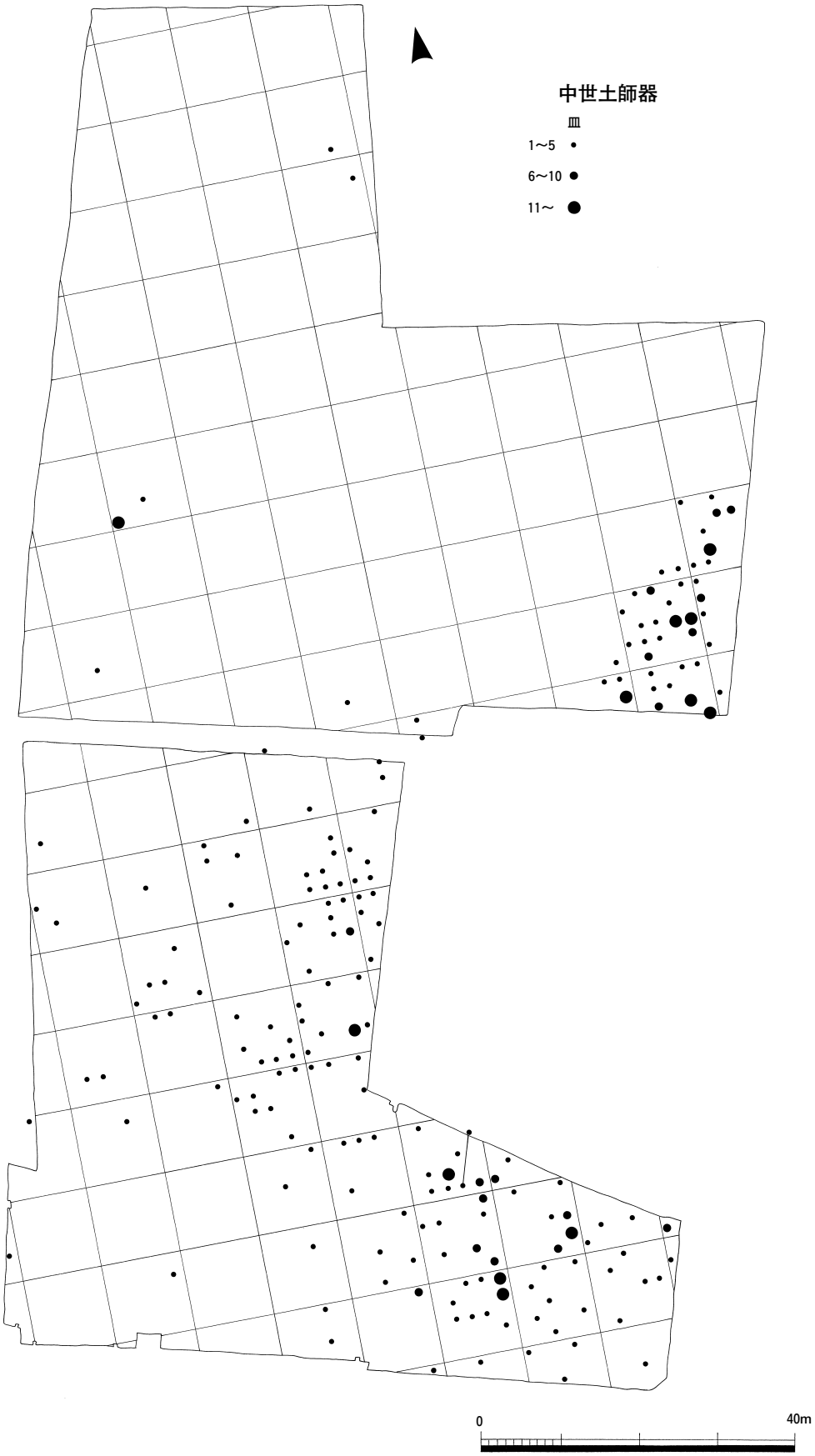
種類		器種	詳細時期・分類	点数
青磁	同安窯系	皿	大宰府Ⅰ-2b類	1
	龍泉窯系	椀	大宰府Ⅰ-1類？	1
			大宰府Ⅰ-1ｃ類	1
			大宰府Ⅰ-2類	4
			大宰府Ⅰ-2～3類	1
			大宰府Ⅰ-2or3類	1
			大宰府Ⅰ-2～4類	2
			大宰府Ⅰ-4類	1
			大宰府Ⅰ類	1
			大宰府ⅠorⅡ類	3
			大宰府ⅠorⅣ類～	1
			大宰府Ⅱ-a類	1
			大宰府Ⅱ-a類？	2
			大宰府Ⅱa or Ⅳor上田Ｂ-Ⅱ	1
			大宰府Ⅱ-ｂ類	37
			大宰府Ⅱ類	1
			大宰府Ⅲ-2ｃ類	2
			大宰府Ⅲ-2ｃ類（外反）	2
			大宰府Ⅲ-2ｃ類（直口）	1
			大宰府Ⅲ-2類	1
			大宰府Ⅲ類	2
			大宰府Ⅲ類？	3
			大宰府ⅢorⅡ-b類？	1
			大宰府ⅢorⅣ類	1
			大宰府Ⅳ類	1
			大宰府Ⅳ類～	14
			大宰府Ⅳ類～（外反）	1
			大宰府Ⅳ類～？	1
			大宰府Ⅳ類～上田Ｂ-Ⅱ類	2
			大宰府Ⅳ類～上田Ｂ-Ⅱ類	2
			大宰府Ⅳ類or上田Ｄ-Ⅱ類	1
			大宰府Ⅳ類or李朝？	1
			上田Ｂ-Ⅱ類	1
			上田Ｂ-Ⅱ～？明	1
			上田Ｂ-Ⅳ類	4
			上田Ｂ-ⅣorⅣ’	1
			上田Ｃ-Ⅱ類	3
			上田Ｃ-Ⅱ？	1
			上田Ｄ-Ⅱ類	5
			上田Ｄ-Ⅱ・Ｅ類～	1
			上田ＥⅡ類？	1
			上田Ⅱ類～	2
			明	2
		椀？	大宰府ⅠorⅡ類	1
		小椀	大宰府Ⅰ-1b類	1
			大宰府Ⅱ-ａ類	1
			大宰府Ⅱ-b類	4
		皿	大宰府Ⅳ類～	3
		稜花皿	明代	3
			明代～	1
			不明	1
		坏	大宰府Ⅲ-1ａ類	2
			大宰府Ⅲ類	1
			上田Ｅ-Ⅱ類？明	1
			大宰府Ⅲ-３ｂ類	1
		双耳瓶	大宰府Ⅳ類～	1
		盤	大宰府Ⅲ～Ⅳ類？	1
			大宰府Ⅳ類～	7
		不明	大宰府Ⅳ類～	2
			元～明	1
青白磁		皿	11Ｃ後半～12Ｃ代	1
		瓶		1
		瓶壺類		1
		中壺蓋	13Ｃ	1
		壺蓋		1
		合子身		1
白磁		椀	大宰府Ⅱ-1ａ類	1
			大宰府Ⅱ類？	1
			大宰府Ⅳ類	2
			大宰府Ⅳ～Ⅷ類	1
			大宰府Ⅳ～Ⅷ類？	1
			大宰府Ⅵ類？	1
			大宰府Ⅵ～Ⅷ類	1
			大宰府Ⅷ-1類	1
		皿	大宰府ⅡorⅢ類？	1
			大宰府Ⅲ-2類	1
			大宰府Ⅸ類	2
			大宰府Ⅸ-1類	3
			大宰府Ⅳ-1b～d類	1
			森田Ｂ群	1
			森田Ｄ群	1
			森田Ｅ群	3
		皿？	大宰府Ⅴ～Ⅶ類or森田Ｅ群？	1
		皿？	森田Ｄ群？	1
		皿or坏	森田Ｄ群	2
		壺類	大宰府Ⅲ類	1
白磁？		壺	大宰府Ⅲ類	1
中国製染付		皿	小野Ｂ群	4
中国製陶器		天目茶碗		9
			合計	196

瀬戸美濃一覧

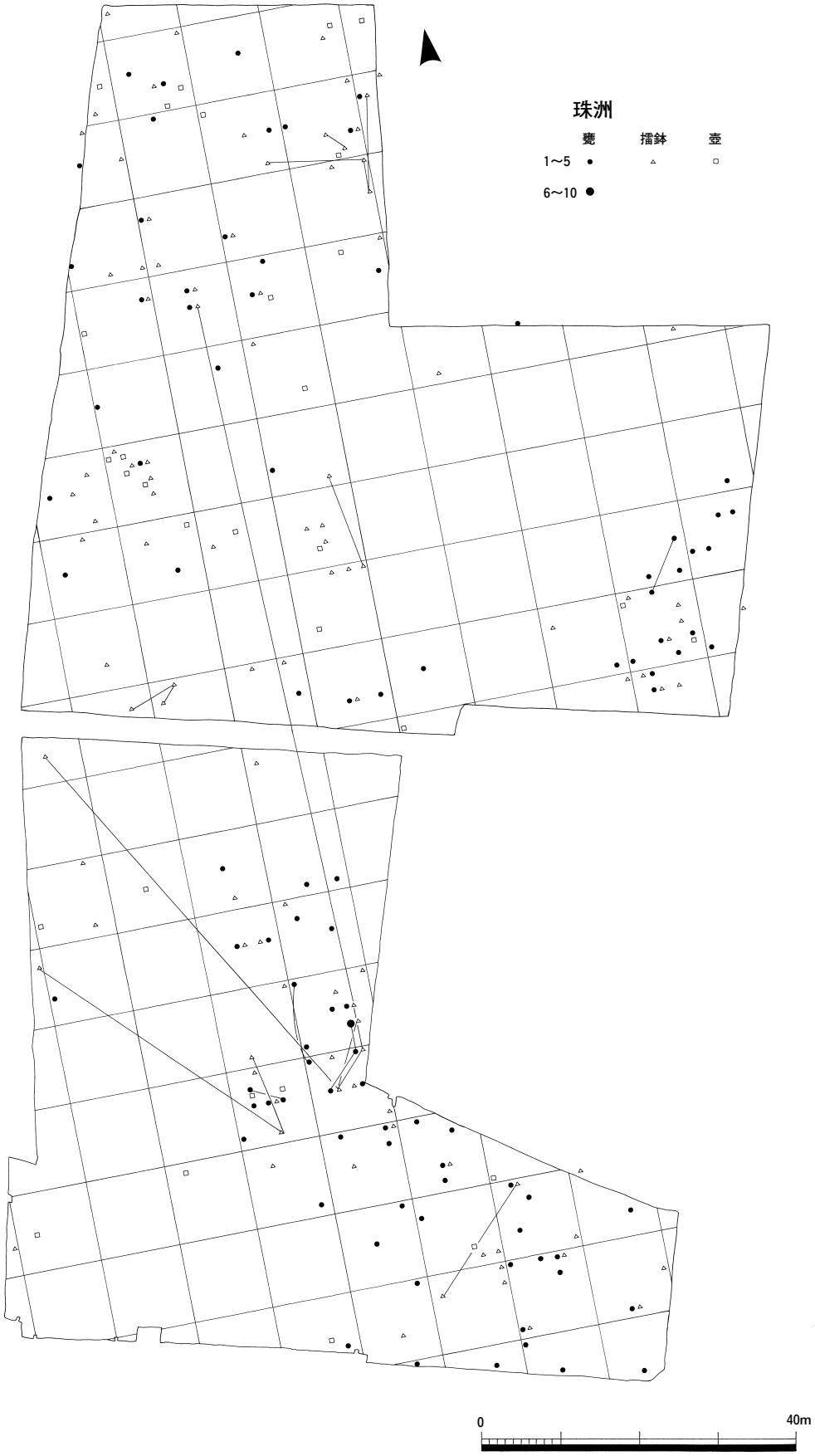
施釉	器種	詳細時期・分類	点数
灰釉	卸皿	中Ⅰ期	1
		中Ⅱ期	1
		中期	4
		後Ⅰ期	3
		後Ⅱ期？	1
		後Ⅲ期	5
		後Ⅲ～後Ⅳ期（古）	1
		後期	8
	卸目付大皿	後Ⅰ～Ⅲ期	1
	縁釉小皿	後Ⅳ（古）	2
	折縁中皿	中Ⅰ～Ⅱ期	1
	折縁深皿	中Ⅲ期	1
		中Ⅳ期	4
		後Ⅰ期	1
		後Ⅳ期（古）	1
	中皿	後Ⅰ～Ⅱ期	1
	直縁大皿	後Ⅳ期（古）	1
	端反皿	大窯2	6
	端反皿or丸皿	大窯第１段階	1
		大窯第１or２段階	1
		大窯第1～2段階	4
	丸皿	大窯第２段階	2
		大窯第３段階前半	1
	腰折皿	後Ⅳ期（新）	2
	挟み皿？	大窯第１段階	1
長石釉	皿？	大窯第４段階	1
	菊皿	大窯第４段階後半	1
灰釉	四耳壺	後Ⅳ期（新）	1
鉄釉	梅瓶	中Ⅰ～Ⅱ期	1
灰釉		中Ⅰ～Ⅱ期	1
		前Ⅲ～中Ⅱ期	1
		前Ⅲ～Ⅳ期	1
	花瓶	後ⅢorⅣ期	1
		後ⅢorⅣ（古）	2
	花瓶？	後期	2
鉄釉	花瓶？	後Ⅳ期	1
灰釉	香炉	後Ⅳ期（古）	1
鉄釉	小坏	後ⅠorⅡ期	1
灰釉	水注	中Ⅰ～Ⅱ期	1
鉄釉	水滴	後Ⅲ～Ⅳ期	1
灰釉	尊式花瓶	後Ⅰ～Ⅲ期	1
		後Ⅲ期	3
		後Ⅳ期（古）	1
		後ⅢorⅣ期（古）	1
		後期	1
	筒形香炉	大窯第１段階	1
	筒形容器	後ⅢorⅣ期	1
	壺	中期	1
	壺or瓶	中期	1
鉄釉	天目茶碗	中Ⅲ期	1
		後Ⅰ期	1
		後Ⅰ期？	1
		後ⅠorⅡ期	3
		後Ⅱ期	3
		後Ⅲ期	3
		後ⅢorⅣ期	1
		後Ⅳ期（古）	2
		後Ⅳ期（新）	12
		後期	1
		大窯第１段階	4
		大窯第１段階？	2
		大窯第２段階	2
		大窯第３段階？	1
		大窯第４段階前半？	1
		登窯第２段階	2
灰釉	袴腰形香炉	後Ⅳ期（古）	1
鉄釉	袴腰形香炉	後Ⅳ期（古）or（新）	3
灰釉	鉢	後期	1
	盤類	後ⅠorⅡ期	2
		後Ⅰ～Ⅲ期	1
		後ⅢorⅣ期（古）	2
		後Ⅲ～Ⅳ期	1
		後期	1
	平碗	後Ⅰ期	2
		後ⅠorⅡ期	1
		後Ⅱ期	2
		後Ⅱ～Ⅲ期	1
		後Ⅲ期	4
		後ⅢorⅣ期（古）	1
		後Ⅳ期（古）	1
		後Ⅳ期	1
		後期	1
	丸碗	大窯第１段階	3
	瓶	不明	1
		中期	1
	瓶子	中Ⅰ～Ⅱ期	9
		前Ⅳ期	1
		後期	1
	瓶子or四耳壺	中期	2
	四耳壺or花瓶	中期	1
	水注	中ⅠorⅡ期	3
	不明	中期？	1
	不明	後期	1
		合計	173

表17　中国製陶磁器・瀬戸美濃一覧表

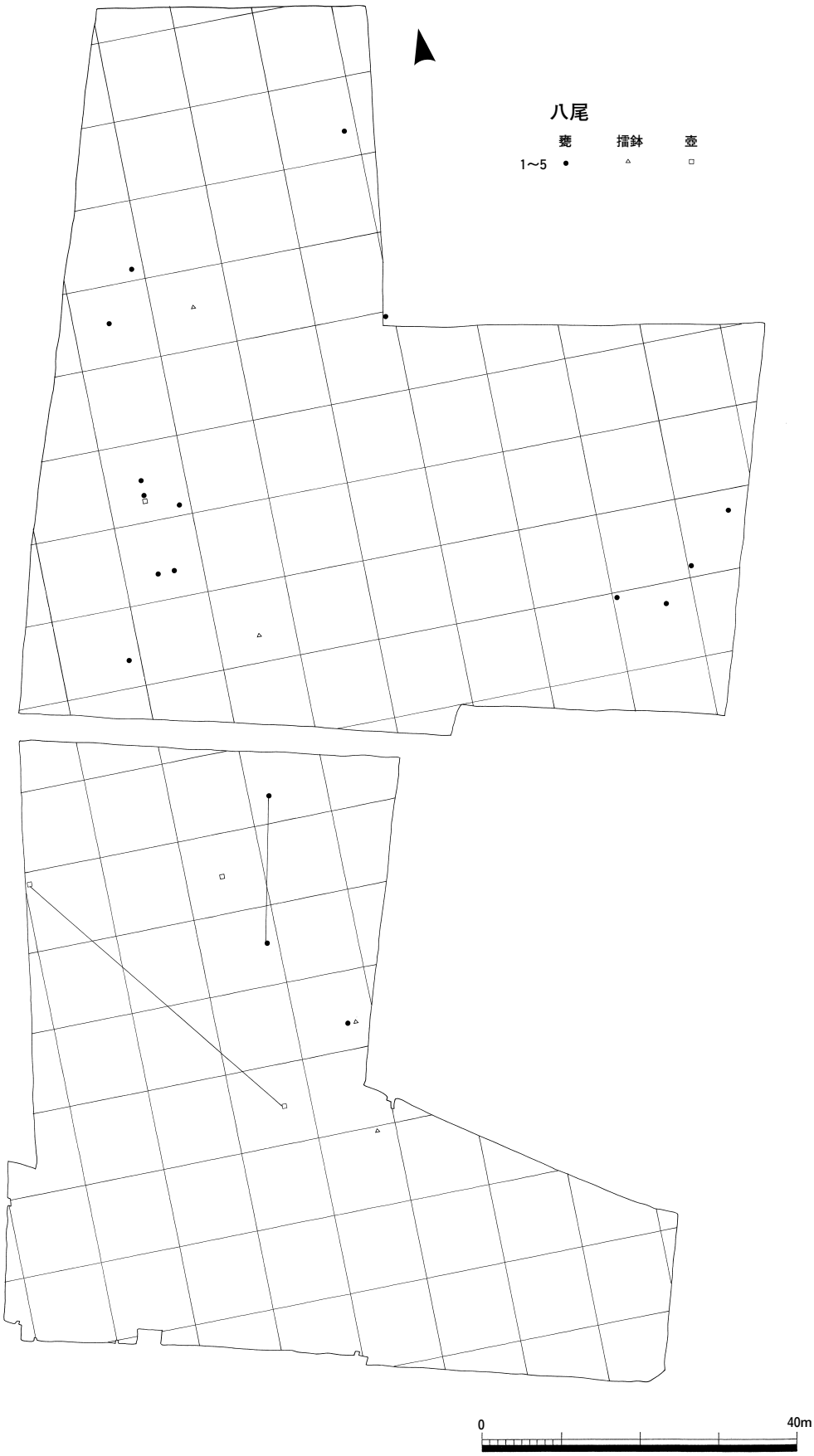
第43図　Ｃ２・３・４地区中世出土分布図（１）



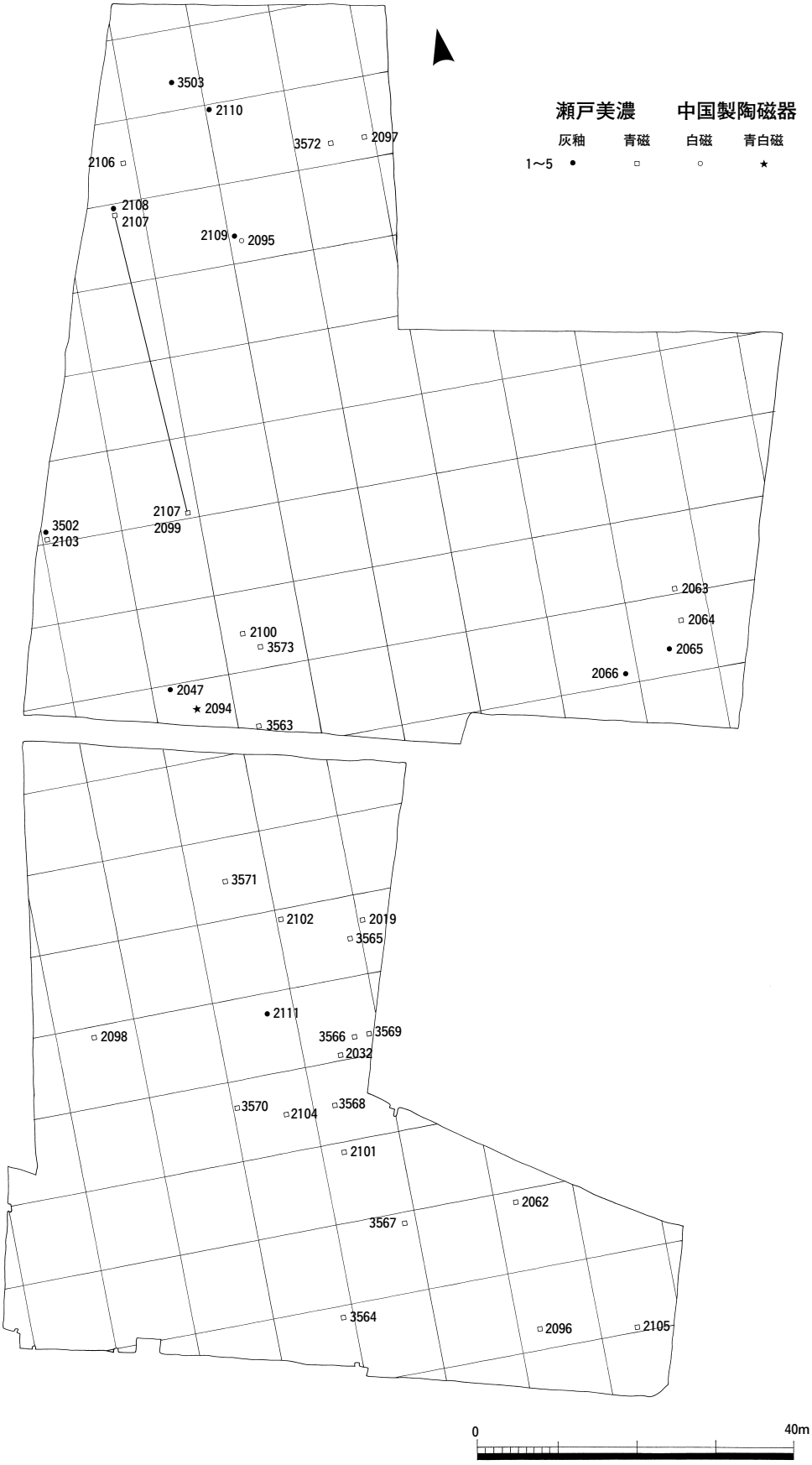
第44図　C２・３・４地区中世出土分布図（２）



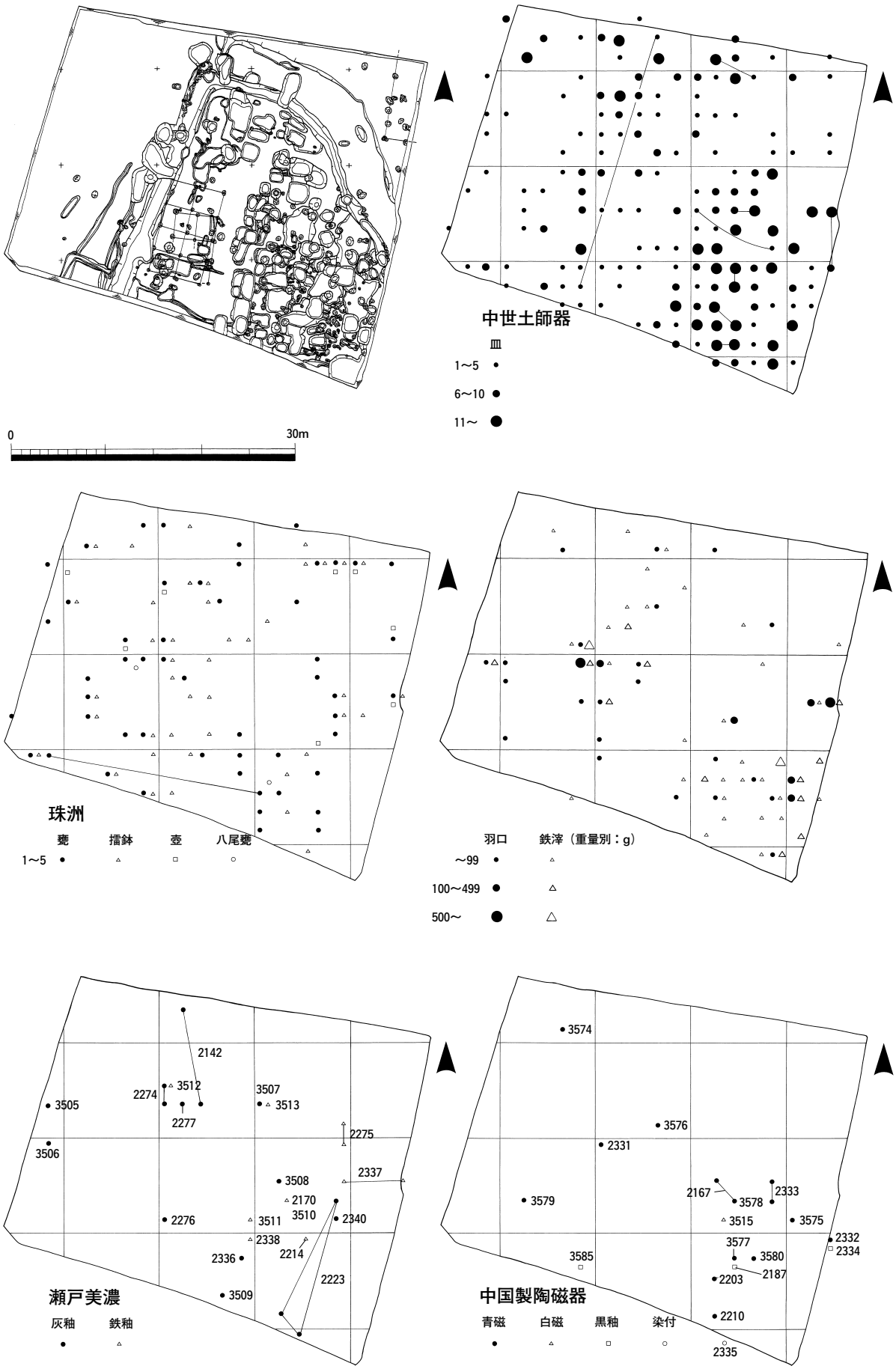
第45図　Ｃ２・３・４地区中世出土分布図（３）



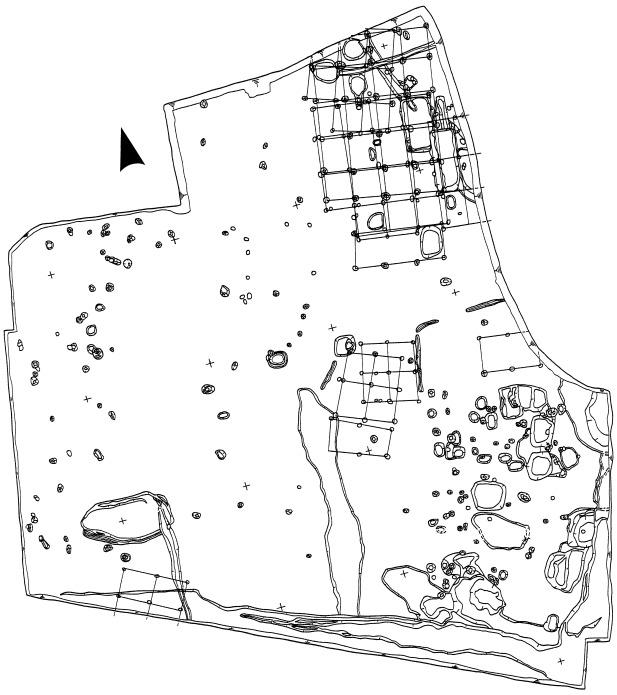
第46図　Ｃ２・３・４地区中世出土分布図（４）

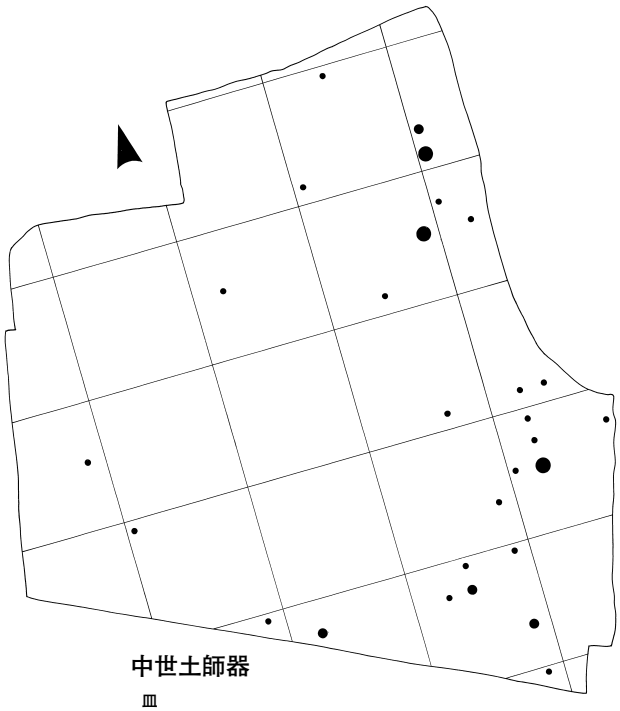


第47図　Ｃ２・３・４地区中世出土分布図（５）



第48図　Ｃ５地区中世出土分布図





中世土師器

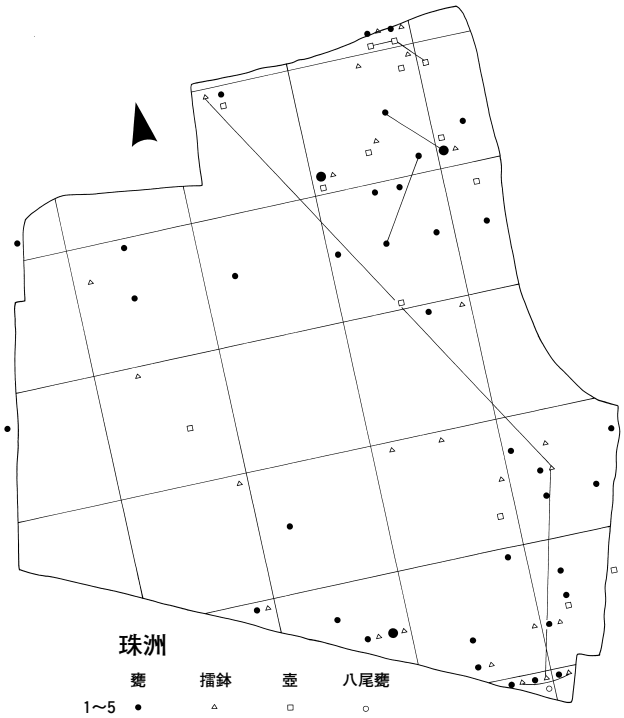
皿

1～5 •

6～10 ●

11～ ●

0 30m

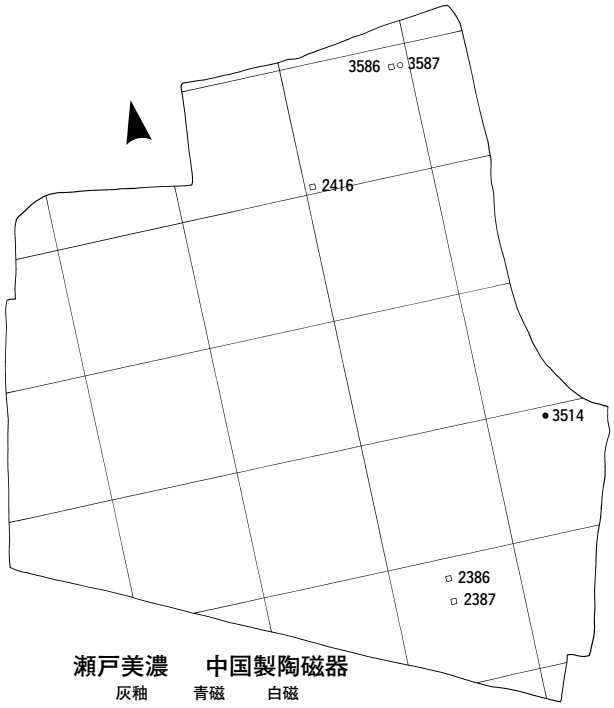


珠洲

甕 擂鉢 壺 八尾甕

1～5 • △ □ ○

6～10 ●

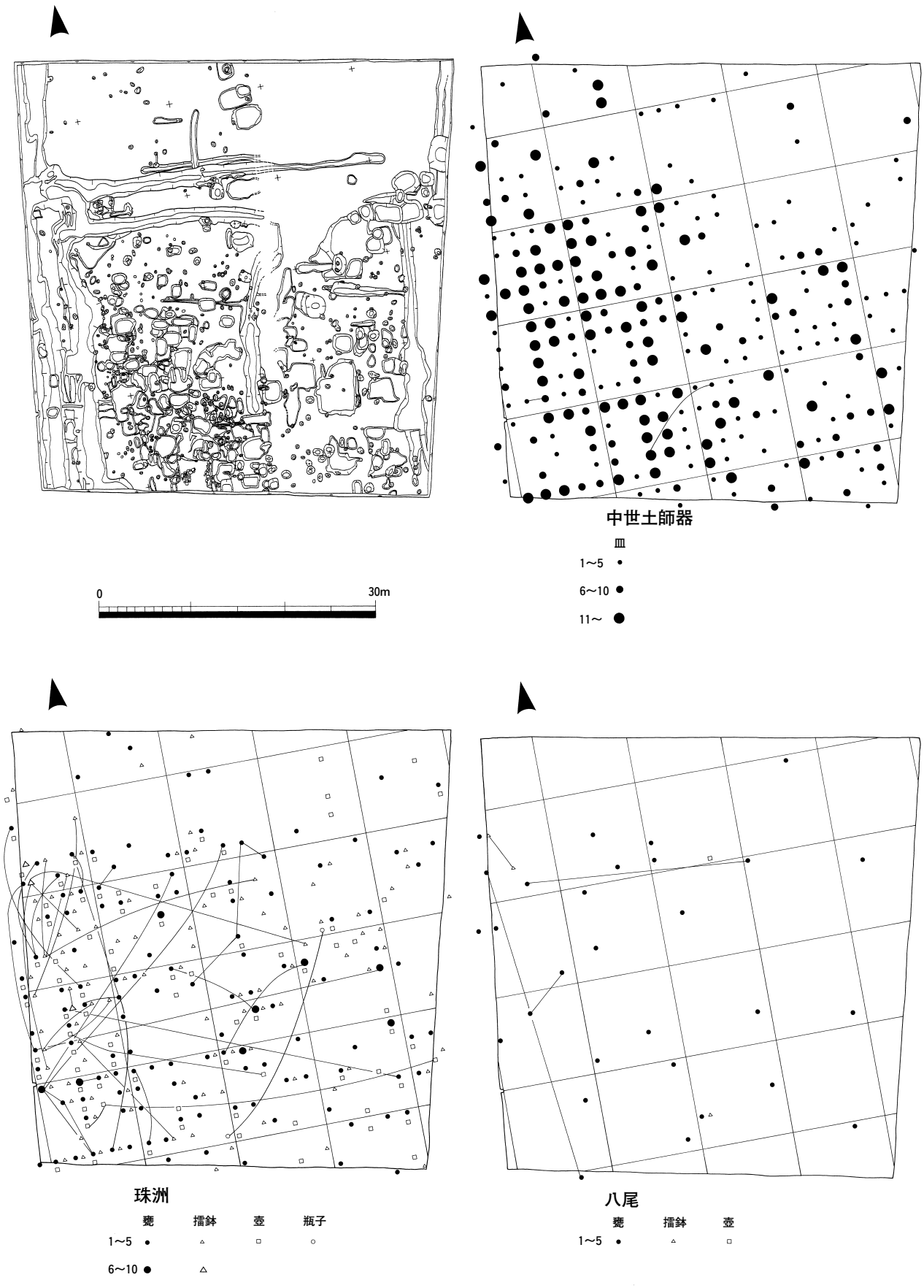


瀬戸美濃　中国製陶磁器

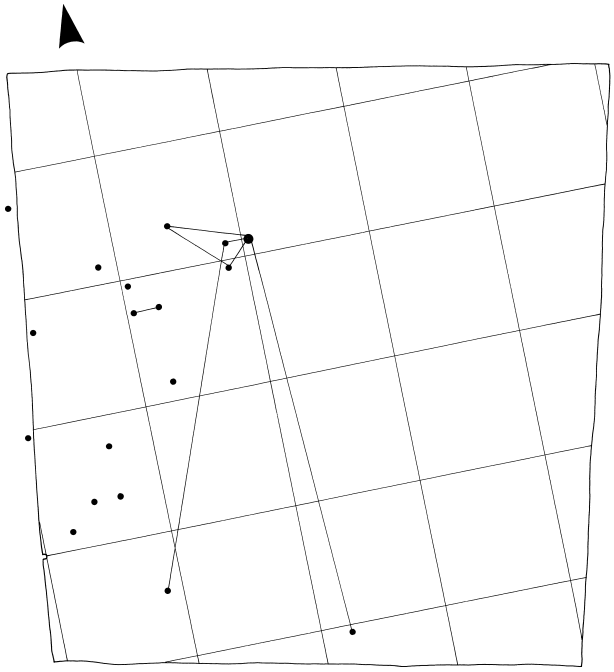
灰釉 青磁 白磁

1～5 • □ ○

第49図　C６地区中世出土分布図



第50図　C７地区中世出土分布図（１）

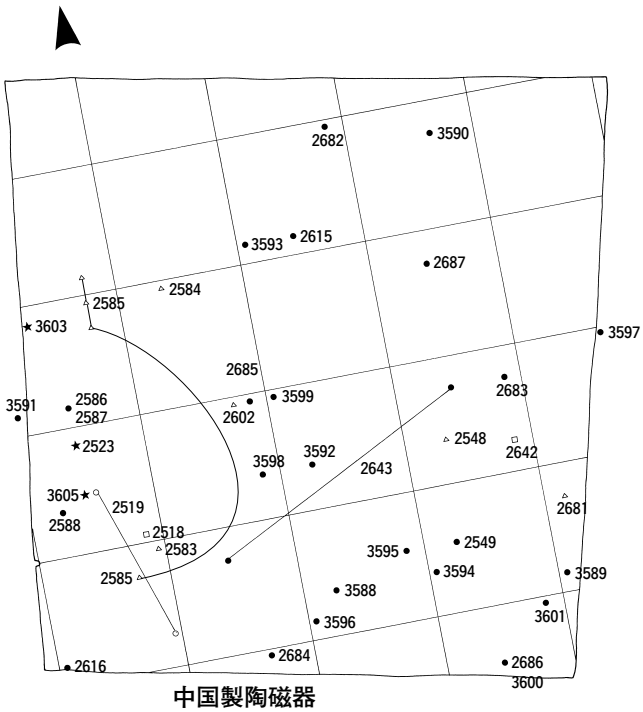


瓦質土器

1～5 ●

6～10 ●

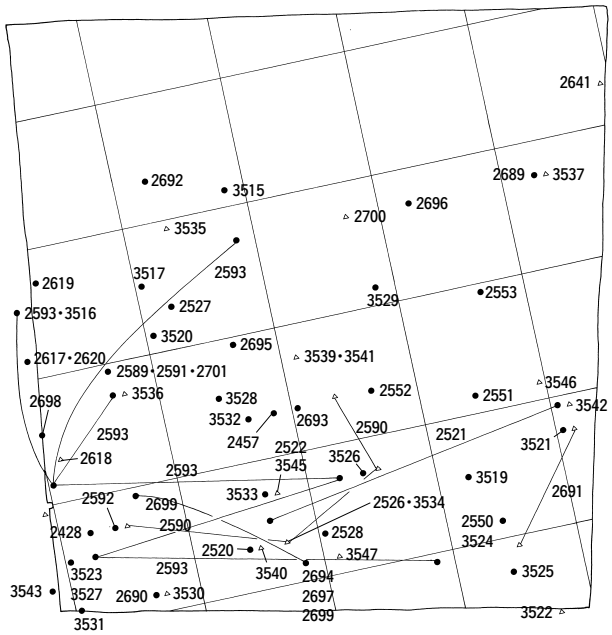
0 30m



中国製陶磁器

青磁 白磁 青白磁 中国染付 黒釉

1～5 ● △ □ ○ ★



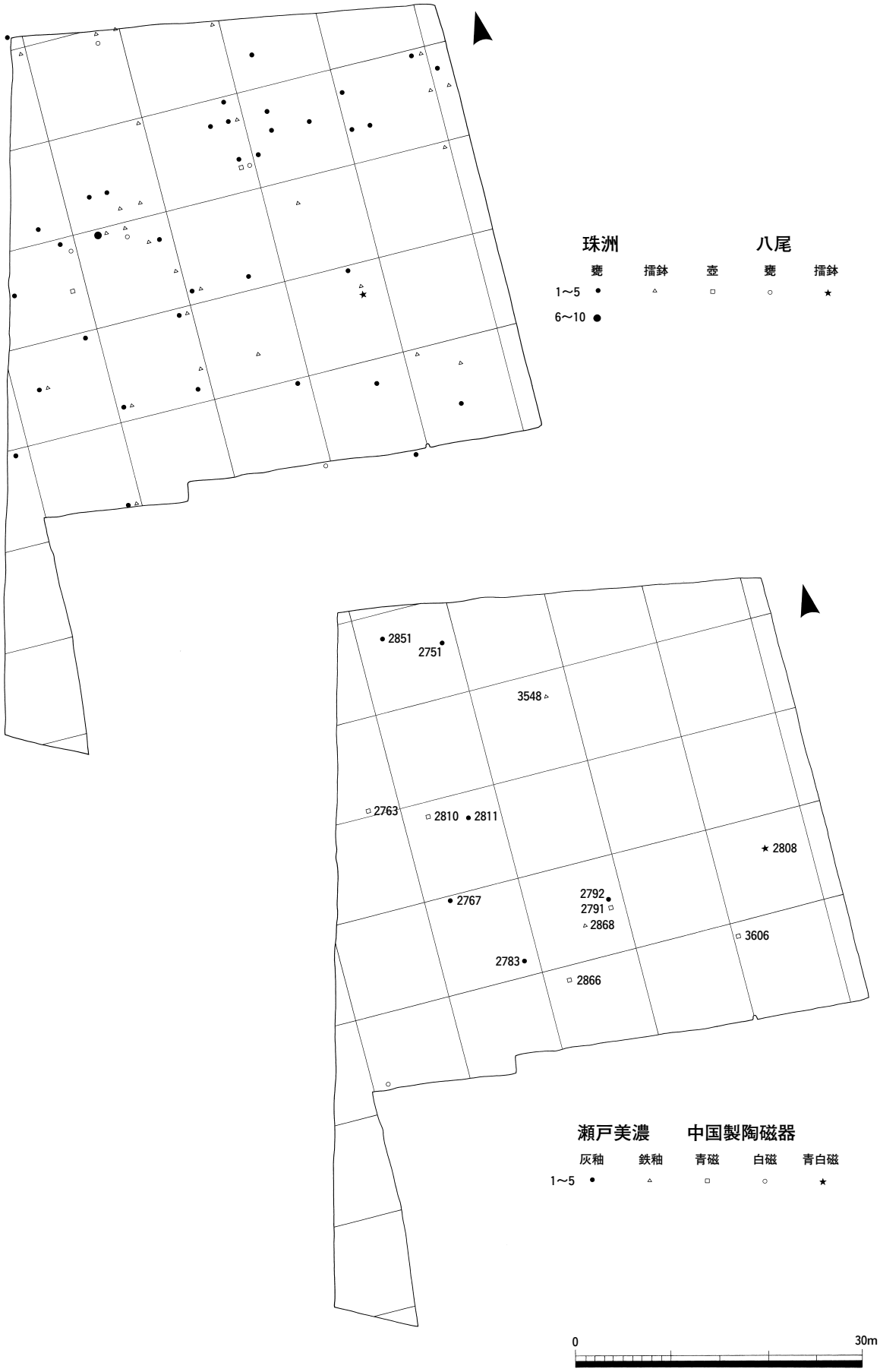
瀬戸美濃

灰釉 鉄釉

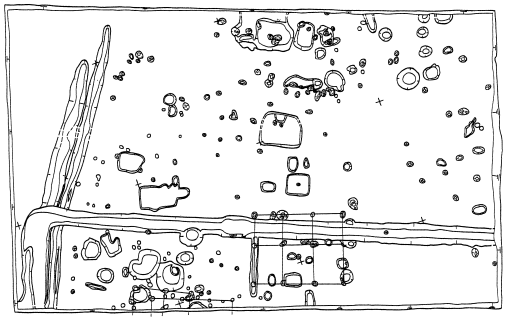
1～5 ● △

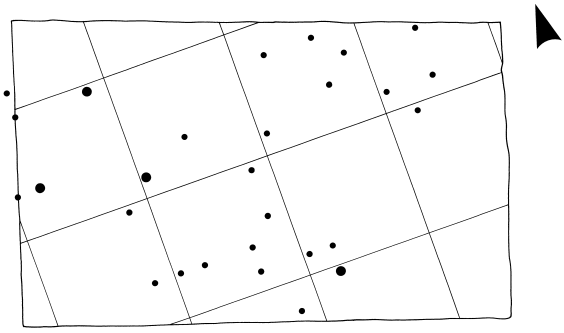
第51図　Ｃ７地区中世出土分布図（２）

第52図　Ｃ８地区中世出土分布図（１）



第53図　Ｃ８地区中世出土分布図（２）



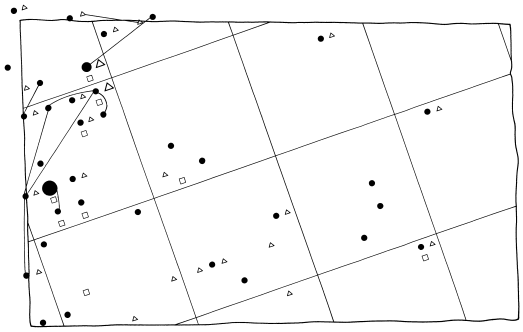


中世土師器

皿

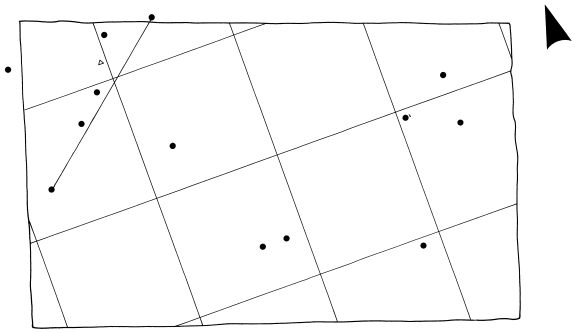
1～5 ●

6～10 ●



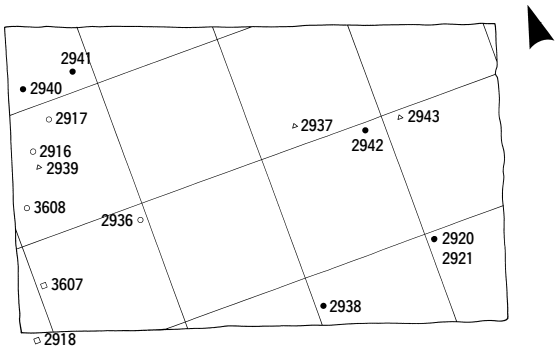
珠洲

	甕	擂鉢	壺
1～5	●	△	□
6～10	●	△	
11～	●		



八尾

	甕	擂鉢
1～5	●	△

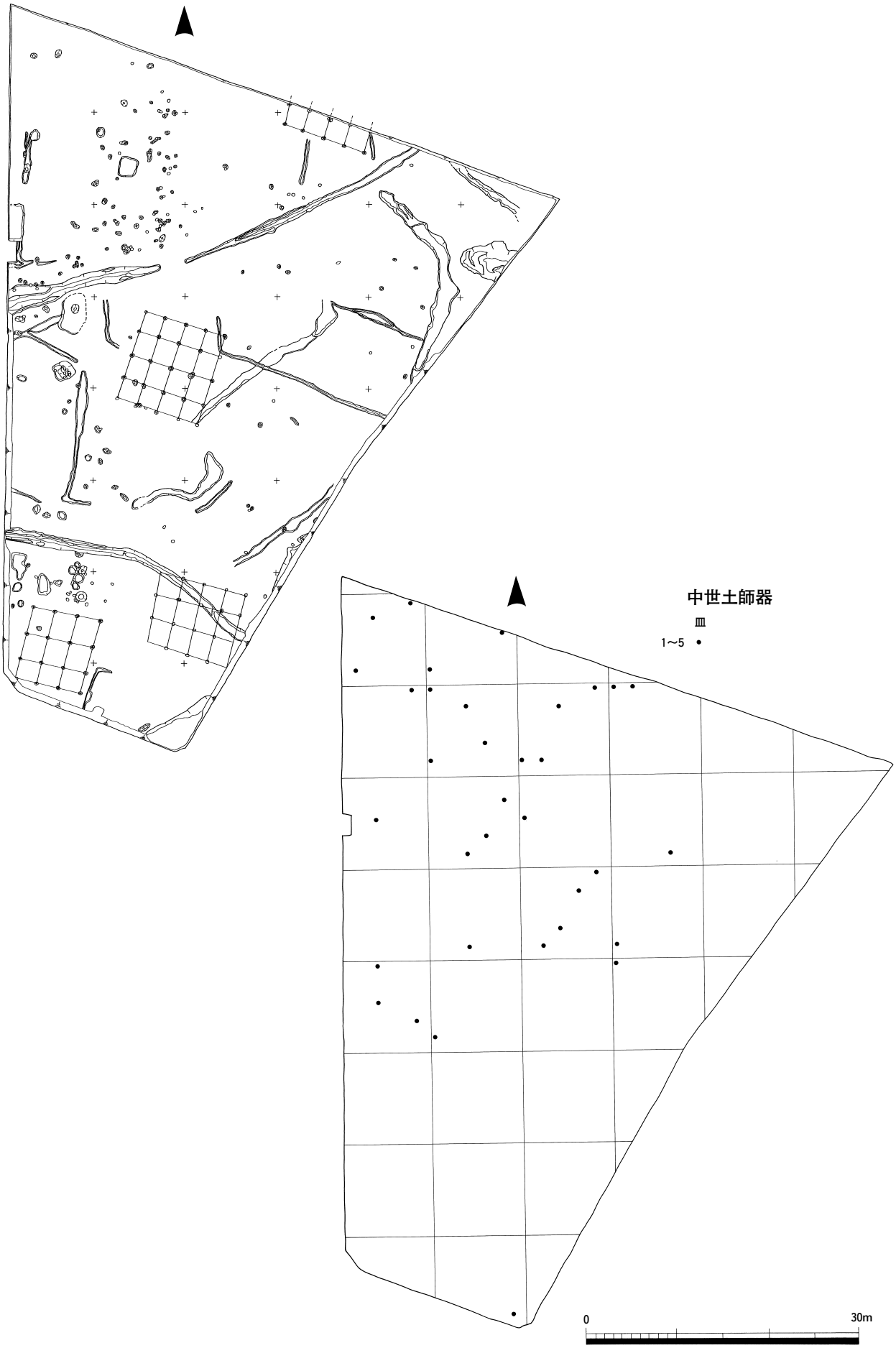


瀬戸美濃　　中国製陶磁器

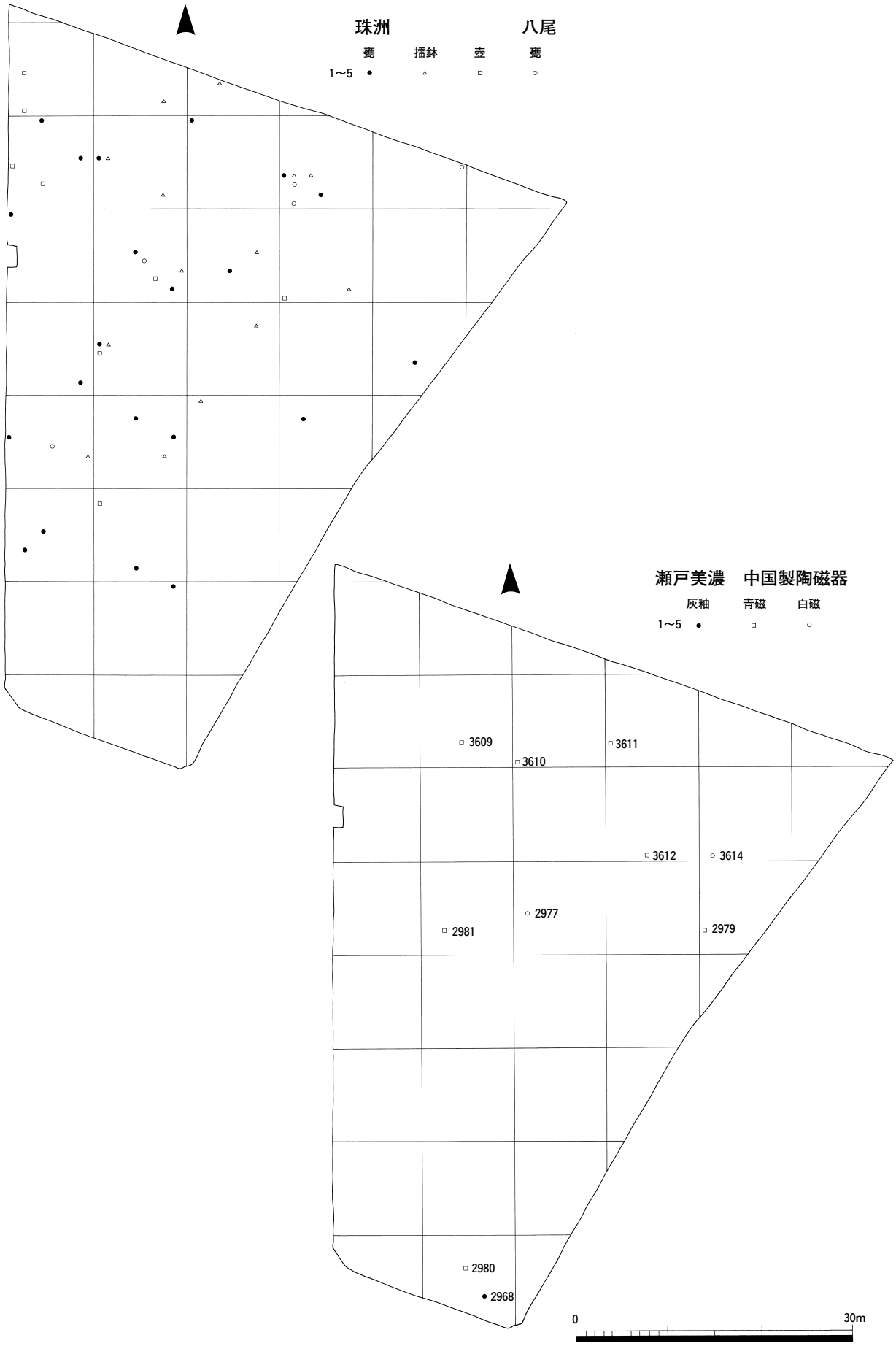
	灰釉	鉄釉	青磁	白磁
1～5	●	△	□	○

0　30m

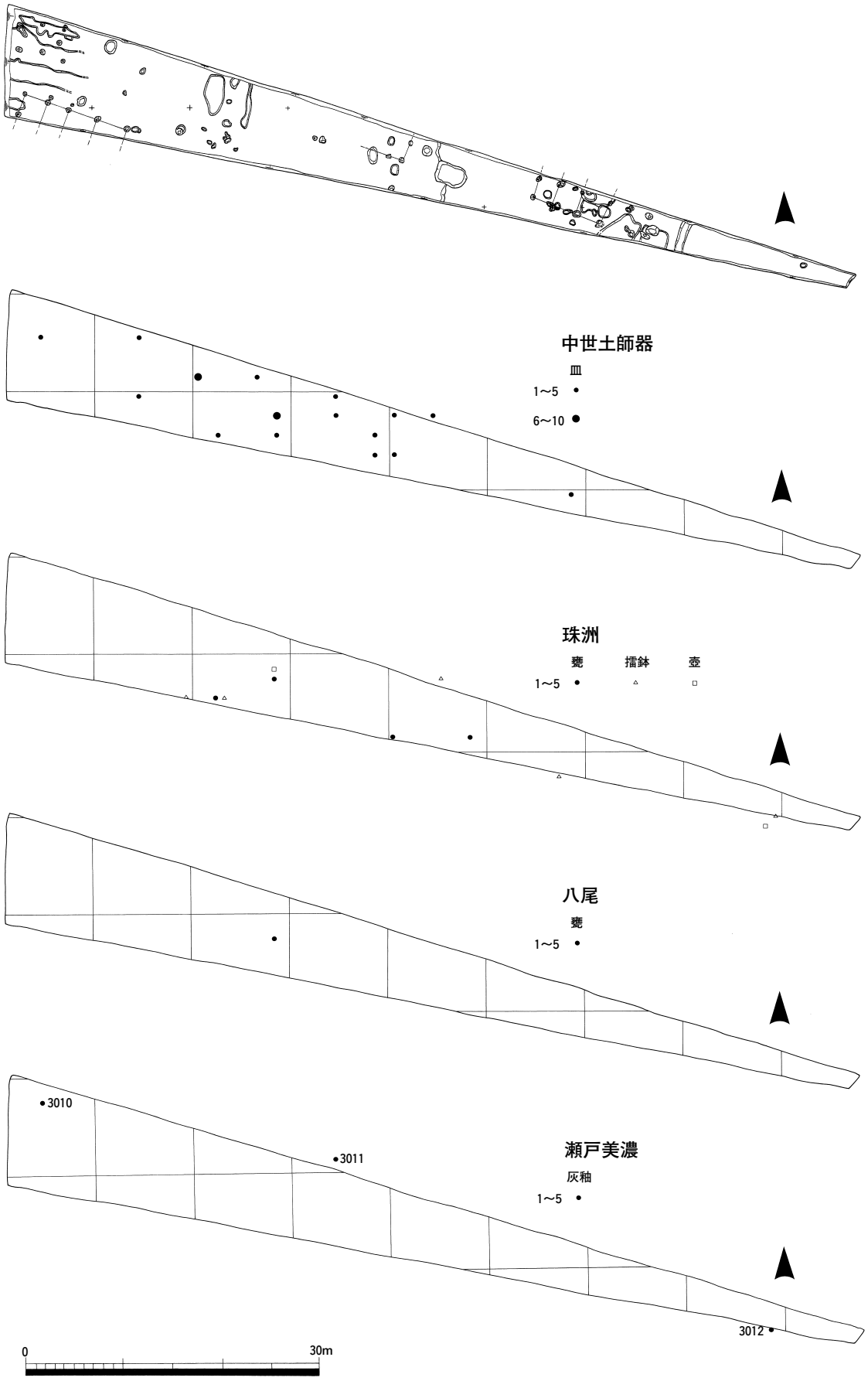
第54図　C９地区中世出土分布図



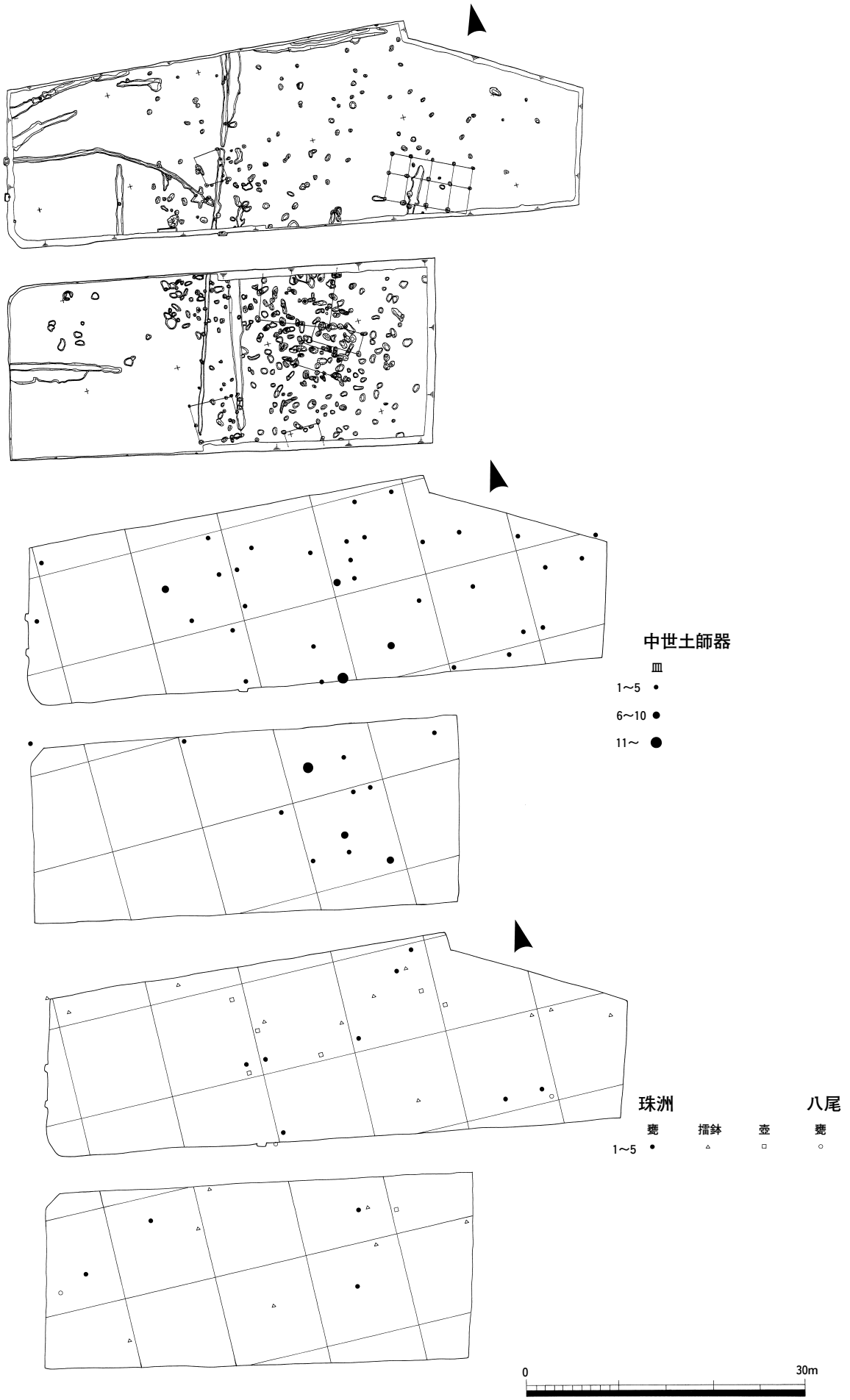
第55図　C10地区中世出土分布図（１）



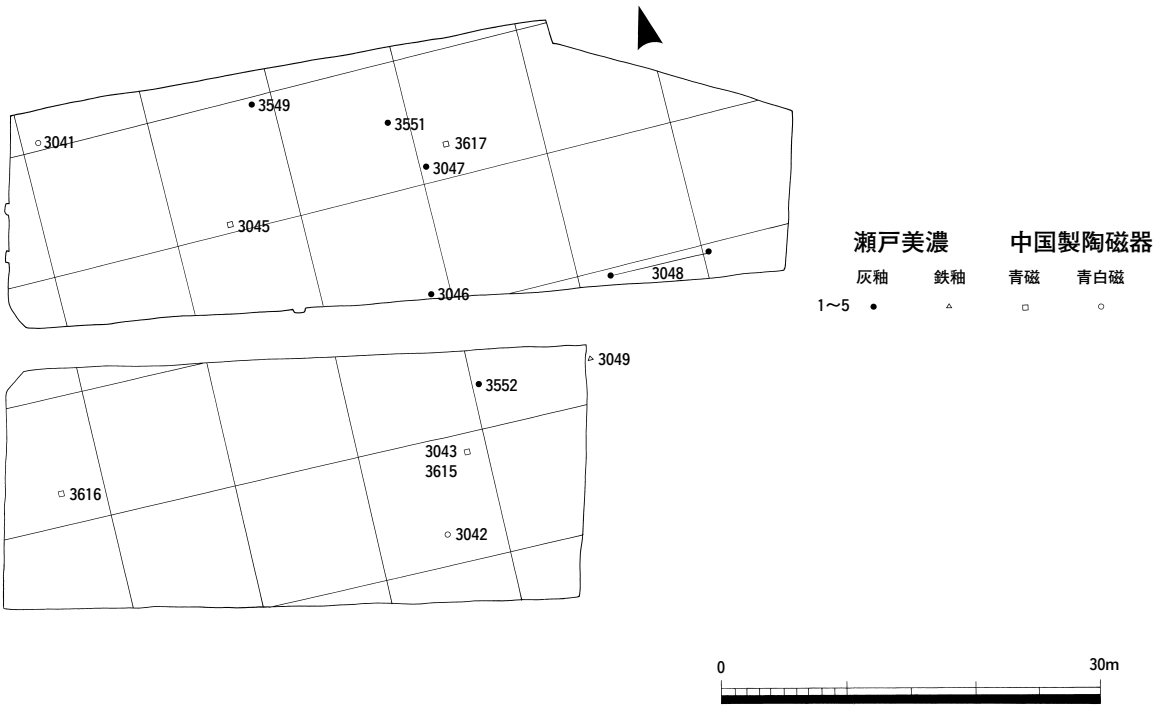
第56図　C10地区中世出土分布図（２）

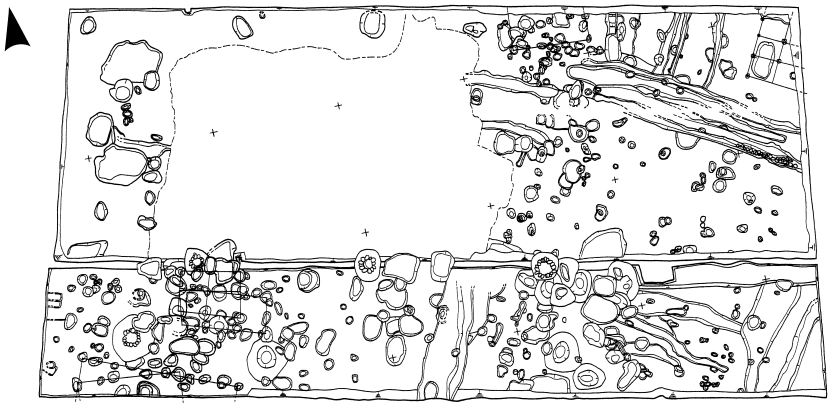


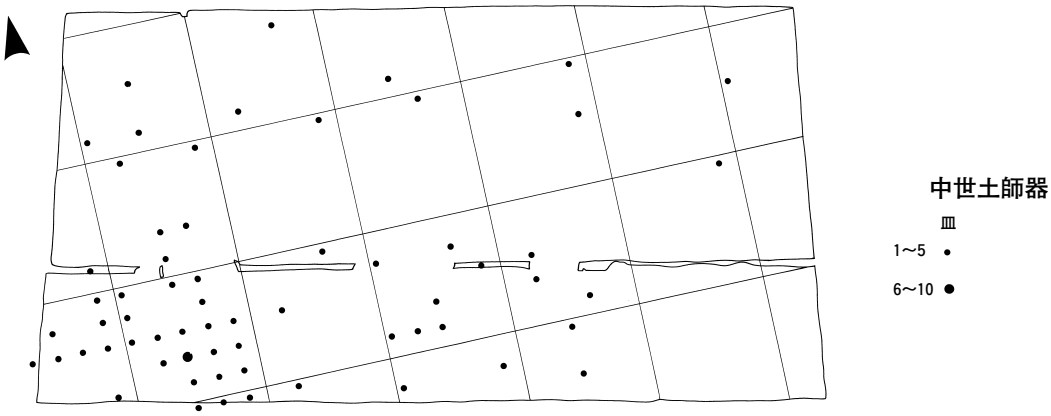
第57図　C11地区中世出土分布図



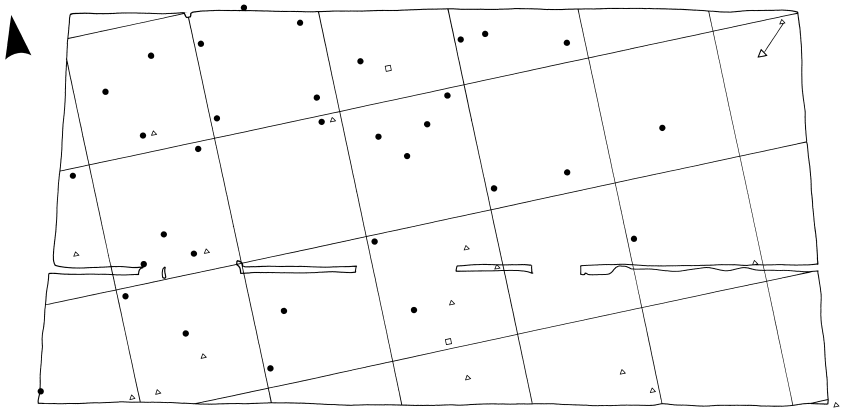
第58図　C13・15地区中世出土分布図（1）





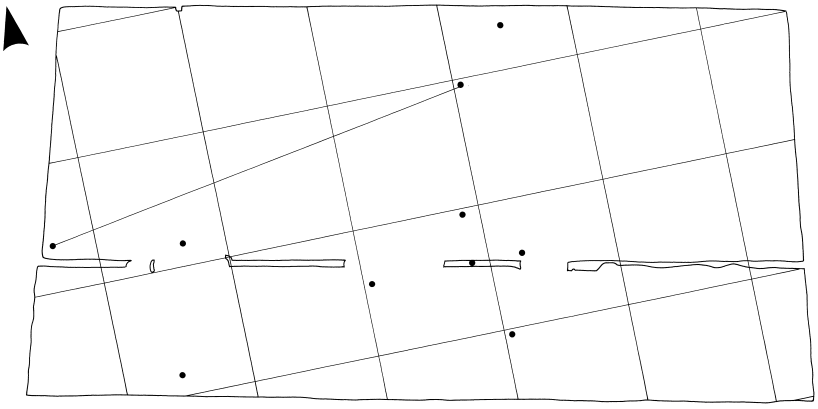


第59図　C13・15地区中世出土分布図（２）
C14・23地区中世出土分布図（１）



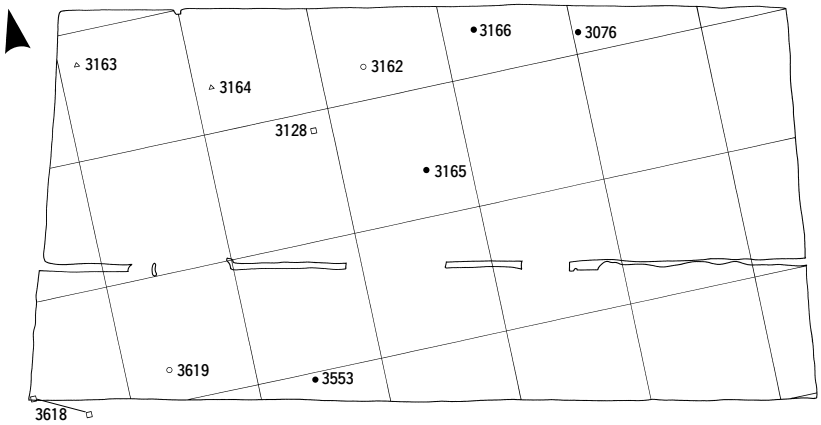
珠洲

	甕	擂鉢	壺
1～5	●	△	□
6～10		△	



八尾

	甕
1～5	●

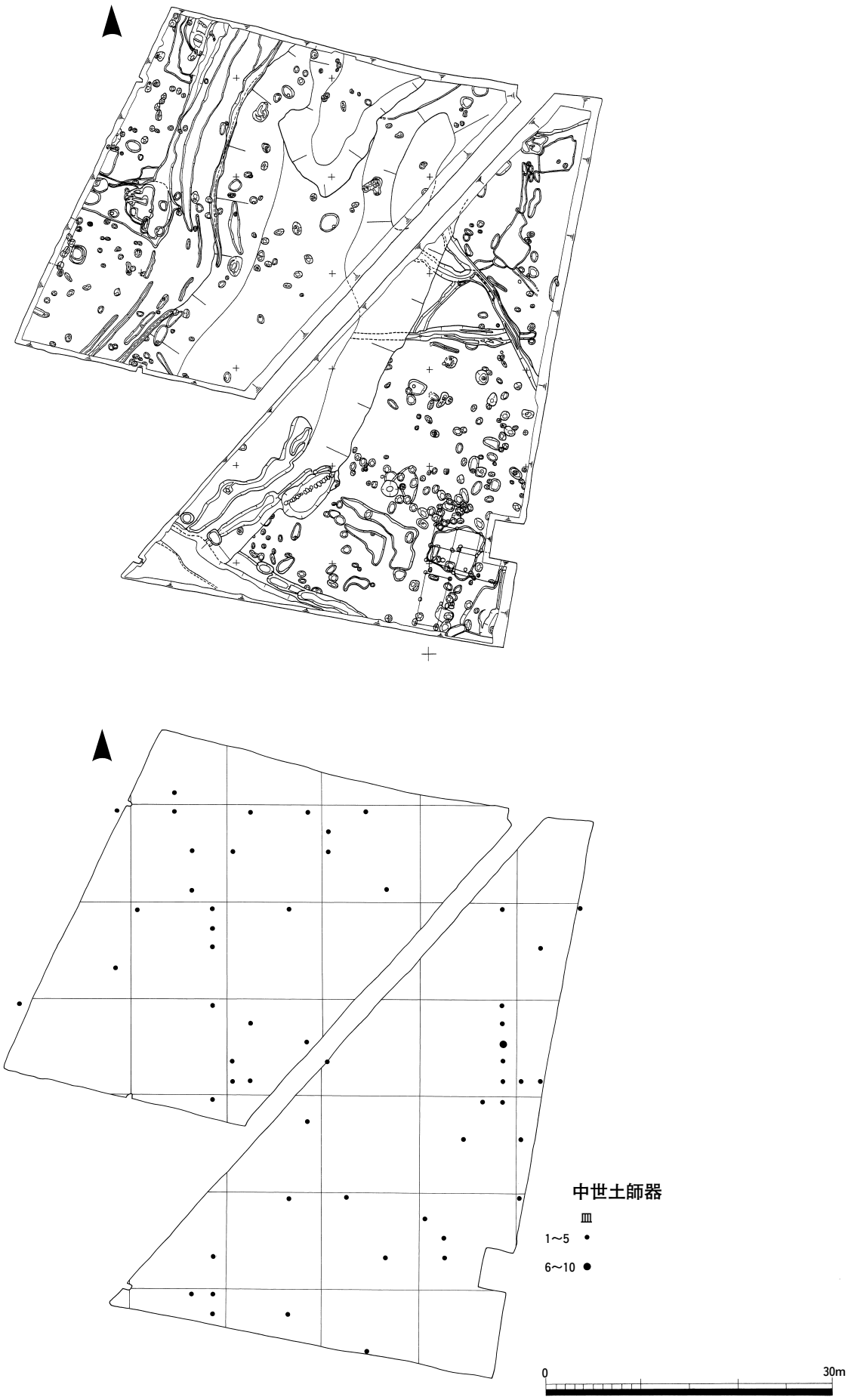


瀬戸美濃　　**中国製陶磁器**

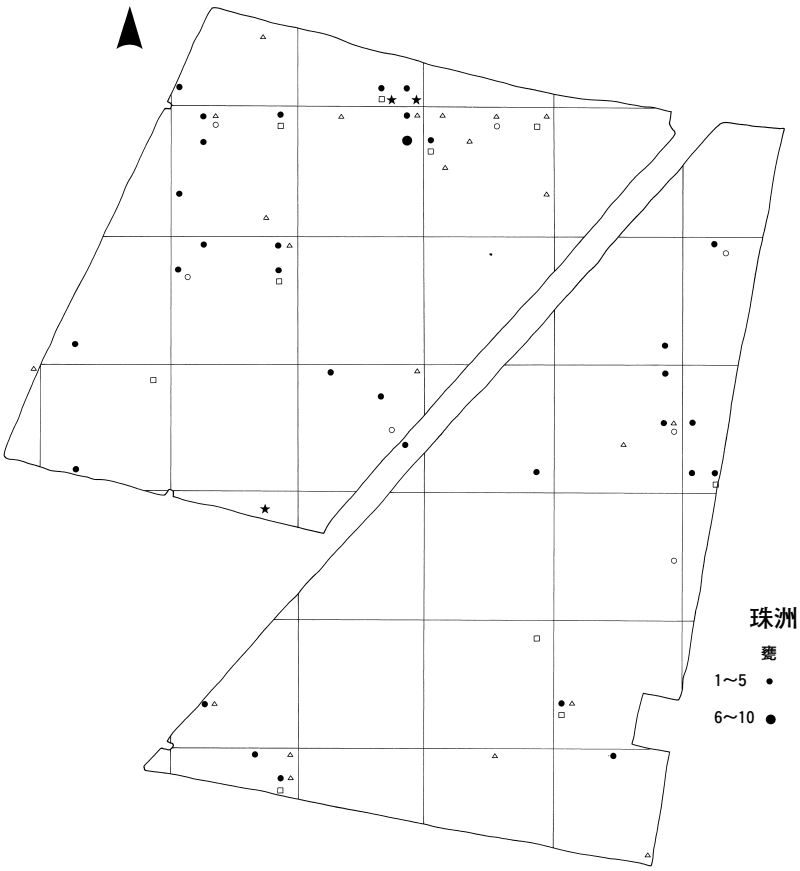
	灰釉	鉄釉	青磁	白磁
1～5	●	△	□	○

0　30m

第60図　C14・23地区中世出土分布図（２）

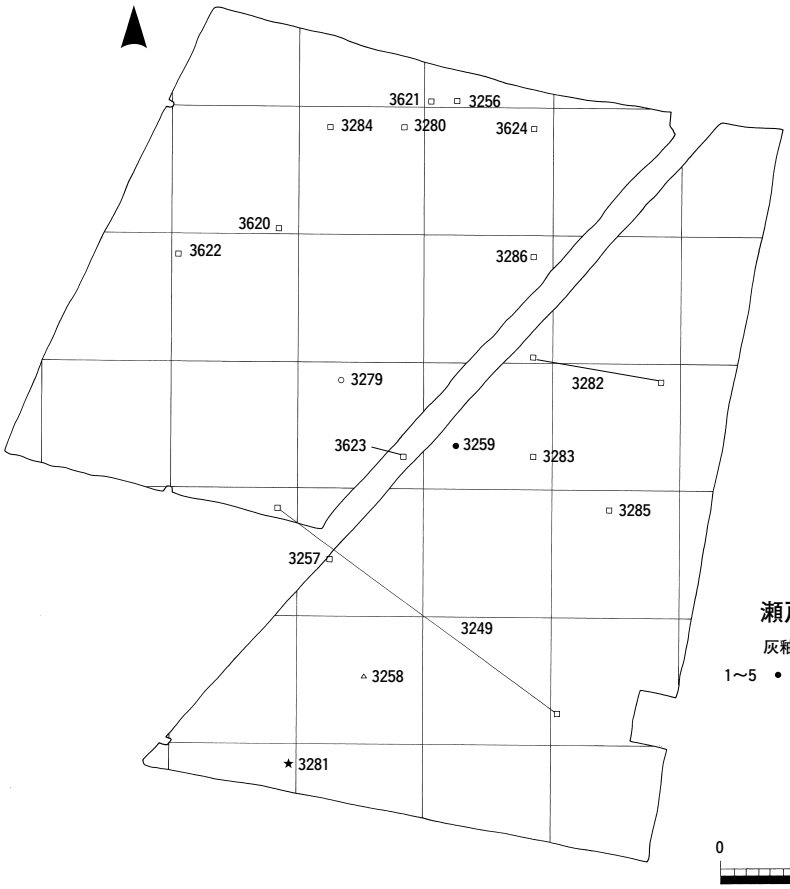


第61図　C16地区中世出土分布図（１）



珠洲　　八尾

	甕	擂鉢	壺	甕	鉢
1～5	●	△	□	○	★
6～10	●				

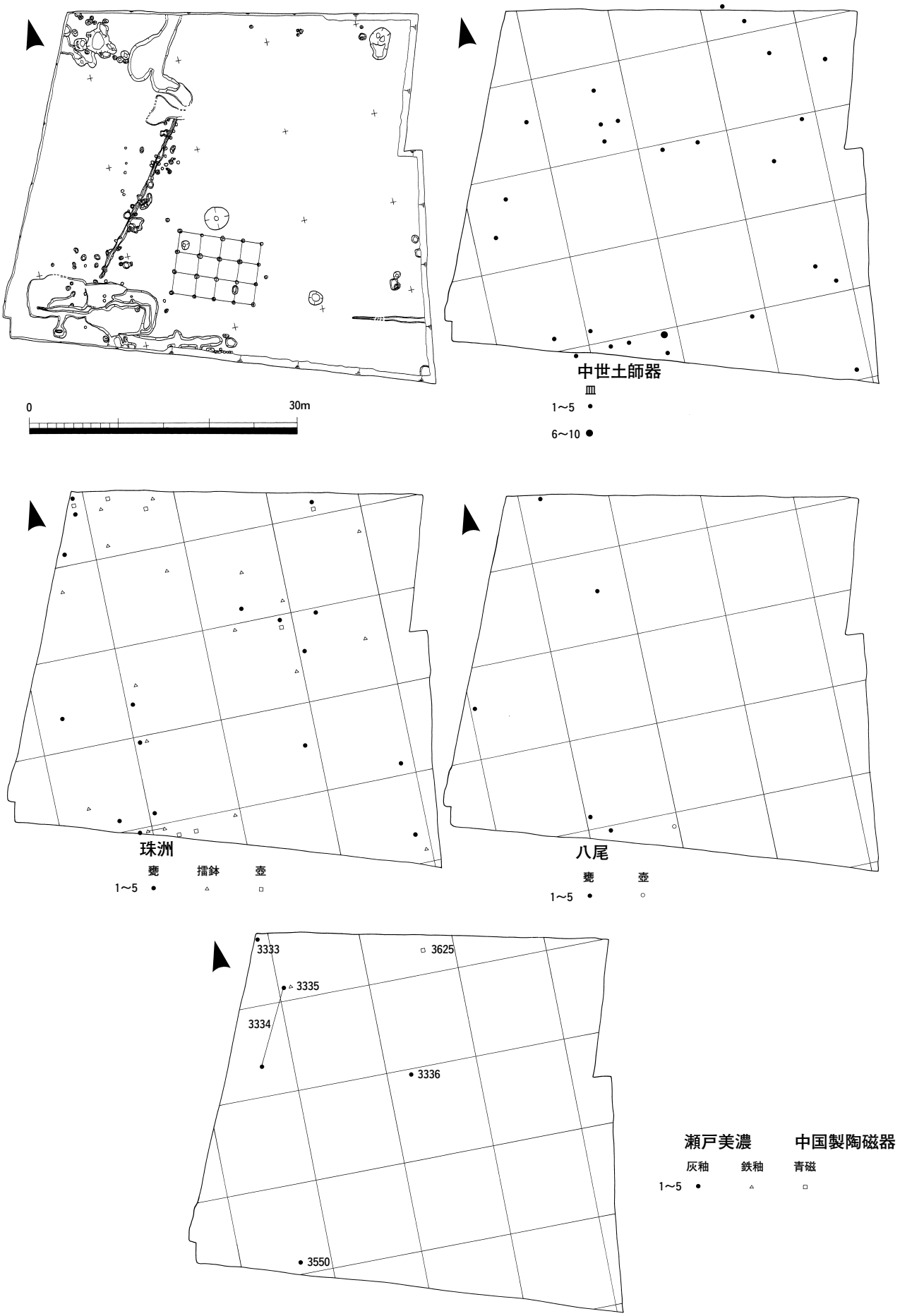


瀬戸美濃　　中国製陶磁器

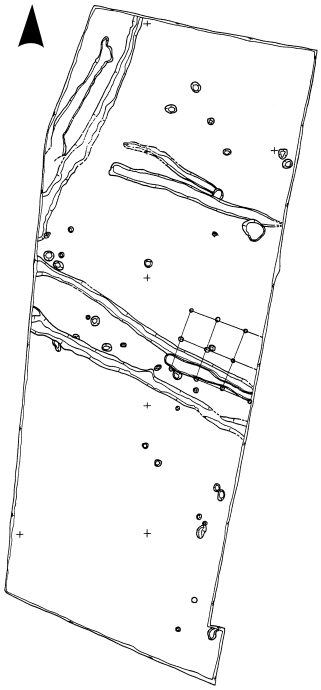
	灰釉	鉄釉	青磁	白磁	染付
1～5	●	△	□	○	★

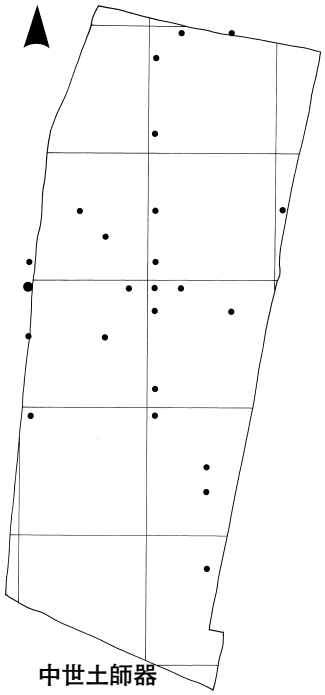
0　30m

第62図　C16地区中世出土分布図（２）



第63図　C18地区中世出土分布図



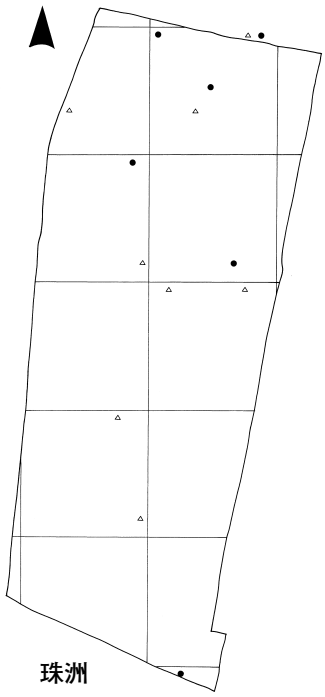


中世土師器

皿

1～5 ●

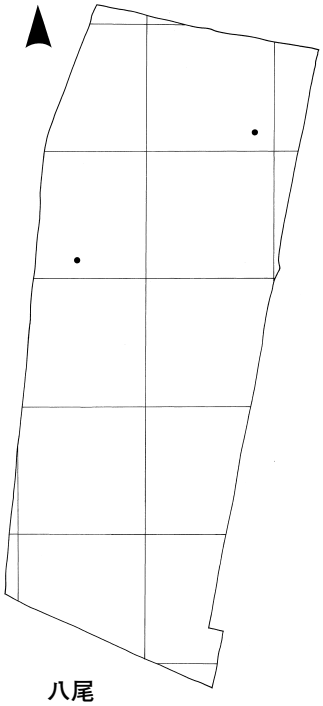
6～10 ●



珠洲

甕　擂鉢

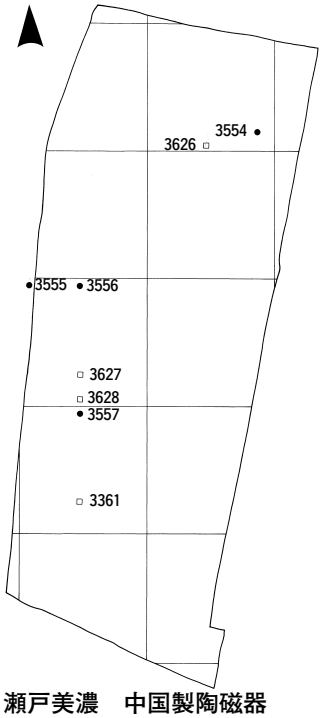
1～5 ●　△



八尾

甕

1～5 ●



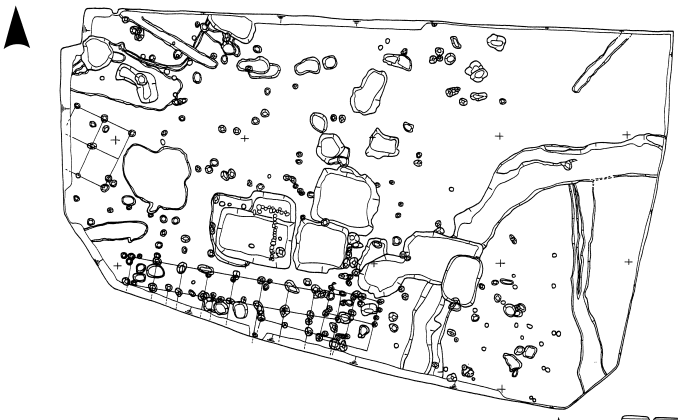
瀬戸美濃　中国製陶磁器

灰釉　青磁

1～5 ●　□

0　30m

第64図　C19地区中世出土分布図

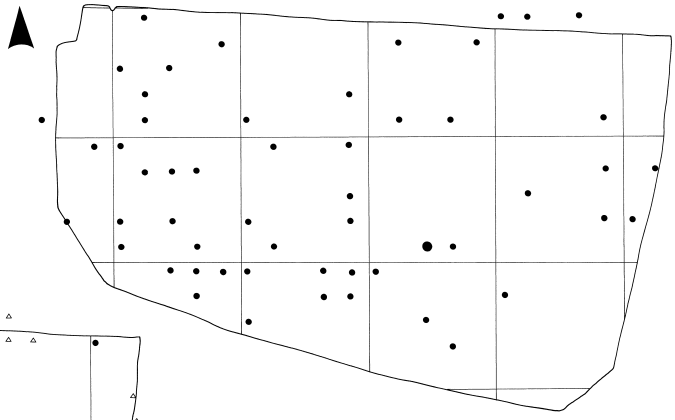


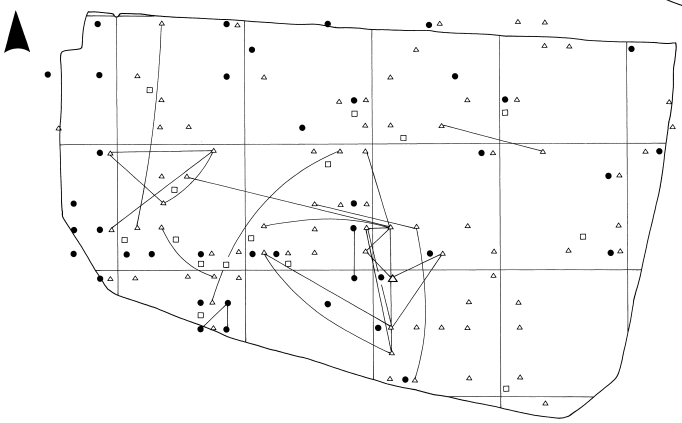
中世土師器

皿

1～5 ●

6～10 ●

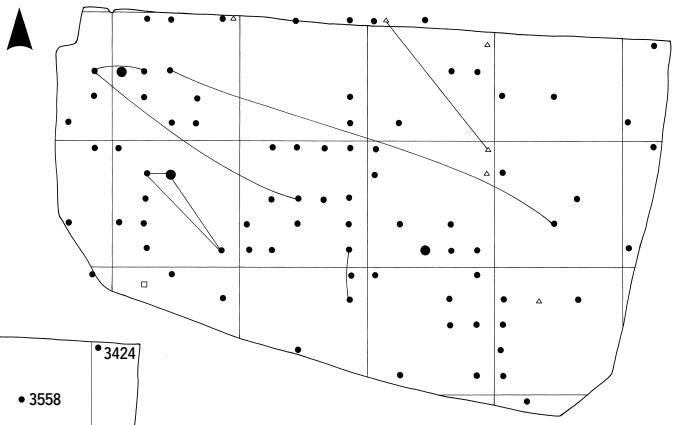




珠洲

甕　擂鉢　壺

1～5 ●　△　□

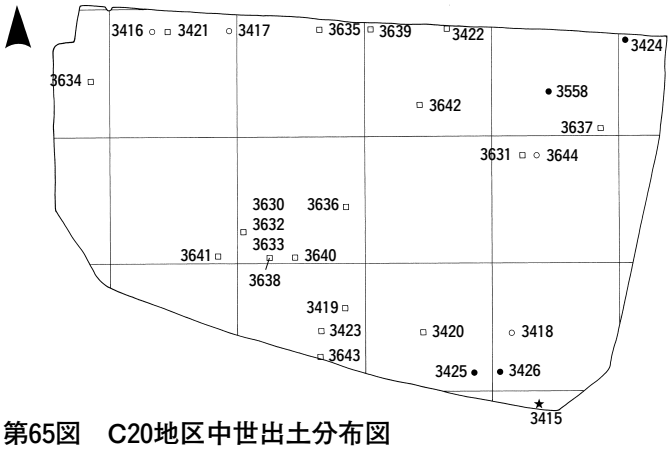


八尾

甕　擂鉢　壺

1～5 ●　△　□

6～10 ●



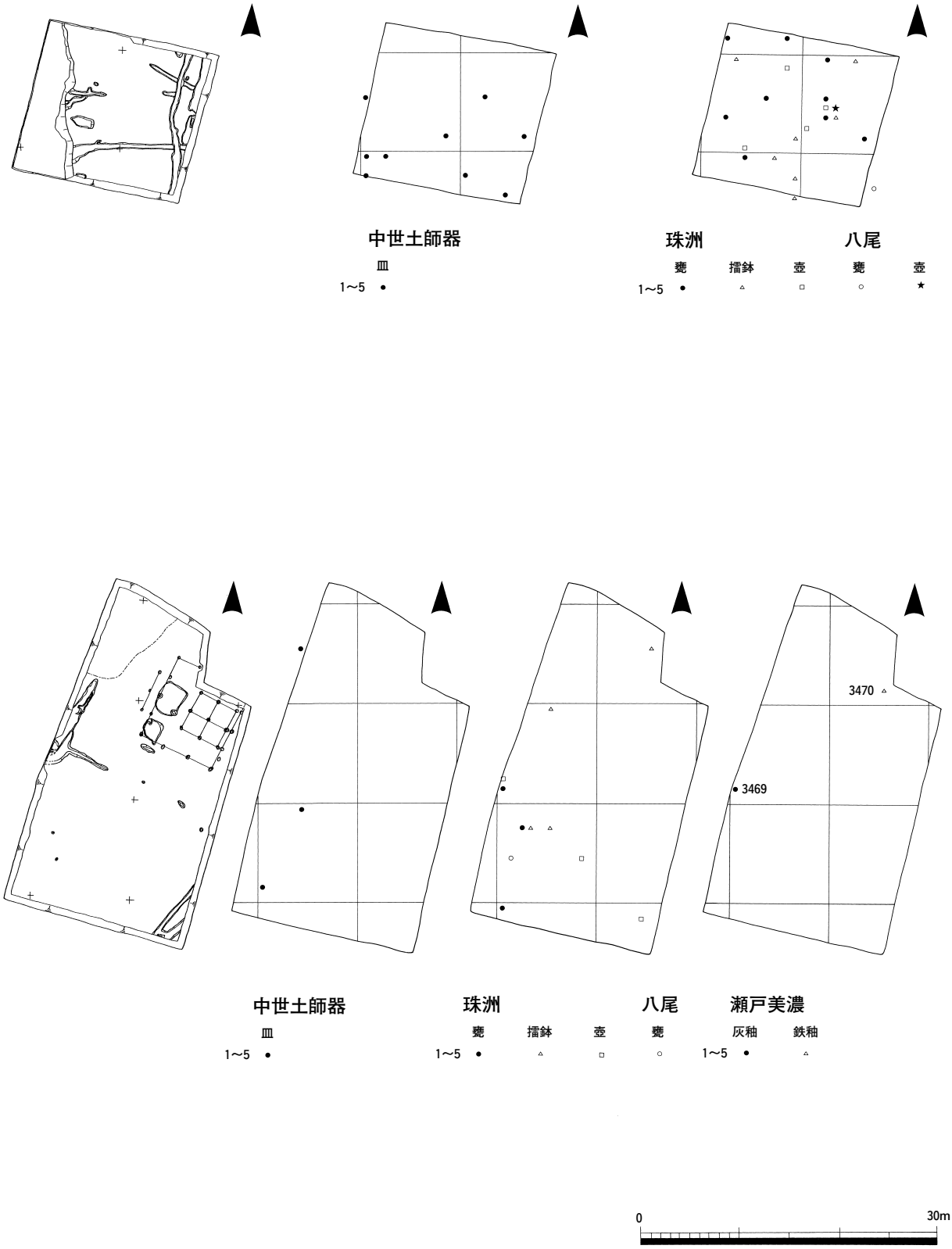
瀬戸美濃　中国製陶磁器

灰釉　青磁　白磁　青白磁

1～5 ●　□　○　★

0　30m

第65図　C20地区中世出土分布図



第66図　C21、C22地区中世出土分布図

第Ⅵ章　考察

１　任海宮田遺跡出土の古代土器分布について

はじめに

任海宮田遺跡は当財団によって平成12年度～15年度にかけて発掘調査を実施した。年度順にＡ～Ｃ地区に大別される。平成７年度～９年度に、富山県埋蔵文化財センターが国際健康プラザ建設に伴う発掘調査を、富山市教育委員会が市道西荒屋新保線道路改良工事に伴う発掘調査を行っている。８世紀後半から10世紀初頭の古代集落遺構である。周辺からは多量の土師器・須恵器の他に、墨書土器・灰釉陶器・緑釉陶器・奈良三彩・製塩土器などがみられ、任海宮田遺跡の中でも中核的な集落の状況が確認されている。これらの土器類について、出土地点ごとに数量を集計し、任海宮田遺跡における出土遺物の分布傾向を検討し、若干の考察を行いたい。

（１）墨書土器の分類

墨書土器が出土した地区ごとに、器種と種類別に分けて各文字の数量を計測した。数量は、各報告書に掲載されている土器一覧表または土器の記述から計数を行った。文字については判読可能な文字を分類して表１・２・３に数量を示している。それ以外の？や□がついている文字は判読不明文字とした。各文字の分布は第１図に、出土位置は総数量を第２図に●で、硯（円面硯・風字硯）を▲、石帯を■、瓦塔を★で表示し、記号の横に数量を明示した。

Ａ各地区の出土傾向

当財団が調査を行ったＡ地区では、Ａ１地区とＡ４地区を中心に古代集落遺構の分布を確認し、それに伴い多数の土師器や須恵器といった土器群が出土した。墨書土器の個体数はＡ１地区４点、Ａ４・Ａ８・A14地区は各１点である。土器の種類は、須恵器３点、土師器４点とほぼ同数になる。識字できた文字はＡ１地区の「城長」、Ａ８地区「山」で、集計されていないがＡ１地区から線刻で「成」と記された須恵器も出土している。全地区の墨書土器総出土数が741点あるうち、Ａ地区の比率は７点（１％）と極端に少ない傾向がみられた。

Ｂ地区の集落は、掘立柱建物12棟、礎石建物１棟、竪穴住居36棟で構成される。建物群は、位置関係や遺物の出土傾向から東西２グループに大別できる。西側はＢ１・Ｂ２・Ｂ６地区で検出した建物で、掘立柱建物・礎石建物・竪穴住居の建物群、Ｂ１地区には大型の掘立柱建物、Ｂ６地区に９世紀後半の土師器焼成遺構があり、Ⅱ期～Ⅳ期が該当する。東側はB12・B13地区の竪穴住居のみの建物群で、Ⅰ期～Ⅲ期と考えられる。東西建物間で存続時期に差異があり、墨書土器の出土傾向についても、集団間の差が認められた。

墨書土器はＢ地区全体で335点確認している。このうち判読可能文字は176点である。西側地区での総数は292点で、多数出土した文字は「成」が86点（30％）、「平」が42点（14％）である。「成」は主にＢ６地区で集中的に出土し、種類は須恵器41点（48％）、赤彩土師器20点（23％）、土師器19点（22％）、黒色土器６点（７％）である。「平」の種類は土師器24点（57％）、須恵器14点（33％）、赤彩土師器４点（10％）で土師器が半数を占める。東側地区の総数は43点で西側より少ない。10点以上出土したのは「貳」13点（30％）である。「貳」の種類は須恵器10点（77％）、赤彩土師器椀Ａ２点（15％）、

土師器椀Ａ１点（８％）となる。東西両地区から出土した文字は「城長」４点で、西地区は土師器椀Ａ１点（25％）、東地区は須恵器坏Ａ・杯蓋・赤彩土師器椀Ａ各１点（25％）である。

器種は、杯や椀といった日用雑器に多く記されている。B 地区は、西側地区は「成」の須恵器坏と「平」の土師器椀Ａが多く、東側地区は「貳」の須恵器坏の割合が高い傾向がみられた。西側地区から主に出土するⅢ・Ⅳ期の文字が、「平」と「成」で建物群ごとに分かれ、東側地区は「貳」が建物群を経営した集団を象徴する文字と考えられる。

C 地区の古代集落遺構は竪穴住居51棟、掘立柱建物１棟で構成されている。西側地区と東側地区に大きく分かれ、東側地区は集落の密度が高い傾向にある。Ⅰ期から形成された集落が、Ⅱ期にかけても同様に推移している。Ⅲ期からは減少傾向で、Ⅳ期は単独の竪穴住居が散在し、掘立柱建物が伴う。C19・22地区などでⅠ～Ⅱ期での竪穴住居の重複が多く、同時期内での建て替えが頻繁にあったとされている。

C 地区の墨書土器の総数は、287点で判読可能な文字は112点である。西側地区での総数は96点で、多数出土した文字は「成」26点（27％）となる。種類は須恵器杯 A22点（85％）、土師器椀Ａ２点（９％）、土師器皿、黒色土器椀Ａ各１点（３％）と須恵器が多い。西側から「家成」６点・「斐家成」３点・「家」２点を確認している。東側地区での総数は191点で、「縄足」23点（13％）、「縄」10点（６％）が出土している。「縄足」の種類は須恵器21点（91％）、土師器２点（９％）、「縄」の種類は須恵器８点（80％）、土師器・赤彩土師器各１点（10％）である。東側地区は「足」の６点があり、「縄足」関連文字が主に分布している。また、器種は杯・椀といった一般的な日用雑器が墨書の対象となっている。西側地区では、C９地区を中心としたⅡ期の「家成」・「斐家成」・「庄」、C10地区でⅢ期の「成」が多い。東側地区は、「縄足」が C20地区を中心として、Ⅱ～Ⅲ期に確認される。「貳」はⅢ期以降、「城長」はⅣ期となる。

富山県埋蔵文化財センターが調査をした北東部分Ａ～O 地区は、８世紀前半から10世紀初頭に渡って扇状地の開発に従事した拠点集落で、一辺３m 未満の小型竪穴住居が多数確認されている。墨書土器は、88点で「城長」、「寅成」、「貳」などが出土している。特殊な文字は、I 地区で「丈部田能古」と人名が土師器鍋胴部外面に、L１地区では、「酒ヵ杯」と赤彩土師器椀の底部から胴部にかけて内面に書かれている。その他に「寅」「稲村」「勿」「福」「木」「人」「稲」「富」「有成」「豊」「家」などが出土した。種類は、須恵器52点（60％）、土師器32点（36％）、赤彩土師器・黒色土器各２点（２％）である。富山市教育委員会が調査されたＡ～E 地区は、西側地区と東側地区の間に位置している。竪穴住居や掘立柱建物が調査区のほぼ中央部に集中する。出土した墨書土器は24点で、「墾田」５点（21％）、「大」２点（８％）、「城長」「仁」「縄」各１点（４％）である。種類は須恵器９点（38％）、土師器７点（29％）、赤彩土師器６点（25％）、黒色土器２点（８％）で供膳具が多い傾向がみられる。その他に、平成９年度に富山市教育委員会が試掘調査された56T から125点、その南隣の A 地点から66点出土している。56T からは「城長」が53点確認された。

B 全地区の出土傾向

全地区の種類ごとの分布傾向は、計測数741点のうち、須恵器428点（58％）、土師器221点（29％）、赤彩土師器64点（９％）、黒色土器28点（４％）である。須恵器と土師器（赤彩土師器、黒色土器含む）の数量の比率は須恵器がやや多い。最も出土比率の高い文字は「成」112点（18％）、「平」43点（７％）で、「家成」・「斐家成」を含めて西側に集中している。東側地区では、「縄足」24点（４％）で、「縄」・「足」の関連文字を含め多くみられる。「貳」は24点（３％）、「城長」が13点（２％）みられた。

西側地区のⅢ・Ⅳ期の文字が、「平」と「成」で建物群ごとに大きく分かれ、C10地区で「成」が広範囲に分布していることから、別集団であった可能性が考えられる。東側地区では、Ⅱ～Ⅳ期の「縄足」・「貳」・「城長」などの文字群が出土しており、少なくとも３つの集団が集落の運営に携わっていたと推測する。その中で、管理する側とされる側が存在し、B１地区のⅢ・Ⅳ期の建物群は管理する側、B６地区は「成」の分布範囲がC10地区まで広がっているため、管理集団の一部と考えられるがその中核域は別であると考えられる。東側の建物群は「貳」の分布範囲が東側から北に広がる点や、建物構成や出土遺物の傾向から、Ⅲ期では管理される側としている。（武田2007）

また、筆記道具である硯（円面硯・風字硯など）を、各集落で確認した。図に掲載していないが、転用硯は、B１地区８点、B２地区２点、B６地区15点、C９・C10地区各１点である。墨書土器が外部からの流入ではなく、集落内で記載されていたことが考えられる。墨書土器には杯・椀といった日用雑器が多く、これが集落の住民が土器の使用にあたって、他の土器との識別を目的として記されたか、集落または住居単位での祭祀や儀礼に際して墨書されたか判別は難しい。前者であれば日用雑器として長期間使用され、後者の場合は祭祀の終了時に廃棄される可能性が高く、短期間の使用目的のケースとなる。この他にも多面的な用途が想定できるため、文字内容は問わず、客観的データとして集落分析の一要素として位置づけておきたい。

（２）施釉陶器と製塩土器の分布

任海宮田遺跡で出土した土器の中には、灰釉陶器や緑釉陶器など搬入品の出土数も多く、当時としては価値の高い品物の一つとして扱われていた。製塩土器は沿岸部周辺で製塩生産を目的としてのみ焼かれた土器である。これらの土器類の分布状況を検討し、分類・計測を行った。数量については、前述の墨書土器の計測の手法に従い分類して、表４に示している。出土位置は第３図に●を灰釉陶器、▲を緑釉陶器、■を奈良三彩とし、製塩土器は第４図にドットで明示した。

Ａ各地区の出土傾向

財団が調査を行ったＡ地区では、緑釉陶器が２点、Ａ１・Ａ４地区から出土したのみである。全地区緑釉陶器出土数からみた比率は９％と少ない傾向がみられる。

Ｂ地区ではＢ１・Ｂ４・Ｂ６地区で主に分布し、Ｂ１地区の大型掘立柱建物から灰釉陶器が多量に出土している。時期は、黒笹90号窯式を中心に若干折戸53号窯式まで下るものがあるため、黒笹90号窯式の製品を一括購入し、その後必要に応じて逐次補充されていたとしている。また、高級品とされる灰釉陶器の輪花椀・輪花皿・段皿などがみられず、出土した椀・皿等の食器類に使用痕が著しく認められることから、公的な祭祀に関連した使用と言うよりむしろ私的な場における日常的な食器としての使用が想定されている。（内田2001）灰釉陶器は170点、緑釉陶器は13点である。灰釉陶器の器種は、椀81点（47％）、皿34点（20％）、壺30点（18％）、椀 or 皿13点（８％）、長頸壺７点（４％）、短頸壺・広口壺各２点（１％）、小椀１点（１％）となる。椀・皿等の食器類が多く、使用痕が認められる。緑釉陶器は13点で、Ｂ６地区で12点と集中的に出土している。軟質のものが多く、京都洛北産のものである。器種は椀６点（46％）、皿４点（31％）、椀 or 皿３点（23％）で、供膳具が中心となっている。

Ｃ地区は一括集中出土することはなく、東側地区中心に散在している。灰釉陶器は２点、緑釉陶器椀６点、奈良三彩の火舎１点である。器種は灰釉陶器が、壺１点、瓶２点となる。Ｂ地区に比べ出土数が少ないが、奈良三彩や鉄鉢形土師器鉢などが竪穴住居群周辺に散在するＣ８・C10地区付近では、仏教的な活動が推測される。

富山県埋蔵文化財センターが調査を行ったC・I・L１・O地区では灰釉陶器４点、緑釉陶器２点確認されている。器種は椀・壺・皿・水注・小瓶である。

製塩土器の総数は263点で、財団が調査したA地区ではA１地区から７点（３％）と全てにおいて少ない傾向が窺える。C地区は24点（10％）、B地区では227点出土している。B６地区は146点（64％）、B１地区は72点（32％）、B12地区は６点（３％）、B13地区は３点（１％）でB６地区とB１地区の中心的な建物群の分布と重なるように出土している。Ⅱ～Ⅳ期の分布状況から西側地区にある中心的な建物群に塩を入れる容器として搬入されていたと考えられる。富山県埋蔵文化財センターが調査を行ったF・L２地区では２点富山市教育委員会が調査したB・E地区で３点確認されている。

（３）その他の出土傾向

B１地区から羽口や土錘など手工業生産に関わる遺物が出土している。特に土錘については他の建物群に比べ303点と多量の樽型土錘が製塩土器と同様、調査区中央から集中して出土している。西側の建物群は集団漁撈行為や土師器生産、鍛冶関連など手工業生産に関わっていた可能性が高い。

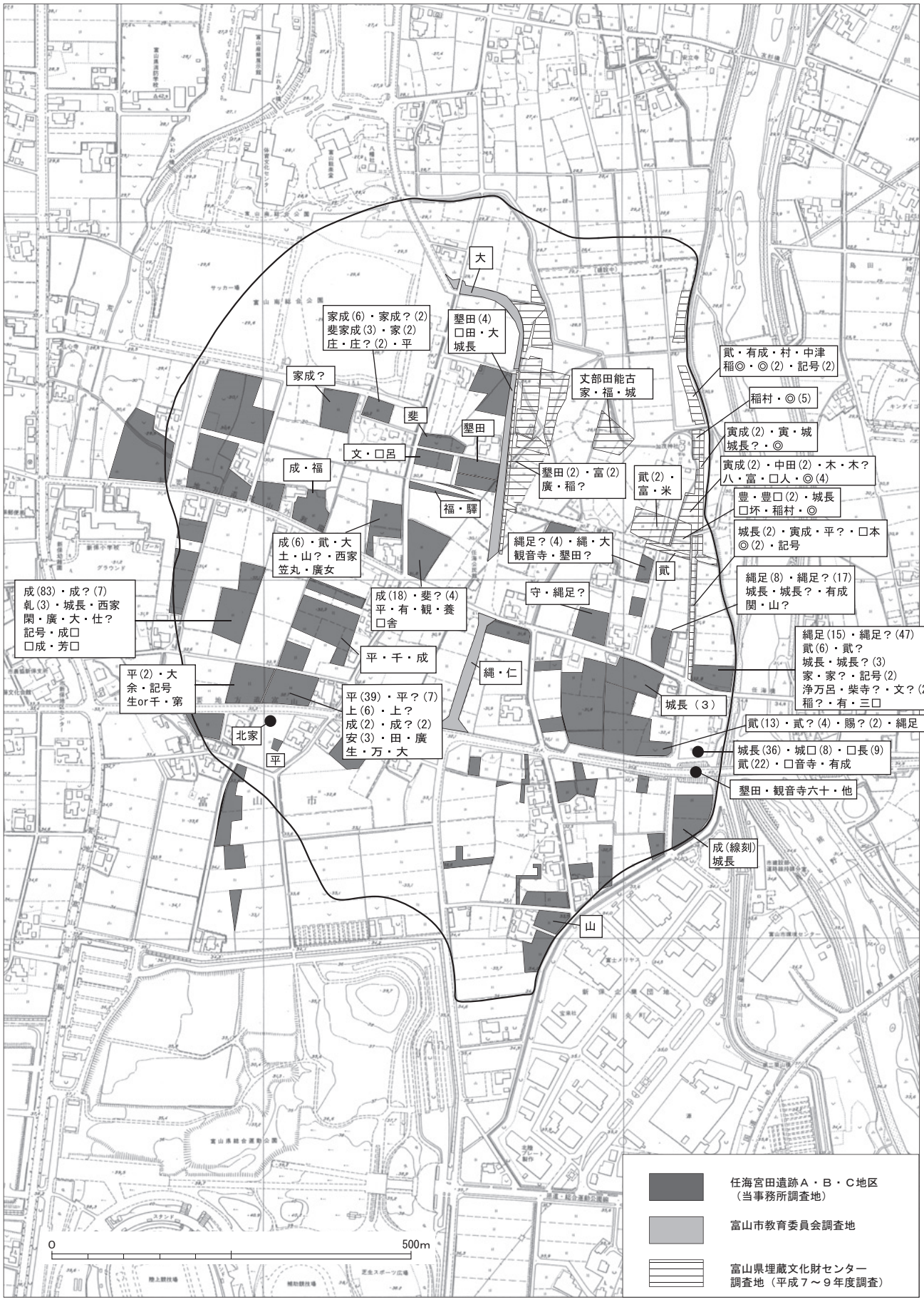
また各集落の周辺では石帯を確認している。B６地区から石材が蛇紋岩の巡方と、石材がマイクログラニットの丸鞆、B13地区で丸鞆、L２地区で巡方が出土し、石材は蛇紋岩である。E地区では巡方を２点確認し、１つは材質が瑪瑙である。縦3.3～3.8cm、横3.0～3.7cmで、瑪瑙製石帯のみ縦、横とも4.1cmと北陸地方で最大級の大きさである。これらの石帯は、形状や石質などから五位以上の役人が保有していたと推測できる。また県内では稀な瓦塔の一部を数点確認している。集落における仏教信仰などが窺える。

（４）まとめ

今回集計を行った任海宮田遺跡から出土している墨書土器は、741点、製塩土器は263点、施釉陶器は200点である。西側地区で、墨書土器389点（53％）、製塩土器223点（85％）、施釉陶器184点（92％）と、B１・B６地区を中心に多数出土している。東側地区は、墨書土器352点（47％）、製塩土器40点（15％）、施釉陶器16点（８％）で、墨書土器がB13地区とC19・C20地区に多数出土がみられた。分布傾向からして、B１・B６地区を中心とした西側地区、B12・B13地区を中心とした東側地区と大きく分かれる。特に集中している西側地区の建物群の居住者が、集落の中の有力者でB１・B６地区の建物群が中心的施設であったと考えられる。

任海宮田遺跡は立地や成立条件から耕地開発を目的とする開墾集落であり、西側地区の建物群から主に出土するⅢ・Ⅳ期の文字が、「平」と「成」で分かれる点や、C10地区で「成」が広範囲に分布していることから、別集団であったと考えられる。また製塩土器が集中しているため、西側地区に塩を入れる容器として搬入していた可能性が高い。Ⅱ～Ⅳ期の「縄足」・「貳」・「城長」の文字群の出土状況は、西側地区のような集落を管理・指導した有力者層の居住域が東側地区に複数存在し、扇状地の開発を進め、財力を増大し富を蓄積したと思われる。そして各集落の周辺から国司クラスの役人が保有するべき石帯が出土し、当時としては価値の高い品物の一つである猿投産の灰釉陶器や洛北産の緑釉陶器などが、遠隔地から運ばれて来ている。在地有力層の主導下で交易・手工業生産・宗教的活動などあらゆる営みが存在していたと推測できる。

以上大雑把な推論を重ねてきたが、集落と文字の普及など周辺地域との比較・検討を要する事項は多く、今後の課題としていきたい。　（細辻　真澄）



第１図　任海宮田遺跡墨書土器分布図

第２図　任海宮田遺跡墨書土器・硯・石帯・瓦塔出土分布図

第３図　任海宮田遺跡施釉陶器出土分布図

第 4 図　任海宮田遺跡製塩土器出土分布図

表１　墨書土器文字別集計表

地区	種類	器種	文字種類																				記号等	判読不明文字又は墨痕等	小計	合計
			成	平	貳	上	大	安	乾	城長	腸	廣	山	田	生	万	余	仕	閑	西家	縄足	第				
A1	須恵器	杯A																						1	1	4
		杯B																						1	1	
	土師器	椀A								1														1	2	
A4	須恵器	杯B																						1	1	1
A8	土師器	椀A											1												1	1
A14	土師器	椀A																						1	1	1
B1	須恵器	杯A		5								1				1								4	11	100
		杯B		4																			1	2	7	
		杯蓋		4																					4	
		皿A																						1	1	
		皿B		1																				1	2	
	土師器	椀		1		3		1																2	7	
		椀A	2	16		2		1						1	1									25	48	
		椀B		2																				3	5	
		皿A		1																					1	
		皿B		1																				1	2	
	黒色土器	椀						1																1	2	
		椀A																						1	1	
		皿B																						1	1	
	赤彩土師器	椀																						1	1	
		椀A		1		1	1																		3	
		椀B		2																					2	
		皿B		1																				1	2	
B2	須恵器	杯A					2										1					1		2	6	10
	土師器	椀A		2																				1	3	
	赤彩土師器	椀																						1	1	
B4	須恵器	杯A																						2	2	7
		杯B																						1	1	
	土師器	椀																						2	2	
		椀A	1	1																					2	
B6	須恵器	杯A	22																					17	39	175
		杯B	9																					11	20	
		杯蓋	8															1						1	10	
		皿B	2																1						3	
	土師器	椀	2						1														1	3	7	
		椀A	13							1		1								1				28	44	
		椀B																						3	3	
		皿B	1																					1	2	
	黒色土器	椀	1						2																3	
		椀A	4																					6	10	
		皿	1																						1	
	赤彩土師器	椀																						1	1	
		椀A	12																					10	22	
		椀B																						1	1	
		皿B	8				1																		9	
B12	土師器	甕																						1	1	3
	赤彩土師器	椀A																						2	2	
B13	須恵器	杯A			8																1			7	16	34
		杯B																						3	3	
		杯蓋			2						1													2	5	
	土師器	椀A			1																			3	4	
		椀B																						2	2	
	黒色土器	椀A																						1	1	
	赤彩土師器	椀A			2																				2	
		皿B									1														1	
B14	須恵器	杯A								1															1	6
		杯B																						1	1	
		杯蓋								1															1	
	土師器	椀A																						1	1	
	赤彩土師器	椀A								1															1	
		椀B																						1	1	
合計			86	42	13	6	4	3	3	5	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	164	342	342

表 2　墨書土器文字別集計表

地区	種類	器種	文字種類																															記号等	判読不明文字又は墨痕等	小計	合計
			成	縄足	縄	貳	家成	足	斐家成	家	城長	福	大	平	土	廣女	西家	笠丸	庄	養	観	有	驛	文	懇田	斐	守	山	有成	関	長	三口	浄万呂	観音寺				
C6	須恵器	杯A	1																																	1	2
	土師器	椀										1																								1	
C7	須恵器	杯A																																	1	1	2
		杯蓋																																	1	1	
C8	須恵器	杯A	3			1																													1	5	19
		杯B																1																	1	2	
	土師器	椀A	2												1	1	1																		2	7	
		皿	1																																	1	
		皿B																																	1	1	
	黒色土器	椀																																	1	1	
	赤彩土師器	椀A											1																						1	2	
C9	須恵器	杯A	1				5		2	1									1																5	15	19
		杯B								1																										1	
		杯蓋					1		1																										1	3	
C10	須恵器	杯A	17																		1														8	26	35
		杯蓋																		1															2	3	
	土師器	椀A												1																						1	
		皿																																	1	1	
		甕																																	1	1	
	黒色土器	椀A	1																																1	2	
	赤彩土師器	椀A																				1														1	
C11	須恵器	杯A										1											1												1	3	4
		杯蓋																																	1	1	
C13	須恵器	杯A																						1											1	2	5
		杯B																																	1	1	
	土師器	椀B																																	1	1	
	赤彩土師器	椀																																	1	1	
C14	須恵器	杯A																							1										3	4	4
C15	須恵器	杯A																								1									1	2	3
		杯蓋																																	1	1	
C18	須恵器	杯																																	1	1	5
	土師器	椀A																									1								3	4	
C19	須恵器	杯A		7	1			1																											7	16	36
		杯B																											1						1	2	
		杯蓋			2			3																											3	8	
	土師器	椀																																	2	2	
		椀A						1			1																								2	4	
		椀A		1																										1						2	
		皿B																																	1	1	
	黒色土器	椀																																	1	1	
C20	須恵器	杯																																	7	7	137
		杯A		10	2	6		1																							1	1		2	65	88	
		杯B		4	1																														4	9	
		杯蓋			1																														11	12	
	土師器	椀																																	1	1	
		椀A		1	1					1	1																			1					11	16	
	赤彩土師器	椀A			1																														1	2	
		皿																																	1	1	
	黒色土器	椀A																																	1	1	
C22	須恵器	杯																																	1	1	13
		杯A			1	1																											1		7	10	
		杯B																																	1	1	
	土師器	椀A											1																							1	
C23	須恵器	杯A																									1								2	3	3
合計			26	23	10	8	6	6	3	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	173	287	287

表 3　墨書土器文字別集計表

調査機関	地区	種類	器種	文字種類																				記号等	判読不明文字又は墨痕等	小計	合計
				城長	懇田	寅成	貳	寅	稲村	大	勿	福	木	人	稲	富	仁	有成	縄	豊	家	酒ヵ坏	丈部田能古				
富山県埋蔵文化財センター	B	須恵器	杯A				1											1							9	11	15
			杯B																						1	1	
		土師器	椀																						2	2	
		黒色土器	椀																						1	1	
	C	須恵器	杯A																						3	3	8
		土師器	椀A	1		2		1																	1	5	
	D	須恵器	杯A																						1	1	2
			杯蓋				1																			1	
	F	須恵器	杯A																						2	2	7
			杯B																						1	1	
		土師器	椀																						1	1	
			椀A								1														2	3	
	G	須恵器	杯A				1																	1	4	6	8
		土師器	椀																						2	2	
	I	須恵器	杯A																		1					1	4
		土師器	椀	1																						1	
			椀A									1														1	
			鍋																				1			1	
	K	須恵器	杯A																					2		2	3
			杯蓋						1																	1	
	L1	須恵器	杯A						1															1		2	7
			杯B																	1						1	
		土師器	椀	1																						1	
		赤彩土師器	椀A																			1			1	2	
		黒色土器	椀A																						1	1	
	L2	須恵器	杯																						2	2	14
			杯A																					4		4	
			杯B																						1	1	
			杯蓋										1													1	
		土師器	椀A			2		1						1											2	6	
	M	須恵器	杯蓋																						1	1	3
		土師器	椀A												1	1										2	
	N	須恵器	杯B																						1	1	1
	O	須恵器	杯																					1	2	3	16
			杯A	1																					2	3	
			杯蓋	1																				2		3	
		土師器	椀																						1	1	
			椀A			1																			3	4	
			椀B																						1	1	
			皿																						1	1	
富山市教育委員会	A	須恵器	杯B							1																1	1
	B	須恵器	杯A		3																				4	7	14
			杯蓋							1																1	
		土師器	椀A	1																						1	
			小型甕																						1	1	
		赤彩土師器	椀A		2																				1	3	
		黒色土器																							1	1	
	E	土師器	椀A																1						4	5	9
		赤彩土師器	椀A														1								1	2	
			皿																						1	1	
		黒色土器																							1	1	
合計				6	5	5	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11	63	112	112

表 4　古代出土遺物集計表

地区	器種	種類									
		灰釉陶器	小計	緑釉陶器	小計	奈良三彩	小計	硯	製塩土器	石帯	瓦塔
A1地区	椀	0	0	1	1	0	0	0	7	0	0
A4地区	椀	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
B1地区	椀	53	124	1	1	0	0	1	72	0	0
	小椀	1		0		0					
	皿	32		0		0					
	椀or皿	8		0		0					
	壺	20		0		0					
	短頸壺	2		0		0					
	長頸壺	6		0		0					
	広口壺	2		0		0					
B2地区	壺	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
B4地区	椀	25	36	0	0	0	0	0	0	0	0
	皿	1		0		0					
	椀or皿	5		0		0					
	壺	5		0		0					
B6地区	椀	3	8	5	12	0	0	4	146	2	0
	皿	1		4		0					
	椀or皿	0		3		0					
	壺	3		0		0					
	長頸壺	1		0		0					
B12区		0	0	0	0	0	0	0	6	0	0
B13地区	壺	1	1	0	0	0	0	1	3	1	0
C9地区		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
C10地区	火舎	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0
C13地区	椀	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
C14地区		0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
C18地区	瓶	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
C20地区	椀	0	1	4	4	0	0	0	18	0	0
	瓶	1		0		0					
C22地区	椀	0	0	1	1	0	0	0	5	0	0
C地区	椀	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
F地区		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
G地区		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
I地区	壺	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
L1地区	皿	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0
	水注	1		0		0					
	小瓶	1		0		0					
L2地区		0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
O地区	小瓶	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
B地区		0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
E地区		0	0	0	0	0	0	0	2	2	0
合計		176	176	23	23	1	1	10	263	6	2

参考文献

内田亜紀子　2001「任海宮田遺跡出土の灰釉陶器」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団

武田健次郎　2007「古代建物変遷」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団2007

武田健次郎　2007「墨書土器について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

武田健次郎　2007「製塩土器について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

武田健次郎　2007「大型掘立柱建物について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

田中広明　1990「律令時代の身分表象（Ⅰ）－帯金具の生産と変遷－」『土曜考古第15号』

田中広明　1991「律令時代の身分表象（Ⅱ）－腰帯をめぐる人々の奈良・平安時代－」『土曜考古第16号』

中村亮仁　2007「任海宮田遺跡Ｂ地区出土の古代土器組成」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団

富山県文化振興財団　2006『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』

富山県埋蔵文化財センター　1996『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1997『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山県埋蔵文化財センター　1998『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

富山市教育委員会　1998『富山市任海宮田遺跡試掘調査概要－県営公害防除特別土地改良事業に伴う試掘調査（３）－』

富山市教育委員会　1999『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』

中野由紀子　2001「任海宮田遺跡の墨書土器について－Ｂ１地区出土資料の紹介－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団

中野由紀子　2002「任海宮田遺跡の墨書土器（２）－平成13年度出土資料の紹介－」『富山考古学研究第５号』富山県文化振興財団

平川　南　1992「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集

森田利枝　2003「任海宮田遺跡の墨書土器－平成14年度出土資料の紹介－『富山考古学研究第６号』富山県文化振興財団

2　任海宮田遺跡における中世集落の動態

はじめに

任海宮田遺跡では、今回の報告以外にも多くの調査が行なわれており、その結果として検出された中世の建物は約240棟に及ぶ。建物外の遺構も多数あり、同時に大量の遺物も残された。このように、中世の遺構・遺物は量・種類ともに多岐に渡り、その全てについて総括して述べていくことは難しい。そのため、ここでは主要な構成要素となる建物と土器について、任海宮田遺跡での様相をまとめ、中世集落の動態を追っていくことにしたい。

（1）中世集落の変遷

ここでは、中世における建物の分布を中心に、集落の変遷をまとめておきたい。遺跡範囲の図面上に当財団や県埋蔵文化財センター（富山県埋蔵文化財センター1996・1997・1998）、富山市教育委員会（富山市教育委員会1999）による主要な調査地区を配した。そこに、年代毎に建物を検出した地区と、建物は確認されないが土坑・溝などが検出された地区を示す（第１図）。建物面積については、時期毎の図面に建物群の分布範囲に応じた建物面積の構成を示す（第２図）。建物面積は１類：100㎡以上、２類：50㎡以上100㎡未満、３類：25㎡以上50㎡未満、４類：25㎡未満に分けている。

A 建物分布と建物規模の推移

〈13世紀代〉

遺跡全体に集落の形成が始まるのは13世紀代頃となる。しかし、一部は12世紀後半代に遡るため、それらも含んでいる。この段階では、建物群の分布範囲は、西・中央・東ブロック３つの範囲に分けられる。これらは旧河道や礫層の隆起により遺構が希薄となる部分で分断される。また、各ブロック内も旧河道が確認されており、さらに細分される。

西ブロックでは旧河道による分断が顕著で、南北方向に長い微高地上に建物群が形成される。特に南側のＢ１・３・４地区を中心に建物70棟が分布する。規模は１・２類が多くある。

中央ブロックは他のブロックに比べ範囲が狭く、建物数も７棟と少ない。建物規模では１類はないものの、小型の４類を含まない。西・東ブロックに比べ、均質的な建物群構成である。

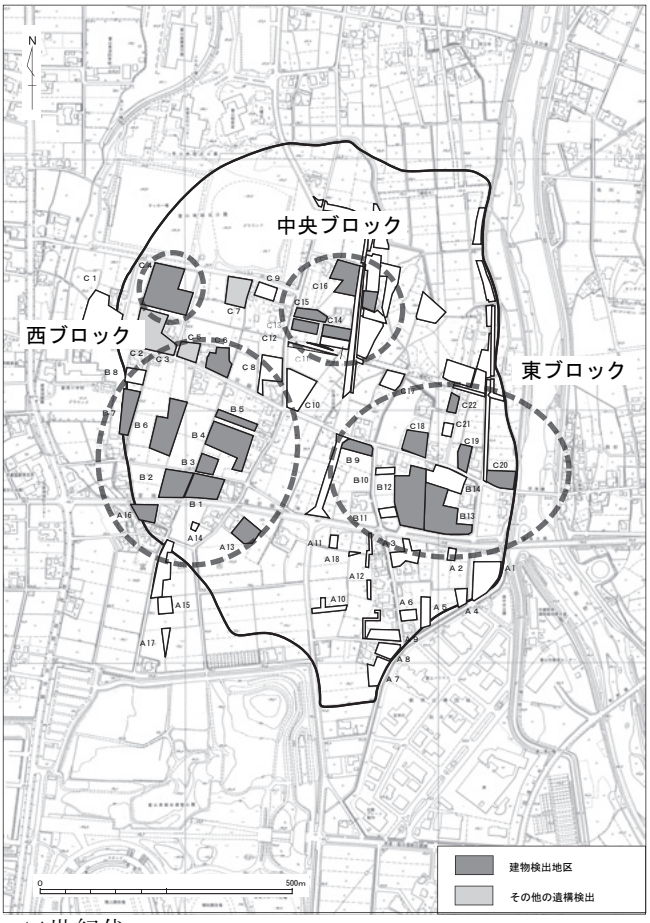
東ブロックは熊野川沿いの南北に長い範囲に多くの建物が分布する。また、それらから距離をおいた遺跡の中央寄りでも、Ａ３・６、B10・11地区からなる南北方向の建物分布範囲が認められる。これらを合わせると、63棟の建物が存在する。規模はB12地区やＬ１地区（県調査地区）を中心に大型の建物が多く、そのため東ブロックの北半に１類が多い傾向にある。また、C20地区では４類のみとなっているが、桁行８間で梁行不明の建物が確認されており、全体が判明すれば、かなり大型の建物が存在していたと考えられる。

〈14世紀代〉

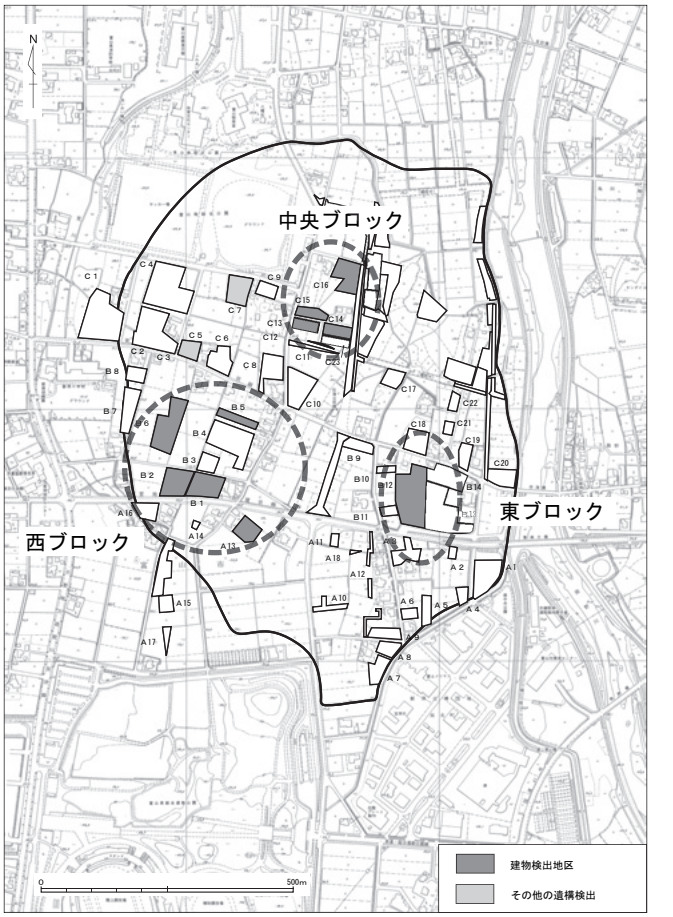
西ブロックでは、建物分布は南北に分れる。北側はＣ２・３・４地区に３棟があり、南側との間にも遺構の分布はあるものの、希薄である。南側には40棟があり、A13・16へと建物分布を広げる。建物規模は１・２類の比率が低くなる。北東側にあるＣ５・７地区では、溝による区画範囲に密集する土坑群が、後半代に形成され始める。

中央ブロックは建物分布域が北に移る。建物は８棟、規模も１類は含まれない点など、前段階とあまり変化しない。

13世紀代



14世紀代



15世紀代

16世紀代以降

第１図　中世遺構分布の変遷

東ブロックでは、前段階では南北に長かった建物の分布が狭まり、建物数も24棟と大幅に減少する。建物規模には１類がわずかに残るが、２～４類で主に構成され、４類が半数程を占める。

〈15世紀代〉

西ブロックでは前段階の南側分布域が継続するが、該当する地区は少なくなる。建物も９棟と少なく、散在する傾向にある。建物規模は１類が無くなるものの、２・３類は一定量存在する。また、北側にはＣ５・７地区で土坑群が継続して形成される。

中央ブロックは建物７棟と、棟数・分布ともに前段階と同様の傾向を示す。建物規模は４類のみと、縮小する。

東ブロックではB12地区のみで、６棟が確認されるに止まる。建物規模は１類が含まれ、前段階とほぼ同様の構成を維持する。また、B12地区では台形状の区画も確認されるが、内部に建物は検出されず、区画された屋敷地であったかは明かでない。

〈16世紀代以降〉

建物は中央ブロックのみで５棟が確認されるが、いずれも近世以降の所産である。つまり、中世における建物群は前段階で終息することになる。ただし、建物以外の遺構や遺物では16世紀代と考えられるものが確認されている。その範囲はおおむね中央ブロック周辺とB12地区となる。このように、建物は確認されないものの、16世紀代の遺構・遺物は少なからずあることから、調査区域以外での建物の存在や、あるいは建物構造の変化によりその存在を十分把握し切れていない可能性もある。

Ｂ集落の動態

以上のように、任海宮田遺跡では13世紀代から遺跡全体で建物群が形成される。建物規模を踏まえると、大型の建物１類を経営の中心とし、それより規模の小さい建物２～４類とともに建物群を構成している。特にＢ４地区は最大面積の建物が検出されており、この地区を含んだＢ地区西側は建物の密度も高いことは報告時に指摘している（青山2007）。14世紀代では西ブロックは南北に分断、東ブロックは縮小化する。建物１類は東・西ブロックの一部のみにあり、全体として建物規模が小さくなる。また、遺跡の北西にあるＣ５・７地区では墓壙や宗教施設に関連する様相が窺える。15世紀代になると、東・西ブロックの範囲はさらに狭くなる。建物棟数も多くないことから、建物が散在する景観であったと考えられる。また、建物規模も縮小化が進み、小型の建物４類が多くを占めるようになる。その構造はそれまでの総柱から側柱へと変化する。16世紀代以降、近世になるまで建物は確認されない。しかし、Ｃ５・７地区での土坑群を始めとして遺構や遺物はある程度あり、その内容は分からない部分が多いものの、集落は存続していたものと思われる。

（２）土器組成の比較

任海宮田遺跡でのＡ・Ｂ・Ｃ地区の報告を通じて、中世の土器組成について示してきた。各地区での内容については、それぞれの報告で述べられている（中村2006、森2007）。ここでは、その成果と本報告書のＣ地区での内容を含め、任海宮田遺跡全体での土器組成の比較を行なっておきたい。しかし、地区によって主体となる時期が一様でない場合や、かなりの時期幅を有する場合があるなどの問題点もある。そのため、今回は遺物の様相から概ね中世前半（13～14世紀）と中世後半（15～16世紀）に主体を持つ地区を抽出して示しておきたい。そのため、時期を把握しきれない地区は除いているため、全地区を対象としているわけではない（第３～５図）。

また中国製陶磁器・瀬戸美濃・瓦質土器について、出土地区に種類毎のシンボルを決め、出土点数

13世紀代

14世紀代

15世紀代

16世紀代以降

第２図　建物規模の比較

に応じてその大きさを変えて示す。また、中国製陶磁器と瀬戸美濃の種類・時期・器種などの構成を主要な地区に関して示す（第６～10図）。

Ａ土器組成

〈中世前半〉

Ａ１・３・４、Ｂ１～４・６・７・12・13、Ｃ６・10・20地区を対象とした。

全体の傾向を平均値として示すと、種類別の構成では中世土師器38.1％、珠洲43.9％、八尾9.7％、瀬戸美濃1.5％、中国製陶磁器6.1％、瓦質土器0.2％、その他0.5％となる。また、供膳具：調理・貯蔵具は46：54である。供膳具は中世土師器：中国：瀬戸美濃＝79：17：４となる。調理・貯蔵具は珠洲：八尾＝83：17で構成される。こうした平均値に近いのはＢ２・６地区である。

中世土師器がやや多いのはＢ４・７・12・13地区である。これらの地区は、先の中世集落の変遷で見たように、中世前半を通して建物群が分布し、大型の建物１類が継続的に存在した範囲に位置している。おそらく、継続的な建物群の存在により大量の土師器皿が消費されることとなり、そこに大型の建物に居住したであろう経営主体者の介在が窺える。

中世土師器が少なく、珠洲あるいは八尾の比率が高くなる傾向が、Ａ１・４、Ｂ１、C20地区で認められる。Ａ１・４、C20地区は熊野川沿いに位置し、特にC20地区では倉庫的な機能が考えられる大型竪穴状土坑が確認され、河川を利用した流通に際した物資の一時的な保管や備蓄が想定される。Ｂ１地区では隣接するＢ２地区内の旧河道内で検出された柱列から、Ｂ１地区への経路となる桟橋状の構造物が想定される。そのことから、やはり河川を利用した流通に関連が強いと考えられる。この様な物流に関わる要素が強いことが、珠洲や八尾、つまり貯蔵具を構成する種類が多くなった要因の一つと思われる。

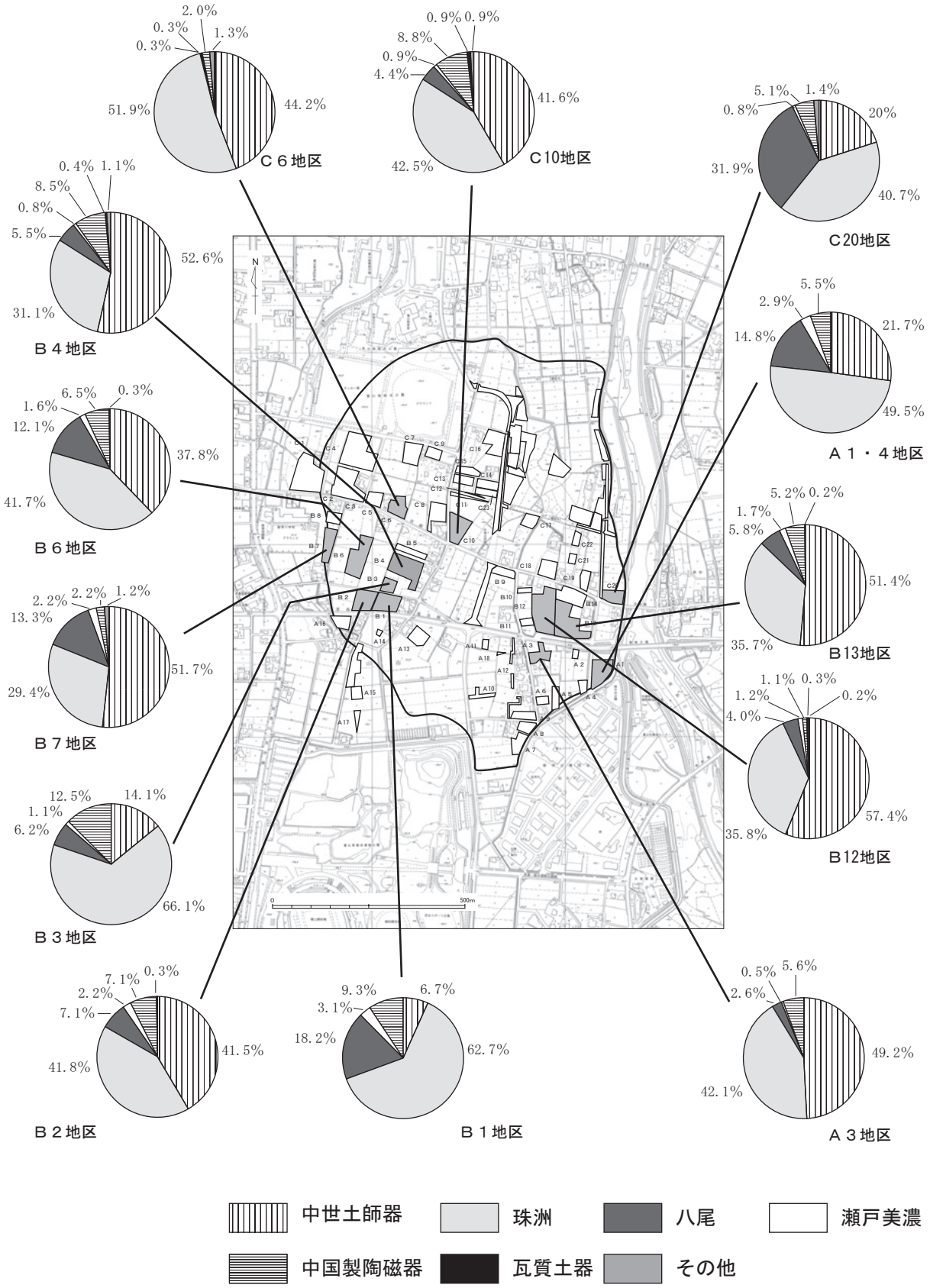
中国製陶磁器の比率が高くなるのは、Ｂ１・３・４、C10地区である。Ｂ１・３・４地区では西ブロックの中でも建物群が多く確認される範囲であり、Ｂ４地区には最大面積の建物も存在する。建物規模別の構成では、東・西ブロックに大きな相違点は認められなかったが、中国製陶磁器の保有・消費においては、西ブロックにやや優位性が窺える。しかし、供膳具内の種類別構成での中国の比率は、Ｂ４地区では平均値よりも少ない。先に示したように、Ｂ４地区では多量の中世土師器が出土したため、中国や瀬戸美濃の比率は低くなって現われたのであろう。

瀬戸美濃はいずれの地区でも少ない。これは、後述するように瀬戸美濃の時期が後期や大窯段階の所産が多いため、中世前半を主体とする地区での出土は多くないためである。前期・中期の製品の出土を見ると、Ｂ１・４・12・13、C20地区などに認められる。

〈中世後半〉

B12、Ｃ５・７・８・13～16・23地区を対象とした。ただし、B12地区については中世前半でも取り上げているが、13～15世紀代の遺物が一定量出土しており、中世後半の様相もある程度含まれており、参考に示しておく。

種類別構成の平均を示すと、中世土師器60.9％、珠洲28.9％、八尾3.2％、瀬戸美濃2.4％、中国製陶磁器3.1％、瓦質土器0.2％、その他0.3％となる。供膳具：調理・貯蔵具は67：33である。供膳具は中世土師器：中国：瀬戸美濃＝92：５：３で構成され、中世土師器が圧倒的に多い。調理・貯蔵具は珠洲：八尾＝91：９となる。このように中世前半に比べ、種類別の構成では、中世土師器と瀬戸美濃の比率が高くなり、珠洲・八尾・中国の比率は低くなる。中世土師器の比率が高くなったことにより、供膳具が多くなり、その中でも中世土師器が約９割を占めるようになる。また、八尾は13～14世



各地区の土器組成

第３図　中世前半の土器組成（１）

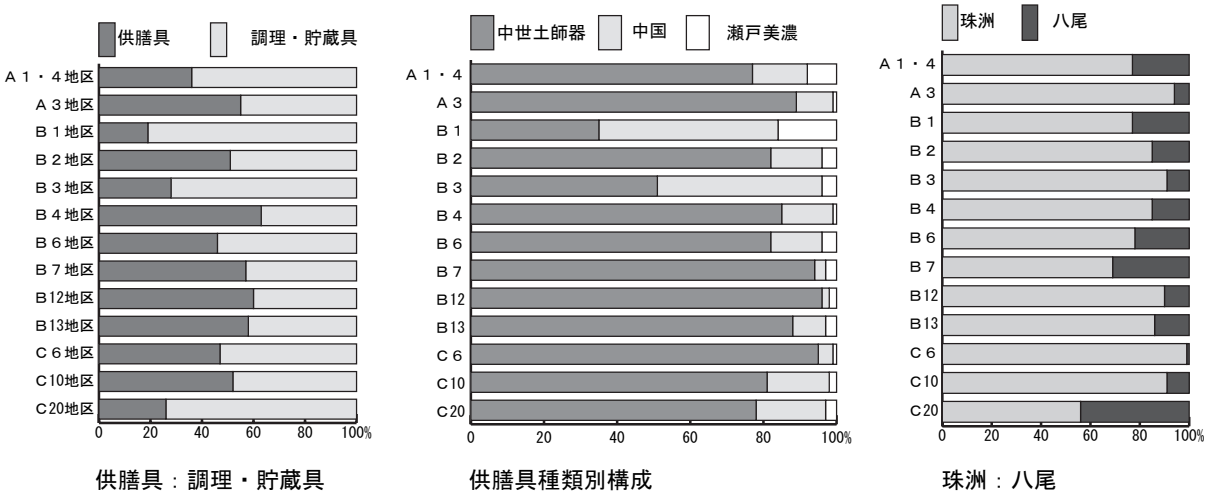
紀代の所産であり、中世後半を主体とするこれらの地区での構成比もわずかなものとなる。

中世土師器が多いのはＣ５・７地区で、種類別で約８割を占める。供膳具内での中世土師器：中国：瀬戸美濃の比率は、Ｃ５地区で98：２：２、Ｃ７地区で98：１：１となり、中世土師器がほとんどを占めている。Ｃ５・７地区では、出土分布で示したように密集する土坑群の範囲に中世土師器が多く出土している。土坑群のいくつかは墓壙と考えられ、またＣ７地区では宗教施設に関連する可能性がある。こうした特性が、中世土師器が多く消費された一因と思われる。このように、Ｃ５・７地区では中世土師器の比率が高いため、他の種類は概して比率が低くなり、当該期の平均値を下回る傾向にある。そうした中、Ｃ５地区ではその他、Ｃ７地区では瓦質土器の比率は高くなる。Ｃ５地区のその他とした種類は、ほぼ羽口で占められている。Ｃ５地区では鉄滓に出土も多く、地区内あるいは、その周辺で金属製品の生産・加工が行なわれた可能性がある。Ｃ７地区の瓦質土器は、後述するように任海宮田遺跡全体の中でも特に集中した出土である。その器種構成も、他の地区では火鉢を主として風炉が加わる程度であるのに対し、Ｃ７地区では香炉や花瓶も加わっている。

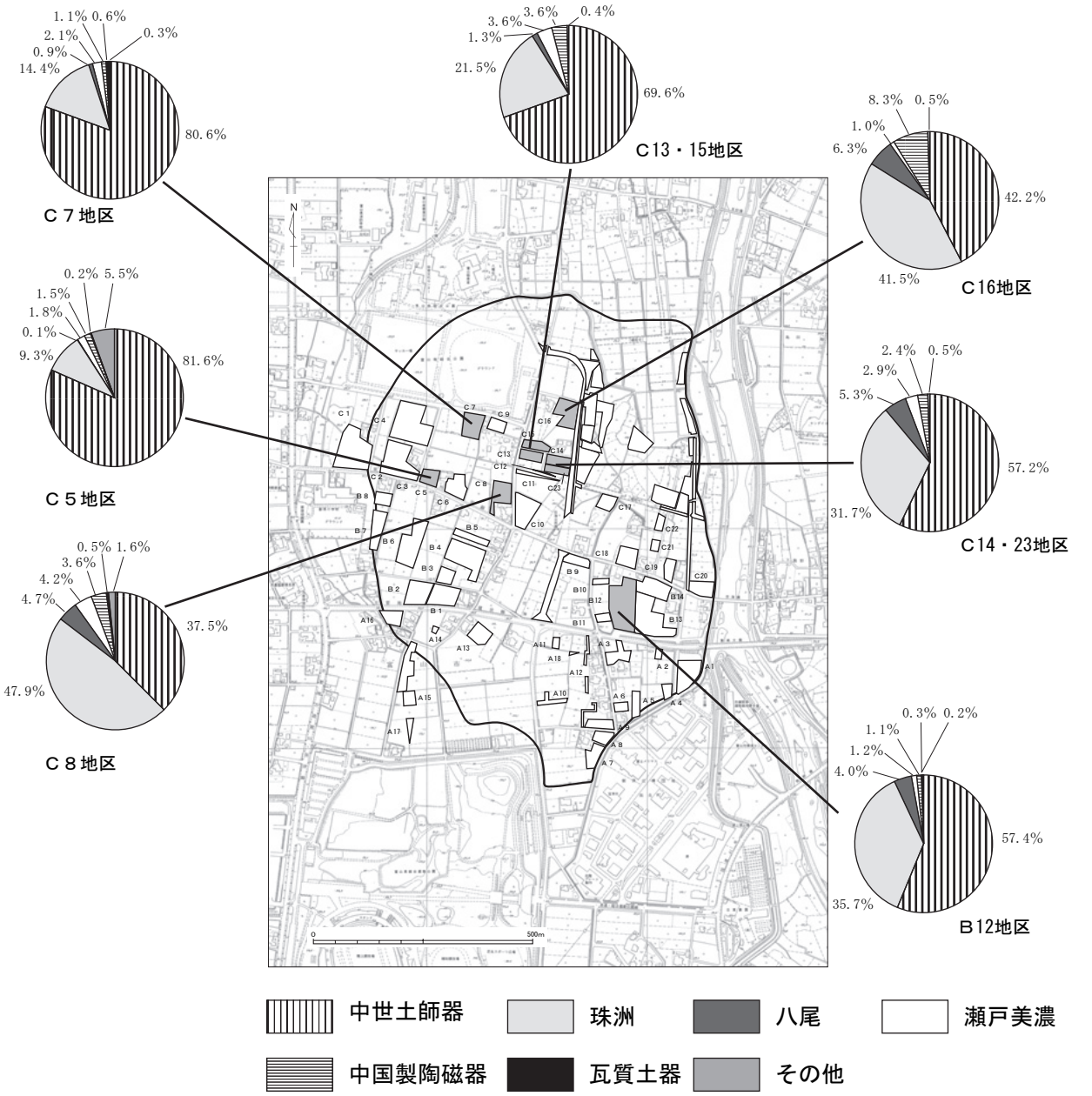
他の地区ではB12、C13～14・23地区において中世土師器の比率がやや高く、逆にＣ８・16地区では珠洲の比率が高まる。前者では建物数は多くないものの、当該期においては集落の中心的な範囲にある。後者ではC16地区で建物がわずかにあるが、Ｃ８地区では建物は確認されず、共に集落の縁辺であったと考えられる。こうした点が中世土師器の比率に変化が生じた要因の一つと思われる。また、C16地区では中国が8.3％と比率が高い。この中には、大宰府分類Ⅰ・Ⅱ類など中世前半の数量も含まれているため、やや高くなったと考えられる。しかし、中世全般を通じ、建物群の動きが活発でない当地区において中国製陶磁器の出土が多くなることは、現段階では説明できない。Ｃ８地区では瀬戸美濃の比率が高い。その時期は大窯段階の主体となり、他の地区に比べ時期が新しい傾向にある。Ｃ８地区では近世以降の遺構・遺物が多く検出されており、近世へと移行する前段階の動きが反映されているものと考えられる。

Ｂ中国製陶磁器の分布と構成

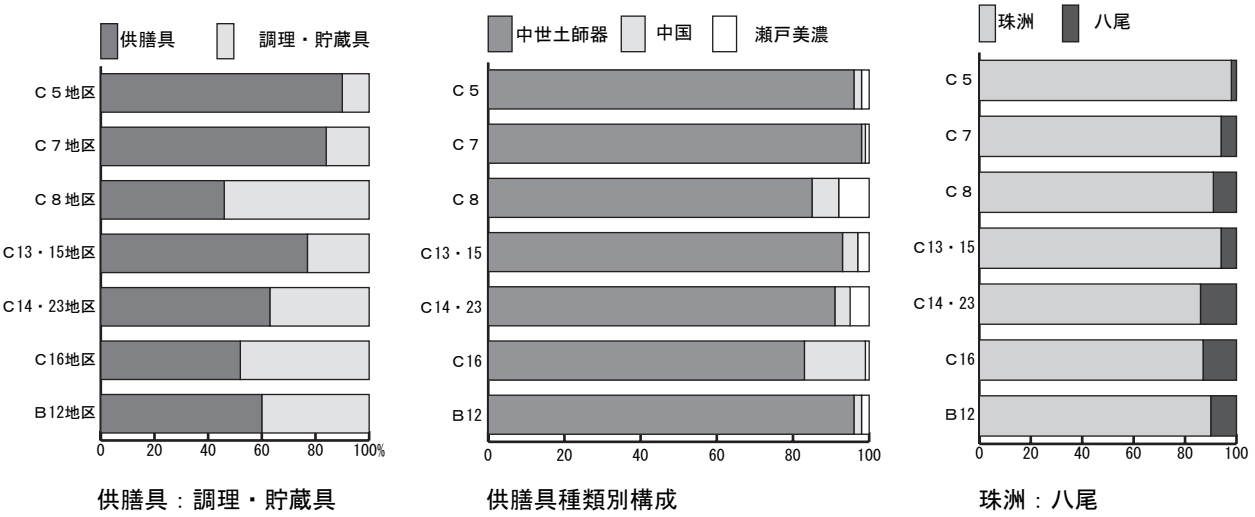
中国製陶磁器の分布からは、Ｂ４地区で青磁・白磁・青白磁の出土が多いことが分かる。次いで、Ｂ２・12、Ｃ２・３・４・７・20地区で青磁の出土が目立つ。青白磁は遺跡の東側に少なく、西側の調査区に散在する傾向がある。黒釉の出土は少なく限定的である。染付けの出土もわずかで、中世後半の遺構が比較的多い地区に点在する。



第４図　中世前半の土器組成（２）



各地区の土器組成



供膳具：調理・貯蔵具　　供膳具種類別構成　　珠洲：八尾

第５図　中世後半の土器組成

種類別の構成では、青磁が主体となる傾向にあり、そのほとんどは龍泉窯系青磁が占める。それらを分類毎に見ると、Ⅰ類はB３・４・13、C10地区などの中世前半に建物群分布の中心となる地区に多い。これらの地区ではⅡ類が少ない傾向にあり、Ⅱ類についてはB６地区で多くを占めている。Ⅲ類はC20地区で多いものの、全体的に少なく、明瞭な傾向は捉えにくい。Ⅳ類あるいはそれ以降の上田分類に相当するものは、C５・７地区といった中世後半に主体を持つ地区において比率が多くなる。また、B１・12地区のように中世前半から後半まで幅広い時期に建物群が認められる地区においても、一定量の比率がある。

白磁については、A１・３・４地区で比率が特に高い。これらの白磁は大宰府分類Ⅳ・Ⅴ類を主体としている。B３・13地区でも白磁の比率がやや高い。この内、B３地区では器種において壺が半数を占め、食膳具以外にも中国製陶磁器が含まれたこととなる。こうした点は近接するB２・４地区でも認められる。また、B13地区は先述したA１・３・４地区と近接しており、遺跡南東部分の建物群において白磁の保有がやや高い傾向が窺える。

青白磁はB１・３地区で比率が高いものの、出土点数の合計はB４地区のそれに満たない。遺跡西側の中でもB１・３・４地区にやや多い傾向は指摘できよう。

黒釉はC５地区で中国製陶磁器の約１／４を占めており、特徴的である。染付は出土が認められる地区においても少なく、中世後半においてごく僅かな量が持ち込まれたと考えられる。

C 瀬戸美濃の分布と構成

B12、C５・７地区での出土が多いことが分かる。これら地区の時期別構成を見ると、後期と大窯期が半数以上を占めている。B12地区では中世前半も含まれるが、C５・７地区と同様に中世後半にも遺構の形成が認められ、後期・大窯期の製品が消費されたのであろう。また、他の地区の時期別構成でも後期あるいは大窯期が主体的であり、瀬戸美濃の多くは中世後半の集落動態に応じてもたらされたものと思われる。こうした中、B１・４・12・13、C２～４・７・20地区では前・中期の製品も確認される。これらの地区の多くでは、中世前半に建物群の形成が認められ、それにより瀬戸美濃も用いられたと考えられる。ただし、C７地区では中世前半の建物群はなく、当該期の遺構も希薄である。また、C７地区出土の前・中期の製品は壺類がほとんどを占め、特異なあり方を示す。先述したように、C７地区では墓壙や宗教的施設との関連が窺え、そうした性格により遺構の形成時期より古い製品が伝世され、使用された後に廃棄された可能性がある。

D 瓦質土器の分布と構成

C７地区に多く、次いでB12地区での出土が目立つ。また、器種に関しては、全体的に火鉢が多くを占める。しかし、B11・12地区では風炉、C７地区では風炉・香炉・花瓶が確認され、器種の点からもB12、C７地区が他の地区に比べて豊富となる。瓦質土器は基本的には中世後半の製品であると考えられるが、当該期の建物群の分布範囲とは明瞭に合致する訳ではない。C７地区では墓壙・宗教施設、B12地区では方形区画の形成が当該期に認められ、建物群のみが確認されるような地区とは異なる場合に、出土がやや多くなる傾向にある。B12地区では判然としないが、C７地区の様相を踏まえると、一般的な居住域とは別の特異な階層との関連が想起される。

E 土器組成の特徴

以上、土器組成と施釉陶磁器などについてまとめてみた。ここでは、土器組成の変化や特徴から指摘できるいくつかの点を示しておきたい。

①中世土師器は中世前半から後半にかけて比率を高める。そのため、供膳具の比率、供膳具内での